の葉の數々書あつめ給ひける中に、うつの山にて、

夢ならで思ひかけきやうつの山うつゝに見ゆる（てカ）蔦の細道、秋の比は關の東の敵もたいらきて、奥の夷まてこと〳〵しく從ひきこえけれは、いさましうてみな歸り上りたり、關白殿は源の君に關の東の八つ迄奉り給へは、やかて武藏なる江戸といふ所にうつらせ給ひぬ、此後よりそ江戸大納言殿なと申しゝに、程なく内の大臣にさへならせ給へり、今そ京にも萬代とのみことふきあへり、又の年の正月朔日、藤孝は内に參りて、四方拜おかみ侍りつゝ、かへりて後筆のこゝろみに、

灯火の光りをそへて雲の上にほしをとなふるあかつきの庭、秋の頃關白殿は、御子とてやしなひをき給ひし、秀次の中納言を都の館にすへて、おほやけの御かためとなしつゝ、關白をも讓り給へり、みつからは他の國を治んと思ひ立給ひき、いにしへ新羅高麗百濟なと聞えし所も、今は朝鮮とそ申侍る、其所をも從へむとて、兵共遣すへきさためなとあり、明ん年出立なりと聞え侍るほと、いつしか年も暮て、次は年の名も文祿にそ改りぬ、春の初よりもろこしに入とて、人々急きあへるを聞て、れいの藤孝、

日の本の光りを見せて遙なるもろこしまても春やたつらん、二月十日秀次の館に行幸有り、御儀式なと先の折の儘とそ聞侍る、こたみも、いみしうめてたくおもしろき事おほかりき、歌なともありぬへけれと、聞をき侍らすなん、彌生の末には、秀吉のおとゝ内に參り給ひて、御いとま聞えつゝ、筑紫に赴き給へり、廿六日都を出給ふ、殊更に引つくろはれたるよ

そほひのきら〳〵しく、御共の兵もたけくおゝしきさまなれは、都人ともは、立つとひて物見侍る、いと所せけなり、肥前の國に館をまうらひ、爰に住て事共おきて給ふ、武士ともは己かさま〳〵に舟よそひして、西の海に漕いてつゝ、追風にきほへる水主の聲々も、うらめつらしく、唐土迄と月をまるへにいそくめり、筑紫には、秋風の物悲しき折しも、京なる母君のなやましうし給ふと告たりけれは、秀吉の大臣はふりはへ上り給ひしに、待つけ給はて失給ひしかは、大臣も口をしう思ひ給ひ、都に入て後のわさいとなみ給へり、忌の程過ては、又下りなんとし給ふるに、内より御使ありて、唐土に渡り給はん事は、有ましき事にとゝめ聞えさせ給へり、おとゝもいとかたしけなきことに思ひて、袖もうるほひつゝ、御かへりこまやかに啓し給ふ、又の年は春の初に院隱れさせ給ひぬ、今は世の中ゆたかなる程なれは、後の御わさ共もこちたくて、いみしうたうとき事の限りせさせ給へり、内には近衛殿の女御をはしめ、御方々々やむ事なくて、あまたさふらひ給へと、いつこにも皇子のおはしまさぬを、心もとなく誰も々々おほいたるに、文祿五年と申しゝ比、近衛殿の女御たゝならぬ御さまなりと聞えけれは、御祈りかすを盡し給ひける、水無月はかりに、御けしき有て、なやませ給へは、白き御帳に遷らせ給ふ、僧達加持參りさはくほと、高やかにない給へるにそ、みな人心おちゐたり、後の御事もたいらかにて、皇子誕生と花やかに聞えたるは、今一きははへ〳〵しくて、人々のけしきまされり、上にもいつしかと奏しつれは、限りなくいみしと思し召れき、御はかし例の事なり、めつらしうさし出給へる光に、そこらの人皆世の物思ひ忘られて、

いといたうほこりかなり、御うふ養ひなと、所せきまてつとへり、三日は御湯殿の事あり、内よりも上の御乳母をはしめ、ねひ人とも打つれて參りたり、垣下のみこたち上達部殿上人みな渡り給ふ、護身の僧參り給へは、文よむ博士は庭にさふらふ、女御の御せうと達は、事ともとり持てつかふまつり給へり、若きとの原はうちまきちらし給ふるも、ちうかはしきまてなり、其夜は内の御さたにて、萬ついかめしきさまなれは、御遊ひなともいとおもしろし、若き君達はみたりかはしう醉さまたれつゝ、家路も忘れぬへうおほしたり、五日は后の宮の御方よりせさせ給ふ、事そきたるやうにまなさせ給ひつれと、是はたおほやけさまにて、宮の亮なと事行ひたり、ちこの御そ、子もちの御前の御れう、人々の御前の物、女房の中にもとさらひたる檜破子とも清らなり、ろくの唐ひつなとまて思しいたらぬ事なく、こまやかにてうせさせ給へり、七夜は、秀吉の大臣よりなれは、さきの夜におとるけちめなく、さはかりの勢ひにて、心ことにまうけ給へる事なれは、かたほなる事なくめつらしきさまに、よういし給ひき、打つゝきめてたき事のみおほくなん、内の女房達の歸り參れるほと、さま〳〵の御送り物、めなれぬさまにまなされたり、内には、今より御心いられさせ給ひて、御使ひまなうかよへと、女御はいとまの有かたきにおほしこりて、まはしはかくてと思し召る、御乳母達なとも、さるいみしき御なこりなれは、御心やすき所にて、つくろはせ給ひぬへう聞えたり、此のちしも打つゝきけしきはみ給ひて、すゑにはあまたおはします、又こと御腹にも男宮女宮かすそひ給へり、今年より年號も改りて、慶長とそ聞え侍る、唐土に居たりける兵も、なか

はゝ軍を收めて歸りけるか、次の年は、再ひ出立侍り、朝鮮にてはあまたゝひえもいはす、いかめしき戰の有と聞つれと、八重の汐路のあなたに、思ひやりたる程は、いと心やすくなん、秀吉の大臣のみそ、ことはに心にかけて思ひ居給へり、關白なりし秀次は、おとゝしはかり、思ひかけぬ筋にて、淺ましうなり給ひしかは、立かへり秀吉の大臣何事をもまたゝめ給へるに、又の年の八月には身まかり給ひぬ、六十にも三つはかりあまり給へは、ことはりの程なれと、此人出給ひて後そ、世の治りぬるを思し召せは、内にも今まは共、かけとゝめまほしう思しめされたり、秀頼の稚きを見捨給へは、よろつうしろめたけにて、こちたき遺言とも侍り、武藏の大臣をはしめ參らせ、武家の人々心かはして公にも仕ふまつり、秀頼をも後見て、世を治むへくさため置給へり、御はうむりの事もいかめしうて、こゝらの人送りつかふまつる、天か下の幸ひ人の、光り失ふ折なれは、月さへかこちかほにかき曇りて、虫の聲にも涙のふり出る計りなり、そこら廣き野に、處もなく立込たる人も、烟を雲に見まかへつゝ、曉の鐘の音に袖をまほりて歸り參れるほと、かなしさのとちめと見えたり、内よりは次のとしの卯月に勅ありて、神に崇め聞えさせたり、此後は、武藏の大臣、伏見に住給へは、時々内にもまいり給ひて、うらなく仕ふまつり給ふにそ、上もうしろやすく、ゆるきなき固めとうれしう思し召れたり、されと武士共の中には、あやしうくね〳〵敷事絶やらて、靜ならぬさまなり、又のとしは陸奥に事ありと聞えしかは、伏見のおとゝは、みつから大將軍にて、兵を具しつゝ、關の東に向ひ給へりしに、いつしか難波わたりもらうかはしうなりて、此大

臣にそむきぬるものおほく成しかは、伏見にとゝめ給ひし御武者も、難波の軍共に亡ぼされ侍る、此頃藤孝は丹後に在けるか、子どもはおとゝに隨ひて、東に下りしかは、此人も方人なりとて、兵共きそひ到りつゝ、城を攻けれは、いとたえかたけに見えけるほど、京より三條の實條の大納言、光廣の弁勅使にておはしたり、そこらつとへる敵共は、物の心もえす、いかなる事にやと思ひけるに、おほやけ事なりけれは、わつらはしくて内に入れ奉れたり、是は古今に秘めたる事のあんなるを、三條の前のおとゝの傳へにて、此藤孝のみ知り給へれは、其事によりてとそ聞えし、藤孝はいたうかしこまり申て、勅使をむかへ奉りつゝ、やかて古今證明の狀なと、とう出て傳へ奉り給ふ、又此つゐてに日比またしかりけれは、式部卿智仁親王の御方にも、申送り奉り給ふ、

いにしへも今もかはらぬ世中にこゝろのたねを殘すとの葉、烏丸光廣の辯には、年頃書置たまへる草紙の箱を、あつけ參らせ給へるに、

藻汐草かきあつめたる跡とめて昔にかへせ和歌のうら波、いとゝおもたゝしき事を、そ城を中にも外にもあさみあへり、圍みあける兵共も、公の御けしきに萬はゝかり聞えて、城を渡し給へとのみいはせけれは、さはとてそこを退きつゝ、こと方に忍ひあけるに、光廣の辯は、さきの箱を返し給ふとて、

明て見ぬかひもありけり玉手箱ふたゝひかへるうら島の涙、かへし藤孝、

浦島や光を添て玉手箱あけてたに見すかへす波かな、其儘に丹後の國は靜まりぬ、奥に

下り給ひし人々は、難波風のあらましくて、蘆間の波のさはくなりと聞給へるより、奥の戰をとゝめて、皆うち上り給ふに、津の國の軍も、又美濃國に打出たるほとなれは、其所にていみしき爭ひ侍りし、奥より上り給ひし大臣の御方勝えたりけれは、敵共は爰かしこにて失はれ侍り、大臣はやかて都に上り給ひ、難波にもおはしたりけるか、こたみの亂れは、幼き秀頼のまり給ふへきならすとて、物しと思したるふしもなく、うらなきさまにもてなし給ひて、昔のまゝにすへ置つゝ、かしつき給へり、猶所々のおきてせさせ給ふに、何國もみな治り行けれは、奥の亂れも音なくなり侍り、今なん誠に、動きなき國と成て、民の戶までも、萬代をそとなへける、大臣は内に參り給ひて、關白をも定めさせ給ふへく奏し給へりけれは、やかて九條の兼孝の大臣に再ひ宣旨下りたり、久しうもりおはしけるに、立かへりはなやき給へるは、治れる御世とて、商山を出て仕えし、古き例にもかよへるはかりなりき、其後は、近衞の信尹の大臣鷹司の信房の大臣なと成かはらせ給へり、内の一の宮は、五つにならせ給へる、年の暮にはいつしかと春宮に立せ給ひぬ、宮のすけ何くれの人々、みなさためさせ給ふ、御母女御も后の宮とそ申侍る、上の御兄弟の式部卿の宮は、京極殿とて、伏見殿とおなし御さまにておはします、武藏の大臣は、いつ方をもうるはしうやむ事なくもてなし奉れ給ひて、内裏の御すりなとをも、こまやかにおほしよりつゝ、おきてさせ給へは、事うちあひ、めやすき世にそ絶る、應長も八とせといへる二月に、武藏の大臣右に轉り給ひ、征夷將軍の宣下ありて、牛車兵仗をも賜り給ひ、氏の長者にさへなさせ給ふ、おなし時にしも、かくいみし

き御よろこひし給へる事を、世にも思ふやうなる御事にそいひあへり、さてなん二とせはかり有て、御子の右大將に、將軍をも氏の長者をもゆつり聞えさせ給ひて、江戸にすへ奉り給ひつゝ、御みつからは、駿河の國に住せ給へり、御子達さへあまたおはしませは、門ひろこりてめてたき御さかえなるに、後の將軍の姫君は、今の春宮の御位の比に參らせ給ひて、末には宮達かすそはせ給へりしかは、のち〳〵は限りなき御さいはひおほく侍りき、内にも春宮の御兄弟の宮達、おとなひ給ひしかは、法親王尼宮なとにても、あまたおはしまし、又近衞殿の御子にならせ給ひて、信尋の大臣と申、一所は、一條殿にて昭良のおとゝと聞えし、何れも關白なとにならせ給ふも、いとかたしけなくなん、内親王一かたは、鷹司殿賜はらせ給ひて、敎平の大臣をうみ奉りたまへり、二條殿もおなしこと賜り給ふ、光平の大臣の母宮にておはします、かく都も東も、いや年のはに榮ふる色見えつゝ、むへうら安の國なりとて、すむ民くさもけしきことなり、かやうのおりにや、藤孝の言の葉に、

八隅しる君かめくみを世にうけてのこるくまなき春は來にけり

唐倭の書の卷々は、みるとしもなきまとの中にも、やふしわかぬ春の光りの、うら〳〵とさし入たるより、おのつから心ものひらかにて、告渡るうくひすの聲、ほころひそむる梅の匂ひなとの、もよほしかほなるに、三十一文字をたに心もとなくして、何のやさしきふし有へうもなけれと、いひあらす心うこきておほゆれは、はかなき物語なとをとうて〳〵、かつ〳〵見侍るに、れいのさかなきこゝろの癖とて、今もあやしき、鳥の跡はかりの事、かきつけてみまほしうおほゆるしも、いとおこかましう、けしからぬ心なりと、我なから思ひあられき、さるは、片田舍にすみなれつる中にも、殊さらに世のひかものにて、人にもいはるゝはかり、ましらひをもせてこもりゐつれは、國の中のありさまをさへ志るとなきに、まいてはるかなる雲の上の御かた〳〵の、もてあつかはせ給ふ事なとは、ゆめきゝ志るとしもなけれは、はつかにさし出る手つきもこよなうたと〳〵しう、ひなひたることのみにて、いとかたはらいたきやうなれと、かたはしたに世におちゝらむことはあるましう、たゝ物の底にをきて、志みのすみやかになさんものを、あなかちに心いれて、明和八といふ年のむつきの朔日よりおりたちぬるに、きさらき望の日こと終侍る、十あまり四まきとかそふるも所せけなれと、いとかたくなしき事のかきりなるに、其名をさへ池のもくすなとつけたるも、かへす〳〵かたはらいたく、むかしのかゝみのおもかけめきて、こと〳〵しけれと、さやうのすちにはかけてもおもひより侍らす、たゝいにしへよりいひならすめる、このくにのそらことを、そこはかとなくいひつゝくるによりてとそ、

かきつむるなみのもくつに深からぬ池のこゝろのいかに見ゆらむ

正四位下　荒木田武遇女

題池藻屑篇後

絳幔之制。彤管之裁。媲二美前賢一。流二芳後世一。紀載廣博。事迹確實。自レ非二錦心繡腸。天縱之才一。何以爲二斯盛舉一乎。所謂天地精靈之氣。鍾二於婦人一者。予於二荒木田氏一乎觀レ之。北海江邨先生序二其首一。論二文有二虛實一。具二舉我邦史乘一。併及二諸名媛述作一。其言盡矣。若夫西土固稱二右文之域一。而閨閣史才。曹大家之外。復誰人哉。於戲荒木田氏者。謂二之女中董狐一。不二亦可一乎。

安永甲午秋九月　　平安　長門介三善彦明撰

右介御巫清直氏請慶德氏得以附鏤版對校之者小杉榲邨氏藏本也

明治十七年七月

明治三十三年六月再校了　　近藤瓶城識

櫻雲記卷之上

後醍醐天皇諱尊治後宇多院第二皇子也母談天門院藤繼子花山院內大臣師繼ノ女實ハ參議忠繼女也祖父龜山上皇養之故位ニ卽クント八幡宮ニ告文ヲ奉納ス然モ第一ノ皇子後二條院卽位始ハ天皇任太宰帥スル故帥ノ宮ト申後ニ中務卿ヲ兼ル花園院卽位ノ時武家ノ計ヒニテ東宮ニ立ラル後二條崩ノ後其皇子邦良親王病有テ危シ故文保二年二月二十九日卽位歲三十一二條道平關白タリ後宇多法皇政務ヲ修行セラル鎌倉將軍ハ守邦親王也執權北條相摸守高時也天皇諸道ヲ好ミ內外典ヲ學ヒ倭漢之道ヲ明ラメラル三月邦良ヲ東宮ニ立ラル元應元年八月西園寺前相國實兼女禧子中宮トナル阿野中將藤公兼女廉子中宮ニ從テ入內天皇是ヲ寵愛三位局ト號ス後ニ准后トナル其外宮女多フシテ腹々ニ男女ノ皇子多元弘元年四月後宇多法皇大覺寺ノ金堂ヲ建立ス五月大覺寺ニ行幸今年夏大旱天皇檢非違使別當藤經宣ニ命ノ粟ヲ出メ貧民ヲ賑ス亦洛中富メル人ノ貯タル米ヲ安ク賣シメテ飢ヲ救フ自ラ記錄所ヘ出テ訴ヲ決談ス晨ニ起夜ハニ寐テ政道ヲ正ス萬民擧テ仰之頃日高時內管領長崎圓喜老耄ニ依テ其職ヲ嫡子高資ニ讓ル高資驕テ高時ヲ蔑ニメ逆威ヲ振フ今年續千載集ヲ奉ル同二年正月法皇朝覲ノ行幸管絃ノ御遊アリ五月奧州安藤五郎同又太郎爭論アリ高資賄ヲ取テ私有ニヨリ安藤謀叛ス又攝州渡邊紀州之安田和州ノ越智等武家ヲ背ク承久以後百餘年北條家ノ下知ヲ背事是ヲ始トス天皇元來武家ノ恣ナル事ヲ憤ル高時カ酒色ニ耽リ高資カ逆威皆人望ニ背ト聞テ密ニ近臣等ト鎌倉ヲ亡サン事ヲ謀ル六月天皇諸臣ヲ召テ五經三史ノ論義アリ頃日後宇多法

皇大納言藤定房ヲ關東ヘ遣サレ政ヲ當今ニ任セラレ閑居セント仰アリ武家刑義ナキニ依テ大覺寺ヘ隱居シ給八月東福寺ノ師錬元亨釋書ヲ奉ル正中元年三月石清水行幸四月賀茂行幸六月後宇多法皇崩ス（年十五）九月土岐頼員多治見國長等天皇ノ密詔ヲ受テ鎌倉ヲ亡サントスル謀露レタレハ六波羅ノ範貞軍兵ヲ遣シテ頼員國長ヲ討殺ス同二年五月日野中納言資朝日野右中辨俊基召捕ラレテ鎌倉ニ赴ク兩人天皇ノ近臣ニテ鎌倉ヲ亡サントスル謀ヲスル故也六月廿五日雷電山門ノ無動寺ニ落ル坊舍三十余宇崩人多死ス白河洪水洛中民屋悉ク流ル七月萬里小路大納言宣房ヲ鎌倉ヘ遣サレ告文ヲ高時ニ給リ謝セラルニ依テ資朝ハ佐渡エ流サレ俊基ハ歸京朝廷無事ナリ八月禪僧疎石ヲ南禪寺ノ住持トス天皇是ヨリ禪法ニ傾ケリ今年撰續後拾遺集

嘉暦元年三月東宮邦良薨ス（年廿四）此月高時病アリ剃髪ノ崇鑑ト號ス（年廿四）其弟左近太夫泰家ニ執權ヲ讓リ金澤貞顯ト連署セシメントス長崎高資同心セス泰家怒テ剃髪シ惠性ト號ス貞顯モ剃髪ス北條守時維貞連署執權シタレ𪜈高時カ旨ヲ受テ執行エリ七月後伏見皇子量仁ヲ東宮ニ立ラル天皇皇子多トイエ𪜈關東ヨリ計ヒニテ東宮立坊ハ心ニマカセス同二年十月北條維貞死ス三年十二月天皇ノ子尊雲法親王ヲ天台座主トス尊雲武勇ヲ好ンテ密ニ鎌倉ヲ討ヘキ志有大塔宮ト號ス今年南都七大寺衆徒確執事𪜈有テ合戰ニ及フ興福寺ニ發シテ燒拂フ同年大神宮熊野山エ萬里小路宣房勅使トス天下一同ニ咳病ス

元徳二年三月東大寺興福寺延暦寺ニ行幸密ニ彼僧徒等ヲカタラヒ武家ヲ討ント謀ル尊雲其

張本タリ五月僧圓觀文觀忠圓等召捕レ鎌倉ヘ下向此等勅ヲ奉テ武家ヲ調伏スル故也皆遠流セラル日野資朝配所ニテ本間殺ス資朝子阿新丸本間ヲ殺ス父ノ讐ヲ報ユ六月北條茂時執權ニ補ス七月日野俊基再鎌倉（關東イ）ヘ召寄セ殺サル九月長崎高資逆威ヲ振フ事甚シ高時密ニ高資カ一族高賴ニ命シテ高資ヲ殺ントス事顯レテ高賴却而奥州ヘ流レテ高資彌驕奢ス鎌倉ノ政衰テ人皆叛ク此ヲ聞テ主上又鎌倉ヲ謀ル志アリ今年山門東塔北谷ヨリ出火堂舍佛閣回祿十月三日大地震紀州千里濱陸地トナル凡廿四丁同七日又大地震富士絶頂百餘丈崩元弘元年三月北山行幸花見ノ御遊アリ管絃北畠親房子顯家陸王ヲ舞（年十四歳）御衣ヲ給ル八月關東ノ使節兩人上洛ス主上及尊雲法親王ヲ流サン爲ナリ主上兼テ中納言具行ニ（師行ニ男）仰テ兵ヲ集ントス於是主上密ニ笠置山ニ行幸萬里小路中納言藤房其弟季房等供奉ス花山院大納言師賢ハ僞テ天子ノ眞似ヲシテ叡山ニ登テ兵ヲ聚ム六波羅ヨリ兵ヲ遣シ叡山ヲ攻此間ニ主上笠置ヘ入テ師賢モ笠置ヘ參ル主上河内國ノ武士楠正成ヲ召テ軍事ヲ任セラル正成河内ニ歸テ義兵ヲ擧テ赤坂山ニ籠ル九月關東ノ大軍笠置ヲ攻敗リ主上山ヲ出テ逃給フ路次ニテ捕ヘ六波羅入奉ル又軍兵發シテ赤坂ノ城ヲ攻ム正成暫拒ミテ密ニ城ヲ出テ金剛山ヘ隱ル尊雲ハ十津川ノ邊ニ隱レ藤房季房等ノ近臣皆捕ラル一宮尊良以下ノ皇子皆生捕トナル師賢遁世長尾ノ山庄ニ籠テ和歌ヲ詠シ春宮太夫師兼ニ送ル

返歌

サラニ又住ハフル身ヲナケクコソ捨テモナシ憂世ナリケリ

サラニ又ナケクトキクハカクハカリイトハシキ世モ捨テソワツラフ師賢山庄ヲ出ルトイヘモ亂世ニヨリ彼方此方エ經歴シテ詠ス

庵ムスフ山ノ下芝ヲリ〳〵ニ嵐ニモ似ヌ身ノ行衞哉　又

思ヒカヲ入ニシ山ヲ立出テマヨフ浮世モタヽ君ノタメ

元弘元年十月武家ノ計ヒトシテ西園寺大納言公宗ニ談シテ量仁即位光嚴院ト號ス後二條院ノ孫邦良ノ子康仁ヲ東宮トス

元弘二年（當今正慶元ヲ用ユ）六波羅北ノ方ニ北條越後守仲時南ノ方ニ北條左近將監時益各居ス兩六波羅ト稱ス三月高時カ使者長井高冬上洛兩六波羅ト議メ先帝後醍醐隱岐國エ流ス既ニ七日ノ早朝千葉五郎左衞門尉佐々木備中判官五百餘騎ヲ率ヒテ先帝ノ輿ヲ警固シ隱岐國ヘ遷奉ル六條少將忠顯一條頭太夫行房三位局供奉ス下部ニ金若トテ才有使丁召具ス又成田小三郎（關東住人）頃日涙々醫方有ニ依テ笠置ヨリ雜色トナル）從ヒ奉ル同十三日出雲國見尾湊ニ着御乘船四月廿一日渡海隱岐前司清高請取奉リ國分寺ニ入奉リ伯州隱州雲州ノ諸士堅ク警固ス一之宮尊良親王ハ土佐ヘ流サレ佐々木判官時信路次ヲ警固ス妙法院尊澄法親王ハ讃岐ヘ流サル長井左近太夫高廣路次ヲ警固ス京ヲ出ル時雨降日是ヲ詠ス

ウキ程ハサノミ涙ノアラハコソワカ袖ヌラセ余所ノ村雨ウチタト云所ニ至ル時尊良親王モ此所ニ泊ト聞テ傍ヲ見ルニ爲明カ筆ニテ

イトセメテウキ人ヤリノ道ナカラ同シヤトリト聞クソウレシキト有ヲ見テ再ヒ見ン事ハシラヲト

末マテモ同シヤトリノ道ナラハ我イキウシトヲモハマシヤハ已ニ讃岐國ニ至テ松山ニ居シテ年ヲ經ル大納言爲世方ヨリ

松山ハ心ツクシニアリトテモ名ヲノミ聞テ見ヌソカナシキ返歌

思ヒヤル心ツクシモ甲斐ナキニ人マツ山トヨシヤキカレシ大覺寺宮越中國ヘ流サル（後爲ニ名越ニ被レ殺）尊雲ハ所々ニ隱レ還俗シテ名ヲ護良ト改テ吉野ノ城ヲ守ル今年四月廿八日ニ年號ヲ正慶ト改ム此月楠正成赤坂城ヲ攻取ル五月先帝ノ近臣或殺サレ或ハ流サル師賢モ下總千葉ニ配流ス粟田口ノ山庄ヲ過ルトテ

此里ニ御幸セシ世ノ面影ソ今日ハナミタトトモニサキタツ尾張國ヲ通ルトテ都人ヘ讀テ遣ス

海山ヲ見ル空モナシワカ心サナカラ君ニ添テコシカハ伊豆ノ三島大明神ニテ讀テ奉納ス

チキリ有テ今日ハ三島ノ御手洗ニ憂影ウツス墨染ノ袖路次ニテ絹ヲ女ノ元ヘ遣ストテ

里ノ海士ノ鹽ナレ衣シノヘトテカラキワカレノ形見ニソヤル亦薫物ヲ送テ是ヲ焚トキハ必夢ニ見ユヘシトテ包紙ニ書付ル

馴々シ夜半ノウツリ香忘レスハ煙ニソハン面影モカナ隅田川ノ邊ニテ詠ス

事トヒテイササラ爰ニ角田川鳥ノ名キクモ都ナリケリ下總國配所ニテ月ヲ見テ

古鄉ノヲナシ空トハ思ヒテシ形見ノ月ノ曇リモソスル此コロニヤアル野中ニ居テ虫ノ音ヲ聞テ詠之

イニシヘハ露分ワヒシ虫ノ音ヲタツネス草ノ枕ニソキク配所ニテ十月下旬病重クテ命絶ントスル時

雲ノ色ニシクレ雪ケハ見ユハカテ只カキクラス今日之空哉

死出ノ山コエンモシラテ宮古人猶サリトモト我ヤマツラント讀テ翌日廿九日ニ卒ス五月十九日ヨリ嵯峨ノ釋迦眉間ヨリ光ヲ放ス希瑞ト云々此月正成天王寺邊ニ出張ス六波羅ヨリ須田高橋發シテ敗軍ス七月宇津宮公綱又發向正成ト合戰八月赤松圓心播州苦縄ノ城ヲ搆テ先帝ノ味方ニ屬ス正成千劔破城ヲ築テ楯籠九月高時其一族大佛貞直阿曾時治及二階堂道蘊等大軍ヲ將ヒテ上洛ス

元弘三年（當今正慶二年ヲ用ユ）正月關東之大軍相分テ護良之皇子ノ守ル吉野城楠カ守ル千劔破ノ城並正成カ家人ノ籠ル赤坂ノ城ヲ攻ル二月赤坂城攻落ス次ニ吉野城陷ル護良殆危村上義光其子義隆是ヲ防テ戰死ス其間ニ護良遁深山ニ隱ル其後所々ノ軍兵皆千劔破城ヲ圍テ攻ム凡數十萬人正成樣々奇計ヲ廻シ是ヲ拒ム故ニ寄手多討ル新田義貞寄手ノ列タリ然ニ密ニ護良ニ通シ上野國ニ歸テ義兵ヲ起ス赤松圓心攝州摩耶ノ城ニ出張ス伊豫ニ土井得能等義兵ヲ起ス圓心京ヘ發シ戰フ筑紫ニ菊池寂阿少貳妙惠大友具簡謀テ探題北條英時ヲ攻ム時ニ少貳大友却而英時ヲ救フ故ニ菊池討死ス先帝隱岐國配所ニテ空ク年ヲ越春ニ至テ守護ノ清高諸兵ニ警固サセ出雲國ニ歸ル先帝昔時後鳥羽院ノ御事思召出悲涙頻ナリ都ノ沙汰皇子及諸卿行末告ル人無ク日夜叡慮ヲ苦ム閏二月成田小三郎國分寺之僧ヲ語ヒ警固ノ兵士ノ内伯耆國名和庄源小太郎長高カ弟惡四郎泰長ヲ招テ京師ノ事ヲ問フ泰長答テ君未叡聞ニ達セシ楠正成金剛山ノ守城並諸國ノ蜂起護良ノ計謀ヲ語テ願クハ此時主上圍ヲ密ニ出シ奉リ義兵ヲ揚ケ世ヲ奪ンニ危カルマシト答フ成田甚悅テ小聲ニ成テ汝謀ヲメクラスヘシ今夜奏聞スヘシト云フ惡四郎領掌ス即惡四郎ヲ倡テ奏聞ス主上叡感有テ詔ヲ蒙ル於是泰長カ曰ク伯耆國船上山ハ嶮固ノ地也兄長高武勇有テ器量有リ勅詔ニ應ン計謀セハ何爲成ラサラン哉ケタシ出雲國隱岐前司ヲ計テ味方ニ屬スヘシ且ツ同國ノ鹽冶三郎高貞ヲモ可招幸警固ノ士ノ内富士名三郎義綱ハ高貞カ一族也先語ラヒミント義綱ヲ密ニ招テ雜話ノ次テニ諸國蜂起ノ事ヲ說ク於是義綱モ心解ケ先帝ヘ志ヲ通スルト答フ泰長悅ヒ義綱ト已ニ密詔ヲ蒙リ同廿日泰長雲州ニ渡海シテ高貞カ館ヘ至テ勅詔ノ密謀ヲ說クトイヘ已ト欲ス自是先ニ諸國ノ兵亂皆先帝ノ宸襟ヨリ起レリ因茲逆徒等若シ奪捕奉ラント察シテ隱岐出雲伯耆ノ警固ノ兵士ヘ守リ不可怠ト六波羅ヨリ告ル故近國之族堅ク人ヲ改ル出雲大社神主國曹モ是ニ從ヒ國中ヲ徘徊ス于時泰長途中ニテ行逢フ則泰長ヲ怪ミ問ル（先帝船上山皇居時泰長ハ自害ス）於是先帝計謀ノ爲宮女ヲ義綱ニ賜ル義綱心解ケ忠ヲ勵ント欲ス既ニ雲州ニ渡テ是モ高貞カ館ニ至密詔ヲ述ル高貞未心ヲ定メス先義綱ヲ押籠テ智慮ヲ回ス同廿三日一條行房觀慮シテ泰長義綱カ答ヲ待トイエ已密謀露顯セサル前ニ圍ヲ遁レンニハ不如ト奏ス至此テ三位局產ト

偽テ警固ノ士ニ數盃ヲ給テ沈醉ノ紛レニ產近付タリ民屋ニ出ルト稱シ主上モ同輿ニ被召行房忠顯是ニ副ヒ成田ト金若輿舁トナリ義綱カ旅宿ノ民屋ニ至ル同廿四日黎明ニ主上自ラ泥土ノ地ヲ蹈ミ給フ忠顯成田金若供奉ス三位局ニ行房副テ民屋ニ留ル主上御歩行不働忠顯拘ヘ奉ル于時賤夫荷馬ニ乘テ來ル主上ヲ見テ則荷馬ニ乘セ奉リ忠顯ヲハ己レカ背ニ負ヒ即時ニ千波湊ニ至リヌ賤夫渡海ノ船ヲ求メ主上供奉之面々ヲ乘セ奉ル同廿五日巳刻雲州島根之郡野波ノ浦ニ至テ供御ヲ求メ得スシテ酒ヲ献ス同廿七日杵筑ノ浦ニ着津金若陸ニ至テ供御ヲ求メントス大社國曹カ家僕恠ンテ虜ニス主上モ陸地ニ至ラセ給ヒ大社ノ方ニ赴カセ給ン ト荷馬ヲ設ケ忠顯等主上ヲ馬ニ乘セ奉ル馬曾テ先ヘ不行故忠顯奇異ニ思ヒ本ノ船ニ遷シ奉爰ニ於テ國曹カ家僕其外兒徒等馳來ル船人驚キ急キ船ヲ沖ニ押シ出ス海上ニ至ル時追手ノ船飛鳥ノ如ク押來テ主上ノ御船ヲ見付乘移テ搜シ奉ル船人兼テ主上ト忠顯ヲ船底ニ入奉リ藻草ヲ引懸テ其上ニ水主立並フ追手ノ兵士搜シ得スシテ己カ船ニ乘リ移ル同廿六日伯州片見ニ着津成田陸ニ至テ水ヲ求メ主上ニ奉ル成田即チ名和長高カ館ニ至テ勅詔ヲ述ル長高謹テ承リ領掌シ甲冑ヲ帶シ主上ノ御迎ニ馳行キ船上山ヘ供奉ス長高カ弟長重主上ヲ背ニ負ヒ奉ル岩屋谷ニ至恠シキ輿ヲ求メ乘セ奉ル船ノ上山ヘ至テ俄ニ城郭ヲ搆フ長高カ一族馳來ル諸士所謂弟鬼五郎助高孫三郎基長（長高二男）乙童丸（同三男後ニ號高光）名和信貞同次郎同三郎實行同彦三郎忠秀（各長高從弟）日野三郎義行其子又三郎義泰其甥六郎太郎義氏內河彦三郎義實等廿六騎且大山別當信濃坊源盛（長高弟）僧徒廿餘人引具シテ參ル船上山近村ハ源盛カ檀方故供御ヲ調献ス長高カ

二男基長父カ命ニ任セ館ニ歸テ妻子ヲ隱シ其館ヲ放火シ又粮ヲ船上山ヘハコフ長高カ嫡孫土用松丸（七歳）而已倡テ來ル爰ニ於テ長高左衞門尉ニ任シ長年ト改ム（長ク高ハ危トテ改名）隱岐前司清高カ館小浪ヘ夜討セント相議シテ其兵二十騎雜兵六十餘人馳向田所其弟五郎左衞門種直若林等先ニ進ム于時稻瀨五郎三郎弘義忽ニ心變シ清高ニ告ル因茲兵士ヲ伏セテ急ニ擊ツ故悉戰死ス同廿九日清高ト佐々木彈正左衞門師ヲ帥ヒ南北ヨリ船上山ヲ攻ル長年以下能ク拒テ敵敗走ス長年續テ發シ清高カ館ヲ襲フ力戰盡キ小船ニ乘テ隱岐國ヘ退ク長年又糟谷カ館ヲ攻破テ首級三十餘得タリ忠長カ館小鴨ヲモ攻テ凶徒若干討捕ル於是國中ノ諸士馳集ル鹽治判官高貞其弟義綱ヲ携テ來ル其餘ノ兵士所謂名和長義同六郎行氏同七郎貞高入道覺妙八郎高重十郎行泰（各長年カ弟）孫二郎同四郎助貞同五郎惟村同九郎行實同十郎行義（各長年カ親族）內河兵衞入道念西其甥左衞門尉義重同新三郎貞員同四郎太郎泰近土屋孫三郎宗重同彦三郎同彦五郎信貞其弟阿施伽井小次郎長貞等ノ健者ノ武士來テ守護ス三月三日曲水ノ宴アリ長年伯耆守ニ任ス至爰テ長年カ嫡子太郎義高千劔破ノ寄手ニ列ス父カ告ヲ聞テ同九日船上山ヘ來テ正成カ軍術諸國蜂起ノ事ヲ奏聞ス同十三日六條忠顯左中將ニ任シ藏人頭ヲ兼ル同十五日主上宸筆ヲ染ラレ御製ヲ長年ニ賜ル

忘レメヤヨルヘノ浪ノアラ磯ヲ御船ノ上ニトメシ心ハ又勅シテ長年カ家ノ紋帆掛舟ヲス近國ノ諸軍馳來テ味方ニ屬スル事甚多シ時ニ至テ三位局ヲ行房携テ來ル忠顯軍將ト成テ京師ヲ攻ル昧方ヲ救フニ利アラス於是諸國蜂起スト聞テ高時其一族名越尾張守高家足利治

部太輔高氏軍將トシテ上洛ス高家赤松ト戰テ討死ス高氏先帝ノ味方トナリ赤松ト心ヲ合スル高氏暫丹波ニ退キ諸兵ヲ集ム五月七日忠顯赤松及護良ノ候人法印良忠ト牒シ合セ六波羅ヲ攻敗ル兩六波羅伸時時益ト新帝並後伏見花園兩上皇携奉テ京ヲ出テ關東ニ赴ク時益矢ニ當テ死ス江州番馬ニ至ル時敵既ニ道ヲ遮ル伸時以下從類皆自害ス新帝兩上皇ヲ捕テ京ヘ歸ル千劔破ノ寄手退テ南都ニ落行同月新田義貞上野國ニテ義兵ヲ起ソ鎌倉ヲ攻敗テ同廿二日高時自害其親族從類或ハ討死或ハ自害ス將軍守邦剃髮年三十三（同七月卒）高時二男時行信濃ヘ落行惠性ハ奥州ヘ落行同月筑紫ニ軍起テ探題英時少貳大友皆討レヌ長門ノ探題北條時直降參其外國々ノ北條一族或ハ討レ或ハ逃隱レテ亡ヌ高時ハ九歲ニテ家ヲ繼キ十四歲ニテ執權當職十一年ニシテ剃髮其後七年經テ亡フ年三十一治承四年賴朝鎌倉ニ入シヨリ今年マテ將軍九代北條執權八代都テ百五十四年

元弘三年五月六波羅ヲ攻落ス趣キ船ノ上ヘ註進後醍醐則入洛播州書寫山ニテ義貞ヨリ高時滅亡ノ事ヲ註進楠正成兵庫ニテ迎奉ル時ニ勅願ニ依テ先東寺ヘ行幸松子坊ニテ此松ノ事ヲ問ヒ給フニ事ノ由ヲ奏シテ前大僧正賴意是ヲ詠ス

植置シ昔ヤカヲテ契リケン今日ノ御幸ソ松風ノ音六月京着高氏補鎭守府將軍主上既ニ重祚有テ二條道平左大臣ニ再任シ藤氏ノ長者トナル諸事ヲ掌ニス但シ關白職ヲ不置自聞召ヘキ故也其外再任ノ公卿雲客アリ又解官ノ者多シ元弘ノ亂ニ流サレシ輩皆歸京ス右大臣ハ久我長通內大臣ハ洞院公兼於是花山院師賢ニ文貞公ヲ諡ス此月護良皇子征夷大將軍ニ任シ

入洛ス高氏カ人望アリテ終ニ朝敵ト成ヘキ威勢アルヲ知テ急ニ殺サントス主上許容セス高氏恐テ護良ノ繼母淮后ニ賄シテ難ヲ免ル七月千劔破ノ寄手降參皆誅ス八月高氏尊ノ字ヲ給リ改テ尊氏トス既ニ主上公家一統ノ政ヲ施サル淮后內寵ノ中スニヨリテ賞罰不正天下却而武家ヲ慕フ中納言藤房時々是ヲ諫ム許容无十月北畠參議源顯家陸奥ノ國司ニ任シ下向ス義良親王爲陸奥大守是ヲ携ヱ上野入道道忠輔佐ス陸奥出羽兩國悉ク靜謐ス十二月廿八日成良親王關東爲管領源直義執權シテ鎌倉ニ下向二階堂小路山城美作カ舘ニ居ス

建武元年正月大內裏造營事初也同廿九日改元同春尊氏ニ武藏常陸下總ヲ給ル義貞ニ上野播磨ヲ給ル直義ニ遠江ヲ給ル脇屋義助ニ駿河ヲ給ル義貞嫡子義顯ニ越後ヲ給ル正成ニ攝津河內長年ニ因幡伯耆ヲ給ル其餘ノ恩賞猶多シ赤松圓心獨賞ヲ給ハラス朝家ヲ恨奉ル三月九日高時殘黨本間澁谷ノ一族等謀叛鎌倉ヲ襲フ利アラス又紀州蜂起飯盛山ニ城ヲ搆フ正成討ヤフル此月十一日石清水行幸同月護良子陸良誕生（母源大納言師茂女）五月護良關東ヘ流罪護良近臣法印良忠殺サル七月紫宸殿上ニ化鳥鳴渡ル隱岐ノ廣在射之ヲ十一月奥州津輕ノ兒徒時如高景等皆義良ヘ降參

建武二年出雲國ヨリ龍馬ヲ進覽三月中納言藤房（萬里小路イ）遁世西園寺大納言公宗北條高時弟惠性謀叛ヲ企ツ惠性還俗シテ時興ト稱ス高時カ子時行關東ニ起リ其一族名越時景ハ北國ニ起ル事顯レテ公宗及同類橘本俊季金吾氏光三善文衡皆誅セラル二月顯家中納言ニ任シ義良叙三品五月尊氏嚴島ヘ詣ス同廿一日出羽ノ國人等國司葉室宰相光顯ヲ殺ス北畠親房其子顯信顯能顯

雄三人伊勢ヘ下向ス時行信州ニテ蜂起三月ヨリ是ヲ企ツ諏訪三浦葦名鹽谷本間是ニ屬ス鎌倉ニ發ス路次武州府中ニテ小山高朝自殺ス澁川刑部大輔義季細川頼貞新田四郎等戰テ或ハ敗シ或ハ自害スマタ北國ニ時兼蜂起ス七月鎌倉ヲ攻ム直義鎌倉ヲ出ツ護良ヲ於東光寺殺ス成良親王大江ノ時古携奉リテ歸洛ス兇徒追之直義返テ防戰駿河國手越川原ニテ戰テ直義沒落淵邊某不退シテ討死（淵邊護良ヲ殺ス不經日死ス）敵頻ニ襲來ル今川ノ名兒屋三郎防戰シテ力盡キ自害ス於是敵不進尊氏奉勅命凶徒爲追討東ニ赴ク路次所々ノ戰ニ時行敗ラル八月十九日相模川ノ合戰ニ今川頼國討死官軍利アラス敵清久山城守討ル葦名判官持明自殺ス兇徒敗北諏訪參河守以下四拾餘人鎌倉於大御堂皆顏ノ皮ヲ剝テ自害ス此月奥州ノ夷敵蜂起ス國司顯家及伊達行朝發向悉誅戮ス名越時兼ヲハ賀州於大聖寺斬戮ス尊氏以陸奥守家長奥州ノ管領トス斯波館ニ居ス於是關東ノ武士皆尊氏ニ屬ス至此時ニ尊氏ト新田義貞鉾楯互ニ罪ヲ訴奏ス故尊氏爲朝敵ト尊良親王東國ノ管領ニ任シ義貞ニ副テ東征ス路次所々ノ戰ニ朝敵ヲ敗ル十一月廿七日矢作ノ戰ニ直義カ從兵鹽瀨資連討死十二月五日手越川原軍ニ直義方肥前守盛經入道鹽瀨資連戰死ス十二月箱根竹ノ下合戰ニ官軍敗北尊良義貞歸京ス因茲北國西國南海處々ノ武士尊氏ニ應スル者多シ此月廿三日於奥州高野郡武家管領家長ト官軍相馬胤平兄弟合戰同廿六日於行方郡又戰フ

延元元年尊氏直義以大軍上洛義貞義助正成長年拒トイヘ𪜈大敵ニ力盡敗軍主上叡山ヘ臨幸尊氏入洛内裏京中炎上結城親光討死細川定禪ヲ三井寺ヘ遣シ叡山ヲ攻ントス奥州ヨリ義良親王北畠顯家諸軍ヲ將ヒテ攻上ル時斯波陸奥守家長相馬重胤等顯家ト戰テ杉本觀音寺ニ於テ家長重胤自殺ス既義良顯家叡山ニ至ル佐々木氏頼カ守城觀音寺ヲ拔ク大館中務太輔自害十六日ニ三井寺合戰官軍千葉新介氏胤戰死ス於是三井寺ヲ攻敗ル定禪歸洛義貞等官軍京ニ攻入ル於四宮河原（内裏イ）杉原國經ヲ討捕ル同廿日信州大智院宮彈正尹尹良親王兵ヲ將ヒテ坂本ニ至ル同廿七日八日九日ノ合戰上杉兵庫助憲房（尊氏叔父）防戰力盡キ中御門京極ノ祇陀林地藏堂ニテ自殺ス其子憲藤重行河原ヘ發シテ戰死ス伊賀左衞門尉光泰（評定衆）其子四郎光長討死ス尊氏毎度利ヲ失ヒ都ヲ沒落今度モ正成種々奇計ヲ回シ功ヲ立タリ二月主上叡山ヨリ還幸義貞顯家正成等尊氏ヲ追懸攝州兵庫ニ至ル十三日於櫻山戰フ九州ノ兵少貳大友尊氏ヲ救フトイヘ𪜈悉敗軍尊氏直義兵庫莫御堂ニ於テ既ニ自害セント欲ス細川律師頼リニ是ヲ諫メ乘船シテ筑紫ニヲモムク時ニ尊氏詠ス

今ムカフ方ハ明石ノウラナカラマタハレヤラヌ我ヲモイ哉細川和氏詠ス

武士ノ是ヤ限リノ折々モワスレサリニシシキシマノミチ於是ニ義貞歸洛左中將ニ任ス菊池武俊九州ノ兵ヲ催シ尊氏ト戰フ菊池敗軍九州ノ兵士悉ク尊氏ニ屬ス義貞西國下向延引之間赤松圓心等西國ノ諸士皆尊氏ニ靡ケリ京師花山院ヲ皇居トス義良親王元服加冠北畠親房タリ二月廿九日改元稱延元元（後於北京建武三年ヲ用ユ）三月四日江田大館西國ヘ下向同月八日於奥州官軍廣橋經泰軍將トシ相馬胤平等ノ諸兵ヲ引卒シ靈山ノ城ヲ出小保川役（殷鄰）ノ城ニ發向シテ攻ル城兵相馬彌次郎光胤等戰敗レ逃奔ル又官軍結城白川入道家僕中村六郎等守多庄熊野堂ニ出

張武家方相馬光胤馳向テ戰フ同廿二日廣橋經泰相馬胤平小高ノ城ニ進テ相馬光胤ト挑戰廿四日經泰敗軍是日京師ニ於テ顯家中納言ニ昇進シテ鎮守府ノ將軍ニ任シ義良及顯家再奥州下向義貞ハ山陽山陰十六ケ國ノ管領ヲ許サレ西國ヘ下向先播州赤松カ城ヲ攻ム四月後伏見院崩御以前ニ潛ニ尊氏ニ院宣ヲ賜ル同月六日於奥州菊田庄相馬胤平ト武家ノ囚徒三箱湯本堀坂口石川等合戰囚徒等敗北ス同九日常陸國ニ於テ小田右兵衛佐カ舘ニ夷賊等楯籠ル廣橋修理亮（後號肥後守ト）相馬胤平等奥州ヨリ發向シテ攻戰武家方敗走ス同廿四日義良顯家奥州ニ下着此月尊氏直義大軍ヲ將ヒテ筑紫ヲ出防州笠戸ニ至テ三浦介高繼ヲ催ス五月八日顯家奥州ノ兵士ヲ以テ那須ノ城ヲ攻ル是月義貞退テ兵庫ニ陣ス正成ニ勅ノ義貞ヲ救フ正成籌策ヲ献ストイヘ𪜈御許容ナキニヨリテ兵庫ニ赴キ尊氏ト合戰正成湊川ニテ討死義貞敗北シテ歸京主上又叡山ヘ臨幸尊氏入洛花園上皇ヲ東寺ヘ請シテ持明院方ノ皇統ヲ立ントス同月廿四日顯家奥州小高ノ城ヲ拔ク城主相馬光胤及其弟五人殺戮ス六月尊氏高師重ヲ遣シ叡山ヲ攻ル官軍忠顯正忠等討死寄手ノ軍敗レテ師重虜トナル多田頼氏戰死ス同卅日官軍京師ヲ襲トイヘ𪜈敗軍左衛門尉房秀伯耆三郎左衛門等戰死ス七月十三日義貞京師ニ發向戰トイエトモ毎度官軍利アラス名和長年討死八月五日於奥州顯家諸軍ヲ遣シ石川庄松山ノ城ヲ攻ル則沒落城兵降參同廿二日佐竹等石川ノ囚徒ヲ引率シ久慈東小里鄕ニ出張ス顯家ノ兵相馬胤平發ノ戰フ武家方二階堂五郎ヲ討捕同月十五日於京師豐仁（後伏見第二ノ皇子光厳ノ弟中御門）即位光明院尊氏ノ計ヒ建武ノ年號ヲ用ユ近衛左大臣經忠爲關白參議源通冬參議藤宗兼祭主大中臣陰直等職ヲ止ラル

先帝ニ密通スルニ依テナリ十月後醍醐帝ノ東宮恒良親王並尊良親王北國ニ赴ク路次ニ於テ千葉介敵トナル主上ハ尊氏ニ欺カレ都ヘ出花山院ニ押込奉ル同月義貞カ守ル金崎ノ城ヲ足利高經高師泰圍ンテ戰フ十一月尊氏任大納言建武式目十七ケ條ヲ定メ又武家ノ代トナル十二月主上潛ニ都ヲ逃出吉野ヘ遷幸楠正成カ子正行來テ守護シ奉ル舊臣等來テ從フ源親房勢州ニ至ル同廿二日北畠顯家（奥州ニ在）藤原隆資同實世（越前ニ在）藤光世（出羽ニ在）各北京ニ於テ職ヲ止ラル中御門宰相宗兼生捕ラル於是吉野ヲ號南朝帝皇二人有リ

櫻雲記卷之上了

櫻雲記卷之中

延元二年（北京建武四年）南朝後醍醐帝（北京光明院）正月尊氏以式部太輔頼兼爲奥州ノ管領ト（頼兼依肚年氏家入道道誠補佐ス）同八日奥州凶徒蜂起ス（野城脇）依之義貞親王及顯家追伐セントト欲シ伊達郡藤口靈山ニ赴ク結城上野入道源秀東海道熊堂ニ至ル同日右大臣公賢大納言師基中納言實任從北京吉野ニ來ル同十七日宰相宗兼於北京殺サル同廿一日德大寺ノ參議公量參議親光皆於北京捕ラル各南朝ニ通スルニ依テナリ同廿六日於熊堂白川入道道忠ト武家方相馬松鶴丸一族合戰終日ニ及テ雙方打死甚多シ二月廿四日於常陸小田ノ富岡山小田宮內少輔治久常陸平大掾ト武家方佐竹義篤合戰同廿六日小田ノ兵士夜討ス廿九日小田ノ軍破ル三月中納言雅（惟繼ノ）經大藏卿菅ノ在氏左大辨參議清忠吉野ニ來ル此月金崎ノ城沒落義顯自害（義貞嫡男）尊良親王モ自殺春宮恒良ハ京ヘ歸ル四月五日近衞關白經忠南都ヘ來ル同月尊氏細川ノ和氏ヲシテ公家領ヲ賂ス夏尊澄法親王勢州一瀨山ノ奥ニテ詠ス

深山ヲハヒトリナ出ソ時鳥我モ都ノ人ハ待ラン七月十四日顯家東彌九郎楠左近藏人ヲシテ常陸國ヲ擊ツ左竹義篤吉原源藏人戰テ日ヲ經テ兩方戰死スル者多シ九月十九日義貞顯家及結城入道西征セントト欲シ奥州ヲ發ス十二月十三日上野國於刀禰川合戰顯家敵ヲ打破テ齋藤實長（武州三嶽住人）討捕ル同十六日武州蘇山安保原ニテ戰テ亦軍ニ勝ツ同廿四日至鎌倉小壹松本前濱腰越所々ノ合戰ニ顯家利アリ新田義興（義貞次男）北條時行顯家ニ馳加於是義詮戰自テ鎌倉ヲ出奔ス義貞顯家則上洛武家方上杉桃井伊賀入道敗軍ノ士卒ヲアツメ是ヲ追テ上ル三浦介心ヲ翻テ武家方トナル今川範國遠州ニ於テ馳加ル吉貞滿義高刑部大輔三州ヲ發シ濃州黑田ニ至ル土岐頼遠土岐山ヲ出皆以武家方ニ加ル延元三年（北京曆應元年）正月濃州青野原合戰同廿三日吉田內大臣定房薨ス師基任內大臣同月義貞義助楠山ヨリ出北國ニ威ヲ振テ京都ヲ攻ントト欲ス二月四日高師泰細川頼春等京都ヨリ發向六日至黑地川十四日勢州雲津川洲俣川口於所々合戰師泰等敗北廿八日於南都合戰京勢得利至是義貞吉野ヘ赴顯家河內ノ國ヘ發向春日少將顯信八幡ヘ出張三月八日ニ八幡並ニ河州吉市川原合戰南方ノ軍破同月尊氏以葛西安藤權ノ助陸奥ノ守護トス五月泉州堺浦合戰顯家戰破テ於安倍野討死（年廿一）顯信新田義興籠八幡山同廿八日持家家房八幡ニ發向六月師直八幡ヲ攻破ル于時溝杭家兼同盛兼ヲ南方ノ兵討取閏七月義貞黑丸ノ城ヲ攻テ流矢ニ中テ死ス（年廿七）同月顯信叙從三位任陸奥守顯能叙從四位上任伊勢守（自是伊勢國司ノ始）藤原有資任伊豫守同月廿五日義貞親王尊澄法親王（宗良親王ト稱ス）以下皇子及北畠親房顯信結城入道源秀欲赴東國至勢州八月十七日勢州ヨリ出船九月十一日於伊豆崎逢難風テ船々ヽヨヒ或沒ス義貞皇子及顯信ノ船勢州篠島ニ歸着ス結城入道源秀舟勢州安野津ニ着爰ニ於テ怠病ヲ得テ死ス親房ノ舟常州ニ着岸宗貞親王並尊貞ノ一宮ノ舟遠州白羽湊ニ至テ則井伊ノ城ニ入懷良親王（號牧宮後爲西征將軍）船四國ニ着從是鎭西ニ下向ス南朝ヨリ日野大僧正頼意爲勅使至篠島于時伊勢ノ神主云ク此度逢難風テ數千艘ノ船破損ストイヘ共親王ノ舟故ナク此浦ニ着船感神慮奉悅ル僧正頼意詠之

神風ヤミソチヨスラン奥津浪頼ミヲ懸シ伊勢ノ濱邊ニ此月於北京尊氏征夷大將軍ノ宣

下直義副將軍ノ宣旨アリ高師直任執事職テ其弟師泰頃日振權威尊氏政務ヲ直義ニマカセテ
令執行直義ト師直兄弟不睦
興國元年北京曆應二年尊氏去歲ヨリ高師秋ヲ以テ伊勢守護トス故國司北畠顯能ト合戰不止春宗良
井伊ノ城ニ在リテ濱名ノ橋橋本ノ松原ノ邊ヲ遙ニ見テ詠ス
夕暮ハミナトモ底モシラスタノ入海懸テカスム松原
ハルタト朝ウツシホノミナト船コキ出ル方ハ猶カスミツツ宗良親王遠州ヨリ京師ヘ上
ラント欲ス味方ノ兵敗レテ吉野ヘ赴キ日ヲ經ル時大納言爲定詠ス
カヘルサヲイカニイソカン名ニシオフ山ノ櫻ハ心トムトモ返歌宗良
古鄕ハコヒシクトテモミヨシ野ノ花ノ盛ヲイカヽ見スラン又宗良詠ス
アキラケキ御代ノ春シル鶯モ谷ヨリ出ル聲キコエナル四月五日於南朝阿曾宗實ニ勢州
朝明郡ヲ賜地頭職ニ補ス同月十九日勅ヲ受顯信奥州國司ト成テ白川ノ城ニ至ル同廿七日下
總國駒城沒落於是一品宮尊良子號宇津峰宮又稱奥州宮遠州ヨリ奥州ニ下向ス慈編僧正神風和記三卷ヲ作テ
献ス白川親朝修理太夫ニ任ス五月五日宗良吉野ニ在リシ時淮后ヨリ菖蒲ニソヘテ和歌ヲ贈
ラル
ワキテタカ賴ム心ノ深キ江ニヒケルアヤメノ根トハシラナン返歌宗良
ワカキ江モ今日ソカヒアルアヤメ草君カ心ニヒクト思ヘハ七月廿三日常州ニ於テ春日
少將小田治久兵ヲ起ス佐竹吉原戰テ敗北ス同月義助黑丸ノ城ヲ攻落ス其後義助破レテ信濃

ニ至ル土岐賴明入道號周濟坊義助ヲ討タント信州ニ赴ク義助美濃ニ至テ伊勢ニ赴キ芳野ヘ參ル
秋ニ至テ宗良東國ニ發スヘキト勅アリテ伊勢ニ至テ乘船遠州ヘ赴ク天龍灘ニ至テ難風ニ逢
ヒ從フ船共沒ス漸ク白羽ノ湊ニ着船于時詠ス
イカテホス物トモシラストマヤカタカタシク袖ノ夜ノウラ浪井伊ノ城ニ再ヒ至リテ詠
ス
馴ニケリフタタヒキテモタヒ衣ナルアツマノ嶽ノアラシニ七月十三日恒良親王北京
ニ於テ害ス同廿一日成良親王薨ス十六歲八月九日南帝御不豫十五日義良親王踐祚十二歲主上御
惱風氣故程無ク平復セント奏スル人アリ于時御製
露ノ身ヲ草ノ枕ニヲキナカラ風ニハヨモト賴ムハカナサ同十六日後醍醐帝崩ス年五十一先
帝ノ女御二條道平女剃髮ス青蓮院慈道法親王ニテ受戒ス于時慈道和歌ヲ詠シ尊圓法親王ニ送ル
思ヒヤレフカキ涙ノ一シホモ色ニ出タルスミソメノ袖返歌尊圓
色替ル袖ノ涙ノカキクラシ余所モ時雨ル神無月カナ九月六日源季光剃髮ス十月五日後
村上帝即位諱義良母准后廉子號新待賢門院先帝寵愛人也近衞經忠ヲ關白トス師基任右大臣資次任別當洞院實世四條隆
資諸事ヲ執奏ス太神宮奉幣使新帝御製
四ノ海ノ浪モ納ル印ニテ三ツノタカラヲ身ニソツタユル
九重ニ今モマスミノ鏡コソ猶世ヲテラス光ナリケリ其比先帝ノ御硯ノ中ニ葵ノ二葉カ
ワラヌヲナシカサシト宸筆ヲ染ラルヽヲ見テ新待賢門院詠ス

カレツヽモ二葉カワラヌ草ノ名ヲカケハナレヌル我ソカナシキ又先帝ノ常ニ彈スル琵琶ヲ見テ

見ルマヽニ涙ソカヽル四ノ緒ノ行末ナカキヲニツタヘテモ又先帝ノ宸筆ノ裏ニ理趣經ヲ書テ達智門院詠ス

イハサリキ身ノ水クキノナカレテモ殘ル形見ノ跡ト見ヨトハ宗良親王遠州井伊ノ城ニ在リテ先帝ノ崩スルヲ風聞テ悲歎シテ深山ノ住居ヲヒシク長月ノ末時雨隙ナキニ庭ノ紅葉一葉ツヽミソヘ和歌ヲ詠シ四條ノ別當資次ヘ送ル

思フニハ猶色淺キ紅葉カナソナタノ山ハイカヽ時雨ル返歌資次

此秋ノ涙ヲソヘテ時雨ニシ山ハイカナル紅葉トカシル宗良親王吉野ヘ赴ントストイヘモ世上靜ナラス患ヘテ詠ス

ヲクレシト思ヒシ道モカヒナキハコノ世ノ外ノミヨシ野ノ山爰ニ於テ遠江ノ國人宗良ヲ背キ三河國足助重春迎ヘ奉テ從ハントス宗良心ヲ定メス其答ニ

一筋ニ思ヒサタメヌ八橋ノクモテニ身ヲモナケク比哉ト云ツカハシテ爰ニ至テ宗良駿河國ニ赴ク國人狩野介貞長及入江神原等屬シテ暫ク爰ニ留マル又信州ヘ赴ントス然ルニ同國貞長カ館ニ興良親王居スト聞テ是ヲ訪フル于時富士山ノ景氣妙ナルヲ都人願望アラント山ノカタチヲ書セ二條爲定カ方ヘ送ルトテ詠ス

見セハヤナカタラハサラニ言ノ葉ノヲヨハヌ富士ノ高根成ケリ返歌爲定

思ヒヤル方サヘナキニ言ノ葉ノヲヨハヌ富士ト聞ニツケテモ今年北畠大納言親房神皇正統記五卷ヲ作テ常陸國ヨリ吉野ヘ献ス

興國二年北京曆應三年新帝吉野ヲ帝都トスト云共行宮殿閣ナク月卿雲客微少昇進除目殆斷絶セントス於是二月下旬源親房常陸小田城ニ居シテ職原抄二卷ヲ作テ芳野ヘ献シ奉ル百官諸位職掌ヲ指カ如シ末代ニ至テ帝都ノ龜鑑ト云ツヘシ親房博識才學アリ今東國ニ在テ文書ノ一卷モ不從シテ輙ク是ヲ顯ス只凡人ノ所作ニ非ス爰ニ至テ親房兵士ヲ遣シ宇都宮綱世ヲ殺ス四月義助勅ヲ受テ南海ニ赴キ四國ヲ平ケントス五月義助伊豫國ニテ病死細川賴春四國ヲ從ヘ平均北越ニテ味方ニ屬スル兵士軍ヲ起ス八月奥州ノ宮號宇津峯ノ宮常州小田ノ城ニ入春日中將顯時一條少將具信唐橋肥後守經泰刑部大輔秀仲等供奉ス時ニ至テ官軍ニ應スル伊達宮内少輔石橋川村六郎田村庄司南部滴石等兵ヲ發シ斯波岩手兩郡ヲ攻テ轉貫出羽守及一族共ヲ討取ル今年ニ至テ宗良親王駿河ノ國ニ有トイヘモ義兵ヲ起スヘキ所ニアラストテ則去ントル時狩野介貞長等名殘ヲ惜ミ行末ニ至テ忠ヲ盡スヘキト云フ是ヲ感シテ詠ス

身ヲイカニ駿河ノ國ノ興津浪ヨルヘナシトテタチハナレナハ清見カ關ニ至テ其眺望ヲ見テ

東路ノ末マテユキヌイホサキノ清見カ關モ秋風ソフク車カヘシト云フ處ヨリ甲州ニ至テ信州ヘ赴ク富士山ノ麓ヲ通ルトテ其山ヲ褒テ

北ニナシ南ニナシテ今日幾日富士ノフモトヲメクリ來ヌラン甲州白須ノ松原ニ休テ

カリソメノ行通路ト聞シカトイサヤシラスノ待人モナシ信濃國ニ着テ送リノ族ヲ返ス
トテ駿河ノ人ノ方ヘ讀テ遣ス

富士ノ根ノ煙ヲ見テモ君トヘヨノサマノ嶽ハイカニ萠ユルト同國大河原ニ至ル香坂高宗等屬シテ是ヲ賞ス冬ニ至テ北國ノ兵士南朝ニ心ヲ通スル族有リ宗良招ニ應シ潛ニ越中國石黑ノ某カ館ニ赴キ寺泊ニ至テ歸雁ヲ聞テ

故鄕ト聞シコシチノ空ヲタニ猶浦トヲクカヘル雁金

興國三年北京曆應四年八月廿八日官軍勢州田丸ノ城ニ楯籠ル高士佐守師秋是ヲ攻落ス宗良親王越中國ニ在リテ詠ス

カソフレハ七トセモヘヌタノミコシナナノヤシロノカケヲハナレテ同國名子ノ浦ニ潛ニ居シテ京師ヘ赴ク人ニ讀テ爲定カ方ヘ遣ス

イタツラニ行テハ歸ル雁ハアレト都ノ人ノコトツテハナシ

今ハ又トヒクル人モ名子ノ浦ニシホタレテスムアマトシラナン返歌爲定

音ニナクハソレカトハキカテ行鴈ノコトツテナシトナニヲモフラン

秋ノ風ハヤ吹カヘセ名子ノアマノシホタレコロモウラミノコサテ同國ニテ宗良歸鴈ヲ聞テ

チナシクハチルマテヲ見テカヘル鴈花ノ都ノ事カタラナン

興國四年北京康永元年二月石堂宮內少輔入道秀慶謀テ白川結城親朝其子顯朝ヘ告テ武家ニ屬スヘシト頻ニ催促ス又御敎書數通是ヲ送ルト雖ヘ𪜈曾テ不從三月廿九日常州關城小田城ヲ武家方佐竹結城相馬等兵ヲ發シ是ヲ攻ル春日中將一條少將及小田治久等各是ヲ拒四月二日敵ノ軍將結城直朝十九歲其外佐竹一族百餘輩戰死ス同五日顯時伊佐ノ城ヲ出テ密ニ計謀シテ伏兵ヲ以テ敵ノ粮ノ通路ヲ遮ル是ニ依テ武家方悉ク敗北ス五月廿二日高三河守師冬鎌倉ノ執事ノ軍兵ヲ催シ關城小田城ヲ攻ント發向ス六月十四日既ニ穗庄ニ至テ同十五日小田近邊三村山ニ陣ス未タ矢ヲ不發勝負ヲ不決徒ラニ日ヲ經ル同廿三日城兵出テ戰フ終日ニ及フ敵討死疵ヲ蒙ル者凡千餘人師冬戰ヒ疲レ退去廿四日城兵亦發スト雖ヘトモ敵敢テ戰フス雙軍以野伏戰而已七月十二日親朝道忠カ子歟然ハ此時任大藏少歟修理太夫ハ前任一品宮秀仲ニ命シテ白川親朝修理太夫ニ任ス同十三日ニ合戰味方軍ニ利ヲ得タリ又常州北郡新城ニテ軍アリ味方小田一族宍戸田野ノ輩多以討死ス然共師冬河內郡駒城ニ至テ退ク廿七日師冬軍兵ヲ發シ夜討ス味方戰死スル者多キトイヘトモ遂ニ敵敗北ス同廿八日八町目垣本鷲宮善光寺山四ケ所ノ敵ノ要害ヲ敗テ放火ス廿九日飯沼舘沒落其夜間者ヲ以テ師冬カ屯スル陣屋ヲ悉ク燒拂フ敵敗走九月師冬再ヒ發向ス味方長沼ノ某忽ニ心ヲ翻シテ武家方トナル時ニ至テ親房曁顯時ヨリ白川親朝父子ヘ頻ニ加兵ヲ請トイヘ共不果十月小田治久心變シ師冬ト和順ノ敵トナル是ニ依テ一品宮及北畠親房春日中將顯時具信秀仲等關城ニ移ル一品宮顯信ハ又下妻ノ城ニ至ル十一月三日師冬佐竹小田等引卒シ田村ノ庄ニ屯ス同八日師冬軍士ヲ發シ關城ヲ攻ル兵ヲ分テ大寶城下妻城ト稱ス北寺山ヘ發シテ兩城關下要ノ通路ヲ塞ク且ツ三戶七郎軍將トシテ大平高橋武

州常州ノ諸兵數千騎大寶城ニ進テ南長峯ニ陣ス是ニ於テ顯信具信勇士ヲ從ヒ出城シテ戰ヒ敵ヲ攻ル然ルニ伊佐ノ城伊達宮內大輔行朝是ヲ守ル眞壁ノ城法超入道是ヲ守ル中郡ノ城西明寺ノ城皆兵士多ク楯籠ル田村庄四保ノ城四保駿河守是ニ居ス（各南朝ニ屬ス）四保ノ城而已味方ノ諸城ニ隔テ敵道ヲ遮ル故力盡キ駿河守城ヲ遁出テ妻ト共ニ剃髮ス其子因幡守降參師冬ニ謁シテ田村本領安堵ス月追ニ至テ師冬兵ヲ引テ小田ノ城ニ歸ル今年十二月尊氏ノ母藤淸子卒ス（上杉頼重女也）

興國五年（北京康永二年）春宗良親王越州ヨリ信州ニ歸ル大河原ノ奧山ニ居ス于時詠ス

カリノ宿カコフハカリノ吳竹ヲアソフソノトヤ鶯ノナク

春每ニアヒ宿リセシ鶯モ竹ノ園生ニワカシノフラン顯信奧州ニ在リテ兵士ヲ催ストイヘヒ國人皆テ應セス剩ヘ結城ノ親朝味方ヲ背キ潛ニ師冬ニ通シ正月十三日遂ニ敵トナル興國六年（北京康永三年）北畠親房關城ヲ援兵ヲ請ト雖トモ今ニ至テ果サス武家方日ニ增シテ急ニ攻城殆ト危シ爰ニ至テ又救ノ兵ヲ請ハント欲シ書ヲ白川結城大藏少輔親朝ヘ送テ曰ク

去年六月囚徒師冬等襲來之後。戮力事自非特其境者依無異途。連々發羽檄之上。自他形勢。推察更無所貽歟。最前依被申領狀。諸人暫雖待救兵之到。緯及遲引。經五箇月間。剩治久以下。懊者忽以變所存屬囚徒訖。移當城以來。分城彌縮。士卒已滅。難艱之甚。不言而可知。空歷九々月。未見一人之戮力。周章之至。無物取喩焉。當時近境之中。御方城墻纔六箇所也。先此關城者。宗祐一身日夜馳走。至今可謂堅確也。至自余之族者。反覆之情。極以叵測。囚徒專依圍當城。船路陸路共以斷絕。於白晝者。更無往來之人。臨暗夜。適雖有一兩之出入。殆希有之儀也。依之面々失膽寄。或放却乘馬。或交易甲冑。如此之類。縱雖欲全忠節。果而無炊骨易子之窘乎。下妻城者。本自人情不一。撰正員者尙幼稚。扶翼者互爭權。隨而浮說不休。私鬪亂可出來之體也。竹園御座大將顯時朝臣經廻之間。聊加斟酌許歟。此外中郡城者。顯時朝臣手勢等也。其勢不足。時兵糧又無畜。眞壁城者。法超一人。雖存忠義。一族郎從皆以有內通之聞。西明寺城者。本自遼遠。殆不及音聞。然者件五箇所之城。危如燕之巢幕上。伊佐城者。行朝々臣忠心不撓歟之間。當時隨分不危之城也。然而關下妻兩城。難義令至極者。以一所不可相支者也。抑戮力間。事其境計畧之分。大概推察之後者。不及盡詞。依無勢斟酌之條。誠又非無其謂。所詮於時節者。可在東奧之舟發向之期乎。囚徒未去國府。合戰之習機宜叵測。猶送日月者。此境官軍悉向枯魚之肆歟。雖導江海之流。其有何益焉。發向之段。猶不容易者。出士卒於國境。可被示形勢歟之由。自去年再三雖懇請。猶以不事行之間。御方所存。逐日令退屈者也。贈一位在國之時。愚身上洛之後。就尊氏叛逆之風聞。不日上道。遂成大義畢。彼時當參不幾之勢也。凌數千里之嶮難。早達先途。是志之切也。第二之度。退國府入雲山。所々相塞。人々兩端。然而志之所之。押平海道。莅于畿內畢。至其身之夭亡者。非士卒之敗北。天運之令然也。同時戰死之族。亦以不幾。雖怨其身之不幸。忠孝之道者。可謂無遺恨也。然乃以彼時思今日。眞實被存其志。殘置守城之勢。被發向者。伊達以西官軍。盡同心。志之切與不切也。殆見近日之體。事之火急。甚於赴湯蒼。至老身者。一瞬之間全忠義。欲以余命報先皇許也。大義之成否。不必係心府。運命云極者。失一命之外無

他事。更不可爲遺恨。倩思此理。且難知暮。殆依難期後信。聊所據吾懷也。烏之將死。其泣悲。人之將死。其言善云々。我國者天祖經始之地。日神統領之州也。聖々相承。授受不忒。且依禪讓。且歸正理。所經九十余代。一百七十餘萬載也。縱雖及末世。不可有違越。日神誓約。可聲無窮故也。依之上自神代之古。下至人皇之今。欲傾國家者。不久滅亡。欲圖逆飾者。必絶種類。世之所知。誰敢疑之。而今高氏等何者哉。罪惡之甚。先代未聞。盜據中原。已經七々年。何其多幸也。但承平將門六年而凶。永承貞任十二年而潰。先蹤聊有之。時節之未到歟。倩見和漢之風。成大奸者。雖終取敗。已有過人之智力。暫保首領也。今尊氏等爲體。非可知政道之器。無可胎子孫之謀。家僕師直。假虎威陵礫重代之武士。彼等一族誇張。已比擬高時等行事。凡重代輩皆是王民也。保元平治以來。屬源平之家。各爲陪臣。不屬皇家之烈。承久以來。剩拘義時泰時等指麾。及百十三年然而彼義時泰時等。隨分存公義。不忽諸朝憲。撫育傍倫。似辨政術。依之相續累其世。兵權被天下畢。有心之輩。見先祖之譜系者。可不心耻哉。幸遇一統之聖運。匪啻不失本所帶。直承綸言。恣給官祿。誠是會遇之時節。誰敢周旋之。而或爲遁一旦之害。或爲全所帶之利。與同于高氏逆節。剩頂戴師直等。何面目見先祖於地下。遂乃屈節忘名之輩。爲數度之降人。弓箭之耻。何事如之。而更無面耻之色。可謂文武之道掃地而盡也。就中承平逆亂之時。先祖秀鄉朝臣立勳功。先兼任下野武藏國宰。後任鎮守府將軍。已來代々異他之一流也。於清盛賴朝等事者。起自勅命。管領武門之上。雖不能左右。謂彼等先祖者。有何用捨。多年附屬。定非本意歟。適復舊儀。可興家業之處。重背皇家。與同逆徒。先祖若有靈者。豈不加睚眦之怨乎。爰故入道上野介朝臣。

身下紀傳有不字

深存忠貞。感悅一統之運。付公私被表慇懃。心中更不忘之。足下父子。爲彼嫡流。今無違失。親光朝臣死節。其跡相續而致忠。是併亡魂懇誠之所及。積善之餘慶也。比此於衆人者。九牛之一毛。論此於自門者。百烏之一鶚耳。帶此名譽。抱此忠節。遂無瑕類。彌發光花。豈是不被庶幾乎。總可爲辱後惡之大法。別可謂昌先烈之孝道也。而如聞者。近日游說之輩。於所々各樹異義歟。或云堅守城郭。伺天下之形容。不可必好挑戰。高氏等誠有運命者。一身立義。何爲臨時歸伏者。不及失家之耻云々。或云。坂東諸城。縱雖令覆沒。於奥州相支者。又定可送時日歟。京都諸國之謳歌。凶徒滅亡之兆。稠疊隨事體成大義者。還可有巨益云々。或云與廢有時。運命有天。閑可見損益之際。故贈一位等。爲全忠孝。雖令上道。不達本意。先鑒如此。宜加思慮云々。如此之義。於此境。猶以多々自可有被觸耳之途哉。不辨大義。不存遠慮族者。猷即時進發之經營。必可與同緩怠之義勢也。且又愚老年來隨分最負之類。猶以有向背之所存。頻揚不可。何況疎遠之士卒等乎。至如此事者。雖不足介意。萬一及大義之障碍者。可無公平事也。當家出皇族。久立公門。晨夕所習者。朝廷之禮儀。和漢之憲章也。生於大平之俗。不知亂代之風。何況武家之故實。邊鄙之成敗。萬而不得一理。諸人之不受。皆所自顧也。殺此身不可塞其謗矣。但爲先朝之一老。具蒙慇懃之顧命。於今殆傍若無人。於當代又有保護之勞。恐以一身之安否。可被測御運之叡慮也。於之諸方存忠之輩。伺坂東奥州之形勢。各擁義旗之時節。忽失一命者。萬方可解體之條。爲之如何。奥州一方暫雖守節義。諸方凶徒一面攻之者。適歸順之輩反覆。無所疑矣。將軍三位中將赴任之後。三ヶ年未立一匡之功。其身未練。又無扶翼之輩。於愚老失命者。雖有其志。更有何益。

然乃據今時之衆議者○不異積薪於猛火之上○暫安其坐○別有異圖者○不足論之○欲全貞節者○爭無遠略○貪余命望戮力者○上天罰之○祖神捨我焉○只爲天下發此狂言○君子掄之耳○凶徒已覆滅○聖運合一統者○面々朝奬○各々光花○唇吻之所及○緣底存等閑縱○又不叶衆望者○退此一身○有何遺恨○各立大功○宜決聖斷也○此等之條々深被加商量者○雖存雖亡○可無心底之爵而已○

興國七年北京貞和元年備前兒島ノ三宅高德等脇屋義助カ子義治ヲ取立竊ニ京ヘ上リ尊氏直義ヲ夜討セントハカル事顯テ信濃國ヘ逃去ル七月ノ比天變故於大內祭神大神宮ヘノ奉幣使

正平元年北京貞和二年三月花山院從三位左中將長親兼左大辨祖父師賢父時兼兼左大弁ト云于時長親詠和歌

親ノヲヤノタメシヲ見ツル我身カナ君ノ君ナル代ニツカユトテ

今年北京ニ風雅集ヲ撰ス宗良親王是ヲ聞テ是ヨリ前ニ續後拾遺集ヲ撰シ時聊ノ障リ有リテ作者ニ洩ヌ今又田舍ニ在リ撰者モ爲定卿ハ洩ヌ此道モスタリ行ト歎キテ

イカナレハ身ハシモナラヌコトノ葉ノウツモレテノミキコヘサルラン

此度ハカキモラストモモシホ草中々和歌ノウラミトハセシ爰ニ至テ信州大河原ニ年月ヲ經ルイツヲ期スヘキト定ス香坂高宗等カ忠義モ空クナラント愁ヘテ

イハテ思フ谷ノ心モクルシキハ身ヲムモレ木トスクスナリケリ

正平二年北京貞和三年武家方奥州結城白川彈正顯朝相馬ノ某伊賀式部入道大軍ヲ以テ藤口靈山田村宇津嶺等ノ各南朝方ノ城諸城ヲ攻ル城兵悉敗ス七月廿七日洞院ノ中納言公行實世カ男剃髮ス

正平三年北京貞和四年楠正行父正成カ遺跡不違無二ノ忠功ヲ勵ス故兵ヲ起ス五月八日尊氏高師泰ヲシテ南方ヲ擊ントス欲シ東條ノ城ニ至ル二月六日於春木谷師泰ト楠合戰五月十五日於野村武家方淡輪助重與横山ノ某合戰八月正行軍士ヲ率シ河內ヨリ攝州ニ出張尊氏ヨリ細川顯氏ヲシテ討シム於藤井寺合戰顯氏敗軍佐々木六郎左衞門粟田小太郎村田六郎楢崎等ノ兵士悉討死正行勝ニ乘テ潛ニ京ヘ上リ尊氏直義之館ヲ俄ニ攻ル故不能防戰尊氏ハ免テ江州ヘ逃行直義ハ兼而地道ヲ堀テ置ケル故其道ヨリ逃出ル於爰正行河內ヘ歸ル尊氏直義歸洛九月三日河州宮重同國風森於所々正行合戰每度軍ニ利ヲ得スト云フナシ渡邊孫十郎等ノ諸兵若干討取ル十月廿日攝州於池田ノ城正行戰テ又敵ヲ破ル正行カ勇力世擧テ之ヲ褒ム戰ヘハ勝攻レハ取ル同月二十八日北帝即位崇光院ト稱ス十一月廿五日尊氏命シテ山名時氏細川顯氏ヲシテ正行ヲ擊天王寺住吉ニ至テ屯ス正行住吉ニ急ニ馳テ戰テ山名カ軍ヲ破ル時氏疵ヲ蒙ル其弟參河守及原四郎二郎犬飯六郎目加田馬淵等ノ勇士悉ク戰死同十二月十四日高師直師泰諸兵ヲ帥テ八幡山崎ニ陣ス同廿七日楠其弟正時吉野ヘ參ル

正平四年北京貞和五年正月二日高師直以大軍飯山（森イ）ノ麓於四條繩手正行ト合戰ス正行以兵術武威ヲ勵シ大敵ヲ打破テ師直殆危シ南次郎左衞門松田次郎左衞門上山六郎左衞門等ノ諸卒戰死スル者甚タ多シ師直能拒ムユヘ楠カ軍散シテ正行矢ニ中テ死ス歲廿六其弟正時並一族四十三人同所ニ戰死ス師直進ンテ吉野ニ攻入後村上帝加名生山ヘ走ル吉野內裏炎上師直歸京ス住吉ニ至テ和歌ヲ詠ス師直

天下ルアラ人カミノシルシアリ世ニタカキ名ノアラハレニケリ

師泰河内ノ石川河原ニ陣ス正行カ弟正儀殘兵ヲ發シテ對陣ス三月十五日於寺田師泰ト正儀合戰同十八日於山田戰フ十九日佐保田ニテ軍有リ四月廿二日日野高嗣合戰師泰正儀未雌雄ヲ決セス八月直義ト師直隙アリ於爰直義政務ヲ止ラル上杉重能畠山直宗惡逆ノ張本タルニ依テ師直是ヲ殺ス十月尊氏ノ長男義詮鎌倉ヨリ上洛直義ニ替リテ政ヲ行フ師直權ヲ恣ニス義詮ノ弟基氏ヲ鎌倉ノ爲管領高師冬上杉憲顯其家老タリ十二月直義剃髮號惠源

正平五年（北京觀應元年）春新待賢門院先帝ノ御廟昔ヲ慕ヒ塔尾御陵ニ參ル座主堂其外坊舍兵火ノ爲ニ回祿ス然共花ハ昔ニ替ラス哀ニ覺ヘテ一房消息ノ内ニ入レ宗良親王ヘ送ルトテ

三吉野ハ見シニモアラスアレニケリアタナル花ハ猶ノコレトモ御返事宗良

今迄モオモホユルカナチクレニシ君カミカケヤ花ニソフラン

尋見ル人ノ爲ニヤ殘シケンオナシカサシノ三吉野ノ花同御陵ノ邊ニ櫻ヲ千本植ントテ誓シテ年々植花ノ咲タルヲ見ニ粟田久盛朝臣詠之

植ヲカハ昔ノ下ニモ三吉野ノ御幸ノアトヲ花ヤ殘サン

夏足利直冬（尊氏落胤ノ子）尊氏常ニ疎ム故惠源取立於筑紫兵ヲ起ス石見國三角入道コレニ屬ス六月三日武家ヨリ高師泰ヲシテ石見國ヲ擊ツ八月十三日直冬於肥後兵ヲ起シ同廿五日官軍ノ守ル所ノ石州皷崎ノ城青杉ノ城ヲ攻テ援ク佐和善四郎等自殺九月廿五日奥州白川ノ住人結城三河守其兄大藏太輔ヲ背テ再ヒ南朝ニ屬ス故顯信ト通シテ石堂藏人入道秀慶ト戰フ十月尊氏及師直大軍ヲ將ヒ直冬爲誅伐ニ西國ニ赴ク義詮京ヲ警固ス惠源潛ニ京ヲ出ル十二月九日惠源吉野ヘ降參則大將ノ宣旨ヲ賜ル同月廿五日鎌倉基氏ト師冬不快師冬鎌倉沒落甲州栖溪城ニ至ル廿六日上杉能憲師ヲ帥テ師冬ト攻戰フ（其後上杉憲顯一人鎌倉ノ爲執事）於爰畠山國清モ其一族直宗誅セラルヽニ依テ武家ヲ背テ南朝ヘ降參奥州管領畠山高國其子國氏モ武家ヲ背テ南朝ヘ降テ同國吉良右京大夫貞家ト合戰上杉重能養子民部少輔能憲其一族朝房ト共ニ二百騎ヲ從ヘ上洛シテ惠源ニ屬ス

正平六年（北京觀應二年）正月惠源南方ノ軍兵ヲ催シ京ヲ攻ントス桃井直常是ニ應シ北國ヨリ攻上ル尊氏歸京シテ合戰直常敗軍然レトモ人皆師直ヲ惡ンテ惠源ニ從フ故尊氏又西國ヘ落行ク正月十七日甲州伊野村栖溪城ニテ能憲及諏訪ノ親部カ爲ニ師冬殺サル此月於備中國師泰ト上杉朝房合戰朝房破壞ス二月攝州光明寺小清水所々ノ軍ニ尊氏師直軍敗レ惠源利ヲ得タリ尊氏師直松岡ノ城ニ籠リ既ニ自害セントス是時惠源ト和睦尊氏惠源義詮皆歸洛師直師泰剃髮シテ降參路次ニテ二人共ニ殺ス其一族皆所々ニテ殺サル同月十二日奥州岩切ノ城ヲ貞家攻破テ畠山高國其子國氏幷遊佐等自害從類百餘人自殺ス三月廿四日於奥州源顯信ト吉良貞家合戰顯信軍敗レ田村ノ庄宇津嶺ノ城ニ入ル播州赤松則祐（南朝方）護良ノ子陸良ヲ取立大將ニセントス兵ヲ催ス頃仁木細川土岐佐々木ト（尊氏方）石堂上杉桃井（惠源方）各武威ヲ論テ不快七月廿五日和泉國陶器ノ城ノ官軍出張同月尊氏惠源再ヒ不和惠源北國ヘ赴ク八月四日泉州井山ノ城（南朝方）淡輪彦太郎助重（武家方）兵ヲ發シテ井山ノ城ヲ攻テ戰フ同五日三州本野原ニ於テ富永高兼同直資ト（惠源方）富永直兼合戰高兼直資敗軍シテ戰死ス八月尊氏北國ヘ赴ントス九月六日於泉州

佐野ノ城南方ノ兵ト京ノ軍士挑ミ戰フ毎日合戰不止既ニ十八日ニ至ル又宮軍ノ籠井山城守兵ヲ發シ戰事同十八日ヨリ十一月廿五日ニ至テ軍果サス九月十七日惠源相田ニ陣ス於蒲生野合戰尊氏ノ兵渡邊左衞門尉榮討死惠源ノ兵秋山新藏人光政戰死ス於爰畠山國清入道々誓尊氏ニ降參十月八日惠源北國ヨリ關東ニ趣キ鎌倉ニ入十八日尊氏關東進發義詮京守護タリ同十六日泉州井山ノ城合戰同廿三日奥州柴田ノ郡倉本川ニ於テ伊達飛驒守行朝田村ノ庄司南朝方相馬親胤吉良貞家合戰十一月尊氏駿州薩埵山ニ陣ス惠源大軍ヲ以テ圍之十二月宇都宮氏綱武家方ト桃井長尾惠源方於上州名波ノ庄合戰宇都宮公綱藥師寺公義等尊氏ニ應ノ薩埵山後攻ス惠源大ニ敗レテ尊氏ニ降參尊氏是ヲ携テ鎌倉ニ入此間京都兵少ク危カルニ依テ義詮南帝ヘ和睦後村上帝僞テ許容ス依之觀應二年ヲ改南朝ノ年號正平六年ヲ用ユ二條關白良基ヲ初トシテ百官皆吉野ヘ參吉野伺公之輩皆官位昇進北畠大納言源親房准后ノ宣旨ヲ蒙ル南帝ノ見動功有故此月於奥州五辻源少納言右馬頭清顯南朝方ト石堂入道秀慶武家方合戰石堂等敗軍

正平七年北京文和元年義詮砂金ヲ南帝ヘ獻ス正月六日尊氏ノ末子基氏童名稱光王丸惠源之ヲ育フ二月廿六日惠源卒年四十二宗良親王東國ニ在テ吉野ノ行宮ヲ他所ニ遷サルヽト聞テ先朝ノ遺跡イト遠サカル事ヲ愁ヘテ和歌ヲ詠シ主上ヘ奉ル

タラチネノ守リヲソフル三吉野ノ山ヲハイツチ立ハナルラン

御返事後村上帝

故郷トナリニシ山ハ出ヌレト親ノマモリハ猶モアルラン今年二月後村上帝吉野ヲ出住吉ヘ行幸住吉ヲ皇居ト定ム同十四日津守ノ國夏敘正三位同十九日後村上帝八幡ヘ行幸於爰伊勢國司源顯能兵ヲ將ヒテ來ル俄ニ顯能楠正儀等ヲシテ京ヲ襲フ義詮江州ヘ出奔細川頼春討死頼春カ家僕四國ヨリ發ス討死ヲ聞テ町田筒井湯淺川鰭等自殺ス是ヲ殉死ノ始トス顯能勅ヲ請テ上洛シテ持明院殿ヘ參リ本院光明新院光明主上崇光東宮直仁ヲ車ニ乘セ奉リ吉野ノ奥加名生ニ押籠奉ル于時三種ノ神器南方ヘ取奉リ北帝ヲ稱太上天皇三條實春典藥頭篤直八條實音吉野ヘ供奉於爰平安城ニ主ナクシテ荒廢ノ地トナレリ兵亂打續クルユヘニ御禊ノ大嘗會モ行ハレス頃年宗良親王補中務卿征夷大將軍ノ宣旨アリ勅使由良入道信阿彌也宗良親王年ヲ經テ遠國ニ住テ都ノ手振ヲモ忘弓馬ノ業ノミニテ征夷將軍ノ宣旨ヲ蒙リシモ不思議ニ覺ヘテ

思ヒキヤ手モフレサリシ梓弓ヲキフシワカスナレンモノトハ

旦年宗良信州ニ居シテ都ヘ讀ヲ遣ス

思ヒヤレ木曾ノミカサモ雲トヘル山ノコナタノ五月雨ノコロ又ヲハステヤマノ邊ニテ月ヲ見テ

是ニマス都ノツトハナキモノヲイサトイハヽヤヲハステノ月

閏二月宗良親王武藏國ニ赴ク小手差原ニ至テ諸軍ヲ指揮シテ兵ヲ勇テ讀テケル

君カタメ世ノタメ何カヲシカランステヽカヒアル命ナリセハ

同廿八日宗良及新田義宗義興義治師ヲ師テ金井原小手差原ニテ合戰尊氏防戰ス新田敗トイヘ共義興義治鎌倉ニ攻入基氏出奔義宗臼井峠ニテ尊氏ト戰フ義宗擊負越後ヘ走ル尊氏亦鎌倉ヲ攻ム義興義治退テ川

村ノ域ニ入ル三月六日大内之介弘幸（南朝方）卒ス同廿八日埋墓河曲口合戰官軍敗ラル宗良親王東夷ヲ征ス宣旨有テ東山東海ニ籌策ヲメクラス于時寄海親ト云フ事ヲ歌ス

四方ノ海ノ中ニモワキテシツカナレ我カヲサムヘキ浦ノ浪風三月義詮諸兵ヲ催シ上洛八幡ヲ攻テ度々合戰楠勇力ヲ勵シ和田某戰功有リ土岐頼名等ヲ打捕ル此月十八日於伯耆國長年カ殘黨兵ヲ起シ船ノ上山ノ城ヲ守テ南方ニ忠ヲ盡ス京方ノ軍士是ヲ攻ル城兵律師長信等戰死ス四月三日於伯州合戰備中守行實左京進高政等宮方ノ兵士多以テ討死ス同九日奥州國司顯信及田村ノ庄司伊達飛驒守兵ヲ起ス吉良貞家相馬胤頼國魂隆秀等發シテ安積郡戸谷田佐々河矢拇所々合戰同廿五日八幡城合戰伯耆兵庫助長氏等ノ城兵戰死ス五月十一日ノ夜南方ノ軍敗レ後村上帝八幡ヲ落ル於路次參議實勝四條大納言隆資等多以討死ス七月三日奥州田村ノ庄久野原ニヲヒテ官軍ト吉良貞家合戰九日於矢拇ノ城又戰フ八月七日宇津ノミテノ城陥ル一品ノ宮顯信清顯秀仲顯時沒落吉野ノ奥加名生ニヲヒテ八條大納言實音（九月十三夜歟）八月十五日（夜イ）和歌ヲ詠シ内大臣公秀ヘ送ル

長月ヤ月モフケヌルカケ見ヘテ身ヲアキハツルミヤマヘノ秋返歌公秀

長月ヤウキ世ヲアキノ月見テモフカキミヤマヲ思ヒコソヤレ八月十七日北帝後光嚴院即位

正平八年（北京文和二年）正月十日備前國岡山ニ於テ南朝ノ兵上神太郎兵衛尉高直戰死ス同月遠州乾ノ住人天野周防前司與良王（宗良親王子遠州宮號）生捕リ携テ上洛ス二月持明院殿回祿五月七日山名時氏其子師氏謀叛シテ南朝方ト成テ伯耆國ヲ出ツ六月山名吉野ノ官軍ト牒シ合セ京ヘ攻上ル北帝ヲ義詮伴ヒ奉リ東國ヘ落行ク同十一日西山谷ノ堂ニ於テ師直子武藏將監（道譽カ子）討死ス爰ニ於テ北帝ヲ細川清氏カ背ニ負テ部助等堅田ニ發向既ニ敵迫來ル佐々木秀綱濃州樽井ニ暫皇居トス義詮勢ヲ聚山名ヲ討タントス山名父子勢ヒ盡キ伯耆ヘ歸ル北帝歸洛七月畠山安房守國清鎌倉ノ管領トナル足利直冬南朝ニ應シ大將ト成ル

正平九年（北京文和三年）二月二日後村上勅シテ能登國惣持寺（曹洞宗）勅願所ノ宣旨アリ新田義興脇屋義治川村ノ城ヲ出奔尊氏歸洛ス仁木左京太夫贈章ヲ武家ノ執事職トス義詮發シテ山名ヲ討ツ山名此ヲ聞テ直冬ヲ迎テ戰フ越前ノ足利高經越中ノ桃井直常モ武家ニ恨ミ有テ直冬ニ從テ南朝ニ屬シ北國ヨリ攻上ラント約ス十二月山名伯州ヲ發ス

正平十年（北京文和四年）正月北帝ヲ尊氏伴ヒ奉リ江州ヘ落行ク直冬及山名桃井足利等入洛二月四日尊氏東國ノ兵ヲ催シ東坂本ニ陣ス同八日細川清氏ト北國ノ兵戰テ二宮兵庫助討死ス又仁木ト桃井合戰義詮西國ノ兵ヲ催シ神南ニ陣ス山名ト戰フ師氏疵ヲ蒙リ敗軍直冬東寺ノ城ニ籠テ尊氏ト戰フ三月十五日武家方奈須五郎及從兵究竟ノ者擊死ス同月南方ノ糧絶テ直冬時氏高經直常皆本國ニ歸ル尊氏義詮歸京五月廿一日伊賀國ニ於テ官軍ノ春日郡判官（師イ）高貞凶徒ノ爲ニ討ル北畠大納言守親（顯信二男）奥州國司ニ任ス（于時奥州ニ居ス）爰ニ於テ白川彈正少弼（武家方）ト合戰守親和歌ヲ詠ス

陸奥ノアタチノマユミ取初テソノヨニツカヌナヲナケキツヽ

正平十一年北京延文元年正月二條ノ爲忠和歌二首天野行宮ヘ捧ク奉ル

君スメハ峯ニモヲニモ家居シテ深山ナカラノ都ナリケリ

世ニ出テハヒカリソフヘキ月影ノマタ山フカキ雲ノ上カナ後村上長親ニ勅在テ四條隆資ニ贈左大臣從一位

正平十二年北京延文二年二月光嚴法皇光明院崇光院直仁親王皆後村上帝ノ免アリテ吉野ノ奥山ヨリ歸京シ給フ花山院右大將兼文章博士長親和歌ヲ詠ス

ヲモヒキヤ筆ノ林ノ花ノ香ヲ我袖ニサヘウツスヘシトハ洞院相國公泰剃髪覺元ト號ス

冷泉入道相國ト號ス十二月主上御方違ノタメ行幸ノ時光明臺院入道前關白左大臣詠ス

マチニタル君カ行幸ニ色ソヘテ老木ノ松モ春ヤシラマシ

正平十三年北京延文三年四月十八日南朝ニ於テ新待賢門院薨ス後村上ノ國母阿野公廉女初三位局ト號ス又准后ト稱ス同月廿九日尊氏薨ス年五十四建武三年ヨリ延文三年マテ治世廿三年此時武田伊豆守信氏剃髪シテ和歌ヲ詠ス

梓弓モトノ白羽ハヒキカヱヌ入ヘキ山ノカクレカモナシ五月五日雨フル義詮詠ス

袖ノ色カワルトキクハタヒコロモ立カヘリテモナヲソツユケキ此日千秋三河藏人高範和歌ヲ詠シ南朝ノ儒家有範カ方ヘ送ル

時シモアレ袖ニウキヲヲカクソヘテ雨モナミタモハレスソラカナ六月三日尊氏ニ贈左大臣從一位コヽニオヒテ義詮和歌ヲ以テ勅答ス

歸ルヘキ道シナケレハクラヰ山ノホルニツケテヌルヽ袖カナ七月十九日征夷將軍懷良親王尊氏薨スルヲ聞テ兵ヲ起ス大宰少貳ト合戰北畠中納言信親春日大納言顯時洞院大納言菊池武明同武信豐ヒ新田一族堀口掃部助江田丹後守等悉ク戰死ス頃年菊池武光元來南朝ニ屬シ懷良親王ヲ仰ク故新田氏族其餘諸國ノ南方ニ應スル兵士來テ菊池ヲ賴ム者多シ八月十九日南朝ニ於テ左大臣實世薨ス年五十二十月鎌倉管領基氏及執事畠山國清入道道誓計テ新田義興ヲ殺ス其外新田ノ一族所々ニ於テ悉ク平ク十月六日四條三位高宗夜討ノ爲ニ殺サル十一月菊池武光兵ヲ發シ九州大半從フ十二月義詮征夷大將軍ノ宣下アリ今年宗良親王新待賢門院薨スルヲ聞テ愁ノ餘リニ先年花ニ添テ賜ル消息ヲ取出シシホメル花ヲ見テイト哀ヲモヨホシ

尋テモ今又誰カ三吉野ノ花ノムカシヲワレニカタラン

正平十四年北京延文四年南朝二條教基關白トナル師基ノ男師基ハ剃髪ス北畠准后親房薨ス年六十七中院一品ト號ス十月仁木頼章死ス細川相模守清氏武家ノ執事ト成ル同八日畠山道誓基氏ノ名代トメ東國ノ大軍ヲ率シ上洛十一月義詮ニ南朝ヲ攻ンコヲ進ム十二月義詮及道誓數十萬騎ノ兵ヲ以テ南方ヘ發向廿三日義詮尼崎ニ陣ス楠正儀和田正武此ヲ拒ク南帝山中觀心寺ニ幸ス正平十五年北京延文五年一一月ヨリ京勢關東勢南方ヘ發ス畠山道誓四月三日紀州龍門山ノ城ニ戰フ城兵鹽冶伊勢守討死畠山敗軍同十一日芳賀等重而發向和州ノ人越智某降參ス同十二日住吉ノ社鳴動同十八日於吉野陸良親王護良ノ子逆心シテ内裏ヲ燒ク二條師基是ヲ攻ム陸良戰負殺サル同廿九日細川清氏赤松範實龍泉寺ノ城ヲ拔ク五月赤坂ノ城楠正儀守ルトイヘモ力盡キ自

火ヲ放テ退去ス同五日新待賢門院三年ノ服終ル日菖蒲ニ寄セテ御製阿野大納言實爲ニ賜ル

今サラニ音ニコソタツレミトセマテアヤメモシラテ過シカナシサ（ナイ）御返事實爲

アヤメヲモシラテ過コシ程ヨリモ今日コソサラニ音ヲハソヘツレ同月南帝觀心寺ニ皇居ス深山ニテ攻ル事ナラス楠和田金剛山ノ奥ニ隱ル故同十八日義詮並ニ道誓歸洛ス于時仁木義長（頼章弟）道誓ト不和七月南方ノ兵士蜂起ス道誓清氏發向ス天王寺ニ至既ニ義長ヲ擊ントス義長急キ義詮ノ館ニ來テ强テ道誓清氏追討ノ御敎書ヲ乞受任執事職於爰佐々木道譽カ謀ニテ義詮女ノ姿ニ變シテ館ヲ出西山ノ谷ノ堂ヘ落行ク因茲義長勢盡キ伊勢ヘ落行ク義詮歸洛楠正儀譽田之城ヲ攻テ扳ク山本田邊阿瀨川等湯川庄司是ヲ攻落ス山名時氏蜂起山陰道ヲ擊ツ道誓清氏歸洛又南方兵ヲ發ス道誓功ナキヲ恥テ八月潛ニ關東ヘ赴ク九月再ヒ住吉ニ行幸皇居トス爰ニ於テ社頭ノ松ト云フ事ヲ入道前關白左大臣詠ス

千代ヲ又カサヲテチキレ御幸シテフタヽヒナル、住吉ノ松返歌

今見テモヲモホユルカナヲクレニシ君カミカケヤ花ニソフラン今年東國ノ凶徒攻メ來テ行宮モ危シ宗良親王是ヲ聞テ急キ進發セントス于時幾程ナク擊從ヘ又住吉ニ行幸故京師ニ攻入給ヌ信州ヨリ兵ヲ催シ早ク來ルヘシト勅有リ然レヒ秋冬ニ至テ果サス因茲再ヒ勅有テ御製賜ル

イツマテカ我ノミヒトリ住吉ノトハヌウラミヲ君ニ殘サン（ナンシィ）御返事宗良

我急ク心ヲシラハ住吉ノマツヒサシサヲウクミサラマシ

正平十六年（北京康安元年）六月十八日九州博多ニヲヒテ征夷將軍懷良親王及菊池武光軍士ヲ發ス大友刑部大輔太宰ノ少貳冬資馳向テ戰フ少貳冬資直資（實ィ）等戰死ス八月ニ至テ合戰止ヌ七月十二日山名時氏美作ヘ出張赤松ト戰フ八月菊池ト大友等ノ戰ヒ遂ニ大友敗軍ス九月廿八日楠正儀攝州ニ出張佐々木秀詮ト合戰佐々木敗軍秀詮兄弟渡邊白江源二瓜生次郎左衞門等ノ軍士凡貳百七十三人戰死ス是月武家ノ執事細川清氏ト佐々木道譽權ヲ諍フ遂ニ清氏反逆ニ成テ都ヲ沒落十月清氏南朝ヘ降參大將ノ宣旨ヲ蒙ル同月後村上帝住吉ノ社行幸神主修理權太夫津守國量叙正四位下于時御製

位山越テモ更ニ思ヒシレ神モヒカリヲソフル代ソトハ又供奉ノ人風流ノ破子ヲ奉テ興ヲ催ス神主國量八十島ノ祭ノカタヲ作リ捧奉ル時御製

ミソキスル八十島カケテイマシマヤ涙ヲサマレル時ハミヘケリ十一月關東畠山道誓基氏ニ背テ豆州ヘ沒落十二月三日官軍二條師基四條隆俊石堂賴房細川清氏楠正儀和田正武湯淺山本恩地桂（ヶカ）川等ノ軍士ヲ發シ都ヘ攻入同八日北帝義詮伴テ江州ヘ落行ク官軍入洛義詮ノタチヲ放火ス同月廿四日義詮武佐ニ至テ軍士ヲ聚ム廿六日官軍京ヲ去ル廿九日義詮歸京

正平十七年（北京貞治元年）正月清氏阿波國ニ赴ク四國ヲ平ク二月斯波義將武家ノ執事職ニ補ス（足利高經入道）三月十三日北帝江州ヨリ京ニ還幸西園寺實俊カ館ヲ皇居トス四月十九日內裏ニ遷ル（々朝カ末子義將壯年故道朝諸事ヲ行フ）六月三日直冬山名時氏中國ニ出張七月細川賴之四國ニヲヒテ清氏ト合戰清氏軍敗レ討死森治郎左衞門鈴木孫七郎同行長戰死ス於爰賴之四國悉ク平ク八月後村上帝住吉行宮

ヨリ宗良親王ヘ御製信州ヘ送ル十五夜ノ月ヲ敞覽有テ
年經ヌルヒナノスマヒノアキハアレト月ハミヤコト思ヒタニヤレ御返シ宗良
イカヽセン月モ都トヒカリソフ君住江ノアキノユカシサ又
月ニ君思ヒ出クリアキフカシワレヲハステノ山トナケクニ九月道朝カ二男氏經九州ノ
探題ニ任シ下向ス菊池武光是ヲ擊敗ル氏經剃髮シテ歸洛
正平十八年北京貞治二年正月十三日三州竹島合戰後村上帝住吉行宮ヨリ吉野ニ還幸六月春日神木
入洛南朝權大納言公夏是ヲ聞テ秋ニ至テ詠ス
神モ又今年ノ秋ハ旅寢シテ思ヒイツラン春日野ノ月八月十六日莊嚴淨土寺ニテ御八講
行レケル夜月隱ル時御製
秋ヲヘテ月ヤハサノミクモルヘキミタカキクルヽイサヨイノ空八月廿日基氏鎌倉ヲ建
ル上杉憲顯入道桂山管領トス是時上杉ト芳賀不和芳賀反ス同廿六日基氏兵ヲ發シ武州岩殿
山ニテ芳賀伊賀守高貞入道禪可ト合戰高貞其弟駿河守敗軍基氏是ヲ追フ野州夫玉ノ宿ニ至
ル宇津宮頻ニ和ヲ請於是基氏歸ル於南朝阿野實爲任內大臣叙從一位
正平十九年北京貞治三年春大內介弘世武家ニ降參厚東駿河守宮方ト成テ菊池ニ應ス故大內介豐後
國ニ來テ合戰弘世敗軍シテ上洛山名時氏武家ニ降參ス仁木義長モ同ク降參ス畠山道誓關東
ヨリ河內ニ潛ニ來テ南朝ヘ降參セントス楠等許容セス故流浪シテ死ス七月廿七日上野國世
良田伊豫守義政基氏ヲ背ク故追討ス廿八日於如來堂義政自害ス

正平二十年北京貞治四年五月四日故尊氏後室卒赤橋相模守冬ゝイ時女八月佐々木道譽並諸大名武家ノ執事道朝
ヲ讒ス依之同五日道朝赴越前從京追討使ヲ遣ス宗良親王從信州吉野宮ヘ和歌三百六十首ヲ
詠シ是ヲ奉ル
正平二十一年北京貞治五年二月廿七日莊嚴淨土寺御八講執行ノ日雪降ル御製內府家賢ニ賜ル
思ヒヤレサカ野ノ春ノ雪ニモヤ消クルツミノ程ハ見ユラン御返事家賢
ナシムナヨ法ノムシロノ春ノ雪消ラン露ノタメシナリセハ七月於越前道朝卒其子義將
降參
正平二十二年北京貞治六年二月關東宮方平一揆兵ヲ起テ武州川越ノ城楯籠基氏是ヲ聞追伐セントト
欲ス于時病アリ故其子金王丸九歲爲名代發向シテ川越ノ城ヲ攻ル四月廿六日基氏卒年廿八閏六
月十七日川越ノ城ヲ拔ク城兵平一揆勢州ヘ走ル其子孫關一統金王丸進テ宇都宮ノ城ヲ攻ル城主宇
都宮氏綱降參九月細川頼之武家ノ補執事職十二月七日武將義詮薨ス年三十八此年無文和尙後醍醐皇子
入唐徑山ニ登
正平二十三年北京應安元年義滿十一歲爲武家ノ棟梁三月廿六日上杉憲顯關東下向九月十九日憲顯上
州足利ノ於陣所卒上杉能憲同朝房鎌倉爲執事十一月廿一日鎌倉金王丸元服氏滿ト號ス於南
朝右大將長親源氏物語ノ抄ヲ作十二月廿日義滿征夷大將軍宣旨有
正平二十四年北京應安二年正月楠正儀武家ヘ可降參ト告ル二月十五日左馬頭滿詮十一歲義滿弟武州本田
ノ陣ニ下向春主上御不豫于時宗良親王信州ニ在リ消息ニ御製ヲ添是ヲ送ラル

メクリアハン頼ソシラヌ命タニアラハトタノム程ノハカナサ御返事宗良
メクリ逢ン頼ミアルヘキ君カ代ニヒトリ老ヌル身ヲイカニセン又遍照光院入道前太政
大臣讀テ宗良ヘ送ル
目ニムカヒ月ニワスレヌ心ヲハタヽナカソラニ思ヒヤラナン返歌宗良
思ヒヤリ歎キテクラス心ヲハ月日モ知ヌ時ヤアルラン三月十一日吉野ノ行宮ニ於テ後
村上帝崩ス年四十三如意輪寺ニ葬ス先帝後醍醐依遺勅在世ノ内讓位セス亦剃髪セス先帝ノ年號
ヲ不用於爰太子熙成親王受禪號後龜山院藤冬實關白ト成二條教基男右大將長親父内府薨シテ三
年ノ喪未滿亦先帝素服ヲ賜ル悲歎ノ和歌ヲ詠ス
三年マテホサヌナミタノ藤衣コハ又イカニ染ル袂ソ同月土御門右大臣顯信剃髪四月楠
正儀入洛義滿ニ謁ス五月五日菖蒲ニ寄テ新宜陽門院詠之
タフハ又アヤメノ草ニ引カヘテウキヲソカヽルシイ柴ノ袖返歌嘉喜門院
ヲモハヌニアヤメモシラヌシイ柴ノ袖ニ憂ヲノカヽルヘシトハ關白左大臣先帝ノ惠ア
ル事ヲ慕ヒテ和歌ヲ詠ス
今ハ又涙ニナシテツヽムカナ袖ニアマリシ君カメクミヲ九月北畠内大臣顯信ノ從兵等
勢州ニテ土岐大膳太夫ト合戰土岐カ兵敗北顯能續テ三重郡ノ諸城ヲ攻取ル此月於越中義政
ト桃井合戰直常破レテ國人皆武家ニ屬ス十月十三日滿詮武州ヨリ歸京上杉彈正少弼朝房畠
山右衞門佐基國入道得本武州本田陣ヨリ信州ニ發向同國大川原ノ城ニ中務卿宗良親王是ヲ

守テ滋野一族香坂高宗木曾上杉等屬之於是合戰十月ヨリ十二月下旬ニ至テ戰不止シテ雄雌
不決既寒氣甚深雪故雙軍屈シテ互ニ兵ヲ引於是宗良親王吉野ノ行宮ニ至ラント欲シ信州ヲ
發ス香坂高宗等頻ニ是ヲ止ムトイヘトモ聞カスシテ民部卿光資ヲ大河原ノ城ニ殘ス高宗猶モ
屬ス宗良兼テ志ス事モ違變シテ中途ニ迷フ時和歌ヲ詠ス
シハシタニフカヌ間モカナ風ノミニタツチリノミノアリカサタメテ既ニ美濃國ニ至テ
犬山ヨリ鳴海ノ浦近ク出テ海邊ヲ見テ是ヲ詠ス
山路ヨリ磯邊ノ里ニ今日ハ來テウラメツラシキ旅衣カナ宗良又信州ニ歸ル今年細川頼
之南朝ヘ奏シテモトノコトク持明院殿ト太覺寺殿代々在立有テ三種神器北朝ニ渡御南北和
睦シ南帝上落有テ公家武家本領如古官位不可有違反ト再三雖奏南朝公武共ニ曾テ不應此時
南朝ニ屬スル國大和河内紀伊和泉伊賀伊勢志摩飛驒信濃上野越後越中伊豫備前石見長門肥
後日向大隅薩摩都テ廿箇國加之北國ニ宗良親王九州ニ懷良親王勢州ニ北畠國司アリ

櫻雲記卷之中了

櫻雲記卷之下

建德元年（北京應安三年）　後龜山院（諱熙成號小倉殿法名金剛心母嘉吉門院近衛左大臣經信ノ忠女）帝位ニ在リテ初春ヲ祝シテ松契遐年ト云フ事ヲ御製

十カヘリノ花咲マテト契哉ワカ代ノ春ニ相生ノ松五月武家ヨリ宇都宮氏綱ニ命シテ軍士ヲ將テ南方ヲ擊ント欲ス南朝ノ武士馳向テ矢鋒ス名有ル勇猛ノ兵士鯨波ヲ唱テ進ンテ擊ツ宇都宮忽戰鈍シテ頗ル刃傷ヲ蒙ル者若干有リ悉ク軍散シテ粉川寺ニ至テ退去ス爰ニ於テ畠山師ヲ帥ヒテ宇都宮ヲ救フ南朝ノ戰ヒ强シテ寄手軍ニ倦ム于時七月五日宇都宮氏綱陣中ニ於テ病死ス故强テ戰事ヲ不得シテ兵ヲ引テ歸ル八月世泰親王（後付上皇子）四品ニ叙ス爰ニ至テ伊勢國司南朝ノ勅ヲ受テ軍士ヲ催ス于時伊賀ノ國人服部川上等武家ヲ背ヒテ國司ニ附屬ス國司近國ニ威ヲ振テ武名有リ十一月南朝ノ猛士和田某以下勅ニ應シ軍兵ヲ引率シ楠カ要害ヲ攻ル（楠正儀武家ニ降ルニ依也）城兵拒ムト雖モ南軍ノ和田等諸兵ヲ指揮シテ凱歌ヲ唱ヘ急ニ攻ル事宛水ノ避ルカ如シ故殆危シ爰ニ至テ武家ノ執事細川頼之大勢ヲ帥ヒテ南方ニ發シテ楠カ要害ノ後攻ヲス南軍武威ヲ勵シ戰ト雖モ頼之謀策ヲ以テ諸勢ヲ麾テ風ノ發スルカ如ク頓ニ擊ツ南軍ノ豪氣緩シテ戰ヒ破レ軍ヲ引テ歸ル時ニ至テ山名氏清ヲ河内ノ國ニ留テ南方ノ押トシテ蓋シ頼之歸洛ス既ニ楠正儀南朝ヲ背テ武家ニ降參スト雖モ其一族ハ正成正行カ遺訓ヲ聊背カス堅ク守テ南朝ヘ忠ヲ勵ント欲ル而已

建德二年（北京應安四年）一月鎮西ノ菊池武政等南朝ノ勅ニ應近國ノ志有ル兵士ヲ悉ク驅催シ隣國ヲ擊從ヘント欲シ已ニ武威ヲ振テ勢ヒ京師ニ聞ユ爰ニ於テ武家ヨリ今川伊豫守貞世入道了俊ヲ九州ノ探題ニ補シテ下向ス大内ノ義弘ヲ副テ菊池ヲ征伐セントス菊池九州ニ粗威勢有（同イ）筑紫ヲ擊平ク南朝ノ宮征西將軍式部卿懐良親王ヲ取立是ヲ仰テ近國ノ諸將附屬ス頃日使者ヲ調ヘ船ヲ設ケ大明ヘ遣之其狀ニ曰日本國王懐良ト書セリ大明ヨリ日本國王ヘ來ル使者筑紫ニテ菊池留テ其返事ヲ懐良ヨリ遣ス故大明ニハ懐良ヲ日本ノ眞ノ帝ト思ヘリ三月十一日南朝ニテ先帝（後村上）三回忌ノ法會ヲ執行ス于時先帝ノ御製ノ短冊ヲ稍集メテ是ヲ繼テ其裏ニ法花經ヲ宸筆ヲ染ラレ供養ス其導師大僧正頼意和歌ヲ詠ス

書置シ昔ノ春ノコトノ葉ニ御法ノ花ヲ今日ハソヘツヽ是月北帝即位後圓融院ト稱ス六月伊勢ノ國司師ヲ帥ヒテ阿野郡ニ發テ世保ヲ擊ツ世保戰ニ力盡キ忽ニ敗北爰ニ於テ國司輙ク阿野郡ヲ領ス頃年懐良親王鎮西ニ在リテ謀策ヲ回ラスト雖モ朝敵ヲ敢テ治伐スル事ナラス甚タ世ヲ恨テ宗良親王ヘ和歌二首贈ル

日ニソヘテ遁レントノミ思フ身ニイトヽ憂世ノ事シタキ哉

シルヤイカニ世ヲ秋風ノ吹カラニ露モトマラヌ我心哉其年ノ十二月ニ至テ此和歌ヲ見テ返歌ヲ又便ヲ求メ遣ス宗良

トニカクニ道アル君カ御代ナラハ事繁クトモ誰カ迷ハン

草モ木モナヒクトソ聞コノ比ノ代ヲ秋風トナヒカサラナン（野イ）

文中元年（北京應安五年）三月伊勢國司軍勢ヲ催シ同國朝明郡ヘ發向シテ仁木ヲ攻ル屢戰テ仁木カ軍

敗レ悉ク退散ス爰ニ於テ國司朝明郡（野ノ）ヲ領ス五月武家ヨリ細川頼之ヲシテ南方ヲ擊ントヽ欲シ既ニ師ヲ帥ヒ發向ス于時頼之故有テ執事職ヲ辭シテ西山西方寺ニ隱ル大樹（將軍）赤松則祐ニ命シテ頼之ヲ召返ス爰ニ至テ諸人柳營ヲ重シ武將ノ威有リ六月今川了俊（于時侍所）九州ニ在テ南朝ニ志有ル菊池等ヲ追伐セントヽ欲ス然ニ家僕所々ノ戰ヒニ減少シテ僅ニ殘兵三百餘騎官軍菊池籌策ヲ廻シ大村千葉等ノ諸將復シテ其勢甚タ多シ了俊還テ敵ノ擒トナラン事ヲ悔ユ蓋シ本國ノ遠江ヲ避ン事ヲ愁ヘ救ヒノ兵ヲ請フ次テニ和歌ヲ詠シ細川頼之ヘ贈ル

何トナク心ニカケテ思フ哉ハマナノ橋ノ秋ノ夕暮頼之是ヲ聞テ志ヲ感シ遠江ヲ避ン事聊違變有ルマシキト答フ則大内義弘ヲシテ了俊ヲ救フ義弘大軍ヲ率シ九州ニ至テ挑ミ戰フ菊池等敵ノ轉變ヲ計テ勇力ヲ勵シ進ンテ擊事凡龍ノ水ヲ決カ如シ敵ヲ怖レサル事宛大山ノ如シ故雙軍勝敗ヲ決セス對陣ス八月南軍進發シテ又楠カ守ル所ノ要害ヲ攻ル城兵拒ムトイヘモ官軍武勇ヲ振テ端的ニ城ヲ挫ントヽ急ニ攻ル城兵戰ヒ屈ス時ニ至テ武家ヨリ猛勢ヲ發シ後攻ス故城兵氣ヲ得テ堅ク守テ拒ム寄手兵ヲ分テ後攻ノ勢ト挑ミ戰フ九月六日大ニ戰フ雙軍矢ヲ放チ干戈ヲ振テ命ヲ塵芥ヨリ輕フシテ名ヲ磐石ヨリ重シテ勇氣ヲ勵シ兵術ヲ盡シ進退互ニ決セス戰ト雖モ南軍少勢加之前後ヨリノ敵ニ當ル事ヲ不得遂ニ軍敗レ軍去ス武家淡輪ノ某等戰ニ利ヲ得タリ今年北畠顯信右大臣ニ任シ從一位ニ叙ス

文中二年（北京應安六年）三月柳營命シテ細川氏春ヲシテ南方ヲ征伐セントヽ欲シ諸軍ヲ帥ヒテ尼ケ崎ニ陣ス六月大明ヨリ使僧來ル入洛ス其趣大明ヨリ既ニ使者三度ニ及ヒ日本ヘ渡ストイヘモ

筑紫ニテ菊池ニ押ヘラレ遂ニ京ヘ至ル事ナシ因茲兩使僧ヲ遣ス大樹是ヲ聞テ大ニ驚ク八月南方ノ兵士相議シテ計謀ヲ廻シ河内ノ天野ニ至テ敵ノ武備ノ緩ムヲ推察シテ潛ニ軍勢ヲ發シ敵ノ陣中ヘ頓ニ夜討シテ悉ク打破テ右往左往ニ驅通ル敵周章シテ戰ニ力盡キ忽ニ退散ス南軍太タ首級ヲ得タリ（或曰今年後龜山院位ヲ太子寛成ニ讓テ吉野ヲ逐電ス）

文中三年（北京應安七年）九州ノ官軍菊池等戰强シテ既ニ武家ノ軍鈍ク屢味方屈スルト聞テ大樹義滿自ラ出馬セントヽ豈敵ヲ誅伐踵ヲ旋スヘカラストヽ三月諸將ヲ引率シ大軍ヲ以テ筑紫ヘ進發ス中國九州所々ノ合戰武家忽ニ勝利ヲ得ル菊池武畧ヲ廻シ鬪爭スト雖モ每度利ヲ失フ宮方豪氣衰ヘ爰ニ於テ菊池等請降テ和平ス十月義滿歸洛然ヒ官軍ニ屬スル菊池等カ兵士所々ニ城ヲ搆テ堅ク守テ西征將軍ヲ猶仰テ守護ス時ニ至テ武家大ニ威盛ニシテ南方漸衰ル今年冬宗良親王信州大河原ヨリ南朝ヘ來ル去ル延元ノ比東ニ下テ遙ニ年月ヲ經テ今爰ニ至テ其見シ人モ失果テ最愁ヲ催シ獨懷舊ト云事ヲ詠ス

同ク八トモニ見シ代ノ人モカナ戀シサヲタニカタリアハセン先帝在世ノ時信州ヨリ來ルヘシト數度勅有トイヘトモ戰場ニ間ナク遂ニ果サス今吉野ニ來テ愁傷モ一方ナラス又信州ヘ趣ク志有ル時雁ノ鳴ヲ聞テ

數ナラヌ嘆キニナキテ我ハタヽカヘリクヒタル雁ノ一行

天授元年（北京永和元年）九州ノ官軍菊池松浦黨兵ヲ起ス故探題今川了俊及大内義弘士卒ヲ發シ三月三日筑州世振山ニ陣ス爰ニ於テ矢鋒ス官軍凱歌ヲ唱ヘ競擊今川大内諸軍ヲ指揮シ馳懸テ戰

フ官軍菊池進ンテ味方ヲ麾テ既ニ急ニ懸テ敵ヲ挫ク勢ヒ圓石ヲ千尋ノ谷ニマロカスカ如シ
今川家僕奥山井伊笠原等ノ健氣者發シテ刀傷セラル稍武家ノ備亂レント欲ス義弘勇力ヲ勵
シ士卒ヲ諫メ挑ミ戰フ故宮方戰勞レ援助ノ兵ナク遂ニ敗走今川大内敵ヲ追捲テ鯨波ヲ唱ヘ
悅フ八月太宰小貳冬資忽ニ武家ヲ背テ逆心ス今川了俊是ヲ聞テ軍兵ヲ率シ少貳ヲ攻ル屢戰
トイヘ𪜈遂敗北ス

天授二年北京永和二年三月十一日先帝後村上九回忌タリ故ニ如意輪寺ニテ法會修行有リ導師日野前
大僧正賴意是ヲ勤ル于時宗良親王和歌ヲ詠シ賴意ヘ贈ル

イク春ト散テ見スランツラカリシ花モ昔ノ別ナカラニ返歌前大僧正
暮ヘトモ見シ世ノ春ハウツリキテアタナル花ニ殘ル面影爰ニ於御製
四ツノ時九ノカヘリニ成ニケリ昨日ノ夢トヲトロカヌマニ今年源守親平經泰各大納言
ニ任ス伊勢ノ國司源顯泰中納言ニ任ス七月足利直冬武家ニ降參大樹其罪ヲ免シテ剩ヘ石見
國ニ居セシムル

天授三年北京永和三年七月七日主上七夕ノ御遊有リ于時宗良親王千首ノ和歌ヲ獻ス此日世泰親王
薨ス後村上第二之皇子如意輪寺ニ葬ス頃年宗良親王ノ子興良王北京ニ囚獄セラル于時病有リ心絶シ
トス和歌ヲ詠其父宗良親王ニ贈ル

如何ニ猶涙ヲ添テワケワヒヌオヤニサキタツミチ芝ノ露宗良是ヲ見テ啼泣頻ナカラ返
歌

我コソハアラキ風ヲモフセキシニ獨ヤ苦ノ露ハラハマシ既ニ其翌日興良薨ス程經テ宗
良親王落涙ヲ止テ信州ニ發セント欲ス爰ニ至テ内裏ニ於テ百番ノ歌合ニ旅ノ心ヲ讀リ

老ノ涙又立歸リ稻舟ノ上レハ下ル旅ノクルシサ吉野ヲ出信州ニ赴ントス爰ニ於テ宗良
親王哀傷心ニ滿テ遂ニ解ケス長谷寺ニ入テ剃髮染衣ノ形ト成テ主上ヘ和歌ヲ獻ス

君ニナト我ハハツ瀨ノ鐘ノ音カクナルトタニシラセサリケン帝是ヲ敞覽有テ驚動シテ
日ヲ經テ御製ヲ賜ル

忘ルナヨ木曾ノ麻衣ヤツルトモナレシ吉野ノ花染ノ袖既ニシテ宗良信濃ニ赴ク

天授四年北京永和四年十月宮方唐橋肥後守經泰大和紀伊兩國ノ軍士ヲ催シ出張京師ヲ攻ントス欲ス
武家ヨリ細川兵部大輔氏春諸卒ヲ將ヒ發向シテ紀州ニ至テ既ニ挑戰フ官軍ホヽ計謀ヲ廻シ
兵士心ヲ一致ニシテ眞シクラニ衝テ懸ル細川カ勢進不得輙ク退立ラレ戰敗ル爰ニ於テ武家
ヨリ細川右京大夫賴元山名修理大夫義理同陸奥守氏清石堂赤松等ヲ以テ味方ヲ救フ紀州ニ
發シテ武備ヲ全シ兵ヲ分テ皷ヲ擊テ凱歌ヲ唱ヘ矢鋒ス官軍名有ル勇士敵ヲ急ニ挫ントヲ面ヲ
顧ス馳懸テ一陣ヲ破ルトイヘトモ武家ノ猛勢ニ戰ヒ疲レ遂ニ宮方ノ軍散ス京勢勝テ鯨波ヲ
擧歸洛ス十二月又南朝ノ兵士起テ聚ル事蟻ノ如シ今度ハ義滿自ラ進發諸將是ニ從フ先東寺
ニ陣ス蓋シ細川賴之同賴元山名赤松等先登ス南軍既ニ八幡山ニ至テ城壘ヲ完ス同月十八日
京師ノ諸將八幡山ヲ圍ンテ攻戰フ城兵常ニ學フ所ノ正成カ軍術ヲ以テ敵ヲ心ノ儘ニ城下ニ
引寄セ大ナル木石ヲ投ケ懸打ル、者不可勝計寄手攻屈ノ備ヘ亂ルヽ山上ヨリ遙ニ是ヲ順見

シテ究竟ノ勇士轡ヲ揃ヘ撃テ懸リ敵ノ備ヲ堅横ニ驅破テ若干討捕リ城ニ入寄手恐怖ストイヘトモ賴之軍謀全フシテ城ヲ數重ニ圍テ急ニ攻ル爰ニ於テ官軍剛強トイヘトモ力竭キ拒守ノ謀ナラス遂ニ城陷ル爰ニ至テ南軍再ヒ軍士ヲ催シ鳥ノ如聚テ楠カ氏族千劔破ノ城ニ楯籠ル和田和泉守土丸ノ城ヲ守ル武家ヨリ山名義理同氏清大軍ヲ率シ兵ヲ分テ兩城ヲ圍攻ル楠和田武略ヲ以テ敵ヲ若干討捕ル故京勢戰倦テ遠攻ニス南方ノ强大ノ族屢戰ヒ忽ニ敵ヲ破トイヘトモ遂ニ糧竭キ兩城共ニ沒落ス湯淺カ守ル所ノ城モ勢力屈シテ陷ル既ニ細川山名諸城ヲ扱テ歸京ス氏清ハ猶紀州ニ留テ武備ヲ全フス于時柳營武功ヲ感賴之ニ和泉國義理ニ紀伊國ヲ賜ハル今年北畠顯成顯家子權中納言ニ任シ從二位ニ叙ス

天授五年北京康曆元年閏四月武家ノ執事細川賴之其職ヲ止テ四國ニ至テ剃髮シ常久ト號ス斯波義將執事職ニ補ス

天授六年北京康曆二年山名氏清紀州ニ有リテ南軍ト戰止マス或時ハ山名敗ラレ或時ハ南軍ヲ破リ雌雄ヲ決セス挑ミ戰七月ニ至テ宮方ノ軍屢敗其軍監民部大夫某退カスシテ戰死ス其外强兵十四人討死ス山名其首級ヲ得テ京師ニ捧ク八月ニ至テ南軍ノ餘黨戰ヒ屈シ紀州ヲ沒落ス氏清敵ヲ悉追拂テ入洛ス今年入道宗良信州大河原ニ在テ義兵ヲ起サント欲トイヘトモ南方ニ通スル兵士皆以テ背テ香坂高宗而已心ヲ變セス忠ヲ勵ントス宗良計謀ナラス信州ヲ出河內國ニ至テ山田ニ居ス九月十三夜關白左大臣冬實和歌ヲ詠シ贈ル

而影モ見シニハ如何カカハルラン姨捨ナラヌ山ノ端ノ月宗良返歌

身ノ行衛ナクサメカネシ心ニハヲハステ山ノ月モウカリキ爰ニ行脚ノ僧二首ノ和歌ヲ南朝ノ內裏ノ門ニ書付逐電

世ニ出ハヒカリソフヘキ月影ノマタ山フカキ雪ノ上カナ

是ソコノ木丸殿ト思ヘトモナノラテ行ハシル人モナシ

同年土御門右大臣顯信卒ス源ノ守親大納言ヲ辭ス

弘和元年北京永德元年十二月三日宗良及羣臣等新葉和歌集ヲ撰ス凡南帝三代弘元元年ヨリ弘和元年ニ至テ南朝ノ君臣ノ和歌ヲ載ス

弘和二年北京永德二年正月廿四日南軍兵士ヲ催ス楠正勝泉州土丸ノ城ヲ守ル赤坂ノ城楠和田カ族楯籠ル山名氏清敵ヲ征伐セントタメ河州泉州ノ勢ヲ聚メ發向ス正勝其祖父及父カ軍術ヲ學ヒ備ノ伍ヲ固メ或ハ出城敵ノ緩ム所ヲ擊チ又ハ頓ニ夜討ニシ伏兵ヲ以テ敵ヲ殺シ屢戰ヒ勞レ軍ヲ引テ二陣ヲ以テ攻破敵進メハ城ニ入矢ヲ放テ敵ヲタヽヨハシ敵ノ足ヲ定メス味方ノ備不動事山ノ如シ其疾事風ノ如シ敵退ケハ馳懸リ前ニ發スレハ忽然トシテ後ヘニ懸ク拔ケ轉變自由ニ敵ヲ擊ツ山名名高キ武將タリトイヘトモ楠カ軍術ニ手ヲ空フシ足ノ蹈所ヲ覺ヘス進退途ヲ失ヒ屈ス然トモ大軍新手ヲ替テ攻戰フ楠和田敵ヲ其數多ク討捕ル味方疵ヲ蒙リ刃傷スル者甚多ク軍士減少シテ城ヲ出奔ス氏清城ヲ取テ功ヲ立タリ赤坂ノ城コラヘスシテ沒落ス南軍紀州ニ走テ兵士ヲ驅催ス山名義理兵ヲ進メ挑ミ戰フ楠又兵術ヲ以テ敵ヲ切カシ闘フ自ラ進テ干戈ヲ握テ打破ル義理味方ノ進マサルヲ怒テ先鋒ス山名右馬助氏賴劣シト馳セ

懸ル楠ト挑戰テ終ニ楠カ爲ニ氏賴討ル南軍勝ニ乘テ敵ヲ追捲テ藤代ノ城ニ入ル義理續テ發シ城ヲ攻ル互ノ矢サケヒノ聲天地ヲ響ス兩軍ノ旗風ニ飜シ靡逢フ山名毎度利ヲ失ヒ憤テ味方ヲ指揮シ諫メテ凱歌ヲ唱ヘ急ニ攻ル楠等力竭キ遂ニ城陷ル楠カ一族六人及家僕百四十人速ニ戰死ス爰ニ於テ氏清ハ泉州土丸ノ城ニ居シ義理ハ藤代ノ城ヲ守ル今年四月北帝卽位後小松院ト稱ス

弘和三年（北京永德三年）七月北畠右大臣顯能薨ス十二月北朝新後拾遺和歌集ヲ撰トイヘトモ南朝ノ羣臣和歌ヲ載セス

元中元年（北京至德元年）春ニ至テ帝詔シテ僧如瑤ヲ大明ヘ使ス

元中二年（北京至德二年）三月勅シテ甲州鹽ノ山ヲ勅願寺トス南朝ノ軍士多ク以テ高麗國ニ渡テ軍勢ヲ催ス然トモ果サス今年右大臣長知六百番ノ歌合ヲ催サント欲ス

元中三年（北京至德三年）六月廿六日關東ニ於テ宮方ニ屬スル小山若犬丸（義政子）兵士ヲ催シ下總國古河邊ニ至テ屯ス鎌倉管領氏滿是ヲ聞テ大軍ヲ發シ追伐セントス既ニ古河ニ至テ鬪フ小山武威ヲ振テ敵ノ大軍ノ轉變ヲ悟テ備ヲ分チ進ム鎌倉勢敵ノ小勢ヲ侮テ暫時ニ挫ント喚テ懸ル小山カ一陣戰テ態ト退ク鎌倉ノ兵勝ニ乘シ敵ヲ嘲テ備ノ伍ヲ亂ノ是ヲ追フ小山カ二陣動セス靜ニ懸テ挑ミ戰フ若犬丸本陣ノ諸卒ヲ自ラ將ヒ急ニ横ヲ擊ツ爰ニ於テ鎌倉勢騷動シテ敗ス野田等ノ健者退カスシテ忽チ戰死ス于時上杉兵庫助憲孝（憲方子）後陣ニ備ヲ設ケタリシカ兼テ軍法ノ約諸ヤ有ケン兵ヲ進メ面ヲ顧ス鯨波ヲ唱ヘ突テ懸ル既ニ小山カ備亂レテ退散ス度々

戰フトイヘトモ小山カ軍術竭キ常陸國ヘ走ル氏滿敵ヲ快ク追拂テ鎌倉ニ歸ル憲孝カ戰功ヲ賞ス

元中四年（北京嘉慶元年）勅シテ春宮大夫師兼九州ニ下向ス今年常州宍戸男體ノ城ニ小山楯籠テ其一族ヲ招テ是ヲ守ル氏滿命シテ上杉朝宗入道禪助師ヲ帥テ發向十一月廿四日敵ノ城ヲ攻戰フ城兵是ヲ拒ム故敵ヲ攻落シ難シ小山諸軍ヲ指揮シテ矢ヲ放テ寄手命ヲ沒スル者頗太タ多シ稍攻屈シテ日ヲ經ル

元中五年（北京嘉慶二年）武將義滿紀州ノ濱ニ遊フ岡ノ城ニ至ル是粗紀州ニ南朝ノ軍士アリテ軍ヲ起サント聞テ然ラハ自ラ征伐セント謀テナリ察スル如ク時ニ至テ楠正秀軍兵ヲ催シ河內國ニ出張山名氏清士卒ヲ發シ相戰フ正秀敵ノ大軍ヲ恐レス孫吳カ兵術白起カ勇力ヲ出シテ戰フ楠天性逞シキ健者向フ敵ヲ干戈ノ續ク限リニ悉ク斬戮ス正秀カ勢ヒニ敵曾テ進ミ得ス備ヲ縮テ發セス氏清諸卒ヲ訶テ何爲小勢ニ多勢ヲ以テ足ヲ不行怖畏スル事兵士ノ耻ト謂ツヘシ自ラ麾テ味方ヲイサメ馳懸テ挑ミ戰フ正秀大剛タリトイヘトモ遂ニ破ラレ退散ス七月去歲ヨリ男體ノ城ヲ上杉圍テ戰止ス或時ハ城兵出テ戰ヒ寄手ヲ破リ又ハ城際ニ敵ヲ引寄矢鋒シテ敵ヲ討捕ル然レトモ後攻ノ味方ナク遂ニ力竭キ城陷リ小山等沒落ス

元中六年（北京康應元年）爰ニ至テ南朝ニ志有ル諸國ノ軍士大半背テ武家ニ屬ス因茲南朝ノ威勢日ニ衰然トイヘトモ河內ノ國ニ楠和田橋本福塚宇佐美神宮寺八尾紀伊國ニ湯淺山本恩地贊川貴志野上大和國ニ三輪眞木宇野坂部佐和秋山等ノ軍士南方ニ從フ加之伊勢國司近國ニ武名有

テ國内大半平ケ大和國宇多ノ郡伊賀國名張郡志摩一國ヲ從ヘ南朝ニ忠アリ

元中七年北京明德元年春武家ヨリ命シテ山名畠山大軍ヲ率シ河内國ニ進發シテ南軍ヲ擊ントスル楠和田僅ノ小勢ヲ以テ馳懸テ戰フ既ニ落合ニ至テ兩軍備ヲ設ケ勝敗ヲ決セントスル南軍未豪氣盛ンニシテ和田楠諍ヒ進テ敵ヲ擊ツ山名畠山カ軍勢先鋒ノ勇士數輩戰死ス楠等機ニ乘テ子房カ秘術項羽カ猛威ヲ勵シ競擊ツ敵沛然トシテ山名畠山カ陣殆危シ然カレトモ大軍後陣ノ兵ヲ以テ押取込メ擒ニセントス挑ミ戰フ敵和田楠戰勞シテ敵ヲ擊破テ遁行ク

元中八年北京明德二年義滿細川入道常久ヲ四國ヨリ召テ執事職ニ再任ス十二月廿九日山名一族武家ニ叛逆ス京師ニ於テ大ニ戰ヒ其張本氏清戰死ス其氏族及ヒ家僕悉ク斬戮セラル

元中九年北京明德三年武家ヨリ命シテ大内義弘ヲシテ山名義理ヲ擊ツ氏清カ伯父紀州ニ在リ義理泉州ニ至テ兩山土丸兩城ヲ守テ相戰フ義弘是ヲ攻テ兩城共ニ拔敵同廿五日義理出奔シ紀州藤代ノ城ヘ入爰ニ於テ力盡キ降參シテ剃髮ス時ニ至テ千劔破ノ城宮方ノ兵士及ヒ山名カ殘黨楯籠ル畠山發向シテ城ヲ攻ル城兵防戰ストイヘトモ助ケノ勢ナク戰ニ倦遂ニ城沒落ス既ニ楠正勝其弟正元十津河邊ニ流浪ストイヘトモ南朝ヘ忠ヲ不忘爰ニ於テ正元密計シテ京ニ入テ武將義滿ヲ擊ントス南方衰ヘ武家盛ナル故ニヤ遂ニ事顯レテ殺戮セラル正成正行忠志ヲ違スト正元ヲ時ノ人褒メ後人賞ス已ニ和泉河内ノ楠和田カ一族畠山大内カ家僕トナル者オヽクシテ南方彌衰微ス十月義滿ノ命ニ因テ大内介義弘和泉ノ國ニ至テ南北和睦ヲ調ヘントス蓋シ義弘ハ其祖父其父ニ至テ南朝ヘ忠義ノ臣故連年冷泉相國入道ヲ以テ和平ノ事南方ヘ奏ストイ

ヘトモ曾テ是ヲ許容セス爰ニ至テ南朝漸衰ニ及テ十月十五日南北和親遂ニ調フ北帝及將軍是ヲ感悅ス因茲閏十月二日南帝後龜山院其太子寛成親王北京ニ行幸嵯峨ニ至テ大覺寺ヲ皇居トス南朝ノ羣臣從ヒ來ル加之同三日三種神器内裏ヘ渡御于時南帝尊號有テ太上天皇ト稱ス且太子寛成親王春宮ニ立ツ抑延元二年後醍醐天皇吉野ニ入御以後爰ニ至テ凡ソ五十六年ニシテ南北初テ一統ス然ルニ南方ノ殘黨猶吉野ニ留テ吉野十津川ヲ領スル者有リ既ニ南帝太上天皇剃髮有リテ法諱ヲ金剛心ト號シ奉ル頗伊勢國司北畠顯泰カ領本ノ如安堵ス

明德四年此時ニ至テ天下一統南朝ノ年號絶ル九月廿一日柳營義滿伊勢太神宮參詣于時北畠親能顯泰カ子叙爵シテ義滿ヨリ諱字ヲ賜テ滿泰ト改ル剩俊泰顯泰カ猶子顯俊カ二男叙爵ス

應永二年關東ニ於テ小山若犬丸再ヒ兵ヲ起シテ小山ノ城ニ楯籠ル鎌倉氏滿不聞敢テ軍ヲ將ヒテ二月廿八日古河邊ニ至ル于時小山强兵ヲ率シ城ヲ出逆寄ニシテ拒ミ戰フ小山初ノ戰ニ利アラサル事ヲ慣テ今度ハ無二ノ勝敗ヲ決セントス勇ミ懸テ鎌倉ノ備ヲ破ル已ニ辟易シテ氏滿ノ本陣敗レントス欲ス後陣ノ勇兵發シテ横ヲ打テ小山カ軍退散シテ若犬丸直ニ奥州ニ走ル於爰ニ奥州田村ノ庄司師ヲ起シ近邊ヲ馳リ催ス五月廿七日氏滿古河ヨリ則發シテ六月朔日奥州白川ニ屯ス田村ノ庄司馳セ懸テ闘フ氏滿諸軍ヲ指揮シ急ニ擊テ田村等悉ク敗亡ス氏滿敵ヲ挫シイテ鎌倉ニ歸ル

應永四年正月十五日小山若犬丸奥州會津ニ至テ軍ヲ起スニ漸ク力竭キ終ニ自殺ス同廿四日其子二人七歲五歲蘆名左京大夫直盛是ヲ生捕テ鎌倉ニ倡行キ則六面ノ濱ニ沉メラル秋ニ至テ九

南方紀傳政宗

州ニ於テ太宰少貳入道宗閑菊池肥後守蜂起ス千葉大村等是ニ應シテ既ニ大軍ヲ催ス大内義弘是ヲ聞テ士卒ヲ將ヒ發向ス其弟伊豫守弘勝同六郎成見等從ヒ行ク兩軍備ヲ全シ矢鋒ス互ニ名有ル勇士命ヲ輕シ名ヲ重シ鯨波ヲ揚ケ拒ミ戰フ或ハ退キ或ハ進ミ雌雄不定日ヲ經テ戰フ然レトモ菊池等官軍援助ナク戰ヒ屈シ軍敗レ退散ス大内備ヲ亂シ是ヲ追フテ頗ル首級ヲ得タリ

應永六年大内義弘故有テ和泉國堺ニ至テ武家ニ逆心ス義滿大軍ヲ率シ進發シテ悉ク打平ク義弘戰死ス

應永七年奥州ニ於テ宇津宮氏廣其子公(ハヤ)島等野心ヲ挾ミ兵ヲ起サントス九月八日斯波持詮發シテ忽ニ誅戮ス

應永九年陸奥國伊達大膳大夫入道鎌倉滿貞ニ背ヒテ兵ヲ起ス五月廿一日滿貞ノ命ニ依テ上杉氏憲兵士ヲ催シ鎌倉ヲ立テ奥州ニ至テ伊達カ守ル赤館ノ城ヲ圍テ攻ル城兵拒テ屢戰フ上杉自ラ諸兵ヲ勇メテ急ニ攻メ懸テ城ヲ拔ク(ツイ)伊達降參ス于時山家ノ雪ト云和歌ヲ詠ス

中々ニツヽラオリナル(ツイ)道タヘテ雪トトナリノチカキ山里

應永十年四月廿五日新田義隆(義治男)相州箱根山中ノ木賀彦六郎カ館ニ隱ル其告有リテ鎌倉ノ管領氏兼命シテ安藤隼人發シテ是ヲ捕ヘ底倉ニテ終ニ誅戮ス

應永十一年三月十七日北畠俊泰士佐守ヲ兼(去歳八月廿四日正四位下左中將ニ補ス俊泰ハ顯俊カ二男顯泰カ養子其實子滿雅ハ南帝春宮即位遲キ事ヲ憤テ武家ヲ恨ム且ツ俊泰ハ武家ニ忠有リ故ニ連年昇進ス)

應永十二年正月六日北畠俊泰從三位ニ叙ス

應永十四年頃日洛中ニ於テ諸人連歌ヲ好ム于時南帝(小倉殿ト號ス)君臣共ニ連歌ノ名譽有リ

應永十五年五月六日征夷大將軍義滿薨ス其子義持武家ノ棟梁トナル

應永十七年七月廿二日新田貞方(義宗子)千葉介是ヲ搜シ求テ捕ヘテ七里カ濱ニ於テ殺戮ス新田ノ末流殆ト絶ヘントス

應永十九年八月主上位ヲ讓ル稱光院ト號シ奉ル時ニ至テ南帝後龜山法皇ノ太子寛成親王即位ノ望有トイヘトモ武家是ヲ擧用セス故ニ伊勢國司及和州紀州河州奥州ノ兵士南朝ニ志有ル族急ニ是ヲ訝ヘ背カント欲ス

應永二十年奥州ニ於テ官方伊達松犬丸懸田播磨守軍士ヲ催シ大佛ノ城ニ楯籠ル鎌倉管領持氏命シテ大軍ヲ率シ畠山國詮發向ス奥州ニ至テ對陳ス雙軍矢ヲ發セス戈ヲ振數日ヲ經ル已ニシテ二本松ノ城伊達カ家僕守ル是ヲ圍テ急ニ攻城ヲ拔ク松犬丸大佛ノ城ヲ守テ能拒ム畠山勇力ヲ勵ス故城陷ル松犬丸城ヲ出奔ス

應永廿一年先頃南帝ノ皇子ニ位ヲ讓ラサルニ依テ伊勢國司北畠滿雅鬱憤ヲ含テ武家ニ背テ軍士ヲ聚メ所謂關左馬助其一黨神戸岸國府鹿伏兔等其外和州伊州勢州志州ノ兵士悉ク驅催ス然トモ北畠俊泰而已武家ニ背カス

應永廿二年ノ春北畠滿雅兵ヲ發シ坂内ノ城ヲ攻ル時ニ城主俊泰京ニ在リ故家僕拒ム滿雅急ニ攻戰フ城内ニ將ナク一決セスシテ遂ニ陷ル爰ニ於テ國司阿井賀ノ城ニ居シテ其弟雅俊木

造ノ城ヲ守ル顯雅大河内ノ城ヲ守ル其外多氣坂内玉丸等ノ諸城ヲ兵士ヲシテ守ラシムル加之北伊勢ノ諸城關一黨楯籠ル漸國中ヲ平クシト欲ス武將義持是ヲ聞テ土岐左京大夫持益ニ命シテ北畠俊泰世保大膳大夫康政仁木右馬頭滿長長野雲林院等ノ軍勢ヲ差副勢州ニ發行シテ先ツ土岐持益拜野ノ城ヲ圍テ攻戰フ城兵拒ムトイヘトモ力竭城ヲ拔ク且木造ノ城ヲ攻ル雅俊防戰ス京勢ヲ數輩討捕ルト雖戰ヒ苦ミ雅俊城ヲ退去シテ坂内ノ城ニ入爰ニ至テ俊泰己カ在京ノ時居城ヲ拔レシ會誓ノ耻辱ヲ雪イテ城ヲ採テ則守ル四月ニ至テ京師ノ軍士一手ニ成テ阿井賀ノ城ヲ拒ム國司滿雅能ク拒テ寄勢ヲ軍術ヲ廻シ悉ク斬戮ス是ヨリ先滿雅ノ兵士垂水鳥屋尾方穗村木等ヲ岩田川雲出川ヘ發シテ京都ノ勢ヲ防戰シテ頗ル多ク以テ首級ヲ得タリ又今德柳原八田天花寺曾原船江波瀨岩内大淀玉丸等ノ諸城ヘ軍士ヲ分ケ堅ク守ル皆諸城共嶮難ノ地輙ク攻破ル事ナラス京勢徒ニ日ヲ經ル城兵敵ノ緩ムヲ見テ夜討シ敵ヲ却カス故攻屈シ殆勢ヲ引テ退ントス然トモ京師ノ軍將等計策シテ阿井賀ノ城ノ水ノ手ヲ察シテ是ヲ塞テ兵士ヲシテ守ラシム因茲城兵既ニ勞セント欲ス時ニ滿雅知計シテ城内ノ高キ所ニテ馬ヲ白米ヲ以テ是ヲ洗フ敵遙ニ見テ水飽マテ有ルト知テ水ノ手ノ守リヲ解ク故水之難遁レ城ヲ固ク守ル（是ヨリ此城ヲ白米ノ城ト云リ）今年鎌倉管領持氏其執事上杉氏憲入道禪秀憤有テ野心ヲ挾ミ潛ニ一族ヲ催シ官軍蜂起ノ時ヲ得テ兵ヲ起サントス八月南軍蜂起セント欲ス是南帝ノ親王帝位ニ即サル事ヲ怒テ動亂ス武將義持南都ニ參詣（詣イ）シテ南軍ノ鬱憤ヲ宥メント南方ノ皇子重テ位ニ即ク事ヲ誓約ス故南軍心解テ開陣ス九月義持歸洛ス

萬下南方記傳有歳字

應永三十年義持其嫡子義量ニ征夷大將軍ヲ與奪ス

應永三十一年南帝後龜山院嵯峨小倉山ニ於テ崩ス羣臣皆以テ剃髮ス

應永三十二年二月廿七日征夷大將軍義量薨ス

正長元年正月十八日前將軍義持薨ス三月十二日武臣相議シテ青蓮院門主義圓（義持弟）還俗シテ義宣ト號シ武家ノ棟梁トナル七月廿日稱光院崩ス同廿九日後花園院卽位十二月前南帝ノ皇子寛成親王（小倉殿ト稱ス）帝位ヲ繼嗣セサル事ヲ憤テ潛ニ嵯峨ヲ出勢州ニ至テ國司ヲ語ヒ兵ヲ起サントス

永享元年三月武將義宣征夷將軍ニ補シ義教ト改ル今年南軍蜂起ス越智十市久世萬等軍勢ヲ催シ吉野ヨリ發ス武家ヨリ畠山持國師ヲ帥イ進ンテ所々ニ合戰ス南軍微少タリト雖モ京勢ヲ動モスレハ擊破テ武名ヲ顯ス故雌雄決セス然トモ大敵遂ニ敗北ス伊勞國司滿雅兵ヲ擧ル武家ヨリ命シテ仁木持長一色義貫等發向ス長野雲林院北畠持康防戰シテ京軍ヲ破ル又土岐與安世保持賴軍士ヲ將ヒ味方ヲ救フ岩田ニ於テ國司ト大ニ戰フ雙軍凱歌ヲ唱ヘ矢鋒ス土岐世保カ備ヘ亂レテ悉ク敗ス滿雅勝ニ乘テ競擊ツ故備ノ伍全カラス時ニ土岐等諸卒ヲ指揮シテ返シ合セ戰フ滿雅カ軍散シテ滿雅退カスシテ大ニ怒テ味方ヲ麾クトモ一陣破レ殘黨全カラスシテ遂ニ敗軍ス土岐世保戰ニ勝テ若干首級ヲ得タリ爰ニ於テ寛成親王力竭キ請降ル滿雅其子顯雅共ニ降參ス武家寛成親王ヲ携テ入洛シテ又嵯峨ニ籠居ス後剃髮シテ法諱覺理ト稱シ萬壽寺ニ入其子勸修寺門主ノ弟子トス

永享二年和州紀州ノ南軍悉ク義ヘ皆以テ武家ニ降參ス近衞左大臣南朝ヲ離レ紀州ニ至テ住居トス堀内ト號南方ノ殘黨多ク以テ附屬ス伊勢ノ國司顯雅（滿雅子カ）武家ヨリ免許シ舊領本ノ如シ

永享七年九月廿六日南軍和州越智伊豫守遂ニ武家ニ降ラス獨立ス故京師ヨリ軍士ヲ遣シ是ヲ討ント欲ス

永享八年越智伊豫守和州高鳥ノ城ヲ守テ兵ヲ起ス畠山家僕河内守護代遊佐兵庫助軍勢ヲ催シ發シテ城ヲ攻ル城險阻ニシテ寄手戰勞ス城兵能拒テ矢石ヲ飛ス命ヲ失フ者太多シ故急ニ攻ル事ヲ得ス徒ニ月日ヲ送ル

永享九年高鳥ノ城攻止ス三月四日大ニ戰フ城兵寄勢或ハ討レ或ハ疵ヲ蒙ル勝敗ヲ決セス寄勢攻屈シ遠攻ニス

永享十年五月ニ至テ高鳥ノ城全フシテ和州所々ノ南軍蜂起ス故武家ヨリ命シテ一色左京大夫義貫世保刑部大夫持賴大軍ヲ率シ和州ニ起キ所々ノ一揆ト戰フ八月廿八日京勢多武ノ嶺ヲ燧テ凶徒等ヲ擊ツ悉ク首級ヲ得タリ爰ニ於テ越智伊豫守援助ノ兵絶ヘ糧ノ續ナク戰フニ力竭キ城ヲ出奔ス京勢高鳥ノ城ヲ拔テ歸洛ス

永享十一年十月伊勢志摩ノ士族其守護一色義貫ニ背テ野心ヲ挾ム故義貫ノ家族石川九郎兵ヲ發シ凶徒ヲ擊ツ

永享十二年柳營義教ノ命ニ依テ武田信榮兵士ヲ以テ和州三輪ニ於テ一色義貫ヲ斬戮ス其一族家人三百人誅伐ス（去比義貫南軍ヲ討叛心有ルト遭讒云々）同月十六日土岐與安軍士ヲ將ヒテ和州多武ノ嶺ニ至テ世保持賴ヲ討ツ（一色義貫ト同罪也）持賴罪ヲ謝スルニ及ハス自殺ス七月朔日一色等カ伴類武藏國ニ於テ蜂起ス既ニシテ須賀土佐守カ居城ヲ急ニ襲フ城兵驚動シテ防クニ戰ヲ忘レ最安ク城ヲ拔ク同三日上杉憲信及ヒ長尾景仲發向シテ凶族ト挑ミ戰フ一色氏族遂ニ討負ケ敗北ス今年伊勢ノ國司滿雅卒ス其遺跡其子中將顯雅相續シテ大河内ノ城ヲ守ル其弟少將教具多氣ノ城ヲ守ル北畠家代々南朝ニ忠有リトイヘトモ南方悉ク衰微シテ爰ニ至テ國司武家ノ招ニ應ス故伊勢守護職世保氏ヲ止テ北畠是ヲ掌ニス因茲官位舊領本ノ如シ國司ノ一族皆以テ武家ニ屬ス其領知ヲ分ケ授ク今年大覺寺門主義昭（滿ノ子義教別母ノ兄）常ニ小倉殿（寛成親王）昵近ス故義昭謂テ曰ク義教武家ノ棟梁ト成テ天下ニ雅意ヲ振テ公武尊卑共ニ憤リ有リトイヘトモ權ニ恐レ應スル而已希ハ義兵ヲ擧ケハ五畿内近國ノ志有ル勇士潛ニ計謀ヲ廻シ小倉殿ヲ武將トシテ已レ軍將ト成テ軍士ヲ驅催サンニ盡ソ馳聚ラサランヤト云事有ラン加之勢州ニ北畠在リ剩ヘ其一族世保一色等武家ヲ蔑如ニス九州ニ菊池大伴カ伴類在リ且又關東動亂止ス此時ニ至テ武家ヲ擊ンニ豈何爲ナラサランヤ小倉殿是ニ許容シ潛ニ相議ノ先菊池ニ廻文ヲ贈ル菊池是ニ應シ今關東結城ノ城戰場ノ半ナリ年ヲ超ヘ此費ニ乘シ兵ヲ起スヘシト答フ故密々南方舊好ノ兵士ヲ催促ス門主義昭病ト稱シ籠居シテ長髮ス爰ニ於テ義教怪テ門主ノ籠居ヲ悟テ斬戮セント欲ス九月ニ至テ義昭逐電坊官大和法眼一人從テ其行方ヲ知ラス故武家ヨリ其像ヲ畫テ諸國ヲ搜索

嘉吉元年三月十二日大覺寺門主義昭（又義有ト稱ス）薩摩國ニ至テ民屋ニ入土民ノ農具粉ヲ挽ク舂ノ名ヲ問フ農人其姿ヲ怪ミ加之言語常ナラス是武家ヨリ求ル人ニ違變有ルヘカラスト察シテ剩ヘ懷中ノ文書ヲ奪取テ見ニ果シテ菊池ニ贈ル消息ナリ其文ニ歌有リ

花ハイカニ我ヲアタシト思フラン常ニカハラヌ今年ナリケリ

山陰ノ花コソ今ハ開キソムレ都ハスヘト思ヒヤルヘキ（山陰ノ花ハ小倉殿ヲ稱スル歟）

郷民等疑ヲ散シ同月十三日門主及坊官ヲ圍ンテ攻ル義昭遁レ難ク辭世ニ云ク

アタナリト思ヒシ花ノ齡ヒサヘウラヤマシクモ明日ヲシルカナ

遂ニ農人等二人トモニ殺害ス是月廿三日大樹伊勢太神宮ニ參詣シテ勢州ノ境地ヲ搜索ル粗大覺寺門主ニ國司應シテ隱レ居ルト聞テ也然ラハ自ラ征伐セントノ志有リ其思慮違フ故疑ヲ散シ五月二日義教歸洛爰ニ至テ筑紫ヨリ門主義昭ノ首及ヒ坊官大和法眼カ首ヲ捧ク武家太タ悅フ門主ノ首顏ニ疵有リテ其像分明ナラス時ニ義昭昵近ノ童子ヲ召テ是ヲ問フ義昭齒二ツ闕ケタリ果シテ云カ如シ其首ヲ知ル六月征夷大將軍義教赤松滿祐カ館ニテ遭害

嘉吉二年義勝武家ノ棟梁ヲ繼嗣ス十一月征夷大將軍ニ補ス

嘉吉三年七月廿一日征夷大將軍義勝薨ス（歳十）其弟義成武將トナル僅八歳爰ニ於テ天下殆ト危シ七月廿八日播州浪人赤松三郎則重（滿祐カ甥）蜂起ス山名入道宗全速ニ征伐ス時ニ至テ南軍殘兵吉野十津川及ヒ河州紀州ノ兵士ヲ驅聚メ既ニ南帝ヲ興起セントス日野東ノ洞院一品有光是ニ應ス爰ニ於テ南軍僅ニ兵士三百人潛ニ入洛シテ九月廿三日ノ夜楚忽ニ內裏ニ亂レ入ル一

手ハ楠次郎ヲ將トシテ淸凉殿ニ上ル大和越智ノ某軍監トナツテ局町ヨリ攻入所々放火ス南軍ノ勇士一人長刀ヲ持テ進ンテ玉體ヲ犯サントス殆ト危シ忽ニ眼暗ミ倒レ臥ス主上幸ニ偷レ近衞房嗣ノ亭ヘ行幸爰ニ於テ南方ノ軍士三種ノ神器ヲ奪ヒ取テ內裏ヲ出ル東門ヲ守佐々木黑田判官囚徒ヲ追フテ內侍所ヲ取返シ奉ル寶劔ハ淸水ノ邊ニ捨置ク淸水寺ノ僧心月坊拾ヒ取テ捧ケ奉ル神璽ヲハ奪ヒ取テ叡山ニ登テ南朝ノ宮寬成親王（後龜山ノ皇子）高壽寺ノ僧ト成給ヒシヲ取立ントト還俗サセ是ニ從ヒ奉テ既ニ兵ヲ起ス是ニ組セシ日野有光入道武家ヨリ殺害ス故其子右大辨宰相資親父ト同意セサルトイヘトモ其罪遁レカタク遂ニ降參爰ニ至テ武家ヨリ軍士ヲ催シ叡山ニ發シテ衆徒ト共ニ南朝ノ宮ヲ攻ル南方ノ勇士楠越智等武威ヲ振テ挑ミ戰フ敵數輩討捕ル然トモ大軍ヲ以テ急ニ擊ツ楠等兵術盡キ速ニ戰死ス寬成親王遁ルニ道塞テ遂ニ自殺ス京師ノ武士若干首級ヲ得テ歸洛ス是時ニ至テ伊勢太神宮神馬己ト廐ヲ出汗ヲ流スト後日ニ註進ス

文安元年八月南朝殘黨ノ軍士馳聚テ爰ニ於テ相議シテ亦南朝ノ宮（高福院ト號シ）取立ントト欲シ奪取ル所ノ神璽ヲ捧テ吉野ノ奥ニ至ル鄕民ヲ招テ南朝ノ皇統ヲ立古宮ヲ再興シテ新皇ト稱シ奉リ舊好ノ羣臣來テ崇メ奉ル且又南方ノ宮（源勝法親王）圓滿院門主ヲ還俗サセ取立ントト和州泉州紀州ノ志有ル諸兵集テ八幡山ニ楯籠リ義兵ヲ擧ル爰ニ於テ武家ヨリ命シテ畠山カ家僕軍勢ヲ驅催シ八幡山ニ發向シテ是ヲ圍テ攻ル南軍能ク拒ム戰ヒ强シテ畠山カ兵士悉ク破ラレ戰死スル者太タ多シ寄手攻屈シ頗戰勞ス時ニ南軍競ヒ懸テ蓋シ軍術ヲ盡シ命ヲ塵芥ヨリ輕シテ

急ニ擊テ懸ル敵辟易シテ殺戮セラルヽ者甚タ多シ南軍勝ニ乘テ敵ヲ飽マテ嘲弄シテ本ノ陣ニ歸テ備ヲ堅クス依之細川出羽守大軍ヲ率シ馳來テ畠山ヲ救フ南方ノ軍士敵ノ轉變ヲ遙ニ見澄シ聊緩ム事ナク端的ニ馳懸ル敵恐憶シテ屢戰フトイヘトモ遂ニ日下ニ敵ヲ追靡ケ悉ク討取リ鯨波ヲ唱ヘ本ノ陣ニ歸ル爰ニ於テ荒手ヲ以テ細川諸軍ヲ指揮シ競ヒ討南軍稍拒ムトヽ雖モ終ニ軍破レ八幡ノ城ヲ避テ紀州ニ出奔文安三年八月紀州南方ノ宮征伐トシテ武家ヨリ畠山家僕遊佐及宇津宮入道ヲ指加ヘ師ヲ帥テ發向ス南軍ノ兵士强大ノ族ヲ聊足ヲ不行急ニ討テ懸リ挑ミ戰フ故京勢動スレハ備ヲ破ラレ進得ス南軍機ニ乘テ豪氣ヲ勵シ干戈ヲ振テ戰フ爰ニ至テ京軍悉ク敗走ス

文安四年十二月紀州へ遊佐兵庫助宇都宮入道祥綱大軍ヲ率シ再發向シテ南軍ヲ攻ル楠等ノ勝者諸軍ヲ麾テ敵ヲ挫テ進ム山勢ヒ恰繚子カ軍術獨出獨入カ如シ敵戰屈シ敗死スル者甚多シ爰ニ於テ味方ヲ指揮シテ湯淺ノ城ニ入テ堅ク是ヲ守ル敵續テ發テ城ヲ圍テ攻戰フ南軍健ナル兵士タリトイヘトモ味方ニ助ノ勢ナク籌策ヲ廻スニ力盡キ城陷ル南朝ノ宮自殺楠二郎等ノ勇兵既ニ敵ヲ若干討捕速ニ戰死ス遊佐宇都宮軍ニ勝テ南朝ノ宮及楠等カ首ヲ捕テ京師ニ送ル

文安五年正月十日紀州ノ南軍悉ク征伐ノ慶賀トシテ室町ノ亭ヘ公家武家出仕市ノ如シ同廿七日南方ノ宮及楠等ノ兵士ノ首級七條河原ニ梟ル蓋シ赤松左馬助敎祐近年南朝ニ屬シ所々ニ隱ル爰ニ至テ力竭キ勢州ニ走ル因茲武家ヨリ國司ニ命シテ軍士ヲ遣シ赤松ヲ搜シ索メ誅

伐ス其僕者二人斬戮ス

寶德元年四月十九日武家ノ棟梁義成征夷大將軍ニ補ス

長祿二年八月南朝ノ新帝十津河ヨリ吉野ニ移ル爰ニ於テ赤松カ家族石見太郎左衞門流浪シテ諸國ヲ經順ルコト年ヲ累ヌ時ニ赤松カ家ノ絶タルヲ愁テ思量ヲ廻シ家ヲ再興セント三條右大臣實量ニ仕テ赤松先祖圓心ヨリ代々當家ニ忠ヲ竭ス事ヲ說ク實量是ヲ憐ミ嘉吉ノ大逆ヲアカナフ程ノ忠ヲスヘキヤ石見答テ曰若南朝ニ赴テ新帝ヲ害シ神璽ヲ奪ヒ採テ來ンニハ如何有ヘキヤ實量則奏聞シテ武家ニ告ル許容セラルヽニ依テ石見ニ是ヲ云フ甚悅テ赤松カ一族眞島ト其家僕中村彈正等十餘人相議シテ南朝ニ赴キ計謀シテ朝廷ニ仕ユ月ヲ經テ奉公ノ勞ヲ積ミ粗昵近ス

長祿三年六月廿七日ノ夜中村隙ヲ窺ヒ寢殿ニ忍ヒ入テ新皇ヲ害シ奉リ則神璽ヲ奪採テ出ル中村十津河ヘ遁走ル吉野ノ鄕民急ニ追テ中村ヲ殺ス神璽ヲハ眞島捧テ歸京シテ內裏ヘ獻ス

爰ニ至テ南朝ノ皇統終ニ亡フ

此書ハ何人ノ撰ヒタルヤ知ラスト雖トモ專ラ南朝ノ事ヲ記スルヲ以テ吉野山ノサクラハ雲カトノミナンオホエケルトアル古今集ノ序ノ詞ニトリテ名ツクト見エタリ

明治三十三年六月

近藤瓶城識

櫻雲記卷之下終

通行假名本南方紀傳上トアリ

南方紀傳上

後醍醐天皇（諱尊治）

元弘元年辛未八月九日改元、同年春、彈正尹前亞相師賢卿遁世、籠ニ北長尾山山庄ニ、一首和歌、送ニ春宮大夫師兼許ニ云、

更ニ又住侘ル身ヲ歎コソ捨テモ同シ浮世成クレ

返シ

更ニ又歎クトキケハカクハカリイトハシキ世モ捨ソワツロフ

二月山門東塔北谷衆徒中不和、及ニ合戰ニ、三月、帝北山花見行幸御遊、有ニ管絃ニ、北畠親房息顯家舞ニ、陵王ニ、于レ時十四歳、給ニ御衣ニ、夏五月十一日、東使二人（二階堂下野判官長井遠江守）上洛、着ニ六波羅ニ、範貞使ニ、雜賀隼人佐、召ニ捕圓觀上人文觀忠圓等僧徒ニ、六月八日、關東下向、秋七月三日、大地震、紀州千里濱陸地成ル、二十餘町、同五日、參議源持房出家、同十一日、召ニ捕俊基三人僧ニ、僧配流、同七日、大地震、富士山絶頂崩百餘丈、八月九日改元、同月、大外記註ニ進關東ニ之處、有ニ改元詔書ニ、無ニ改元記ニ、仍關東有ニ評定ニ、先例稱レ未レ有レ之、關東不レ用ニ新年號ニ、用ニ元德暦ニ、八月、帝與ニ大塔宮ニ集レ兵、命ニ黃門具行ニ、（師行二男）欲レ傾ニ關東ニ、已發覺、高時聞レ之大驚、俊基以下悉誅レ之、八月廿二日、東使上洛、可レ奉レ配ニ流今上ニ、并近臣及大塔宮可ニ誅伐ニ之由云云、彈正尹亞相師賢出ニ長尾山庄ニ歸レ洛、詠ニ和歌ニ云、

菴ムスフ山ノ下柴ヲリ〳〵ノ嵐ニモ似ヌ身ノ行ヘカナ

思カヲ入ニシ山ヲ立出テマヨウ浮世モ唯キミノタメ

八月廿四日戊刻、主上行ニ幸南都又笠置山ニ、中宮赴ニ野々宮ニ、季房供奉、（于レ時一品公主立ニ齋宮ニ在ニ野宮ニ）師賢登山、八月廿八日、坂本合戰、六波羅方源時信（佐々木家人、并海東左近將監一類悉討死、九月廿日、持明院春宮量仁親王踐祚、同廿七日、東夷貞直貞冬高氏等、發ニ向笠置城ニ、同月晦日、笠置寄手陶山小見山夜討、官軍敗北、錦織飛驛判官源義繼子息義忠以下十三人、城中自害、今上御ニ沒落於山城國多賀郡ニ、東夷奉レ捕、御製云、

サシテ行笠置ノ山ヲ落ヌレハ雨カ下ニハ隱家モナシ

冬十月十日、平等院奉レ入、同十三日、六波羅入御、同日赤坂城落城、櫻山城沒落、自害、

光嚴院（仁王九十六代後伏見第一）三月二十二日改元、同日卽位、

正慶元年元弘二年、關東號ニ元德四年ニ、三月七日、主上遷ニ幸隱岐國ニ、三月八日、一宮（尊良親王）配ニ流土佐國ニ、大覺寺宮配ニ流越中國ニ、妙法院宮配ニ流讃岐國ニ、亦第四聖護院宮配ニ流但州ニ、恒良親王（八歲）成良親王（七歲）義良親王（六歲各准后腹）依ニ幼稚ニ留ニ京都ニ、師賢卿下總千葉配流、春正月、去年生捕宮方、死罪流刑、三月廿二日、持明院天子卽位、元德四年ニ、爲ニ正慶元年ニ、前三月五日、時益伸時補ニ六波羅ニ、夏五月十七日ニ、楠木正成天王寺出張、隅田高橋等發向、同廿一日合戰、京方敗北、秋七月、宇都宮公綱發向、楠木退、七月廿七日、宇都宮敗北、又赤松播州起、八月卅日、先帝中宮禧子爲レ尼、同九月廿日、東國勢悉上洛、十月八日入洛、十月廿九日、師賢於ニ配所ニ薨、辭世云、

雲ノ色時雨雪ケハミヘワカテ唯カキクラス我心カナ

十一月三日大嘗會、

元弘三年、（癸酉）關東號ニ正慶二年ニ、春正月晦日、京方三手分、發ニ向吉野赤坂金剛山ニ、二月三日、赤坂合戰、廿四日落城、十八日吉野城合戰、落城、村上父子殞命、二月廿日、治時發ニ向金剛山ニ、二月十一日、義貞大塔宮令旨給、閏二月廿四日、主上出ニ御隱岐國ニ、同日遷ニ坐伯耆國攝津浦（名和湊ノ）ニ、同廿六日、遷ニ幸船上山ニ、源長年爲ニ宮方ニ御迎參、其時給ニ御歌ニ云、

忘メヤヨルヘモ波ノ荒磯ヲ御船ノ上ニ留シ心ハ

閏二月十一日、六波羅勢於ニ攝州摩耶城ニ合戰、六波羅勢敗、同廿八日、重而出勢、三月十日、瀨河合戰、同十一日、京方敗北、赤松責上、三月十二日、洛中合戰、赤松敗北、三月十五日、京勢山崎向合戰、京方敗、同廿八日、山門僧徒六波羅發向、京方打勝、四月八日、忠顯京發向、忠顯敗、四月九日、谷堂峰堂葉室衣笠等悉炎上、四月十六日、尊氏入洛、同十九日、高家入洛、四月廿七日、京勢發向、久我畷合戰、高家爲ニ赤松ニ討死、高氏同日加ニ官軍ニ、五月於ニ馬場宿ニ出家、日野資名權中納言俊實權中納言賴定、五月七日、宮方攻ニ六波羅ニ、及レ晚落城、五月八日、仲時時益等、奉レ具ニ新主兩院ニ沒落、新主兩院以下趣ニ鎌倉ニ、時益於ニ關山ニ誅伏、仲時到ニ馬場ニ自害、所從四百三十二人自害、新主兩院奉レ捕歸洛、同十日、千葉屋寄手敗北、大覺寺宮於ニ越中國ニ、爲ニ名越兵庫助ニ生害、季房於ニ配所ニ爲レ賊生害、同月十一日、新田武藏野合戰、京方打勝、（九歟）同十五日、於ニ關東ニ、鎌倉重發向、官軍不レ利、五月十八日、新田分倍河原合戰、京方勝、同十八

日、鎌倉合戰、守時自害、同廿二日、高時法師幷一族、籠葛西谷合戰、京方足助三郎太郎重信卿房賢良等、爲長崎に被レ誅、鎌倉將軍宮守邦親王出家降參、崇鑑幷一族四十二人、門葉二百八十二人自害、同廿八日、高時一男被レ誅、同廿三日、帝自船上山還幸、同廿七日書寫山、同廿八日法華山、同晦日兵庫、赤松父子參向、又新田義貞早馬注進鎌倉沒落之由、六月朔日、高氏任鎮守府將軍、聽内昇殿、六月二日、楠木正成參向、六月七日、大内還幸、勅定云、年號幷人人官位以下、用元弘元年云云、先年流罪宮方、幷公家武家僧徒等悉上洛、六月七日、自九州菊池大友注進云、去五月廿五日、九州探題修理亮英時令戰沒落、自害云云、秋七月九日、千葉屋寄手生捕十五人、於東山被レ誅、同比英時妻女赤橋守時女也、上著、依内緣預尊氏、其時彼女房詠和歌云、

シラサリシ心ツクシノイニシヘヲ身ノ思出トシノブヘシトハ

六月廿三日、尊雲法親王入洛、還俗號護良、任征夷將軍、二條左大臣道平爲氏長者、右大臣長通久我内大臣公賢西園寺師賢墓謚文貞公、秋七月十一日、中宮禧子爲太皇太后、七日守邦親王薨、三十歳冬十月十日、顯家叙正三位、義良親王童躰任陸奥太守、下向奥州、上野介入道道忠奉輔佐、陸奥凶徒悉靜謐訖、十月十二日、中宮崩、同日爲後京極院禧子、西園寺實兼公女、十一月三日、齋宮薨、十二月廿八日、成良親王爲關東管領、源直義兼相摸守奉執權下向、入鎌倉二階堂小路山城美作守館、

建武元年甲戌春正月廿三日、以恒良親王爲皇太子、三歳十　同月廿九日、改元建武元年、三月九日、高時餘類本間澁谷一族等謀反、襲鎌倉、凶徒不レ利、三月高時一族、於紀伊國蜂起、飯盛山構レ城、楠木正成有殊功、楠木正成爲大將、三善信連爲勅使、發向、下知高野衆徒、被レ抽軍忠、三月十一日、石清水行幸、同十四日、藤房遁世爲律僧、大塔宮子陸良誕生、母源大納言師重女五月三日、尊氏以伯母淮后申云、大塔宮還俗後謀反由、已發覺云云、帝逆鱗、即被召禁、候人權律師淨俊等、多以被レ誅、十一月奥州津輕凶徒時如高景以下、義良親王降參、十月十五日、兵部卿護良親王被禁囚、仰尊氏配鎌倉東光寺、左大臣經忠近衛殿右大臣公賢西園寺殿内大臣定房吉田一品宣房建武二年乙亥春二月、顯家任權中納言、奥州宮叙三品、三月西園寺公宗橋本俊季金吾氏光三善文衛、依謀反被レ誅、政所二階左衛尉入道行親被レ誅、夏五月、尊氏詣嚴島、同二十一日出羽國住人、殺國司葉室宰相光顯卿、親房卿息顯信顯能顯雄三人伊勢下向、西園寺公宗餘黨、相摸次郎、去三月信州蜂起、諏方三浦葦名鹽谷本間一味、發向趣鎌倉、於聖福寺邊合戰、路次戰、官軍不利、小山高朝於武州府中自害、澁川刑部大夫義季細川頼貞新田四郎等或敗北或自害、北國凶徒時兼又蜂起、秋七月廿三日、直義沒落欲上洛、使淵邊令弑護良親王於東光寺、大江時古奉抱成良親王、皈洛、凶徒追懸合戰、直義還合防戰、於駿河國手越川原戰、味方不利　直義沒落、淵邊一騎留討死、此者奉弑大塔宮、不過中陰日數、忽被レ誅畢、凶徒頻襲來、亦今川名見耶三郎殘留防戰、各力盡自害、從是敵不及追來、直義到興津宿、八月二日、高氏卿出京、改名尊氏八月八日、於佐用中山合戰、尊氏有利、同十八日相摸川合戰、今川頼國討死、味方有利、凶徒清久山城守被レ誅、蘆名判官持明自害、諏方三河守以下四十三人鎌

倉大御堂自害、各面皮剝、八月十三日十五日、奥州凶徒起、國司幷伊達行朝馳向退治、八月廿九日、尊氏號二征夷將軍宣一、同卅日從三位、名越時兼以下、於二加賀國大聖寺城一被レ誅、尊氏以二陸奥守家長一爲二奥州管領一、置二斯波館一、冬十一月十八日、尊氏以二細川和氏一奏狀到來、同十九日尊良親王義貞以下東征、河野對馬入道通治、以二南山和尚一降二尊氏一、本領安堵、通治下二向奥州一、十一月廿七日節度使與二直義一、於二矢作一合戰、官軍有レ利、直義方鹽瀨資連討死、十二月五日、遠江國上野合戰、手越川原合戰、直義方肥前守盛經入道鹽瀨資忠討死、十二月十三日、箱根竹下合戰、新田敗北、敵國國蜂起、節度使無レ利飯洛、十二月廿三日、奥州於二高野郡一斯波家長與二相馬胤平兄弟一合戰、同廿六日於二行方郡一合戰、

延元元年丙子足利號二建武三年一、二月廿九日改元、春正月十日、江州勢田宇治尊氏入洛、帝乘レ輿幸二叡山一、勅使河原父子自害、内裏兵火、結城親光討死、義貞親王顯家率二東軍一攻上、斯波陸奥守家長、及相馬重胤等、於二杉本觀音寺一、爲二顯家一自害、尊氏方正月十二日、義貞親王顯家卿江州參着、亦佐々木氏賴觀音寺城攻落、大館中務大夫自害、同十六日園城寺合戰、官軍千葉介氏胤殞レ命、官軍有レ利、落城、寺家燒亡、敵敗北、官軍追レ之、於二四宮河原一敵杉原國綱討死、雖二入洛一、官軍三舍、正月廿日、信州勢大智院宮彈正尹尹良親王着二御坂本一、同廿七日同廿八日九日合戰尊氏伯父母方兵庫助憲房以下戰、力盡於二中御門京極祇陀林寺地藏堂一自害、其子於二川原一討死、評定衆伊賀左衛門尉光泰子四郎光長被二打取一、尊氏不レ叶、沒二落丹波國一、顯家卿義貞朝臣攝津國兵庫浦發向、十三日、打二出西宮一合戰、櫻山合戰、敵方九州小貳大友、雖レ及二合力一、悉敗北、尊氏兄弟於二兵庫魚御堂一、已可レ及二自害一、令二用意一所、細川卿律師頻加二意見一、乘レ舟沒落畢、其時尊氏詠二和歌一云、

今ムカフ方ハ明石ノ浦ナカラマタ晴ヤラヌ我カ思哉

細川和氏

武士ノ是ヤカキリノナリ〳〵モ忘ラレサリシシキシマノ道

二月二日、自二山門一還二幸花山院殿一、義良親王元服、加冠左大臣、任二三品一、任二陸奥守一、二月二十九日改元、爲二延元元年一、三月四日、江田大館西國下向、三月八日、於二陸奥國一、宮方廣橋經泰爲二大將一、相馬胤平以下自二靈山城一出張、向二小三保河俣城一被レ攻、敵相馬彌二郎光胤以下敗北、結城白河入道道忠家人中村六郎等、同國宇多庄熊野堂蜂起、敵相馬光胤馳向合戰、三月十五日、於二信濃國一上杉憲藤、爲二顯家一討死、兄弟共於二下野二階堂一顯行討死、同三月廿二日、廣橋經泰相馬胤平、馳二向相馬光胤小高城一合戰、同月廿四日、廣橋敗、同日義良親王國司顯家卿陸奥下向、四月六日、於二菊田庄一相馬胤平、與二敵三箱湯本堀坂口石川等一合戰、敵敗北、四月九日、常陸國小田右兵衞佐舘敵籠城間奥州味方廣橋肥後守于時修理亮相馬胤平以下馳向合戰、凶徒敗北、四月廿四日、親王國司御下着、四月廿六日、尊氏攻二上周防國一笠戸着陣、催二三浦介高繼一路次戰、官軍失レ利、同廿八日、持明院殿後伏見賜二院宣一、尊氏、五月八日、顯家卿以二陸奥兵一被レ攻二那須城一、五月十三日、新田失レ利、退至二兵庫一、同十五日楠木下着、兵庫五月二十四日、奥州國司被レ攻二落小高城一、相馬光胤兄弟五人被レ誅、城落訖、五月廿五日、兵庫湊川合戰、楠木正

成兄弟自害、官軍失レ利歸洛、同廿九日、帝山門臨幸、五月廿九日、尊氏入洛、用二建武暦一、以二正慶天子一爲二治世之主一、以二第二皇子豐仁親王一欲レ爲二主上一、六月二日、京勢山門發向合戰、官軍及二難儀一、忠顯卿正忠朝臣討死、六月十日、持明院殿先帝重祚、六月廿日、京勢與二官軍一於二無動寺一合戰、京方多田賴氏以下被レ誅、高豐前守師重被二生捕一、後被レ誅、去五日到二廿日一、敵味方數千被レ誅、六月晦日、官軍襲二京都一無レ利、左衞門尉房秀伯耆三郎左衞門以下討死敗北、七月十三日、義貞以下亦京都發向無レ利敗北、那波伯耆守源長年等討死、七月廿三日、醍醐寺合戰、宮方城郭燒拂、八月五日、於二陸奥國一、顯家卿還レ兵被レ攻二石河庄松山一、城敗沒落、敵降參、同月廿二日、佐竹石河凶徒引率、久慈東小里鄉發向、顯家味方胤平以下合戰、凶徒二階堂五郎打取、八月十五日、新帝踐祚、十六歲八月廿二日、山科尊氏方足利五郎發二向四宮川原一合戰、宮方阿彌陀峰陣於二新日野一合戰、

北帝仁王九光明院諱豐仁母同上十七世光嚴院御猶子

左大臣經忠北朝爲二關白一、參議源通冬參議藤宗兼中御門祭主大中臣蔭直等被レ止レ職、是先帝一味、內二通山門一由云云、八月廿八日、大覺寺回祿、諸堂房舍一時燒亡、九月十四日、足利五郎宇治發向、十月九日、東宮幷尊良親王等赴二越前國一、於二路次一千葉介貞胤爲二敵降參一、同十三日、金崎城合戰、同十一月合戰、十二月廿一日、南方帝先入二御河內東條一、乘輿潛出二洛陽一、幸二吉野一、源親房入道至二伊勢一、同廿二日、於二北朝一源顯家在奥州藤原隆資同實世在越前同光世在出羽被レ止二權中納言職一、又召二捕中御門宰相宗兼一、

延元二年、丁丑北朝建武四年、基嗣北朝爲二關白一、春正月、足利尊氏以二式部大夫兼賴一奥州爲二管領一、兼賴少年間、氏家入道道誠爲二代官一、正月八日、陸奥凶徒蜂起、親王幷顯家入二伊達郡藤口靈山一、結城上野入道入二東海道熊野堂一、正月八日、右大臣公賢公大納言師基卿中納言實任卿自レ京入二吉野一、來二正月十七日宰相宗兼終爲二北帝一被レ誅、二十七同廿一日、宰相公量德大寺宰相源親光中院被二召捕一、是皆南帝一味由云云、正月廿六日、於二陸奥熊野堂一、白河入道道忠、與二敵相馬松鶴丸一族一終日合戰、兩方多討死、二月廿四日、於二常陸國一小田富岡山一、敵佐竹義篤幷與二小田宮內少輔治久幷常陸平大掾一合戰、同廿六日、小田方夜討、同廿九日、小田敗北、三月、中納言惟繼卿大藏卿菅原在氏左大辨宰相清忠入二吉野一來、三月六日、金崎城沒落、義顯自害、尊良親王同御自害、四月五日、關白左大臣經忠入二吉野一來、同十六日、基嗣北朝爲二關白一、經忠弟尊氏使二和氏貶一公家領一、四月義貞蜂二起越前杣山城一、七月十四日、顯家還二東彌九郎楠木左近藏人一、攻二常陸國一佐竹義篤吉原源藏人等合戰及二數日一、兩方多以殞レ命、七月廿日、定房出二奔吉野一、將軍方二階堂山城守顯行討死、九月十九日、義良親王幷顯家卿及結城入道、有二西征之儀一、十二月十三日、於二上野國刀禰河一合戰、官軍有レ利、武州三嶽住人齋藤實永殞レ命、同十六日、武州蘇山安保原合戰、官軍有レ利、十二月廿四日、到二鎌倉一小壺合戰、松本合戰、前濱合戰、腰越合戰、皆官軍有レ利、親王幷顯家上洛、上杉桃井、波賀入道集二敗軍一、又追責上、三浦介今川心省吉良滿義等黑田着陣、土岐賴遠土岐山出張、十二月廿四日、備後國太田庄地頭左衞門尉三善資連、件本領奉レ寄二進高野山大塔一、

延元三年戊寅北朝暦應元年春正月、於二美濃國青野原一合戰、正月廿三日、南朝吉田内大臣定房薨逝、師基任二内大臣一、二條殿　二月四日、師泰賴遠自レ京發向、同六日、着二黒地一、同十四日、伊勢國雲津河河又河口度々合戰、京方敗、同廿八日、奈良合戰、權中納言光繼討死、京勢打勝、親王入二御吉野一、顯家卿發二向河内國一、顯信八幡張レ陣、三月八日、八幡幷河内國古市河原合戰、官軍不レ利、三月三日、尊氏以二葛西安東權介一爲二陸奥守一、三月二十一日、坊門清忠從二位於二吉野一薨、五月十九日、經通公北朝爲二關白一、同月廿二日、和泉國堺浦合戰、官軍敗北、顯家卿討死二十歳五月二十八日、持家家房等朝臣、發二向八幡山一、六月中度度合戰、城中有二殊功一、同月十八日、敵溝杭家兼同盛兼被二打取一、六月晶王於二吉野一薨、七月十一日、城中糧盡、官軍引退、閏七月二日、越前國足羽城合戰、大將義貞死節、卅八、氏家重國取レ首、於二南朝一、顯信叙二從三位一任二陸奥守一、顯能叙二從四位上一任二伊勢守一、藤原有資任二伊豫守一、閏七月廿五日、義良親王尊澄親王以下宮宮、幷入道一品親房以下顯信卿結城道忠等、率二東軍一下二向勢州一、八月十一日、尊氏叙二正二位一、同十三日、北朝廢二東宮成良親王一、以二興仁親王一立二東宮一、同月十七日、解纜出船、同月廿八日、北朝九月十一日、東國下向舟共、於二伊豆崎一遭二大風一、船漂沒數千、親王顯信卿等船、歸着二勢州篠島里一、結城上野入道道忠艤二此御船一、親房一品船着二常陸國内海一畢、尊澄法親王幷尊良親王第一宮船着二遠江國白羽濱一、尊澄法親王御詠有、

イカテホス物トモシラストマヤカタカタシク袖ノヨルノ浦浪

其後兩宮入二御井伊城一、亦尊澄親王有二御詠一、

ナレニケル一度キテモタヒ衣ナル、アツマノ嶺ノ嵐ニ

同時花園宮船着二四國一、懐良親王牧宮ト云舟着二四國一、自レ是可レ有レ御二下向鎮西一云云、自二吉野一日野僧正賴意爲二勅使一到二伊勢篠島一、禰宜神人申云、此度大風舟數千破損不レ勝レ計、其中親王御船、无二異儀一、此浦還御、聊太神宮因二神助一故也、至祝無レ限、賴意一首和歌奉レ獻二親王一云、

神風ヤ御船ヨスラン奥津浪タノミヲカケシ伊勢ノ濱邊ニ

十月廿八日、尊氏改二建武五年一爲二暦應元年一、十一月北朝、親王御禊大嘗會、南朝延元四年、北朝暦應二年、自二去年一尊氏以二高師秋一任二伊勢守護一、與二國司一合戰、夏四月五日、南方愛州宗實賜二勢州朝明郡地頭職一、四月十三日、恒良親王薨、十五歳　同月廿一日、成良親王薨、十六歳　同月廿五日、佐々木佐渡入道配流、依二山門訴訟一也、八月九日、南帝御不豫、同十五日踐祚、義良親王十二歳遷左大臣經忠亭受三種神器　同十六日、帝崩、五十三歳　經忠爲二關白一、師基任二右大臣一、資次任二別當一、實世洞院　隆資四條掌二傳奏一、九月六日、南山源季光出家、十月五日、新帝即位、一品入道親房、自二常陸國一獻二神皇正統記一、五卷　先帝女御榮子二條關白道平女　落髮、戒師青蓮院慈道親王也、詠二一首和歌一送二尊圓親王一、

二品慈道親王

思ヤレ深キ涙ノ一入モ色ニ出タル墨染ノ袖

返シ

二品尊圓親王

色カハル袖ノナミタノカキクラシヨソモシクル、神無月カナ

伊勢太神宮奉幣使、新帝拜二三種神器一、御製云、

四ノ海ノ波モヲサマルシルシニテ三ノ寶ヲ身ニソツタユル
九重ニ今モマスミノ鏡コソ猶世ヲ照ス光ナリケレ

南帝後村上院（諱義良母新待賢門院仁王九十六代後醍醐第七王子）南帝興國元年北朝暦應三年、（四月廿八日改元）吉野新帝即位、雖レ有二
帝都一號一行宮一、無二殿閣一、官人微少、昇進除目、旨趣殆似二斷絶一、依レ之二月下旬一品親房於二常
陸國小田城一作二職原抄二卷一、奉二獻吉野行宮一、百官諸位職掌諸家勝劣如二指掌一、至二末代一帝都
可レ謂二龜鑑一者也、素雖レ爲二廣才大智一、今在二東關逆旅一、一卷無二文書一、輙開レ口顯二毛緒一、非二凡
人所一作、偏知二淡海公再誕一、一品入道親房遣レ勢、誅二宇都宮綱世一、四月源高貞於二雲州一自害、
五月十九日、顯信卿爲二國司一、奥州白河城下着、一品宮陸奥御下向、號二宇津峰宮一、五月廿七日、
下總國駒城沒落、殞命三十人、七月義助至二信濃一、九月一日、土岐頼明入道號二周濟坊一、義助爲二
退治一、爲二大將一下二向信濃國一、同月十八日、義助至二美濃一敗北、入二伊勢一至二吉野内裏一、北朝春
日神木入洛、南朝慈扁僧正獻二朝神風和記一（三卷）白河親朝任二修理大夫一、同月廿三日、於二常陸國一
春日少將幷小田治久蜂起、敵吉原佐竹敗北、
正平（己酉）三月十一日後村上院崩御（四十）一王子寛成親王可有御即位之所月卿雲客幷吉野十八卿
者共不奉屬悉背第二宮奉立太子然云へ已一宮（號住吉宮）押自號即位四年之間住吉御座有然共終不
叶文中二年（癸酉）八月御位ヲ御弟二宮（廿カ）應成王ニ讓給ヒ御沒落有高野山へ入セ給ヒケル猶彼
山ノ衆徒ヲカタラヒ御即位可有ト思食ケルニヤ高野山ニテ丹生明神幷弘法大師ヱ御立願ア
リ

敬白發願文事

右今度之雌雄所如思者殊可致報賽之誠狀如件

文中二年九月十日太上天皇寛成（是ヲ後ニ於吉野）奉號慶長院

正長七月廿日帝崩無太子御弟モナシ七月上旬ニ御惱重御座候間嵯峨御座小倉宮第一御子御
即位ノ望御座アリテ御逐電十月廿七日今上（後花苑御即位）十二月小倉宮奉取立伊勢國司逆心爲打手
土岐世保發向合戰國司討死首上洛四塚懸南帝御和談嵯峨御歸御位望之宮御出家勸修寺江御
入室後奉號教尊權僧正ハ此御事也

正平七年四月一日

南方紀傳卷第二（闕本）目錄

親房卿書簡裏書（自興國二年至同五年）

親房卿送ニ親朝一狀

宗良親王紀行

已卯年（興國五年己卯）二月又芳野へ入セ給秋八月中ノ五日讓ヲ受テ天日嗣ヲ傳ヲマシマス

親房卿書簡裏書

南朝年號興國二年（辛巳）足利號ニ暦應三年（四イ）一

敬白發願文事

准三宮一品沙門□敬白

亡息贈一位右大臣顯家

通本々シ南方二其辰午七治テ書
行親七題ト下ニ庚丙ヨリ年ア
假房字シ紀ニ廿貞マ五ヲ也
名云ナテリ傳テ年ニ小テ年リ

越州宮方蜂起、宗良親王自ニ信州一密至ニ越中國名子浦一着津、八月十九日、京都ヨリ春日神木歸座、　南方宇津峰宮一品親王入ニ常州小田城一、春日中將顯時一條少將具信唐橋肥後守經泰刑部大夫秀仲等供奉、　此時、奥州宮方伊達宮內少輔石川石橋河村六郎田村庄司南都滴石輩一手成、　斯波岩手兩郡責上、敵轉貫出羽守並一族打取、　十一月小田治久降參、

南朝年號興國三年足利號康永元年四月廿七日改元

春三月法勝寺炎上、　八月廿八日、籠ニ宮方勢州玉丸城一、高土佐守師秋攻落、　秋九月三日、北朝仙院伏見殿御幸、土岐賴遠參會、路次狼籍、　冬十二月廿三日、尊氏母堂二品清子薨逝、法名雪庭、號ニ等進院一、

南朝年號興國四年、足利號康永元年、

春二月、石堂宮內少輔入道秀慶坊白河結城親朝顯朝父子方頻、可レ爲ニ將軍方一由及ニ催促一、亦稱ニ京都御敎書一、數通送レ之、而招レ之、不レ至、　春三月廿九日、常陸國關城小田城合戰、將軍方佐竹結城相寄來、宮方春日羽林一條少將已下防レ之、夏四月二日、寄手大將結城直朝、于時十九歲其外佐竹一族以上百餘人討死、　同五日、顯時朝臣出ニ伊佐城一、以ニ野伏一塞ニ凶徒兵粮通路一、此上敵敗北、　鎌倉執事高三河守師冬、夏五月廿二日、關城小田城爲ニ退治一發向、

六月十四日、常州方穗庄着陣、同六月十五日、小田近邊三村山取レ陣、未レ發レ矢、送ニ數日一、同六月廿三日、宮方合戰初、終日責戰、敵手負死人千餘人、師冬引ニ退要害一、同廿四日、宮方雖レ發レ兵、敵不レ及ニ出逢一、兩方野伏軍計也、　秋七月七日、武州住人吉見彥三郎賴武、爲ニ宮方一來、　七月十二日、一品宮命秀仲、以ニ白川親朝一任ニ修理權大夫一、　七月十三日合戰、宮方得ニ勝利一、亦常州北郡新城合戰、味方小田一族宍戸田野輩多討死、　師冬、河內郡駒楯城引退、同七月廿七日、師冬方夜討、味方多討死、雖レ然得ニ勝利一間、同廿八日、八丁目垣本鷲宮善光寺山四箇所敵城放火沒落、同廿九日、飯沼楯沒落、同夜味方以ニ伏兵一師冬陣屋燒拂、

同九月、高師冬重而寄來、宮方長沼忽爲レ敵、此時一品親房入道、并顯時白川親朝父子方頻雖レ催ニ加勢一、不レ能ニ合力一、　冬十月小田少將治久與ニ師冬一和順爲レ敵、因レ茲一品宮春日羽林親房入道具信秀仲移ニ關城一、宮並顯時入ニ下妻城一、　十一月三日、師冬卒ニ小田佐竹一、着ニ陣於村田庄一、十一月八日、師冬關城大手寄來、一手大寶城北寺山寄來、塞ニ兩城往反路一、一手三戸七郎爲ニ大將一、大平高橋武州常州勢數騎大寶城南長峰取レ陣、　顯時朝臣、並一條少將卒ニ城中兵一、出張合戰、宮方勝利、　伊佐城、伊達宮內大輔行朝籠レ之、　眞壁城、法超入道籠レ之、　中郡城西明寺城味方多勢籠レ之、然而村田庄四保城主四保駿河守一人敵被ニ押隔一、不レ叶、其身妻出家出レ城、子息因幡守降參、師冬對面、村田本領可ニ安堵一旨、下知云云、及ニ暮年一、高三州師冬治レ兵歸ニ小田城一、

南朝年號興國六年、甲申五歲　足利號康永三年、

春、宗良親王自ニ越州一歸ニ信州一、　顯信卿在ニ陸奥一、同雖レ催レ兵、國民不レ應レ之、　結城親朝背ニ宮方一、密ニ通參河師冬一、　正月十三日親朝已敵一味、

親房卿送ニ結城一狀

通行假名本此狀ノ終リニ跋ヲ載セテ云フ南方記傳第一巻は元弘年中より興國元年の治亂興亡大概これをしるす第二巻は興國二年庚辰より貞治五年丙午まて廿七年の間乃一巻ともに全部五册是を所持すといへとも先年故ありて第二巻目紛失すそのゝち多年是をもとめん事をおもひ或は關東鎌倉奥州

去年六月、凶徒師冬等襲來之後、勠力事自非恃二其境一者依無異途連連發二羽檄一之上、自二他形勢一推察、更無レ所レ貽歟、最前依被申領狀諸人誓雖レ待二救兵之到一、綷及二遲引一、經二五箇月一之間、剩治久以下傾者、忽以變二所存一、屬二凶徒一訖、移二當城一以來、分域彌縮、士卒已減、艱難之甚、不レ言而可レ知、空歷二九箇月一未レ見二一人之勠力一、周章之至、無二物取レ喩焉、當時近境之中、御方城墎、纔六箇所也、先此關城者、宗祐一身日夜馳走、至レ今可レ謂二堅確一也、至二自餘之族一者、反覆之情、極以叵レ測、凶徒專依レ圍二當城一、船路陸路共斷絕、於二白晝一者、更无二往來之人一、臨二暗夜一適雖レ有二一兩之出入一、殆希有之儀也、依レ之面面失二膽畧一、或放二却乘馬一、或交二易甲冑一、如レ此之類、縱雖レ欲レ全二忠節一、果而無二炊レ骨易レ子之窘一乎、下妻城者、本自人情不レ一、揆正員者尙幼稚、扶翼者互爭レ權、隨而浮說不レ休、私鬪亂可二出來一之體也、竹園御座、大將顯時朝臣經廻之間、聊加二斟酌一許歟、此外中郡城者、顯時朝臣手勢等也、其不レ足レ恃、兵粮又無レ蓄、眞壁城者、法超一人雖レ存二忠義一、一族郎從、皆以有二內通之聞一、西明寺城者、本自遼遠、始不レ及二音聞一、然者件五箇所之城、危如二燕之巢二幕上一、伊佐城者、行朝朝臣忠心不レ撓歟之間、當時隨分不レ危之城也、然而關下妻兩城、難義令二至極一者、以二一所不一レ可二相支一也、抑勠力間事、其境計畧之分、大概推察之後者、不レ及レ盡レ詞、依二無勢一斟酌之條、誠又非レ無二其謂一、所詮於二時節一者、可レ在二東奧之勢發向之期一乎、凶徒未去、國府合戰之習、機宜叵レ測、猶送二日月一者、此境官軍、悉如レ向二枯魚之肆一歟、雖レ導二江海之流一、其有二何益一焉、發向之段、猶不二容易一者、出二士卒於國境一、可レ被レ示二形勢一歟之由、自二去年一再三雖二懇請一、猶以不二事行一之間、御方所存、逐レ日

或は京都吉野阿州攝州勢州紀州古寺書跡をのこらす尋るといへともいまた是を見す漸常陸の國におゐて親房卿の自筆にて白川結城親朝へをくりたまふ書簡を見出すその書の裏書に興國三年より同五年の間關東にて宮方の合戰の事ありすなはち書寫之畢

令二退屈一者也、贈一位在國之時、愚身上洛之後、就二尊氏叛逆之風聞一不レ日上レ道、遂成二大義一畢、彼時當參不レ幾之勢也、凌二數千里之嶮難一、早達二先途一、是志之功也、第二之度、退二國府一入二靈山一、所々相塞、人々兩端、然而志之所レ之、押二平海道一、淼二于畿內一畢、至二其身之夭亡一者、非二士卒之敗北一、天運之令レ然也、同時戰死之族、亦以不レ幾、雖レ怨二其身之不幸一、忠孝道者、可レ謂無二遺恨一也、然乃以二彼時一思二今日一、眞實被存其志殘置守城之勢被二發向一者、伊達以西官軍、盖無二同心志一レ之、功與二不功一也殆見、近日之躰、事之火急、甚二於赴二湯獲一、至二老身一者、一瞬之間、全二忠義一欲下以二餘命一報中先皇上計也、大義之成否、必係二心府一、運命云極者、失二一命一之外無二他事一、更不レ可レ爲二遺恨一、倩思二此理一、且難レ知レ暮、殆依レ難レ期二後信一、聊所レ攄二蓄懷一也、烏之將レ死其泣悲、人之將レ死其言善云云、我國者天祖經始之地、日神統領之州也、聖聖相承、授受不レ忒、且依二禪讓一、且歸二正理一、所レ經九十四代、一百七十餘萬載也、縱雖レ及二末世一、不レ可レ有二違越一、日神誓約、可レ曁二無窮一故也、依レ之上自二神代之古一、下至二人皇之今一、欲レ傾二國家一者、不レ久滅亡、欲レ圖二逆節一者、必絕二種類一、世之所レ知、誰敢疑レ之、而今高氏等何者哉、罪惡之甚、先代未レ聞、盜二據中原一、已經二七箇年一、何其多幸也、但承平將門、六年而亡、永承貞任十二年而潰、先蹤聊有レ之、時節之未レ到歟、倩見二和漢之風一、成二大奸一者、雖二終取一レ敗、已有レ過レ人之智力一、暫保二首領一也、今尊氏等爲レ體、非下可レ知二政道一之器上、無下可レ貽二子孫一之謀上、家僕師直假二虎威一、凌二轢重代之武士一、彼等一族誇張、已比二擬高時等行事一、凡重代之輩、皆是王民也、保元平治以來、屬二源平之家一、各爲二陪臣一、不レ屬二皇家之列一、承久以來剩物義時泰時指麾、及二百十三

年、然而彼義時泰時等、隨レ分存二公儀一、不レ忽二諸朝憲一、撫二育傍倫一、似レ辨二政術一、依レ之相續累二其世一、兵權被二天下一畢、有心之輩、見二先祖之譜系一者、可レ不二心恥一哉、幸遇二一統之聖運一、匪二啻不レ失二本所帶一、直承二綸言一、恣給二官祿一、誠是會遇之時節、誰敢周二旋之一、而或爲レ遁二一旦之害一、或爲レ全二所帶之利一、與二同于高氏逆節一、剩頂二戴師直等一、何面目見二先祖於地下一、遂乃屈レ節忘レ名之輩、爲二數度之降人一、弓箭之恥、何事如レ之、而更無二面恥之色一、可レ謂二文武之道掃レ地而盡一也、就レ中承平逆亂之時、先祖秀鄕朝臣立二勳功一、先兼二任下野武藏國宰一、後任二鎭守府將軍一已來、代々異二他之一流一也、於二淸盛賴朝等事一者、起レ自二　勅命一、管二領武門一之上、雖レ不レ能二左右一、謂二彼等先祖一者、有二何用捨一、多年附屬、定非二本意一歟、適復二舊儀一、可レ興二家業一之處、重背二　皇家一、與二同逆徒一、先祖若有レ靈、豈不レ加二睚眥之怒一乎、爰故入道上野介朝臣、深存二忠貞一、感二悅一統之運一、付二公私一被レ表二慇懃一、心中更不レ忘レ之、足下父子爲二彼嫡流一、于レ今無二違失一、親光朝臣死節、其跡相續而致レ忠、是併亡懇魂誠之所レ及、積善之餘慶也、比二此於衆人一者、九牛之一毛、論二此於自門一者、百鳥之一鶏耳、帶二此名譽一、抱二此忠節一、遂無二瑕類一、彌發二光華一、豈不レ被二庶幾一乎、惣可レ爲下辱二後惡之大法一上、別可レ謂下昌二先烈一之孝道上也、而如レ聞者、近日游說之輩、於二所々一、各樹二異儀一歟、或云堅二守城郭一、伺二天下之形容一、不レ可二必好挑一戰、高氏等誠有二運命一者、一身立義、何爲臨レ時歸伏者、不レ及二失家之恥一云云、或云、坂東諸城、縱雖レ令二覆沒一、於二奧州一相支者、又定可レ送二時日一歟、京都諸國之謳謌、凶徒滅亡之兆、稠疊隨二事體一成二大義一者、還可レ有二巨益一云云、或云興廢有レ時、運命在レ天、閑可レ見二損益之際一、故贈一位等、

爲レ全二忠功一、雖レ令二上道一、不レ達二本意一、先鑒如レ此、宜レ加二思慮一云云、如レ此之儀、於二此境一猶以多多、自可レ有二被レ觸レ耳之逆一哉、不レ辨二大義一、不レ存二遠慮一、族者、厭二即時進發之經營一、必可レ與二同緩怠之義勢一也、且又愚老年來隨分負之類猶以有二向背之所存一、頻揚揚不レ可、何況於二疎遠之士卒一乎、至二如レ此事一者、雖レ不レ足レ介レ意、萬一及二大義之障碍一者、可レ無二公平事一也、當家出レ自二皇族一、久立二公門一、晨夕所レ習者、朝廷之禮儀、和漢之憲章也、生二於太平之俗一、不レ知二亂代之風一、何況武家故實、邊鄙之成敗、萬而不レ得二一理一、諸人之不レ受、皆所二自顧一也、殺二此身一、不レ可レ塞二其謗一矣、但爲二先朝之一老一、具蒙二慇懃之顧命一、於レ今殆傍若無人、於二當代一、又有二保護之勞一、恐似二一身之安否一、可レ被レ測二　御運之叡慮一也、依レ之諸方存レ忠之輩、伺二坂東奧州之形勢一、各擁二義旗一之時節、忽失二一命一者、萬方可二解體一之條、爲レ之如何、奧州一方、暫雖レ守二節義一、諸方凶徒一面攻レ之者、適歸順之輩、反覆無レ所レ疑矣、將軍三位中將赴任之後、三箇年未レ立二一匡之功一、其身未練、又無二扶翼之輩一、於二愚老失一命者、雖レ有二其志一、更有二何益一、然乃據二今時之衆議一者、不レ異下積二薪於猛火之上一、暫安中其座上、別有二異圖一者、不レ足レ論レ之欲レ全二貞節一者、爭無二遠畧一、貪二餘命一、望二勠力一者、上天罰レ之、祖神捨レ我焉、唯爲二天下一發二此狂言一、君子論レ之耳、凶徒已覆滅、　聖運令二一統一者、而面朝奬、冬光光華、唇吻之所レ及、緣レ底存二等閑一、縱又不レ叶二衆望一者、退二此一身一、有二何遺恨一、各立二大功一、宜レ決二聖斷一也、此等之條條、深被レ加二商量一者、雖レ存雖レ亡、可レ無二心底之鬱一、故以狀、

康永二年七月十五日　　親房

宗良親王紀行　禁詠集在之

妙法院の宮は遠江の人々背き申けれは三河の國より重春等か足助へうつし奉るへきよし申けれとも宮よりの御返事に

一筋に思ひ定めぬ八橋の雲手に身をもなけくころかな

と被仰て駿河國へ御座をうつされけりかの國には狩野介貞長入江蒲原無二の宮方にて興良親王かねて御座しましけれはまはらく爰に御うつり有それより信濃へ御下向有へきにて有しか此處の風景富士のけふりも宿のあさけに立ならふやうにてまことにめつらしけなきやうなれと都人はいかに珍しからんと山の姿ゑに書せ給ひ二條爲定卿の許へ御文有其中に

みせはやな語は更に詞の葉も及はぬ富士の高ね成けり

爲定卿

御返事

思ひやる方さへそなき言の葉も及はぬ富士ときくにつけても

大塔の忠雲僧正より如何にもして宮の御座所へ尋下り年月の御物語申度よし心かくると申けれは宮より

清見潟なみの關守隙もあらは待とは告よ三保の浦風

其年も暮けれは明年の秋まて駿河に御座有しかとも味方に參る兵もなしかくて信濃へ御座をうつさるへきよし御用意有けれは狩野介か一味のともからさしつとひ夜もすから御名殘を惜み奉り猶行末まて二心有ましきよし各々なく〳〵申上けれはかれらか無二の忠を感せさせ給ひて御詠歌を給はりけり

身をいかに駿河の海の興津浪よるへなしとて立はなれなは

また夜ふかく御出有興津と云里にて曙かたに成ぬるに霧もたへ〳〵に成てゆたゝ見へたる三保崎のまつはらはさなからうみのうへにのこれり吹拂ふ風の氣色もすさましきに出舟の早く過るも波の關守にはよらぬかと見ゆ月は有明なれは明日もあらす面白すみ渡りて見捨かたかりけれは宮はかくそ詠させ給ふ

東路の末まて行ぬ庵崎の清見か關は秋風そ吹

浮島か原千本の松原を過て車返しと云所より甲州に入信濃へ御通り有へきにて富士の麓を廻らせ給ふに山の姿何方よりも同し樣に丸く見得たくひなかりけれは

北になし南になしてけふいくか富士の麓をめくり來ぬらん

甲斐國白須と云所の松かけにあはし御馬をとゝめて

かりそめの行通路ときゝしかといさや白須の待人もなし

信濃國大河原と云處の香垣の美作守高宗か館へ入せ給ひぬ御送りの御供に參りし輩歸りけれは興良親王の御許へ御傳言有

富士の根のけふりを見ても君とへよ淺間の嶽はいかにもゆると

其年の暮に又北國の宮方申事有てひそかに越中國石黑か館へおもむかせ給ひ名子の浦と云處に忍て御座をうつされしに吉野殿より勅使の下りしついてに二條爲定卿かもとへ宮よ

（已下二百三十餘字通行假名本無）

り

いたつらに行ては歸る鴈は有と都の人のことつてはなし

今は又問來る人も名子の浦まほたれて住海士とまらなん

此卿は宮の御母堂に親しき人にてつねにはとむらい申されけりやかて御返事有り　爲定卿

音に啼はそれとはきかて行鴈にことつてなしと何おもふらん

あゆの風はや吹かへせ名子の海士の鹽たれ衣かうみのこさて

後村上院

人王九十六代第五十世天皇諱義良後醍醐ノ第六御子御母准三后藤原ノ廉子此君妊マレサセ給ハントテ日ヲ懷クト夢ニ見申サセ給ケルトソサレハ多ノ御子ノ中ニ唯ナルマシキ御事トモ兼ヨリ聞セ給フ元弘三癸酉年朝妻東陸奥出羽ノ堅メニテ趣カセ給甲戌夏立親王丙子春ニ上ラセ坐シテ内裡ニテ御元服加冠左ノ大臣トカヤ即三品ニ叙シ陸奥ノ太守ニ任セサセ給曆應元同戊寅年又上セ給テ芳野ノ宮ニ坐シカ秋七月伊勢ニ越サセ給重而東征有シカト猶伊勢ニ歸リマシ曆應二

（通行假名本南方紀傳三トアリ）

南方紀傳下

丁末南朝正平廿二年（南京後村上院治世廿九年日也北京後光嚴治世十六年今年百十七年也亂世故全ク今延引）北朝貞治六年春三月十三日、北帝長講堂ヘ行幸、後白河法皇爲ニ百年忌追善一、二月二十九日、北帝中殿御會、關白良基上レ序、將軍義詮列ニ其衆一、

サキニホフ雲井ノ花ノ木スエニモ千代ノ春ヲ尙（ホマ、）ヤ契ン　今上御製

ツカヘツヽ齡ハ老ヌ行末ノ千年モ花ニナヲヤ契ン　關白良基

八千世ヘシ君ニ相生ノ花ノ枝ハ風モ散サヌ九重ノ春　藤原爲（ナリ、）郡

我君ノ千代ノカサシトシルカラニ今日ヨリ櫻色モ添ケル　式部大掾懷國

以下畧之

北京冬通爲ニ關白一、（號一心院）二月五日、關東宮方平一揆蜂起、籠ニ武州河越城一逆心、鎌倉基氏聞レ之欲ニ退治一、其身依ニ病氣一、息男全王丸（于時九歲後號氏滿）爲ニ名代一、軍勢發向、被レ攻ニ河越館一、夏四月廿六日、基氏卒、二十八歲、號ニ瑞泉寺殿一、（昔觀應年中尊氏直義私談時以ニ關東八州一與ニ直義一尊氏卿語ニ直義一云長男義詮爲ニ猶子一置ニ鎌倉一京洛不レ入ニ難レ保ニ國家一末子以ニ基氏一直義爲ニ猶子一置ニ鎌倉一京洛不レ政道不レ正爲ニ一人一難レ保ニ國家一末子以ニ基氏一直義爲ニ猶子一置ニ鎌倉一京洛不レ靜時以ニ坂東兵一可レ治ニ天下一由相定其後尊氏兄弟一期後義詮聞ニ此旨一常弟基氏ヲ謂ニ直氏養子一怖畏令ニ腐心一基氏更無ニ余義一唯一筋欲レ令ニ忠功一義詮心底不ニ私融一基氏今度雖ニ急病痾一不レ加ニ醫養一不レ服藥只願欲レ先ニ兄義詮一）閏六月

上杉入道足利ニテ卒トアリ

十七日、河越城没落、平一揆走ニ勢州一、此子孫留ニ勢州亀山一關一黨是也　全王丸河越合戰後、被レ攻ニ宇津宮城一、宇津宮氏綱降參、同月南方花山院内大臣家賢薨、號妙光寺殿　八月十八日、北京最勝講、衆徒喧嘩、數多被ニ創死一、希代珍事、十二月三日、將軍息男義滿叙ニ正五位下一、同七日任ニ左馬頭一、同日將軍義詮薨、三十八歳、謚ニ實筐院殿一、贈左大臣從一位、吉野故院後醍醐　皇子無文和尚入唐上ニ經山一、

戊申　南朝正平廿三年、北朝應安元年、細川頼之爲ニ執事一、任武藏守　四月十五日、義滿元服、加冠頼之於ニ關東一ニ去年平一揆一、眛逆心輩、悉被レ助ニ一命一、觀應年中、拜領地被レ收レ公、代々本領計御免、但觀應無ニ拜領地一人者、本領三分一被レ收レ公云云、關本ヤ、大將幼稚故諸人皆以ニ慈悲恩賞一欲令レ懷　春三月廿六日、上杉道昌入道立京下向、同九月十九日、於ニ上州足利一卒、六十歳、同六月、禁裏仙洞殿下幷神領條々沙汰武家停ニ止濫妨一、閏六月二日、上杉彈正北征賊退治歸ニ武州一、今日入ニ府君影前一、燒香、八月五日、愛甲三品夫ホマ葬ニ於郡寶積寺一、土岐存浩於ニ箱根山一、

ウラシマカ箱根ノ櫻ヲシムトモ明ハクヤシキ風ヤ吹マシ

十一月廿一日、鎌倉全王丸元服、號ニ氏滿一、十歳、南方後龜山院諱熙成後村上太子母藤原勝子號ニ嘉喜門院一、近衛左大臣經宗女、南方右大將長親作ニ源氏物語抄一、十二月廿日、

己巳　南帝正平廿四年、北朝應安二年、上杉中務父方山三十三回忌、春二月十五日、左馬頭滿詮

十一歳　下ニ向武州本田陣一、三月十一日、南帝崩、四十三歳謚後村上院　一宮住吉覺成親王、因ニ後醍醐遺勅一、存命中無ニ讓位一、亦不レ可レ有ニ法體一、不レ可レ用ニ先帝年號一、南帝太子熙成親王受禪、藤原冬實奉レ納ニ如意輪寺一南帝爲ニ關白一、于レ時左大臣二條教基公男　南方右大將長親父内府薨、後三年喪未レ滿、又故院給ニ素服一、歎息

餘、詠ニ和歌一首一云、

三年マテホサヌ涙ノ藤衣コハ又イカニソムルタモトソ

四月二日、日吉神輿入洛、山徒捧レ狀、欲レ破ニ却南禪寺一、武家不レ決レ之、三月南方土御門右府顯信出家、信州將軍宮至ニ吉野一、奉レ吊ニ故院一、亦下ニ向信州大河原一、奉獻和歌、

數タラヌ歎ニナキテ吾ハタ、歸リ侘タル鴈ノ一行

九月、北畠内大臣顯能公兵、於ニ勢州一合戰、土岐大膳大夫兵敗軍、其時顯能攻ニ取三重郡諸城一、五月廿四日、佐々木雪江薨、四十五　九月三日、大風吹、鎌倉大佛殿倒、十月十三日滿詮將軍弟　自ニ武州一歸京、上杉彈正幷畠山入道卒ニ軍勢一、自ニ本田陣一發ニ向信州大河原城一、南方征夷將軍一品中務卿爲ニ退治一、幷香坂高宗上松等隨レ之與ニ京勢一合戰、自ニ十月一至ニ十二月下旬一、今年信州大雪降、寒氣甚、故兩軍引レ兵歸、宗良親王至ニ吉野一、民部卿光資猶止ニ信州大河原城一、京管領細川頼之奏ニ南朝一請レ和、持明院殿大覺寺殿一代替御治世有、三種神器被レ渡ニ北朝一、南北令ニ和睦一、南皇在上洛、供奉公家武家本領如レ元、幷官加階無ニ相違一可レ有由、再三雖レ令ニ奏聞一、群臣令ニ評定一不レ聞レ之、破ニ和談一矣、此時猶南方領地在ニ河内大和和泉紀伊伊賀志摩伊勢飛驒能登越中信濃上野越後伊豫備前石見長門肥後日向大隅薩摩廿個國中一、北國在ニ宗良親王一、征東將軍　九國在ニ懷良親王一、征西將軍　勢州在ニ北畠國司一云云、十月十五日、上杉兵部建ニ立報恩護國院南陽山一、

庚戌　南朝建德元、北朝應安三年春、細川頼之督ニ諸軍一發ニ向南方一、攻ニ河州一、楠正儀籠城以拒レ之、頼之以ニ山名氏清一合戰、以ニ宇都宮氏綱以下一、發ニ向紀州一合戰、夏五月、紀州南方軍强、而宇都

宮敗軍、入ニ粉川寺一、其後畠山發ニ向紀州一、宇津宮相共破ニ南軍一、宇津宮下ニ向國一後、稱ニ立願一於ニ宇都宮一粉川寺觀音建ニ立之一、七月五日、宇都宮氏綱卒、（號南齡菴法名祥綱）秋八月、東福寺背ニ法制一故、欲レ削ニ五山之籍一、然因ニ寺僧之請一免レ之、奉行布施入道昌椿、伊勢國司蜂起、伊賀住人服部河上等屬ニ國司一、

辛亥　南朝建德二年、北朝應安四年、（三月廿三日北朝受禪）南方鎮西宮式部卿懷良親王、遣ニ使於大明國王一、三月十一日、南帝第三回忌、先帝宸筆之短冊集、其裏書ニ法華經一供養、導師大僧正賴意、和歌曰、

書ヲキシ昔ノ春ノコトノ葉ニ御法ノ花ヲタクフハツヘツヽ

夏六月、伊勢國司與ニ世保一於ニ伊勢國一合戰、國司打勝、取ニ安濃郡一、九月廿日、中書王懷良親王、

日ニソヘテノカレントタミ思フ身ニイトヽ浮世ノ事シタキカナ

ミルヤイカニヨヲ秋風ノ吹カラニ露モトマラヌ吾心カナ

冬十月十五日、關東上杉能憲、鎌倉西御門報恩寺建立、冬十二月五日、男山遷宮、十二月春日神木入洛、同十二月往來返、

宗良親王

トニカクニミチアル君カ御代ナラハ事シタクトモ誰カマトハン

草モ木モナヒクトソ聞此ノ比ノ世ヲ秋風トナケカサラナン

十二月廿七日、鎌倉大倉御所移徙、

壬子　南京文中元年、北朝應安五年、春三月、南方官軍伊勢國司令ニ蜂起一、仁木與合戰、南軍打勝、取ニ朝明郡一、夏五月、雹降、豫州進發三百餘騎、皆遠州勢、其時若ニ本領遠江一、國替可レ被ニ九州一否歎息、一首詠ニ和歌一、送ニ細川賴之一云、

何トナク心ニカケテ思フカナ濱名ノ橋ノ秋ノ夕クレ

細川賴之返事云、分國遠州不レ可レ有ニ相違一云云、此時貞世無勢也、大內義弘（十六歲）爲ニ加勢一、同可ニ下向合戰一云云、秋九月廿八日、天龍寺炎上、九月六日、和泉國合戰、南軍楠木敗淡輪某打勝、南方顯能轉ニ右大臣一、叙ニ從一位一、冬十一月廿三日、鎌倉圓覺寺炎上、（玉岩基氏公七年忌佛事宇都宮三郎十八歲受衣基綱也）八月、南帝讓ニ位御弟一、住吉吉野沒落、高野山入ニ玉川一御座、

癸丑　南朝文中二年、北朝應安六年、春建長寺大學堂（號西來院）炎上、五月十日、大雹降、夏大明使僧來告曰、我王嘗三回聘レ使輸ニ書於日本持明帝一、（指ニ後光嚴一）然悉阻ニ於關西親王一、而遂不レ得レ通、故今使臣復來、將軍驚ニ恠之一、九月二日大風、十一月廿五日將軍叙ニ從四位下三木左中將一、

北朝後圓融院（諱緒仁後光嚴第一王子）

甲寅　南京文中三年、北朝應安七年、南朝維成親王叙ニ三品一、正月日、後光嚴崩、（壽三十七）冬宗良親王自ニ信州大河原一上ニ南都一、帝遣ニ使大明國一、十二月廿八日、北帝即位、崇光第一宮、依レ爲ニ持明院正統一、可レ有ニ即位一由、評議有レ之、武家執事細川賴之奉ニ贔負一、今上御即位相定、因レ茲崇光院後光嚴院不快、

乙卯南京天授元年、北朝永和元年、二月廿七日、北朝改元、春三月、將軍八幡參宮、三月三日、九州探題今川了俊大內義弘、陣ニ于筑州世振山、菊池肥前守松浦黨以下宮方攻レ之、今川方與山井伊笠原等損命、敵菊池松浦敗走、八月十一日、澁川武藏守源義行卒、（廿八歲將軍家母堂舍弟也）同八月、大宰少貳冬資不忠、今川了俊被レ討畢、十一月、大嘗會、自ニ武家一被レ申ニ沙汰一、（四年以前後圓融即位公家陵廢故延引二條關白左大臣良基作レ記良基與ニ將軍ニ相睦故相ニ談公家事一）

丙辰南京天授二年、北朝永和二年、春正月、絕海歸、正月八日、滿詮（將軍家舍弟）敍ニ從五位下一、南京北畠顯雄任ニ內大臣一、三月十一日山名師義卒、（五十二歲）三月十一日南方後村上院九年忌御法事於ニ如意輪寺一有ニ大法會一、導師日野大僧正賴意也、宗良親王詠ニ和歌一送ニ賴意一、

幾春カ散テミスランツラカリシ花モ昔ノ別レナカラニ　宗良親王

返

シタヘトモ見シ世ノ春ハウツリ來テアタナル花ニ殘ル面影　賴意僧正

四ツノ時九カヘリニ成リニケリ昨日ノ夢ト驚カヌマニ　南帝御製

南方源守親平經泰任ニ大納言一、同日源顯泰任ニ權中納言一、爲ニ伊勢國司一、

丁巳南朝天授三年、北朝永和三年、三月廿八日、諸國山悉崩、不思儀事共也、七月七日、南方御遊有、宗良親王獻ニ千首和歌一、世泰親王薨、（故院第四王子母從二位教子）葬ニ如意輪寺傍一、興良親王宗良親王子也、

年久令レ伏ニ重病一、以ニ和歌一首一寄ニ父親王一云、其後薨云々、於ニ信州大河原一、

イカニ猶ナミタヲソヘテ分侘ヌ親ニ先立道芝ノ露　宗良親王

返

吾コソハ荒キ風ヲモ防シニ獨ヤ苦ノ露ハラハマシ　南帝御製

朝鮮國使鄭夢周來聘、到ニ筑紫一謁ニ探題今川了俊一而歸國、冬南方將軍宮宗良親王信州下向、於ニ長谷寺一出家、詠ニ和歌一獻ニ南帝一、

君ニナト吾ヲ初瀨ノ鐘ノ音カク成トタニシラセサリケン　南帝御製被下

其後

忘ルナヨ木曾ノ麻キヌヤフルトモ馴シ吉野ノ花染ノ袖

戊午南京天授四年、北朝永和四年、春三月、將軍移ニ徙花亭一、號ニ室町殿一、其館內多種ニ名花一、故時人稱ニ花御所一、三月廿四日、將軍任ニ權大納言一、秋八月廿七日、將軍兼ニ右大將一、十月南方官軍大和紀伊兩國蜂起、南帝命ニ唐橋肥後守經泰一被レ催レ兵、十二月十五日、將軍陣ニ于東寺一、以ニ細川賴之同顯元山名赤松等一被レ攻ニ八幡山一、同十八日落城、南軍敗軍、楠中務大輔尙籠ニ千葉屋一集ニ敗軍一、和田和泉守籠ニ土丸城一、合戰、同月下旬、南軍力盡落城、細川賴之賜ニ和泉國一、山名修理大夫義理賜ニ紀伊守護一、十二月廿三日、將軍歸府、敍ニ從二位一、南京故顯家息男顯成、任ニ權中納言一、敍ニ從二位一、

己未南京天授五年、北朝康曆元年、正月山名義理氏清紀州至、土丸城湯淺城攻破、春正月十二

日、畠山入道義深卒、號增福寺　三月彗星出、三月十一日、上杉安房守爲二土岐對治一率レ兵上洛、依二府命一也、夏四月三日、上杉伊豫守顯定卒、扇谷殿　六月、將軍右馬寮御監、師嗣北朝爲二關白一、斯波義將爲二管領一、細川頼之阿波國隱居、作レ詩云、

人生五十愧レ無レ功、花木春過夏已中、滿室蒼蠅掃難レ盡、去尋二禪榻一臥二清風一、

十月南都衆徒談大和十市某退治爲二義將一、一色富樫赤松發向、又京動鬪間、京勢召返、土岐大膳大夫路次沒落、遣二御教書一欲レ討、十一月六日、河野通直幷兩國寺竹林院殿、於二豫州一爲二細川頼之一生害、十二月十五日、春日神木歸坐、同月土岐献レ使赦免請、佐々木路塞不レ通、土岐赦佐々木欲レ誅、後兩人共赦、

庚申　南京天授六年、北朝康暦二年、春正月五日、將軍叙二從一位一、二月廿三日、春日神木歸座、四月十六日、伊豫河野通直子龜王丸赦免、賜二父遺跡一、五月十六日、關東總州裳原小山義政、與二宇都宮基綱一合戰、基綱討死、因レ茲翌年氏滿進發、被レ攻二小山一云々、十一月十五日、大內弘世卒、周防長門石見主　男義弘立、信州宮方皆背、香坂高宗唯獨殘、將軍宮宗良親王沒落上洛、河內山田居住、九月十三日夜、關白左大臣詠二和歌一送云、

冬實公

面カケモミシニハイカニカハルランヲナハステナラヌ山ノ端ノ月

返　宗良親王

身ノ行ヘナクサメカテシ心ニハヲハステ山ノ月モウカリキ

南方土御門右大臣顯信薨、守親辭二大納言一行脚僧、以二二首和歌一詠、南朝內裏門書ノ飯、其歌云、

世ニ出ハ光ソフヘキ月影ノマタ山深キ雲ノ上カナ

是ソ此ノ木ノ丸トノト思ヘトモ名ノラテ行ハ知人モナシ

五月大內新介其弟三郎於二勢州一合戰、討者二百餘人、七月、氏清南軍破、民部大輔等十人首獻レ京、

辛酉　南京弘和元年、北朝永德元年、氏滿以二梶原道景請一、小山對治、三月八日、重而伊豫國賜二河野龜王丸一之由、細川頼之下二御教書一、七月廿三日、將軍任二內大臣一參內、同廿四日被レ行二大饗一、重任二左大將一、小山義政背二氏滿命一、爲二退治一自二鎌倉一遣二十二ヶ國兵一、攻二小山城一、氏滿至二武州府中一陣二于高安寺一、上杉安房守爲二大將一、同九月十九日、小山義政戰屈而降參、出家法名永賢、上杉安房守對面、雖レ然不レ參二氏滿陣所一、十二月三日、南京入道親王宗良親王、奏二新葉集一、南朝三代自二元弘元年一至二弘和元年一諸王大臣卿上雲閣男女諸臣和歌載レ之

壬戌　南京弘和二年、北京永德二年、正月春日社炎上、正月廿一日、六角堂內阿彌陀堂幷太子堂炎上、正月廿六日、將軍任二左大臣一、閏正月廿四日、南軍峰起、楠木籠二和泉土丸城一、山名修理大夫義理爲二大將一、合戰、山名右馬助氏頼爲二楠木一被二打取一畢、終土丸藤代兩城被二攻落一、楠一族六人、郎徒百四十人討死而敗軍、山名氏清守二土丸城一、義理守二藤代城一、四月十三日、關東小山義政爲二氏滿一被レ誅、五月一日、氏滿至二鎌倉一飯陣、入二大御堂一、同十二月廿日入二鎌倉館一、北京

通行假名本南方記傳四トアリ

二條良基再爲ニ關白一、今年六十三歳也、故思ニ舊事一詠ニ和歌一云、
イニシヘノ跡ニヲヨハヌ身ナレドモ老ノ數ニソ替ラサリケレ
京執事斯波義將、任ニ左兵衞督一叙ニ從四位下一、
帝遣ニ歸庭用（ママ）於大明國一、此年相國寺建立、
後小松院（北朝人皇百一代諱幹仁藤嚴子內大臣公忠女也）後圓融院太子母通陽門院、
癸亥南朝弘和三年、北朝永德三年、（北朝後小松院元年南朝後龜山院十四年當異朝大明大祖洪武十六年）春足利將軍義滿爲ニ氏長者一、正月
蹈歌節會、義滿爲ニ內辨一、六月、淮三后宣下、七月廿九日、義滿創ニ相國寺一、同月南朝守永親王出
家、同月南方北畠右大臣顯能薨、十二月日北朝藤原爲重卿、奏ニ新後拾遺集一、（北朝二十代集不載南朝臣）
南朝元中元年、（甲子）北朝至德元年、二月廿日、細川賴春三十三會忌、桂岩賴元兩人追善、春二月
北朝改元、卯月廿八日、南朝改元、春帝遣ニ使僧如瑤於大明一、夏五月廿八日、男山神輿入洛、秋
八月廿八日、男山神輿御歸座、冬十一月、北朝上皇、攝政良基已下二十餘官、相共於ニ仙洞一
有レ賀、義滿上レ序、
南朝元中二年、（乙丑）北朝至德二年、八月義滿下ニ向于南都一、二月十五日、（御子左）中納言爲重爲レ敵
被レ害云云、三月三日、大雪降八尺、甲州鹽山南帝爲ニ勅願寺一、亦南方軍兵多以渡ニ高麗國一、催レ
兵云云、冬十二月廿日、相國寺佛殿成ニ供養一、南朝五百番歌合　右大臣長親催レ之、（上杉弁大石和田）
南朝元中三年、（丙寅）北朝至德三年、春二月十三日、北京足利義持生、（母日野時光女實安藝法眼女）夏六月一日二
日、南都臨時祭禮、於ニ金堂一有レ舞、同月廿六日、關東宮方小山若犬丸蜂起、於ニ下總古河縣一合

戰、宮方敗軍、鎌倉方野田某討死、秋七月十二日、南禪寺位居ニ五山之上一、以ニ義堂和尙一住持、
南朝元中四年、（丁卯）北朝嘉慶元年春正月三日、北帝元服、（十一歳）二月七日、兼嗣爲ニ北朝攝政一、春疫
災、南朝春宮大夫師兼爲ニ勅使一下ニ向九州一、冬十二月廿五日、美濃國土岐賴康卒、男康行爲ニ美
濃尾張伊勢守護一、
南朝元中五年、（戊辰）北朝嘉慶二年、春將軍義滿詣ニ高野一、遊ニ紀州一、宿ニ岡城一、詠ニ和歌一、是紀州南方
軍兵多、若此時有ニ蜂起一、自可ニ征伐一云云、楠正秀等少少河州出張、爲ニ山名氏清一、被ニ追罰一、敗、
五月大雪降、同月廿六日、將軍辭ニ左大臣一、六月十三日、師嗣更爲ニ北朝關白一、秋七月、關東宮方
小田以下逆臣、籠ニ野州男體城一、秋將軍下ニ向駿州今川館一、詠ニ富士山一、有ニ和歌會一、秋八月、管領
斯波義將有レ故逐電、同月將軍上洛、島田滿貞爲ニ兄土岐康行代官一、在レ京、欲レ亡ニ康行一、造意
企、（伊豫守滿貞望ニ惣領一、先謀諾下從兄弟宮內少輔詮直有ニ逆意一旨上詮直康行婿也必兄婿詮直一味對滿貞一可ニ合戰一其時可レ申ニ沈同罪一由密思企謀ニ詮直一詮直蒙ニ勸氣一滿貞爲ニ備州守護一下向詮直於ニ黑白口一合戰康行同發レ兵欲レ討ニ滿貞一
將軍命ニ土岐賴益一征ニ康行一）
南朝元中六年、（己巳）北朝康應元年、春二月二日、北朝改元、春二月美濃國土岐康行爲ニ退治一、軍兵
發向、康行逐電、土岐左京大夫賴益爲ニ美濃守護一、斯波義重給ニ尾張遠江一、一色詮範給ニ伊勢一、三
月四日將軍發向、爲ニ鎭西宮（泰成親王）并菊池肥前守武政等退治一、可ニ九州下向一、上杉彈正少弼朝房、
留ニ守京城一、山名義理兄弟畠山基國征ニ南方和田楠一、一色詮範仁木滿長長野二郎征ニ伊勢國司一、
右大將顯泰　亦鎌倉勢美濃亂逆驚三月十日上杉入道合、三月十日三島迄出張、聞ニ康行沒落一、三島帶
留、亦此動亂時、關東氏滿、將軍不和、氏滿於ニ東國一威勢、（十一ヶ國隨之）京將軍政道疎、而諸人困窮、

氏滿退治將軍一治天下、欲施善政諸人之由思立、已企上洛、（先之將軍賜書上杉憲春云云）上杉憲春頻雖諫、氏滿無承引、因之憲春自害、氏滿歎息留上洛、三月十八日、防州靈戸關河野六郎通之奉參向將軍、山名時義但州在國、背將軍下知云云、此時已欲被誅不果、五月五日、山名時義依病卒、（于時但馬國城崎住）細州賴久賴元武田小笠原宇都宮等、先發伊豫國退治、土居得能金谷武市村上等合戰、河野刑部大輔通直吉岡城討死、打勝而赴備中水島、夏四月、菊池肥前守出戰長門國、菊池敗、秋九月菊池降落、細川常久留備州、司九國成敗、十日將軍歸洛、亦關東宮方爲退治、鎌倉方大將上杉中務入道禪助、五月十八日、野州男體城攻落、七月七日、至八月末大雨、是後南方威勢衰、近國河內國和田楠橋本福塚宇佐美神宮寺八尾等纔殘、紀州湯淺山本恩地贊川貴志野上等相殘、大和國三輪眞木宇野酒邊佐和秋山等相殘、伊勢國司猶威有、伊勢數郡大和宇陁郡伊賀名張郡志摩二郡士卒關一黨、又鳥屋尾水谷矢野垂水田上榊原佐和以下相從之云云、

南朝元中七年、庚午北朝明德元年、春兵革、山名畠山與和田楠一於河內落一合戰、楠敗、土岐康行被赦免、但馬國山名時義孫伊豫守時長宮內少輔時熙右馬頭氏幸猶背將軍一由風聞、義滿將軍命山名氏清同滿幸一欲退治、三月二十六日、北朝改元、氏清滿幸征但州、又細川常久退治備中國、時長討死、時熙氏幸逐電、上京都、十一月十一日、熊野遷宮、

南朝元中八年、辛未北朝明德二年、春天下大飢饉、義滿將軍下向南都、夏六月、細川常久自西國上洛、再爲京都管領、秋九月、山名時熙同氏幸在清水寺、謝無罪、同晦日三聖寺炎上、冬

十月、山名氏清請將軍一曰、宇治紅葉得盛、於別業欲奉一献云云、將軍定十一日刻限、已出馬、此日時熙氏幸等欲赦免、又與氏清令和睦云云、同十日、滿幸先到宇治、告義滿將軍內意氏清、氏清時熙無罪爲氏清等國除、兄弟皆被誅事於申披、却而爲彼被罪、恐懼稱病不參、十一日將軍至宇治、氏清不參、故空飯座大怒、同十六日地震、十一月、停滿幸出雲守護職、（罪押領仙洞御領也）滿幸勸氏清企謀反、（滿幸者氏清姪而又壻也）將軍赦時熙氏幸、同十日、因幡堂炎上、山名催一家參南朝、欲攻京都、（南帝命刑部少輔顯連賜錦御旗）將軍諭氏清、氏清僞謝罪獻告文、十二月十九日、丹後國古山滿藤代官、告滿幸謀反由、又河內畠山方遊佐河內守國教、告氏清謀反、同廿三日、山名氏冬去洛、同廿四日、義滿將軍諭山名義理、不從、氏清催黨陣于八幡山、廿四日、義滿將軍召細川常久弟賴元畠山基國男滿家今川泰範一色詮範斯波義重大內義弘佐々木京極高詮赤松義則等、同廿六日、將軍入御一色詮範亭、同廿九日、氏清陣淀、滿幸陣谷堂、同卯刻、氏清先鋒山名上總介高茂（高義）小林重長、進到二條大宮、大內義弘力戰、擊小林等百餘軍、修理亮首、（富永左近將監討）高茂懸入大宮陣、爲（某）礪波被討畢、滿幸競來於內野口、細川常久畠山基國佐々木高詮等擊破之、滿幸敗走、氏清氏冬等自亂入京師、與大內義弘赤松義則山名時熙氏幸等大戰、氏清乘勝、打取赤松滿則及富樫介詮親富田等、於是將軍進旗、使一色詮範斯波義重爲先鋒、氏清奮擊遂敗、詮範徒高島斬氏清、一色滿範得其首、氏清猶子小次郎熙氏（十六歲）并山口彈正等同所被誅、則首實檢有、所謂奥州首、（高島源太打之）菊池治部少輔首（篠原左兵衞討之）相野左馬亮首、（猪俣平六討取之）小林首、（礪波□瀨助捕之）氏野越前守首、（日比野三郎打之）瀨尾

太郎首、野田右馬允打レ之足羽平治首、高田五郎逸水源太相ニ討之一、片岡源五首、市田討ニ捕之一右此時首數百餘輩雖レ有レ之、其中首八以ニ實撿一、大將首員外也、何首札附、名字書、氏清首母衣纏杉木掛、實撿役人細川右馬頭頼有、唯輪計四綴大刀帶氏清子時清滿氏自ニ戰場一敗走、不レ知ニ行方一、

南朝元中九年、壬申北朝明德三年、春正月四日、義滿將軍山名舊領加ニ賜群士一、授ニ山城國于畠山基國、丹波國于細川頼元、丹後國于一色滿範、美作于赤松義則、和泉國紀伊國于大内義弘、出雲隱岐佐々木高詮、高範トモ但馬于山名時熙、伯耆國于山名氏幸一、又賜ニ若狹國今富庄于一色詮範等一、滿幸徒上鄕三河入道通清於ニ出雲國一降ニ參于高詮一、鹽冶駿河守滿清於ニ富田城一自害、氏清謀反、於ニ關東一有ニ其聞一、氏滿京都爲ニ合力一、正月四日出張佐々木近江入道宿所去年十二月晦日被レ討由、同七日、飛脚到來、山ニ之飯座、亦出羽奥州兩國司賜ニ氏滿一云云、二月十三日、遣ニ大内義弘等一、赴ニ紀州一、攻ニ山名義理一、先陷ニ泉州雨山城一、丸城一、同十八日、滿幸遁世、同廿五日、義理去ニ藤代城一走ニ由良一、同廿六日山名氏冬降參、同廿八日、義理父子出家、義理五十六才法名宗弘子息二人同氏親法名常勝時理號ニ義清一赴ニ伊勢一、三月二日、細川武州入道常久卒、六十四歲謚ニ永泰院桂岩其徒三島入道常頼墓病死一殉死細川頼元、京都爲ニ將軍一、始ニ萬部經于内野一、吊ニ戰死士卒一也六月七日、南帝命ニ刑部少輔顯連一、以ニ紀州南有本庄一附ニ紀伊國造一、氏清殘黨多籠ニ于千劔破城一、畠山入道合戰、南軍敗走、十月三日、南禪寺湯屋小門炎上、十月大内介義弘運レ謀調ニ和睦之議一、義弘父祖皆以宮方忠臣也故連連奉レ附ニ南朝冷泉相國入道殿吉田從一位宗房卿一使下南北兩朝請レ和如ニ先代一持明院殿與ニ天覺寺殿一相代可レ爲ニ御治世一先有ニ御合體一以ニ三種神器一被レ渡ニ北朝一而南朝太子可レ立ニ春宮一云云此和儀先年雖レ有レ之南帝君臣不レ聽而今已南軍衰微無レ力故有ニ合體一十月十五日南北御合體云云閏十月二日、南帝及太子上洛、入ニ御于大覺寺殿一、又嵯峨殿諸臣供奉、同三日、三種神器入内、南帝尊號太政天皇、太子寛成親王立ニ東宮一、吉野

領知レ舊、吉野十津川南帝新院御出家、法諱剛以金伊勢國司北畠顯泰所領等如レ舊安堵、大和宇陀郡伊賀名張郡伊勢數郡志摩英虞郡也元中九年十一月國司顯泰命ニ中務兼顯諸郡士卒一給ニ案報領地一如ニ元弘以來一勅宣并兩御代勅宣一可ニ領知一云云但此時一族俊通卿奉ニ北帝一又關一黨奉ニ將軍一云云十一月晦日、崇光院御出家、五十九歲法諱勝圓心十二月、將軍義滿還ニ任左大臣一、朝鮮使者來請レ修ニ隣好一、將軍許レ之、

明德四癸酉年後小松院治世十一年天下一統也春、斯波義將爲ニ再管領一、夏四月廿六日後圓融院崩、三十六歲葬ニ六七兩月大旱飢饉秋七月廿四日、相國寺大塔柱立、同廿九日鎌倉若宮鳥居立、京將軍御願八月十七日、義滿將軍辭ニ左大臣一、九月廿一日、將軍參ニ宮于伊勢太神宮一、于レ時三十六歲、北畠親能叙爵、義滿賜ニ滿一字一、改ニ滿泰一、顯泰卿男俊泰叙爵、顯泰猶子顯俊二男九イ八月廿二日、南禪寺炎上、冬飢饉、

應永元年甲戌春三月十二日將軍義滿公下ニ向南都一、夏六月十一日、天龍寺風呂總門炎上、六月十三日義敎生、九月十一日、義滿公日吉參詣、十四日還座、同廿四日夜、相國寺炎上、冬十月廿四日、關東管領上杉憲方卒、六十歲法名道合上杉朝宗爲ニ關東管領一、中務入道禪助是也十一月六日、藤原經嗣爲ニ關白一、成恩寺殿十二月十七日、源義持元服、九歲將軍長男則叙爵正五位下一、任ニ左中將一、爲ニ征夷大將軍一、

應永二乙亥年春正月十日、關東新田方餘類、小山若犬丸敗軍、三月十日、山名播磨守滿幸於ニ五條坊門高倉一被レ誅、至ニ古河縣一、敵出張合戰、小山若犬丸蜂起、爲ニ退治一、鎌倉殿氏滿、二月廿八日、于レ時出家明德亂張本關東奥州田村庄司蜂起、氏滿進發、六月朔日、白川下着合戰、田村敗亡、同十九日自ニ白川一、飯座、六月廿日、義滿公落髮、三十八歲法名道義初號ニ道有一准三后號ニ北山殿一秋、道義公擒ニ倭賊一、遣ニ大明一、應永三年丙子春、大友修理大夫依ニ宿意一、誅ニ義弘右馬頭一、義滿公召ニ大友一、則上洛、蒙ニ勘發一、籠居、命ニ小笠原長秀今川範忠伊勢貞行等一、定ニ武家禮式一、九月日義持任ニ參議一、九月十九日、比叡山大講堂供

養、又義滿給ニ諱字於攝家以下諸臣一稱ニ烏帽子一、

應永四年、丁丑春、正月五日、義持叙ニ從三位一、正月廿四日、小山若犬丸子二人、五才七才會津葦名左京大夫直盛令ニ生捕一、進ニ上於鎌倉一、被ニ入海一云云、三月廿九日、義持任ニ權中納言一、夏四月、相國創ニ北山第一、秋大宰小貳入道宗間菊池肥前守蜂起、千葉大村加勢、大內義弘幷舍弟伊豫守弘勝同六郎成見等發向悉擊レ之、伊豫守討死畢、冬十一月十八日、建仁寺燒失、大友修理大夫蒙ニ免許一下向、

應永五年戊寅春、正月五日、義持叙ニ正三位一、正月十三日崇光院崩、壽六十五歲春北野萬部經始行、三月九日、藤原師嗣爲ニ關白一、再任三月師嗣公男道忠、賜ニ義滿諱字一、改ニ滿基一、三月九日東大寺塔事始、夏四月廿七日、東大寺塔柱立、五月八日、畠山基國爲ニ管領一、法名得元此年義滿公定ニ武家三職七頭一、淮ニ朝廷五攝家七清花一、所レ謂三職斯波細川畠山號ニ三管領一、執事別當也七頭山名一色土岐赤松京極上杉伊勢等也、其中山名一色赤松京極爲ニ京都奉行一、侍所別當號ニ四職一、奏者伊勢守貞行也、亦武田小笠原兩人弓馬禮式奉行、亦兩吉良今川澁河等爲ニ武頭一、秋八月、朝鮮使朴敦來、冬十一月四日、鎌倉左兵衛督從三位氏滿卒、四十二歲號ニ永安寺一、男滿兼立任ニ左馬頭一、廿一歲初號ニ氏兼一、京都一字改ニ滿兼一、

應永六年、己卯春、三月十一日、興福寺金堂供養、職衆三百人、夏四月十九日、藤原經嗣爲ニ關白一、再任秋七月七日、關東滿兼謀反由、雖レ有ニ其聞一、不ニ實說一、平、九月客星出ニ南方一、九月十五日、相國寺七重塔供養、高サ三百六十尺、冬十月十三日、大內左京大夫義弘和泉堺着、以ニ平井新左衞門一啓ニ案內一、十一月廿一日、關東滿兼武州府中發向、麻高安寺一亦進ニ發足利庄一、大內義弘於レ堺有ニ野心聞一、以ニ伊豫法眼一、青蓮院坊官雖レ召、稱レ有ニ子細一不レ參、和泉紀伊筑紫中國ノ勢、充ニ滿堺城一、南方兵楠正秀卒ニ一百餘騎一加ニ勢大內一、亦菊池肥前守兼朝同爲ニ合力一、着津、土岐宮內少輔池田周防守山名滿氏氏清二男來一味、義滿公以遣ニ絕海和尙一、雖レ被レ宥大內不レ從、十一月八日、前將軍卒ニ諸軍一、到ニ東寺一、同十四日進ニ陣于八幡一、畠山基國斯波義將細川頼元山名右衞門佐入道兄弟京極治部少輔赤松上總介吉良石堂武田小笠原富樫河野伊勢國司勢、其兵三萬餘騎發ニ向泉州一、義弘搆レ城築ニ矢倉井樓一、以防レ之、十一月廿九日、諸軍攻ニ堺城一、自ニ卯時一至ニ夜半一、力戰、兩軍盡レ力退、北畠源左少將滿泰討死、土岐宮內少輔詮直池田周防守秋政等與ニ力大內一、自ニ尾州一、至ニ濃州一、使ニ土岐美濃守賴益攻レ之、詮直敗軍、楯ニ籠長森城一、十二月七日、矢田庄合戰、富永五郎左衞門資良同彈正四郎資貞、山名合戰、富永佃二郎左衞門ヲ打、十二月同日山名滿氏藤野源郎號川端勝間田遠江守等爲ニ滿氏一戰死、京極五郎左衞門秀滿同義濃發向、三井寺衆徒防レ之敗軍、不レ知ニ行方一、同十二月廿四日、四方放火攻入、大內義弘力戰、揮ニ長刀一馳ニ入基國陣一、與ニ尾張守滿家一相擊、義弘遂死、大內郎徒森民部丞杉備中守戰死、滿家得ニ其首一、子息新助持盛降參、楠敗走、及ニ曉天一、矢櫓勢樓火移、堺一萬間、一字不レ殘燒畢、菊池肥前守敗北走ニ九州一、其時畠山基國領ニ河內紀伊一、賜ニ細川攝津和泉一、

應永七年、庚辰春正月、將軍叙ニ從二位一、二月廿八日、伊勢外宮遷宮、關東滿兼自ニ足利庄一、三月五日遷ニ座于鎌倉一、京都可レ有ニ和融一云云、依ニ上杉禪助頻取申一而也、九月八日、斯波左京太夫持

詮法名法英、於奥州追討宇都宮廣子公（本マヽ）島等首、鎌倉進上於侍所實檢、
應永八年辛巳二月廿八日、大内炎上、帝遷幸准后第、春創北野經堂、春有送地藏、春大雪、春
北山殿贈黄金於大明帝、三月將軍任權大納言、三月廿九日實仁親王生、稱光院是也　夏五月日吉社
八講、秋七月、洪水又玉落大鳴、
應永九年壬午春正月日、源義持叙正二位、二月、大明建文帝書來、贈日本國王源道義云云、夏
大旱、關東滿兼弟滿貞爲奥州管領、下向于篠川城（號篠川御所）奥州住人伊達大膳大夫政宗入道、
對篠川殿入止逆意、爲退治自鎌倉上杉右衞門佐氏憲進發、五月廿一日、於奥州赤館
館合戰、上杉敗軍、重而自鎌倉軍勢發向合戰、伊達敗軍、九月五日政宗降參、此時政宗題山家雪和歌一首詠送云々中々ニツヽラナリ成ラエテ雪ニトナリノ近キ山里　九月大明使僧來、冬地震、十月北畠顯泰薨、男滿雅任伊勢國司、十
一月將軍叙從一位、
應永十癸未年春二月、天倫一菴歸于大明、又義滿公遣使於大明、三月將軍參詣于石清水、夏四
月廿五日、新田義隆（隆歟）義治男相州箱根山中木賀彦六在所隱居由有其告、滿兼命安東一集人於底
倉温湯討之、六月廿三日相國寺塔雷火、秋七月澁川左近將監滿頼爲九州探題、管領勘解由小路殿聟也依之
了俊替被捕　琉球國舟六浦流來、船中有音樂聲云云、
慶永十一甲申年春正月廿一日、下野那須地欲燒出、春義滿公遣使大明、三月十七日北畠俊泰
兼土佐守、去年八月廿四日正四位下左中將任參議云云俊泰國司顯俊二男顯泰養子也實子滿雅悔南帝東宮即位遲遲常奉恨室町殿俊泰無京都奉公故依室町殿吹擧昇進　夏五月大明使者
來、秋七月山名持豐生、時熙男也、

應永十二年乙酉春、正月六日、北畠俊泰叙從三位、四月廿六日聽帶劒、五月廿二日、春日神木
六千餘本枯、六月九日洪水、六月日祇園社鳥居倒、斯波義重京爲管領、上杉安房守憲定爲關
東管領、
應永十三年丙戌正月十三日、畠山金吾基國卒、五十五歳、號長禪寺、法名德元、春天下飢饉、夏大
明王遣於使日本、道義稱日本國王、贈帝王冠服於道義、南軍笑云日本雖小國皇統相繼獨立而爲天下皇帝人皇百餘代爲夷國不受王號而
今源義滿代爲武臣如斯似彰日本恥辱於異朝者乎　八月五日洪水大風、拱比樓吹倒、八月十七日將軍兼右大將、九月十二
日夜、清水寺塔炎上、十一月朔日大地震、
應永十四年丁亥正月五日大地震、二月日義量生、義持一男母一品資康女　夏六月辰刻空晴雷一鳴、閏六月廿七日
霰降、此年大旱魃、秋八月廿四日大風吹大飢饉、同廿九日京室町殿將軍亭
燒亡、十二月十四日大潮入大地震、此比洛中連歌庶民好、就中故二條殿尤名譽、其外祇公法
師周阿法師眞鍋新左衞門佐渡守護天下顯其名、亦嵯峨小倉殿南帝君臣共連歌名譽有、
應永十五年戊子春二月六日、蛾蟆多鬪將軍第、三月四日、義嗣叙爵、十五歳、同弟義圓入室青
蓮院、三月八日帝行幸北山准后第、將軍家不供奉義嗣供奉　同廿四日義嗣任左馬頭、同廿九日義嗣任左
中將、夏四月廿日、藤原忠嗣爲關白、近衞殿後普賢寺　同廿五日義嗣敍從三位任參議、五月六日前
將軍道義公薨、五十一歳、謚號鹿苑院天山、同九日帝贈大政天皇尊號、將軍再三辭之、日本
法王號贈臣下例有云々、無歟
應永十六年己丑春三月朝鮮使來、斯波義重爲管領、夏四月八日未刻霰降、六月將軍家參宮伊勢、

青木以下至召上三十四字假名本無

七月廿三日將軍任ニ内大臣ニ、大將如元　關東鎌倉滿兼亭六月廿九日回祿、滿兼入ニ宍戸遠江守宿所ニ、七月十三日鎌倉御所新造始、奉行上杉右衞門佐也、八月廿七日上棟、十月四日京將軍移ニ三條坊門殿ニ、十二月十八日鎌倉移徒、

應永十七年庚寅春正月廿七日大地震、二月廿七日天龍寺定ニ五山第一ニ、三月鹿入ニ大内ニ、春吉野藏王堂供養、夏四月義持將軍高野參詣、六月五日畠山滿家爲ニ管領ニ、去二月十九日依義重上表也秋七月廿二日、關東鎌倉滿兼薨、廿三歲謚號稱光院ニ男幸王丸立、上杉氏憲爲ニ管領ニ、同日義宗男新田貞方、爲ニ侍所千葉介ニ於ニ七里濱ニ被レ誅、依ニ滿兼薨ニ、上杉朝宗法名禪助、自ニ殿中ニ直上總國長柄山下向遁世、八月朔日大水大風、堂塔破崩者多、八月十五日鎌倉幸王丸上杉長基山内御出、滿隆隱謀說有故也、九月三日還座、冬十二月廿一日藤原經嗣更爲ニ關白ニ、三任給、青木武藏守時通近江國佐々木滿高、幷滿經背レ命飛州不レ向、國師一味、故守護職召上、

應永十八年辛卯春飢饉、夏興福寺五重塔金堂大湯屋新御願塔二基雷火、又大明成祖皇帝贈ニ書於義持ニ弔ニ慰之ニ、且作ニ祭文ニ謚ニ恭獻王ニ、秋七月廿八日、南方飛驛國司宰相尹鑑尹綱姉小路背ニ將軍命ニ、使ニ京極加賀守高數攻ニ落飛州ニ、向井小島兩城封ニ尹綱ニ、九月九日大明使歸、十一月廿五日、義嗣任ニ權大納言ニ、十二月廿二日、鎌倉幸王丸元服號ニ持氏ニ、

應永十九年壬辰春五月廿九日將軍辭ニ大將ニ、去七日賜ニ兵仗ニ、同廿九日院執事、冬十月廿二日氏長者奘學淳和兩院別當、十一月廿八日躬仁親王御元服、御年十二歲冬十二月十八日關東管領上杉憲定卒、治世二十年中不レ用ニ干戈ニ云云人惜行年廿八歲法名大全長基　男憲基立、十二月廿七日鎌倉滿高移ニ新御堂御所ニ、

稱光院　人皇百二代諱實仁後小松院王子母光範門院藤葉子儀同三司資教女實贈左大臣資國女

應永二十年癸巳春、一色滿範爲ニ伊勢守護ニ、秋七月三日、關東大風由井濱鳥居笠木吹落、八月廿九日、躬仁親王受禪、改諱實仁此即位時伏見殿御望有南帝太子即位望有レ之三人相雙御相論有レ之雖レ然武家此帝奉ニ眞冥ニ終有ニ踐祚ニ此時伊勢國司并大和紀州河内奥州宮方悉一同訴及返逆冬十二月、奥州宮方伊達松犬丸懸田幡磨守籠ニ大佛城ニ、持氏命ニ畠山修理大夫國詮ニ二本松攻落レ之

應永二十一年甲午春三月六日、鎌倉由井濱大鳥居立、八月廿五日、上杉禪助於ニ上總國ニ卒、秋九月伊勢國司北畠滿雅、就ニ御即位事ニ而謀反、關左馬助屬焉、關一黨關神戸峯國府鹿伏兔等也并大和伊賀伊勢志摩軍兵悉馳集、此中北畠俊康卿獨屬ニ京都ニ、冬十二月十九日帝即位、十四歲同廿八日建長寺燒亡、正統庵計殘云云、

應永二十二年乙未春、伊勢國司發亂先、北畠俊康卿依レ屬ニ京都ニ、取ニ其城坂内ニ、俊康在ニ京都油小路館ニ、國司滿雅使ニ兵守ニ木造阿射賀多氣大河内坂内玉丸等諸城ニ、弟少將雅俊守ニ木造城ニ、顯雅守ニ大河内城ニ、國司守ニ阿射賀城ニ云云、并北伊勢關神戸峰國府鹿伏兔等、各守ニ拜野城ニ云云、將軍義持、使土岐左京大夫持益爲ニ大將ニ、并北畠中納言俊康卿世保大膳大夫康政仁木右馬頭滿長及長野雲林院等征ニ勢州ニ、土岐持益攻ニ落拜野城ニ、亦攻ニ落木造城ニ、雅俊去ニ木造ニ守ニ坂内城ニ、俊康卿入ニ木造ニ守レ之、夏四月諸軍攻ニ伊勢國司ニ、圍ニ阿射賀城ニ、城堅固而不レ落、國司先使ニ垂水鳥尾鳥方穩朴木等陣ニ于岩田川及雲出川ニ防焉垂水藤方今德樹原八田天花寺曾原船江波瀨岩内大定玉丸等守レ城而備之又此城高山而難レ登時時出不意夜襲敵北有ニ天花寺城ニ東有ニ兩出城ニ南有ニ地獄谷ニ數多死大將軍相計四方斷ニ水渡ニ欲レ渴レ水城既水乏故國司運ニ策立ニ馬于櫓前ニ以ニ柄杓ニ汲ニ百米ニ如レ洗レ馬而欺レ之外兵退屈而止ニ斷水ニ是後俗名ニ此城ニ稱ニ百米城ニ四月五日、關東管領上杉氏憲於ニ許定座ニ依レ有レ扶ニ持家人ニ、常陸住人越幡六郎背ニ持氏命ニ、同廿六日止ニ出仕ニ、上杉安房守憲基爲ニ管領ニ、氏憲入道法名禪秀恨レ之、催ニ

一味族、悅ニ京都南軍動亂時、欲レ起ニ謀反ニ云云、夏六月十三日、日吉神輿入洛、天寒如レ冬、大風雨、七月中、關東兵集ニ鎌倉、同廿日皆可レ被ニ下向ニ旨持氏下知、秋八月將軍南都參詣、南軍和融爲レ宥、九月將軍皈洛、南帝太子重而可レ有ニ即位ニ之由被レ宥依レ之水軍開陣ニ冬十一月廿九日大嘗會、

應永二十三年丙申春、正月九日夜、北山大塔雷火、正月伊豆三島地俄荷葉生、先例兵亂兆、六月一日仙洞炎上、七月中旬以後、關東八州兵集ニ于鎌倉ニ頻成レ群、八月二日伊豆大島燒出、其聲如レ雷、九月將軍春日參詣、冬十月晦日權大納言義嗣依ニ謀反ニ押籠、龍光院光此日出家、法名道繩、義嗣將軍弟也父義滿公深愛ニ義嗣ニ闔ニ義持公ニ欲ニ家督立ニ于時管領義將頻諫ニ義滿公ニ先兄義持公補ニ將軍ニ雖然義滿後令レ隱ニ居義持ニ欲レ立ニ義嗣ニ不幸父公早薨義嗣失ニ本意ニ今關東動亂時密通ニ滿隆禪秀ニ起ニ謀反ニ欲レ傾ニ京都ニ已發覺云云　十二月二日夜戌刻鎌倉持氏伯父號新御堂殿滿高甥持伸弟持氏及犬懸入道禪秀一家謀反、至ニ西御門保書院ニ擧レ旗、同三日酉刻持氏堂辻敵充滿間、回ニ岩殿上山ニ至ニ佐介館ニ上杉憲基宿所同六日由比濱合戰、持氏方大將氏定敗軍、其夜持氏駿州沒洛、於ニ小田原ニ從軍悉討死、箱根山夜明、同七日箱根着、同日入レ夜三島沒洛、忍箱根別當召具、大森落、亦瀨名落、行賴ニ今川範忠ニ上杉彈正少弼氏定、扇谷同八日於ニ藤澤道場ニ自害、四十二歲持氏在、依レ之差ニ國淸寺ニ落集、狩野介禪秀一味故、狩野一類及走湯山衆徒攻ニ國淸寺ニ、持氏一族木戸將監某爲ニ大將ニ防レ之、其日城沒落、各於レ是自害、持伸爲ニ大將ニ上杉伊豫守憲方禪秀一男下向征ニ武州ニ、十二月廿一日、南一揆江戸豐島、幷二階堂下總守等持氏方合戰、十二月廿五日、持伸憲方敗軍皈ニ鎌倉ニ、亦禪秀聟岩松治部大夫持國號ニ新田ニ於ニ上野國ニ催ニ一揆ニ蜂起、同十二月十八日同廿二日及ニ兩度合戰ニ、皆以滿隆方敗軍、皈ニ來鎌倉ニ、

應永二十四丁酉年春正月一日、滿隆持伸禪秀立ニ鎌倉ニ至ニ武州ニ、同五日於ニ世谷原ニ合戰、持伸等打勝、南一揆江戸豐島打負、同九日又合戰、諸人悉背ニ持伸滿隆ニ、禪秀聟岩松治部大夫移多諸人皆背之云云禪秀等敗軍皈ニ鎌倉ニ、亦持氏催ニ今川勢幷大森等軍兵ニ攻ニ鎌倉ニ、同十日於ニ雪下御坊ニ滿高持伸禪秀憲方弟憲春司快尊長尾兵庫助等自害、同十七日持氏鎌倉入ニ淨智寺ニ、同二月六日、武田安藝守信滿於ニ甲州木賊山ニ自害、同三月廿四日入ニ梶原美作守宿所ニ、四月廿八日皈ニ座鎌倉ニ、四月廿八日憲基辭職、下ニ向伊豆三島ニ、岩松治部大夫岩松下野太郎政綱孫直國子禪秀催ニ殘黨ニ出張、舞木宮內丞及ニ合戰ニ、同五月廿九日生捕進ニ上鎌倉ニ、閏五月十三日、岩松治部大夫於ニ瀧口ニ被レ誅、于時出家法名天用子宗純敗北不レ知ニ行方ニ、後號新田岩松三河守宗純閏五月廿四日憲基皈參、六月晦日管領再任、依ニ京都御下知ニ也十二月朔日義量元服、十一歲叙ニ正五位下ニ任ニ左中將ニ禁色、同十三日昇殿、

戊戌應永二十五年春正月廿四日、權大納言義嗣終以生害、廿五歲號ニ圓修院ニ亦號ニ林光院ニ後贈ニ從一位ニ夏五月十日小河殿薨、權大納言滿詮五十七歲號ニ養德院ニ法名勝山贈ニ左大臣從一位ニ子息大僧正義運延文四年尊氏贈官の時の歌を思出て

位山アトハムカシニカヘレトモ歸ラヌ道ハ今モカナシキ

關東上總本一揆、與ニ禪秀ニ一味、背ニ持氏ニ蜂起、持氏命ニ一色左近將監ニ爲ニ大將ニ、五月廿八日發向、一揆悉敗走、冬十一月十七日一條關白經嗣薨、成恩寺殿十二月一日滿敎爲ニ關白ニ、九條經敎男號ニ後三條院ニ

應永二十六年己亥春義圓爲ニ天台座主ニ、青蓮院正月關東上總一揆亦蜂起、持氏命ニ木戸內匠ニ退治、正月十九日發向、三月攻ニ坂本城ニ降參、夏六月十八日彥仁親王誕生、後花園院是也秋七月十三日呂淵持ニ大明天子書ニ去丁酉發ニ天明ニ八月異國凶徒襲ニ來於對馬浦ニ、兵船五百餘艘爲ニ風波ニ一時漂沒畢、

八月廿九日將軍任二左大臣一、五月廿八日、上州新田岩松治部大夫反、于レ時上州後被奔、上杉兵庫頭誅二于七里濱一、

應永廿七年庚子春正月四日、關東管領憲基卒、二十七歳號崇德院法名心無海印男憲實立爲二管領一、春京都世保持賴爲二伊勢守護一、夏大旱魃、秋九月十日大風、伊勢大神宮破損乎大宮司大中臣長盛訴狀云上葺事自二武家一雖レ有下知于二北畠大納言一七度于二守護方一五度上事不レ成故長盛造二修之一、九月將軍依レ病、近習三十三人代二參于伊勢宮一、亦奏公家呪詛將軍故廣橋兼宣卿裏松義資卿日野有光卿勸修寺時興卿幷此等狐ヲツカツテ公方ヲノロフト風聞スル故也、典藥助俊經陰陽助定棟等被二追籠一、

應永二十八年辛丑正月、持氏任二三位一、使二木戸駿河守賀一之、春大飢饉疫病人多死、夏旱魃、四月四日伊豆大島燒其聲如レ雷、海水如二熱湯一、魚多死、五月五日、於二等持院一、故鹿苑院殿十三回忌法事アリ

中納言雅綠

相生ノカケノ朽木トヲクレ居テ十年アマリナニ殘ルラン

九月持氏命二吉見伊豫守範直一、甲州發向、欲レ退二治武田八郎一、十月廿六日清水寺塔供養、十一月十二日鎌倉圓覺寺炎上、

應永二十九年壬寅春、伊勢外宮假殿遷宮、長盛造修夏四月清水寺供養、五月將軍入二土岐持益宅一而院參、又入二日野一品有光卿亭一、八月十八日畠山入道道端再爲二管領一、七月廿九日道觀上表秋帝行二幸于八幡宮一、九月上皇御二幸于石清水一、冬十月二日兩日出現、長德寺殿催二惡黨一、南方閏十月三日鎌倉於二

比企谷法華堂一、佐竹上總介方合戰、佐竹背二持氏命一、故持氏命二上杉淡路守憲宗一攻レ之、佐竹自害、常陸國住人小栗孫五郎平滿重背二持氏命一、企二野心一、持氏命二上杉三郎重方小山左馬助一追二罰之一、十一月廿一日於二小栗城一合戰、

應永三十年癸卯春三月十八日、源義量爲二征夷大將軍一、十七歳夏四月廿二日誅二長德寺殿一、同廿五日前將軍義持落髮、三十八歳法名道詮五月廿八日鎌倉持氏爲二小栗退治一發向、到二野州結城城一、八月二日小栗城被二責落一畢、滿重幷宇都宮持綱同意沒落、鹽谷駿河守討二取之一、又桃井下野守佐々木入道同意、同月八日被誅、同十六日持氏自二結城一還二座于武州府中一、將軍使二軍兵關東一征二小栗一、至二駿州一、然而被レ誅之間、各歸上、持氏在二府中一、恣振二逆威一、京都不快云云、

應永三十一年甲辰春、迎二佛舍利於仙洞一而供養、三月二日常久入道三十三回忌、嵯峨墓所ニ參リケレハ雪ノ降シ時歌也、

思ハスヨ花ヲ形見ノ嵯峨ノ山雪ニ跡トフ千代ノ古道

右京大夫滿元同三日服西堂將軍爲レ使下向、到二武州府中一、被レ宥二持氏一、夏四月十二日小倉殿崩御、南方法皇諡二後龜山院一、今出川左大臣公冬公以下諸氏悉出家、四月廿日持基爲二關白一、號二後福照院一五月十日服西堂上洛、九月重而下向、條條被レ宥二持氏一、都鄙和睦、冬十月晦日上皇幸二于相國寺一、十一月十四日持氏入二鎌倉一、同廿日奥州稻村殿滿直持氏弟來二鎌倉泰安寺一、同廿七日持氏參會、以二重寶劔一號鐺通一名物也與二滿直一、十二月十三日義量任二參議一、叙二正四位下一、

應永三十二乙巳年春二月一日、一院二宮薨、同四日於二仙洞一、後圓融院三十三回有二法事一、同廿四

通行假名本南方記傳五トアリ

日將軍義量頓薨、十九歲 諡ニ長德院殿ト、法名聲山道基 又公掌ニ政務ト、同廿八日鎌倉殿燒失、秋七月大風洪水、八月十四日相國寺炎上、同十六日持氏命ニ上杉淡路守憲宗ト、爲ニ甲州武田退治ト遣レ兵、九月十日上皇幸ニ泉涌寺ト、十月大風大地震、志摩國伊雜浦有ニ兵起ト、命ニ的屋美作守ト退ニ治之ト、應永三十三年丙午春正月十五日、京都燒亡、自ニ五條至ニ三條ト、同十五日興福寺衆徒破ニ勝院ト、春義持公遣ニ使於大明ト、關東甲州武田右馬助蜂起、持氏命ニ一色刑部少輔ト退ニ治之ト、六月廿六日進發合戰、八月廿五日武田武州一起降參、九月一日着陣、十月六日細川滿元卒、四十九歲諡ニ巖栖院ト、十一月三日相國寺柱立、

應永三十四年丁未春夏洪水數度、六月二日大洪水、信州善光寺燒、同廿八日赤松滿祐燒ニ邦家ト、赴ニ播州ト、籠ニ白幡城ト、滿祐與ニ赤松持貞ト相惡持貞依ニ將軍愛幸ト讒ニ滿祐ト、滿祐者義則子也持貞者貞範孫顯則子也幷滿貞子貞村也 將軍使ニ細川持元山名滿凞ト、欲レ征ニ播州ト、秋八月十四日官聽炎上、九月三日大洪水今年洪水十八度也、冬十月諸大名一揆而訴ニ赤松持貞罪ト、故持貞不レ能レ謝自害、滿祐宥レ罪、十二月十七日赤松滿祐歸洛、

永享五年春三月、九州探題澁川左近將監、與ニ太宰小貳政資不快及ニ合戰ト、同月十二日小貳政資菊池肥前守兼朝、攻ニ落肥前國綾部城ト、探題出走、大內左京大夫政弘、及九國兵攻ニ小貳政資ト、合戰數度、小貳菊池請レ和、

戊申正長元年春正月、將軍重病難治、家督相續評定、或云運枝之中僧令ニ還俗ト可レ爲ニ家督ト云云或云鎌倉持氏最器量當ニ其人ト云云 畠山滿家詣ニ石清水ト、依ニ御闔ト、欲レ立ニ家督ト、由云云、青蓮院殿義圓大僧正將軍同母弟也 當ニ御闔ト云云、同十八日終將軍義持薨、四十三歲 諡勝定院法名顯山道詮、贈太政大臣、同十九日義圓令レ出ニ門主ト、青蓮院 三月十二日還俗、任ニ左馬頭從五位下ト、三十五歲號ニ義宣ト 天下飢饉、四月廿七日改元、五月一日日野入道一品資敎薨、帝外祖也 同廿二日洪水、六月朔日洪水、七月上旬帝御惱急、無ニ繼嗣ト、嵯峨南帝若宮御逐電、御即位有レ之 吉田從一位守房以下供奉、七月廿日帝崩、二十八歲 無ニ繼嗣宮ト、又一院無ニ王子ト、依レ之諸臣評定、仙洞勅云一休可レ有ニ評定ト云云、一休仙洞落胤王子也人以ニ此旨ト問ニ一休ト、一休詠ニ和歌ト奉ニ勅答ト云云 トキハ木ヤ木寺カ木スエツミステヨ世ツクノ竹ノ末ハ伏見ニ仙洞聞ニ此歌ト、則伏見殿御子十歲成玉フチ御養子トシテ入內南方彌恨レ之謀反 廿八日新帝踐祚、同日持基爲ニ攝政ト、自ニ三月ト疾疫、人民多死亡、骸充ニ滿諸國ト、斯波義淳再爲ニ管領ト、十二月南方東宮寬成親王御即位望、故謀反走ニ伊勢ト、或軍兵吉野楯籠催レ兵、伊勢國司北畠屬レ之、

後花園院 人皇百三代諱彥仁崇光曾孫大通院榮仁親王孫後崇光貞成親王御子後小松院養子也

己酉永享元年春三月九日灰砂降、將軍元服、加冠畠山、同十五日義宣任ニ參議ト、爲ニ征夷大將軍ト、諱改ニ義敎ト、同廿九日敘ニ從三位ト、任ニ權大納言ト、秋七月十四日細川右京大夫持元卒、三十三歲號ニ性知院ト、南方兵越知十市久世萬歲等、自ニ吉野ト蜂起、紀州起合戰、畠山持國退ニ治之ト、伊勢國司滿雅發向、仁木持長一色義貫長野雲林院北畠中將持康攻レ之、土岐世保持賴爲ニ大將ト、於ニ岩田ト合戰、國司滿雅打負、則討死、殘兵敗北、世保得ニ其首ト、則上洛、實檢懸ニ四塚ト、南帝及國司子顯雅和睦、南帝還ニ嵯峨ト、出家入ニ萬壽寺ト、帝系者宗廟所レ定、人力不レ及、皆歸正也、昔後深草院者次子而雖ニ兩流相並ト、遂南帝威勢衰、又崇光院者太子後崇光院者次子、而幸雖レ治ニ天下ト、當帝崇光院御子孫歸ニ正嫡ト、是皆天命也、所レ定神明云云、九月五日改元、冬十二月十三日將軍敘ニ從二位ト、同廿日即位、十一歲

庚戌 永享二年春正月晦日、鎌倉淨妙寺炎上、和州河州紀州南軍悉以京降參、亦近衛左大臣殿初離南帝自自立起紀州（號内堀）南方兵多以屬之、同沒落、伊勢國司顯雅京降參、官位所領如元云云、秋八月十八日大風、九月二日大洪水、冬十月十七日將軍從一位、十月細川勝元生、

辛亥 永享三年春二月、將軍參宮伊勢、於八講堂律僧三百人、行光明眞言、三月廿四日一院落餝、（五十六法韓素行智）夏四月十六日將軍高野參詣、供奉大名二十三人、（或云將軍南方御成自渡邊上陸云云）六月廿八日大内修理大夫盛見卒、五十六歲、義弘弟也、義弘男持盛繼其跡任修理權大夫、細川持之爲管領、冬十二月十一日將軍移花御所（室町）

壬子 永享四年春一條兼良爲攝政（號後成恩寺無雙廣才也）二月伏見殿親王宣下、（貞常親王八歲）三月四日將軍見東山花、秋七月廿五日將軍任内大臣、八月廿八日任左大臣、同廿八日召籠赤松滿祐、將軍近習女房三人有科給死、赤松妹有其中、赤松恨之催上杉禪秀餘黨以下軍兵由、有讒言、滿祐走播州、八月將軍遣使於大明、同九月十日富士山爲遊覽下向駿州、同十七日至駿州鬼岩寺、同十八日迎今川範政館有歌會、飛鳥井雅世三條實雅堯孝法印相伴下向、廿一日歸京、冬十一月廿四日京軍兵發向和州攻越智、十二月十九日攻赤松、赤松衆數百人死、滿祐降乎陳謝再三、故許免之、赤松上洛、十二月九日將軍補殿上并院別當奘學淳和兩院別當氏長者、蒙牛車宣旨、

癸丑 永享五年正月三日主上元服、（十五歲）同廿四日地震、春豐後大友（中務少輔）逆心、將軍命大内修理權大夫（持盛）河野刑部大夫（道久）等伐之、於姐嶽合戰、河野討死、三月使小早川又太郎援大内、而

擊大友、關東武田右馬介信長背持氏、三月一日自鎌倉逐電、同日命村上追之、甲州發向、四月八日、大内持盛卒、號觀音寺殿、號芳林道繼、五月廿一日（午刻）大地震、九月十六日子刻同大地震、夜中三十四度、其後廿餘箇日不留地震、夏炎旱、十月山門大衆稱於坂本志賀搆城塹、自京命山名持豐攻之、自十一月十三日至十二月中合戰、十月廿日一院崩御、（後小松院五十八歲）

甲寅 永享六年正月、山門大衆降參、然使之衆徒被誅、官軍歸京、二月義勝生、（母裏松重光女）同十四日因幡堂萬壽寺等炎上、火自六角至七條燒、三月十九日頂法寺炎上、春二月朝鮮使來、夏六月一日、大明使潘賜入洛百餘人、（大明帝聞後小松院崩思義持薨潘賜弔之故云弔源義持王云云）同八日夜裏松權中納言義資卿被誅、秋八月廿三日大明使歸九月十五日伊勢外宮遷宮、疫疾飢死者多、彗星二現大震動、

乙卯 永享七年春二月五日、叡山衆徒中堂總持院放火炎上、同二月四日山門使被誅、金輪院子共四人五山僧數十員被誅、春遣使於大明、秋大風吹、七月廿四日公方右大將拜賀、九月廿六日軍兵發向于大和、越智逆意故也、援南帝、亦十月九州大亂、

丙辰 永享八年春正月二日義成生、（將軍二男母義勝同）夏旱魃、六月遣唐使歸朝、大佛新造、使遊佐兵庫助畠山方河内守護代爲大將、被責和州越智伊豫守、（越智援南帝、能陷香久山橘寺岡寺攻）六月廿二日九州大平賀儀禮、秋九月二日使遣大明、冬十一月廿九日、八坂塔并雲居寺法觀寺等炎上、信濃國小笠原大膳大夫村上中務大輔及合戰、村上請加勢於持氏、持氏命桃井左衛門佐那波上總介高山修理亮、欲勢發、上杉憲實以諫言、小笠原京都御家人也、私難退治、由止之、持氏雖不

甘心、然而止レ之、自レ斯持氏憲實不快、九月廿九日治部大夫義健落馬、同卅日卒、童子千代德大野修理大夫子義敏以令レ繼レ家、冬十二月廿五日鎌倉大町悉炎上、

丁巳 永享九年春正月八日、未刻光物鎌倉中飛回數度、三月四日和州合戰攻二高鳥城一、四月關東持氏命二上杉陸奥守憲直一、催二武州本一揆一、爲二村上加勢一、欲レ發二信州一、說云是全非二加勢事一憲實可レ被レ誅由有二其企一已必定云云憲實驚、子息七歳七月廿五日上州令二下向一、八月十三日持氏至二憲實宿所一和睦、管領如レ元、冬十月廿一日行二幸左大臣家一、同廿六日還行、帝十九歳賢王也有二詩歌會一

春色映池　御製

カタウツス汀ノ松ノ同シ枝ニ八千代チミスル池ノサヾナミ

戊午 永享十年春正月三日星飛入二月中一、夏五月大和一揆悉起、吉野方兵處々出張、越智伊豫守籠二高鳥城一、將軍命二一色左京大夫義貫世保刑部大輔持頼一爲二大將一、發向合戰、六月鎌倉持氏一男賢丸主元服、於二八幡宮一有二其儀一、憲實云任二先規一京都一字可レ有二所望一由、再三諫レ之、持氏不二領掌一、終於二八幡宮一元服、號二足利大郎義久一、剩就二祝儀一、憲實出仕時、可レ被レ誅由有二其說一、憲實稱レ病不レ參、八月十四日憲實上州下向、同十五日夜持氏命二一色時永一、令レ進二發上州一、憲實爲二退治一、同十六日持氏發向、至二武州府中一、同八月廿三日藤原雅世卿飛鳥井雅中納言奏二新續古今集一、第二十一代集也是南朝諸臣歌不レ載但後龜山院御歌四首入レ之花山院右大將長親出家後號二耕雲明魏一名譽和漢連者也此人詠歌六首入レ之稱二明魏法師一不レ書二南方官位一是後北朝來故也北畠持康歌一首載レ之當代奉公故也 同二十八日京官軍發向、燒二多武峰一、扳二高鳥城一、越智豫州敗北、八月廿八日將軍辭二左大臣一、持氏爲二調伏一、行二五檀法於東山一、五大堂建立、九月將軍命二上杉持房一、中務少輔賜二綸旨幷御敎書一、爲二持氏追伐大將一、頂戴天子御旗一、進發、後上杉山內重寶天子御旗ト云ハ是也天子御詠歌書歌云裨振海中雲之幡之手仁東之壓於拂秋風 九月十日京勢下向、於二箱根山一、合戰、京方横地勝間田熊谷寺尾等、與二持氏方大森伊豆守兄弟箱根別當一、及二挑戰一、京方悉打負、寺尾熊谷損命、同廿七日京方越二足柄一、至二早河尻一、於レ是持氏徒上杉憲直二階堂宍戸海老名輩京勢合戰、持氏方敗軍、亦憲實去四月也九日立二白井城一、同十九日至二武州分倍一、持氏方兵皆以屬二憲實一、十月三日持氏鎌倉留主居三浦介時高逆心、京都一味、退二三浦一、同十七日三浦方大藏大懸發向放火、十一月一日鎌倉三浦介發向、義久退去、籔田名塚河津等殘二殿下一打死、十一月二日持氏鎌倉淨智寺入、同四日移二金澤一入二稱名寺一、律寺 同五日出家、法名道繼千葉介胤直警二固之一、持氏隱居、欲レ立二家督義久一、憲實達二此旨於京都一、將軍不レ聽、同七日於二金澤一、一色直兼父子一色三人憲直上杉父子二人自害、郎從多爲二憲實一被二討取一、

己未 永享十一年閏正月十九日、義視生二於細川下野宿所一、閏正月大雪降、二月十日持氏滿貞於二永安寺一自害、同廿八日義久於二報國寺一生害、十歳憲實爲二持氏命助一、訴訟三十度、將軍不レ聽、終如レ此、憲實悲レ之不レ堪、欲レ及二自害一、諸人止レ之、因レ之、忽出家、法名雲洞庵長棟 弟淸方立爲二管領一、春彗星出、夏四月八坂塔雲居寺再興、嵯峨釋迦堂倒、秋七月朝鮮使者高仁宗尹仁甫來、五山長老衆有レ故配流、冬十月被レ實二伊勢島背一。一色左京太夫義貫、守護 故守護代石川九郎發向退二治之一、大洪水六七度河水悉出、

庚申 永享十二年正月十三日、一色伊豫守爲二持氏方一、去二鎌倉一、守二相州今泉城一、使二長尾出雲守憲景太田備中守資光征一之、同廿三日舞木駿河守持廣被レ誅、一色一味故也 正月持氏男春王丸安王丸出二

於日光山ニ入ニ結城一氏朝父子其外舊好侍數多援レ之起ニ謀反一、野田右馬肋籠ニ古河城一、上杉武藏入道憲信長尾景仲征レ之、上州吉見希慶峰起、大石石見守憲重征レ之、二月十三日禁中松柏、（櫻イ）猿樂百人出立三月廿八日若君馬乘始有ニ御禮一、夏四月十六日八坂塔供養、同十九日法觀寺供養、四月十九日鎌倉上杉兵庫頭清方同名持朝結城進發、五月一日京都大將持房于ニ鎌倉一下向、命ニ憲實入道一欲レ征レ之、憲實自ニ伊豆一發向、五月十五日、將軍使ニ武田信繁子信榮攻ニ一色義貫滿範男修理大夫於和州三輪一、一色一族三百人自害、（一色爲ニ越智退治一陣ニ大和三輪一〇將軍近習女房小辨讒ニ一色義貫一援ニ南帝一欲レ傾ニ京都一云云依レ之不レ糺ニ實否一被レ誅レ之義貫怨靈作レ祟罰ニ將軍子息等一）同十六日伊勢守護土岐世保大膳大夫（刑部少輔）持頼同東池田命ニ細川贊岐守一於ニ大和國多武峰一征レ之、世保自害、同廿八日諸大名御禮有レ之、七月一日一色豫州峰起、武州援ニ須賀土佐守城一、同三日上杉憲信長尾景仲一色合戰、一色敗北、又信州大井越前守源持光、以ニ永壽丸一（持氏四男）起ニ笛吹峠一、上杉重方征レ之、七月廿九日攻ニ結城々一、西上野一揆、乾持朝、欽良京勢、大將持氏宇都宮土岐上杉政憲小田北條、震巽越後勢信濃衆、（新田）井武田勢南岩松三河守小山千葉等悉圍レ之、伊勢國司滿雅卒後、（寶樹院殿）息男中將顯雅在ニ大河城一、（內歟）小將敎具在ニ多氣城一、數代雖レ盡ニ忠孝於南帝一、南方威衰、國司獨難レ立、義敎頻請ニ和融一、親レ之盡ニ懇情一招レ之、顯雅懷レ惠歸ニ服京都一、將軍感悅餘、停ニ世保伊勢守職一、立ニ國司家一、南方官加階如レ元、亦世保長野關一黨以下亦將軍屬、國中分領相定、（先神領者神三郡并諸郡中其外諸國神戶御厨等元弘建武以來武家押ニ領之一而今度會合戰未レ靜亦宮方有ニ峰起一甚大事也天下悉大平後國司一家皆可ニ誅伐一由密思企先與ニ領地一令ニ和親一）八月十四日大風吹、大覺寺門主大僧正義昭（義滿末子）當將軍連枝也、（別腹舍兄）慈悲深重而入重レ之、嵯峨在ニ大覺寺一、常與ニ南皇（寬成親王）睦親、南皇語ニ義昭一云、今將

軍振ニ强威一、公家武家多以悉惑、（窮歟）願爲私君一爲ニ大將軍一、討ニ將軍一令レ治ニ天下一、然五畿內宮方、并世保一色一族恨ニ將軍一、今關東亦亂中也、起ニ九州一菊池大村等可ニ馳集一、天下半覆有ニ此時一云云、義昭僧正約レ之、南皇悅レ之、秘以ニ勅使一命ニ菊池一、菊池云結城城來年中無ニ沒落一、來年末必可レ覆ニ天下一云云、因レ茲南皇催ニ舊好輩一、大覺寺殿久無ニ上京一、怪レ之、忽遣ニ討手一欲レ被レ誅、秋九月大覺寺門跡逐電、（坊官一人供奉號ニ大和一）不レ知ニ行方一、將軍圖ニ其形體一、大覺寺尋ニ國國一、於レ令ニ誅伐一者、大可レ有レ賞云云、八月十六日滿天赤如レ紅、九月十八日大地震、（辛酉）嘉吉元年春二月十七日改元、三月十二日大覺寺殿、（義昭又義有ト也）到ニ薩摩一入ニ民家一休息、（大覺寺殿見ニ引稻唐春潛春等農具一不レ知ニ其名一向ニ農人一問ニ其名一農人等集怪云自ニ京都一被レ尋人必定此人也如何樣非ニ只人一歟云大覺寺殿歟池方ヘ遣レ書其中歌有ニ花ハ如何ニ我チアタシト思ラン常ニ替ラヌ今年ナリケリ〇山陰ノ花コソ今ハ開ソムレ都ハ未ト思ヤルヘ〇山陰ノ花ハ謂ニ南皇一歟農人此書ヲ奪取開見彌彌怪レ之同十三日攻レ之大覺寺殿并大和法橋被レ誅于レ時義昭僧正辭世曰アダナリト思ヒシ花ノ齡サヘ浦山敷モ明日ヲ知ル哉嘉吉元四月十日大覺寺殿沒落ノ賀儀ナリ）終人民討レ之同二十三日將軍參ニ宮伊勢一、大雨物怪有、先レ與被レ入レ劔（疊切袋入）錯入ニ別物一、至ニ草津一見レ之、驚使ニ飯尾肥前守歸路取一之、至ニ水口一奉レ之、此太刀將軍家常不レ放レ身、忘レ之事不審、將軍參宮後勢州被レ相ニ改堺目等一也、（是將軍參宮已先年雖レ有レ之國司若隱ニ大覺寺殿一逆心有歟思然則自身爲レ退ニ治國司一也云云）同二十八日還御、已刻歸京、自ニ西海一大覺寺殿首上京、大覺寺殿到ニ最後一被レ疵、其首難ニ見知一、大覺寺殿近習童子歎息奉ニ見レ之云、門主口中可レ知、先年奥齒二落、其跡有云云、因レ茲二首口中尋、果有ニ齒落一、則知レ之奉レ葬云云、四月十六日結城城沒落、氏朝持朝父子自害、并大名數千人討死、若君、（春王安王）二人爲ニ長尾因幡守一尋搜捕レ之、同十七日古河城沒落、五月四日結城以下首上京、同十六日兩佐々木出向ニ濃州垂井金蓮寺一、二人若君生害、（春王十五安王十三）廿八日有ニ結城落城之御禮一、凡近

年公家武家於レ事蒙レ誅多、首實撿每年不レ斷、皆人恐懼、如下踏二薄氷一望中深淵上云云、六月將軍家分二赤松滿祐所領備前播磨美作一、欲二稍稍分一二封赤松伊豆守貞村一、重時將軍男色寵無雙　未レ果云云、六月廿四日、可レ入二滿祐亭一由、衆日仰二其旨一、滿祐懼然饗應有二用意一、是滿祐前底池水鴨生レ子爲レ寵レ之云云　至二其日一赤松二男密語二滿祐一云、今日出御、一門滅亡、爲レ與二貞村一也云云、聞二其告一云、滿祐恨レ之、渥美中村浦上以下三百人、隱二居所所口口一、招二請將軍一、卯刻出御入二彼亭一、酒酣猿樂及二延年一、滿祐謀放二廐馬一。因噪閉レ門、伏兵忽發、自二屏風後一出、渥美弑二將軍一、于時四十八歲　座中供奉輩驚遽相擊、不レ知レ所レ爲、京極加賀守入道道統、及山名中務大輔熙貴討死、武衞義廉大內持世逾レ垣走、左衞門督藤原實雅卿數箇所被レ疵、逾レ垣而出、滿祐等於二打手向一可二切腹一由、雖二相待一、諸人驚天、更不二一和一移レ時、滿祐父子三百餘人、奔二攝州中島領地一、於レ是將軍首葬二宗禪寺一、遂下二着播州城山城一、同廿九日義敎贈太政大臣號二普光院殿一、七月六日於二等持院一葬禮如レ形、死體廿四日火葬大　內持世刑部少輔從四位下號澄清寺去六月廿四日被レ疵未レ愈、亦爲レ不レ打レ敵悔二空歸一、終七月廿八日卒、法名道岩昌弘男敎弘立　同八月十九日將軍義勝叙二従五位下一、童形未レ蒙二將軍宣一　八月廿六日大風吹、同日使二細川讃岐守赤松伊豆守武田大膳大夫本ヲ爲二追手大將一、山名金吾同修理大夫同相州敎之爲二搦手大將一、發二向播州一、九月日滿祐追手于寄手于陣逆二戰於蟹坂一、京勢敗北、重而京勢欲レ攻二白幡城一、細川讃州素與二滿祐一相親、故進爲二先鋒一、不レ納二他勢於國中一、可レ謂二不忠一矣也、去八月奏二赤松追罰一賜二綸旨一、九月山名持豐及敎清敎之、自二搦手一過二大山口一亂入播州一、西福寺上于陣、圍二滿祐城山城一、遂陷、同十日滿祐法師不レ叶自害、敎祐同一族等逐電、來二南方一、於二所所一被レ誅、敎祐於二勢州一被レ誅　同十七日梟二滿祐首於獄門一、曝二播磨於持豐美作於敎清、備前於敎之一、伊勢國司顯雅出家、敎具任二國司一、十九歲　冬十月太宰少貳嘉賴、不レ應二滿祐追罰之催促一、故使二大內敎世攻レ之、小貳敗、避二筑前一奔二肥前一、敎世領二少貳所領一、十一月嘉賴欲レ復レ國再起レ兵、大內敎世擊破レ之、嘉賴走二對馬一、

壬戌　嘉吉二年春正月廿一日大地震、春遣二使於大明一、夏五月廿五日後土御門院誕生、諱成仁帝太子　秋八月四日細川持之卒、四十三歲號弘源寺男勝元立　同月廿四日畠山持國爲二管領一、法名德本任二従三位一基國孫滿家子也　冬十二月十七日將軍元服、加冠二條關白、持基　理髮左中將公經、同日叙二正五位下左中將征夷將軍一、禁色昇殿、九歲　將軍讀書誦二了孝經大學一、

癸亥　嘉吉三年正月二日、天王寺太子堂炎上、同三月二日五穀降凶事也云云、同十七日江州柿御園蓑庄池脇新坊者刻二十七人一參二宮伊勢一、於二內外宮間一會二天狗一不レ知二行方一、是亦伊勢天下宗廟也、天下物怪可レ謂、夏六月朝鮮使來入レ京、爲レ奉レ弔二普光院殿喪一來朝不下敢爲二商賈一來上多不レ可レ入レ京異國人云爲レ奉レ弔二普光院殿喪一來朝不下敢爲二商賈一來上於是使レ入レ京六月十九日謁二將軍一馬上五十騎其路作レ樂吹レ笛打レ鉦　廿四日義敎第三回忌、於二等持寺一有二御八講一、十月廿一日將軍義勝早世、十歲自レ幼能馭レ馬今日墜レ馬薨其辭歌云サキテコソ人モ盛ハ見ルヘキニアナウラヤマシアサカホノ花一色怨靈作レ祟故也　同廿三日義成卿二家督一、此時京城危レ世者多、諸人心不二落居一、七月廿八日播州浪人等赤松三郎則重姪滿祐等起レ亂、山名入道退治誅レ之、亦南方軍兵吉野十津川河州紀州國人集、奉レ起二南皇一、入道寬成親王號二長慶院一北朝日野東洞院一品有親一味謀反人潛上洛、凡三百人、九月廿三日亂入大內、二手分、一手楠木二郎爲二大將一、上二清涼殿一、一手大和越知爲二大將一、於二局町一攻入放火、南方凶徒以二長刀一向二主上一、欲レ危二玉體一、蒙二天罰一否、忽倒伏、待二其間一主上出御、密密行二幸近衞前殿下第一、于

レ時南軍三種神器奉レ奪、取ニ内侍所一御ニ辛櫃一、東門役人佐々木黒田判官追而奉ニ取歸一、神璽寶劔送ニ吉野一、寶劍付レ札清水寺御堂捨置走、彼寺僧心月坊取レ之、進ニ上大内一、南軍楯ニ籠于敵山中堂一、同廿五日官軍幷山門衆徒責ニ中堂一、吉野方楠木越智討死、南皇自害、後龜山院第一皇子有光卿被レ誅レ之、同廿八日日野參議右大辨資親被レ誅（父逆心聊雖レ不レ知レ之父子其科不レ遁但稱ニ遠流一於ニ九條高倉邊一爲ニ侍所沙汰一被レ誅云）去廿三日夜大神宮櫪御馬、出ニ御厩一自走、回流レ汗又御厩歸入旨、彌宜神官次第奏狀、到レ是南軍參入夜刻限云云、

甲子　文安元年春二月五日改元、三月二日、中夜大小豆降如レ雨、夏四月十日大雹降大如レ棗、同十三日北野社炎上（東京地下人與ニ西京地下人一相論西京賊徒籠ニ于北野社一執事畠山衆侍所京極衆故故ニ火社一）秋八月南皇御子二人蜂起、一人吉野奥持ニ神璽一蜂起、鄉人號ニ南方新皇一、一人籠ニ八幡山一、和泉河内大和濃人楯籠、畠山衆發攻レ之、畠山方負、南軍競來、細川出羽守發向、破ニ南軍一、援ニ八幡城一、南軍走ニ紀州一、八月十四日能谷（熊）近江守一株梯號ニ妙湛原夫村老婆此梯愛則法名法名一、八月廿五日兵衛佐義敏拜ニ領三箇國一如レ本、同ニ松王殿及修理大夫殿一即拜謝、

乙丑　文安二年春正月廿二日、江州佐々木大膳大夫入道宗體禪門父子自害、子佐々木五郎時綱楯ニ籠飯高山一、三月大雨洪水、夏六月二日大風、藥師寺金堂倒、三月畠山持國去レ職、細川勝元爲ニ管領一、冬十一月五日房嗣爲ニ關白一（號ニ後知足院一）

丙寅　文安三年春正月二日南部戒檀院炎上、千手堂顯照院庫藏殘八月攻ニ落飯高山一、佐々木五郎時綱生害、成ニ荒廢之地一、九月廿三日大内炎上、秋紀州宮方爲ニ退治一、畠山方遊佐幷加勢宇都宮入道

假名本ニ寶德元年ナシ秋ノ字アリ

發向合戰、京勢悉打負敗軍、宇都宮入道祥綱隱ニ粉川寺一、冬十一月十五日義成叙ニ從五位下一、（童體諱義成）

丁卯　文安四年春二月七日義成叙ニ正五位下一、任ニ侍從一、夏四月二日南禪寺炎上、五月富樫次郎敎親、與ニ叔父安高一論ニ加賀守護一（細川扶持安高畠山扶持敎親）而分ニ半國一、六月十五日兼良爲ニ關白一（號後成恩寺）同廿二日大風、同廿四日大地震、五月五日天龍寺炎上、

寶德元年八月九日成氏入ニ于鎌倉一（十三歲童名千壽王丸賜ニ京一字一號ニ成氏一）關東上杉憲忠爲ニ管領一（成氏童名千壽王丸憲忠童名龍若丸在ニ伊豆一去年上杉臣長尾景仲調ニ君合體儀一歟ニ京都一成氏立ニ大將一令レ入ニ鎌倉一憲忠爲ニ管領一任ニ右京亮一）

文安四年冬十二月於ニ紀州一遊佐兵庫助宇都宮入道攻ニ落湯淺城一、南皇宮幷楠木第二郎等討取、首上洛、

戊辰　文安五年春正月十日大臣以下參賀、室町殿献ニ太刀一、因ニ南方退治儀一、同十七日義成任ニ左馬頭一、同廿七日於ニ七條河原一、實ニ撿南皇王子幷楠木等首一、此年疾疫飢饉、秋七月十九日洪水、八月赤松左馬介敎祐（滿祐ニ男）於ニ伊勢一被レ誅（近年隱ニ南方一横ニ行所所一南軍被ニ後走一勢州一國司使レ兵誅ニ敎祐幷郎黨二人一）首上洛、被レ掛ニ獄門一、

己巳　寶德元年春正月大風、二月洪水、三月十一日義成移ニ室町殿一、夏四月自ニ十二日一數日大地震、同十六日義成元服（十四歲）加冠細川武藏守勝元、理髮細川陸奥守敎經、同廿九日補ニ征夷將軍一禁色、八月廿七日三木從四位下兼ニ左中將一、冬十一月畠山入道德本再爲ニ管領一、

庚午　寶德二年正月六日、義成叙ニ從三位一、自ニ正月一至ニ七月一大疫癘、京中一日千人死、四條川原大橋成、三月廿九日將軍任ニ權大納言一、四月十四日吉野大塔空輪、及元興寺幷大乘院殿炎上、

同廿日鎌倉成氏與二上杉憲忠一不快、互殘二父宿意一、就レ中成氏捽二野心一、成氏移二江島一於レ濱合戰、將軍六月廿七日從二位、秋八月四日成氏憲忠和談、歸二于鎌倉一、九月晦日於二天龍寺一夢想和尚吊二百年忌一、武家執二行之一、贈二勅特佛統國師一、

辛未　寶德三年春三月北白河佛像動、諸人見レ之、三月廿三日白山神輿山上、秋七月琉球人來、八月將軍贈二書於大明國一、八月十七日輿福寺東大寺閉門、九月畠山德本家人、殺二京極持清家人一、持清怒向二德本宿所一攻、斬二下手人一、冬十月元興寺金堂炎上、冬十月將軍母堂慶壽院殿隱二居于嵯峨一、是斯波義廉家臣織田大和守訴論、御口入依レ無二許容一述二懷之一、十二月廿七日將軍參內、

壬申　享德元年春正月五日源教具、伊勢國司于レ時在京、叙二從三位一、三月廿八日辭職下伊勢　夏五月丹後國海中出二有レ體無レ頭屍一、背有二滕字一。七月廿五日改元、八月五日於二御所室町殿一火柱立、諸人見レ之、因レ茲所所祈禱有レ之、

癸酉　享德二年春正月廿二日叙二將軍從一位一、二月十七日將軍姬公生、母一色左馬頭女、四月四日吉野大塔供養、導師興福寺北院僧正　亦飯道寺開帳、大方殿御參、四月廿八日持通爲二關白一、號大染金剛院　六月八日將軍諱改二義政一、十八歲　伊勢國教具於二長谷寺一連歌興行、喜順宗匠　十二月廿九日將軍爲二氏長者一、

甲戌　享德三年春伊勢子良子十歲而娠生レ子、二月將軍爲二伊勢大神宮法樂一詠二和歌百首一、夏四月畠山政長與二義就一、家督相論、管領是德本無レ子、舍弟持富子政長以爲二猶子一、欲レ立二總領一、後生二義就一、初號義夏　德本欲レ立二實子一、因レ茲兄弟連連相論、遂政長出二德本宅一、赴二細川勝元宅一、使二其從者入二山名持豐宅一、秋七月一日房平爲二關白一、鷹司殿號後西光院　七月十二日將軍姬君生、母造宮使女、八月上旬畠山德本家人離二義就一、皆入二山名家一、政長其性廉直也　義就其性荒強也　從二政長一、同廿一日洛中物怨山名相模守教之細川兵部少輔勝久卒レ兵警二固御所一、是天下亂始也　大勝元不レ參、其夜畠山德本家放レ火、德本逃居二伯父滿則宅一、義就來二山名相州宅一、相州不レ納レ之、義就入二遊佐河內守國助宅一、同廿二日夜遊佐國助宅放火、義就遊佐出レ京沒落赴二河內一、同廿八日德本蟄二居建仁寺西來院一、使二政長續二家督一、勝元扶二持之一、德本一族西方云者誤二德本一云闕二政長一、欲二義就家督一再三雖レ申德本不レ用終出レ京西方一族七人至二德本前一各自害　冬十月大明報書來、十一月二日將軍召二諸軍勢於御所一、山名宗全因レ背二上意一、爲レ加二誅罰一、洛中物怨、管領勝元頻申宥、宗全獻二告文一奉レ謝、因レ茲許レ罪、雖レ然宗全去レ京閑二居於但馬國一、其子伊豫守爲二代官一在京、十月細川讃岐守成之、因二宗全蒙一御勘氣一、而屢請下赦二赤松彥五郎則尙一、以二舊領一、乃許レ之、則尙赴二播州一、十二月十日大地震、同十二月廿七日酉刻、鎌倉成氏命二結城一誅二上杉右京亮憲忠西御門一、憲忠二十二歲　上杉徒長尾、與二成氏一合戰、自レ是關東大亂、

乙亥　康正元年建仁寺勸進船入二朝鮮永嵩禪密一、春正月八日將軍姬君生、母大館上總介常譽女、廿一日成氏與二上杉長尾一於二武州立川原一合戰、同廿四日上杉顯房於二夜瀨一自害、同廿二日武州府中合戰、成氏敗、三月廿六日德本卒、夏四月赤松祐之則尙、與二山名持豐一於二播州一合戰、赤松敗、同五月於二備前甲島一赤松自害、宗全許免上洛振レ威、無二比レ肩者一、六月五日持通更爲二關白一、六月十六日將軍命二上杉房顯定政一攻二鎌倉一、成氏走遂不レ歸、七月廿七日將軍八幡社參、七月廿五日改元、同十月廿七日成氏與二上杉一於二岡部原一合戰、上杉勝、於二羽繼一合戰、上杉

敗、同十八日分倍合戰上杉勝、千葉小山成氏一味於上州二宮合戰、上杉陣于武州五十子、冬十二月山門衆徒就庄園事嗷訴不已、捧日吉神輿入洛、命細川勝元防之、既而賜御敕書而歸山、冬十二月晦日夜大地震、

丙子　康正二年春正月廿八日、久我通尙公宅失火、家傳代々文書皆滅亡、三月關東千葉成氏上杉因相論二分、惟胤國城寺某走武州、六月大裏造畢、秋七月廿日遷幸帝于內裏、同廿五日義政公拜賀、彗星出于西、夏畠山政長背上意、義就卒兵發向河內萱振合戰、（兩家合戰初也義就政長一家也旗色同難レ分敵味方故政長ノホリヲ作初舉之日本ノホリ起于斯）同六月廿六日政長方紀州和州和泉河內浪人三手分、河內亂入義就方譽田三河守同達江守於譽田社前防之、和州片岡某討死、（政長方）亦平石五郎小倉民部丞譽田彌五郎討死、（義就方）亦遊佐國助於道明寺河原合戰、遊佐彌十郎爲政長被打取、國助譽田社入一所防之、義就命本折七郎遊佐中務丞加勢、本折討死、政長戰屈互引、和州住人布施越智、亦畠山播磨守等、義就加勢、此時因將軍命、義就與政長和睦、共在京、八月廿七日將軍兼（中務大輔憲顯治部少輔教朝）禪秀子共也、

右大將二十歲冬十二月十九日上杉自丹波下向東國、

丁丑　長祿元年春二月以後至六月自北國水鳥多渡、其羽音如雷電、充滿山野江海、至秋皆失、夏五月十日猿澤池成血、秋七月廿一日吉田社鳴動、九月廿八日改元、十二月廿六日成氏背將軍命沒落鎌倉、其跡關東爲大將、將軍舍弟以香嚴院還俗、（二十二號政知）叙爵任左馬頭、下向關東、雖然鎌倉未靜、近邊以多屬成氏者、因茲先住伊豆堀越、號豆州殿、同廿四日下向、（去廿六日還俗）

戊寅　長祿二年春正月廿七日、將軍姬君生、母赤松伊豆守貞村妹、號宮內卿局、正月廿九日兩日出、閏正月二日滿月、二月廿三日太秦木島明神成異叙正一位、三月將軍石清水參宮、七月廿五日將軍大饗、（勝元沙汰）任內大臣左大臣如元、八月十九日和歌會有、六月南皇自十津川移吉野、同月京勢攻吉野、南皇被疵、走十津川、入高福寺崩、（號高福院自後醍醐至于爰南皇四代而亡）初赤松滿祐家人有石見太郎者、仕三條內大臣實量、而屢歎息赤松家絕云、赤松祖圓心當代先祖尊氏互起請文之事、幷赤松父有感狀事、其外忠功不勝計、三條內府見之憐之云、何以贖嘉吉逆罪否、石見謀云、攻南方打南皇、取神璽獻則欲報之云云、實量公密告武家此旨、將軍欲許之、實量公告石見、石見悅、赤松一族眞島衣笠家人中村彈正評定、中村以下同人浪人十餘人入吉野、詐請仕南皇、南皇許之、六月廿七日夜、中村彈正忽入奉打南皇、入十津川、吉野方蜂起、殺中村眞島等、遂以神璽敗歸京、八月晦日被渡紫宸殿、（明德例）於是將軍召赤松政則（五歲賜諱一字）敕之、再興赤松家、賜加賀半國、（富樫入道安高跡）山名持豐赤松敵也、惡石見所意、憤之、密遣家人闇打石見太郎、叢林詩人萬里、以詩獻朝奉賀云、忽運子房帷幄籌、官軍奪璽叫千秋、今朝再入吾王手、風不鳴條四百州、滿祐子孫絕、滿祐弟義雅子性存法師、嘉吉亂僅九歲也、建仁天隱奄澤和尙憐之、匿山中得免死、其後性存生政則、後性存卒、今年政則、五歲號二郎法師丸、元服號赤松二郎政則、九月二日諸大名神璽入洛、賀儀出仕有之、同十一月十九日、赤松二郎法師出仕、

（通行假名ヲ以テ終トス本ハ詩ヘ本ヲ其本ハ寶曆甲申六月七日寫畢傳頭舍藏ト圖ト奥書アリ）

此書は後醍醐天皇元弘元年より稱光院の應永三十四年までのことを記す其中南朝興國二年より正平二十一年まて廿七年間のこと闕たり作者詳かならず

明治三十三年六月

近藤瓶城識

南方紀傳下終

菊池傳記總目錄

卷之一

一肥後國來歷事
一菊池武時本領安堵附大智和尚事
一菊池寂阿戰死事
一菊池武重矢矧箱根戰功事
一曾氏直義筑紫沒落附菊池武敏討二少貳妙惠一事
一多々良濱合戰附阿蘇惟澄事
一菊池武重寄合內談誓紙附木野武茂納二聖護寺一誓紙事
一鞍嶽山合戰事
一阿蘇惟國被レ行二忠賞一附阿蘇先祖事
一菊池先祖事
一同建二立紫陽山廣福寺一事
一少貳大友討二北條英時一附英時妻詠歌事
一菊池武重下二向肥後一事
一征西將軍宮筑紫御下向事
一菊池武士遁世事

卷之二目錄

一足利直冬西國下向附河尻幸俊事
一筑後合戰事
一長者原合戰事
一菊池武光建二立熊耳山正觀寺一附菊池五山之事
一河野通直屬二將軍宮一事
一菊池武政遣二使於大明國一事
一菊池武先陷二小國九箇處城一事
一飯守山香椎合戰事

一今川貞世爲二九州探題一下向附藤崎宮靈鐘之事
一菊池武敎與二今川大內一合戰事
一菊池武朝水島合戰事
一菊池武朝筑後合戰事
一將軍義滿筑紫征伐附菊池降參事
一葉室親善本領安堵事

卷之三目錄

一菊池兼朝奪二河尻領一事
一菊池持朝生松原合戰事
一菊池爲邦爲二一揆一被レ圍二隈府城一附爲邦剃髮事
一菊池重朝建二聖廟於隈府一事
一菊池政隆與二菊池武經一合戰附菊池家士誓書事
一菊池武經滅亡事
一菊池武包奔二肥前高來一附阿蘇一家繁榮事
一甲斐宗運陷二隈庄城一事
一大友義鎭攻二從肥後國士一事
一大友義國相二續菊池家一事
一小原鑑元入道叛逆伏誅附肥後諸城主事
一菊池義武滅亡事

卷之四目錄

一合志合戰事
一詫磨原合戰事
一菊池武政所々合戰事
一義昭僧正下二向薩摩一被二殺害一事

一赤星道雲與二隈部親永一合戰事
一薩摩勢攻二入肥後一事
一長坂神尾城合戰事
一宇土山本合戰事
一八代蘆北合戰事
一赤星道雲病死事
一飽田合戰事
一隈府城陷附竹迫城合戰事
一薩摩勢與二隈府親永一合戰事
一大津山資冬肥前筑後合戰事

卷之五目錄

一且過瀨合戰事
一井芹一黨被レ誅附甲斐宗立兄弟叛逆事
一伯耆顯孝與二甲斐隈庄河尻一合戰事
一甲斐宗運病死事
一志賀親次攻二坂梨紹元一事
一甲斐宗運討二黑仁田豐後守一事
一坂本合戰事
一南鄉高森城合戰事
一薩摩勢肥前肥後合戰事
一秀吉公九州征伐事

菊池傳記卷一

蟠龍子井澤節長秀輯

○肥後國來歷事

夫天地ひらけはしまりしより我神國あつて伊奘諾尊伊奘冊尊上古の聖神に繼て國の中の柱をたて大八洲とし給ひ世々神聖の御代相つゝき人皇に至て神武天皇大和國に在し初めて大八洲をすへて日本國と號給へるは右二柱の神の大日孁貴に其國を任し給へる故によれりとなむ其後景行天皇諸國の名を立給ひ成務天皇國都の疆を制し各國造を定給ふ元明天皇國の造をあらため國司となつけ國郡鄕村の名を定たまふ上古の大八洲漸く割て三十三國となり後また分りて六十六國となる室中に在して四方の封域をさろしめさんが爲諸國に命して風土記を作り國郡の名及山川原野鳥獸草木土產のたくゐを記せしめ給ふすてに此御代に分直(ワデ)をおこして醐醍帝の時に編をなせりまかれとも王室衰へ官職すたれ風土記もことゝく散失今纔に世に傳ふものは出雲豐後の脫簡のみ古を好むの士誰か慨歎せさらんや我嘗ひそかに思へらく人其國に生れては其境內の事跡知すんは有へからすと於(ヽ)是武を講するの暇よりゝ舊紀を繙き生土の事を記せるものを抄出し自記臆に備へむことを思ふ然といへとも世に徵とすへき書も稀に且我幼より劒を擊馬を走らしむる業にのみ習ひてもとより文史に瞽けれは思ふてやむへかりしを又一二の友にすゝめられてさるし置る反古堆の中をえらひ傳ふへきことあるをまはらく爰に輯め錄すものならし抑肥後の國はもと肥前國と一國にして火ノ國といふ後に兩國に分りて肥前肥後と名つく其比まては阿蘇國蘆北國天草國は各別國にて國造を定置れぬ肥後肥前を分てるとき右の三國を肥後に加へ古の國號を以て郡名となせり景行天皇十八年三月帝筑紫國を廻ります四月熊縣(球磨郡)にて熊津彥を征伐し給ひそれより海路に趣き蘆北の小島に泊り給ふ同五月蘆北より船にめされ火國にいたり給ふに日くれて岸につくことを知らさりし時はるかに火光を見て漕ゆくに岸につけり其火の光所を問ひ給ふに八代縣豐村と答ふ彼火を尋給ふに火をとほせるものなかりしかは其國をなつけて火ノ國と云是世にいふ不知火なり夫より又船を出し玉名郡長須腹赤(ヘラカ)の濱につかせ給ひしに棹人朝勝見といふ者魚を釣て帝にたてまつる是腹赤の御贄(タケイハタツノミコト)の權輿なり同六月十六日阿蘇にいたり給ふに阿蘇津彥阿蘇津媛あらはれて帝にまみゆ是健磐龍命(神武帝孫八井耳命子)草部比賣命(クサカヘヒメ)健磐龍夫人の靈にして今の阿蘇大神なり此のとき帝健磐龍の孫惟人(國造速瓶玉命子)に命せられ社を建祭祀を司しめ給ふ大宮司これよりはしまる其後帝御子豐戸別を火國別とし給ふとなむ(是より後の國司郡司神社寺院古跡等の事悉く附錄に載たりあはせ考へし)

附錄不傳子

○菊池先祖事

抑菊池氏の先祖を尋るに大織冠藤原鎌足公より十二代中關白道隆公の子刑部卿隆家其子對馬守政則後に刑部少輔と號す其子左近少監則隆延久二年に肥後國菊池郡(深河村と云所に菊池と池ある故に郡名とす)を賜て下向し同郡深河村に城を築て住居す是を菊城と號す故に世菊池を以て稱號とす則隆嫡子兵藤警古太郎經隆後に右近太輔と號す經隆か子民部太輔經賴其子經宗其子刑

部太輔經直鳥羽院の武者所となる經直か子九郎隆直一本隆作高非なり後越後守と號す治承五年原田太輔種直と戰て勝利を得たり其後安德天皇の勅によつて諸國において戰功を勵す文治年中義經頼朝に背き西國下向の時隆直を語らはれけれとも從さる故義經緒方惟榮及家人等を遣して討しめらる隆直防き戰て自殺す隆直か二男次郎隆定家を繼て後鳥羽帝につかへ奉り承久三年の合戰に數戰功あり隆定か嫡子小次郎隆繼父に先て早世す以レ故隆繼か子彌次郎能隆祖父隆定か家を嗣て右京太輔と號す其子を式部少輔隆泰と云隆泰か三男次郎武房或説には後改二重本一後に肥後守と號す文永十一年蒙古國より日本を襲しとき九州の諸將各發向し是を防く武房其一人なり相從ふ者共には舍弟赤星三郎有隆同菊池八郎康成葉室太郎高善城六郎詫磨太郎以下八百餘騎對馬に趣き武房有隆康成等勇を震て大に蒙古の軍を破り首を獲ること五百餘に及へり弘安四年蒙古人又襲來りけれは武房有隆一族郎從一千餘騎筑前に馳向ひ蒙古の多勢を討破り一方の大將を赤星有隆搦とる兩度の軍功名を本朝に輝し譽を異域に施せり帝其軍功を感感ありて甲冑を下賜武房兼て勝利を八幡大神に祈り始に賜れる物を獻すへしと誓ける故彼鎧を神殿に奉納しけるとなり

傳云此武房益城郡隈庄に鳳翔山淨土能仁禪寺を建立す諸山の位に昇たる寺にて開山は寶山和尚なり寶山は蜀國王の子也本朝弘長三年仲秋來朝す菊池武房師德を尊崇し大檀那となり文永二年此寺を建立し蜀より持來れる釋迦の像を安置す故に寺號を能仁と號す釋迦を翻して能仁とすといふこと長阿含經にみゆ元德元年九月十三日寶山和尚寂す八十九歲偈云辛丑非レ浮己巳非レ休卽今

乘レ輿鞭二起鐵牛一

○菊池武時本領安堵附大智和尚事

菊池武房が嫡子彌四郎隆盛父に先て早世す故に其子時隆祖父武房か家を嗣けるに叔父六郎武本八郎武經家督を論し鎌倉に趣き時隆と對決に及ひ武本武經負て他邦に逐電す時隆家を相續すといへ共十七歲にて早世しける故其弟次郎武時時隆か家を嗣このとき國中の者武時をにくみ所々において戰ふに武時討負て菊池郡鳳儀山聖護禪寺の住持大智和尚を賴む大智は兼て武時と睦しかりけれはひそかに寺にかくし置上洛して奏聞し本領安堵の綸旨を賜り下向しける故武時菊池に還住し背く者をうち從へ肥後を過半領知し肥後守と號し從五位下に任す後に薙髮して眞空寂阿と號せり彼大智和尚は肥後國宇土郡長崎村の土民の子幼名を滿仲と云七歲にして河尻大梁山大慈禪寺寒巖和尚にまたかひ學ふ二十四歲にて渡唐し三十四歲にて歸朝す洞谷寺開山瑩山紹瑾和尚に嗣法し大乘寺明峰素哲和尚より法衣を傳領す加賀國河內庄に獅子山祇陀寺を建立し其後肥後に來り菊池郡宍鄕班蛇口山に鳳儀山聖護寺を開き住居す此とき山居詩八首あり

其一、一抹輕烟遠近山、展成二淡黑畫圖看一、目前分外淸二幽意一、不二是道人一俱話難、其二、截斷人間是與レ非、白雲深處掩二柴扉一、當レ軒栽レ竹別無レ意、祇待鳳凰來宿時、其三、名韁利鎖留不レ住、晦レ跡烟霞水石中、折脚鐺兒煎二野菜一、住山自効古人風、其四、草屋單丁二十年、未下持二一鉢一望中人烟上、千林果熟携レ籃拾、食罷溪邊枕石眠、其五、萬象之中獨露身、更於二何處一著二根塵一、

回レ首獨倚ニ枯藤一立、人見レ山兮山見レ人、其六、焚レ香獨坐長松下、風吹ニ寒露一濕ニ禪衣一、有時定起下ニ雙澗一、瓶汲ニ五更殘月一歸、其七、空林卓レ錫卜ニ幽栖一、冷淡家風實可レ悲、荷葉滿地無ニ線補一、白雲爲ニ我坐禪衣一、其八、終日搬レ柴運レ水中、分明顯露主人公、三千日月觀ニ成敗一、坐斷須彌第一峰一、又同國託磨郡臺島において賦る詩に蘆雪混邊水谷レ空、蓬瀛何必玉壺中、一條古路人間外、不斷風回ニ岸下松一、是よりさき東明和尚延慶二年に來朝し肥後に來り合志郡久米庄に青原山壽勝禪寺を建て住せり大智上ニ東明和尚一詩に洞家春色與將レ闌、一徑苔封到者難、只有ニ杜鵑枝上語一、夜深獨自哭ニ空山一、と賦しけるとなり

傳云右に載東明和尚は明州定海の人俗姓は沈氏直翁學和尚に嗣法す日本延慶二年に東渡す肥後國玉名郡大慈山善光寺合志郡青原山壽勝寺の開基なり曆應三年十月四日寂す六十九歲なり壽勝寺二代月逢和尚は東明法嗣にて元弘年中の住職貞治三年十一月二日寂す七十六歲なり三代圓郢和尚も開山の法嗣なり曆應年中の住職たり此とき官寺となり壽勝安國禪寺と號す（後に山號を改て今は護法山と云）東明和尚示ニ郢長老一書云、有ニ揮レ斤之手一、無ニ受レ斲之姿一、則不レ然、有ニ受レ斲之姿一、無ニ揮レ斤之手一、亦不レ然、古所レ謂弟子求レ師之難、師求ニ弟子一亦難、從ニ上先覺一授受之際、炳如ニ日星一照映、今古宗風之盛、本之隆也、豈似ニ今時遞相沿襲師資之義漠然一、要レ如ニ先覺之明驗一宗風之盛大一、不ニ亦難一乎、郢首座相從有レ年、巨福兩山自ニ侍香一而至ニ分座一、潛符密證唯、吾所レ知、適時緣嚮合、肥州壽勝古刹、始預ニ諸山之列一、師府辟命因從叟成レ行、倘能以ニ佛祖授受一爲レ心、正好向ニ荒村小院中一、接ニ一人半人一、以起ニ吾宗之墮緒一、不レ辜ニ平昔志願一、亦不レ負ニ老僧所レ知之意一、行矣勿レ忽（汝是は郢長老壽勝寺に下向のとき贈りたる書簡也）應ニ壽勝郢長老請一、九會爲レ人有ニ些巴鼻一、全沒ニ準繩一、握ニ定龜毛拂子一、却是斲堊郢斤、東州傳向ニ西州一去、枯木花開別是春、四代別源和尚康永二年の住職同開山の法嗣にて越前國の人也貞治三年十月八日に寂す七十一歲也

○菊池武時建ニ立紫陽山廣福寺一事

菊池武時入道寂阿此度大智和尚の厚恩を報謝せしめんか爲に玉名郡石貫村に一寺を建立し大智和尚を開山とす寄進狀云

奉ニ寄進一

肥後國玉名郡石貫內

（在四至）紫陽山廣福寺伽藍界事（巨細文書有レ之）

右奉ニ當伽藍地幷山野寄進一元者

大智上人去正中元年甲子從ニ宋土一歸朝、占ニ擇閑寂之地一、早擲ニ俗塵名利之境一、可レ傳ニ靈山少林永平之古風於盡未來際一志願、堅固之間、寂阿不レ勝ニ感嘆隨喜之至一、以ニ當山一限ニ永代一所レ奉レ寄ニ附大智上人一也、末代子孫號ニ本寺檀那一、恣ニ己之私情一、以ニ住持職一如ニ恩給付一、追ニ陪位勢之輩一、破ニ壞正法一之事定有レ之歟、仍申ニ成當山於公家御勅願寺一、奉レ祈ニ聖朝天長地久一、兼當寺開山大智上人法乳之子孫相ニ繼住持職一、可レ傳ニ心燈於龍華之晨一者也、縱雖レ爲ニ本寺檀那所一、當山被ニ定置一置文之內、五箇條制法之外者、住持職山野幷撿斷大小之事、永刼不レ可レ相ニ

成綺（委細事者本寺之本置文在之）後代子孫若背二寂阿寄進狀之旨一者、爲二三寶敵對及二不孝一之子孫上之上者、永遠二三世常住當國鎭守阿蘇大明神幷遙拜大明神冥鑑一、可レ失二家門之運命一、若守二斯寄進狀之旨一、以二淸淨信心一、守二護正法一、則密蒙二三寶諸天之護念一、子々孫々全二弓箭之家一、永可レ奉レ守國家之寶祚一、因寂阿自出二身血一、合レ朱押二手印於寄進狀之面一、以所レ曉二諭後代子孫一者也、永爲レ奉レ護二持正法一、仍所レ奉二寄進狀一如レ件、

菊池肥後守寂阿手印判

同郡の內にて久井原富尾玉名村及扇等六町を寺領に附す此ときに地を開き斧を運して觀應二年に七堂伽藍なれりと云正慶三年寒巖義尹大和尙三十三回忌なりしに大智姿をやつしてひそかに大慈寺にいたり香火薪水の勞を助く供養をはつて偈を門柱に題して去三十三年如二一日一、古今無滅亦無生、西風八月夜闌後、月在二梧桐一枝上明、かくて後菊池一家代々信敬して寺領を附し繁榮の寺院となりにける

傳曰印本の大智偈頌に載さる詩數首あり搜羅して左に記す

接待二首

只言無明熱鐵丸、縱橫呑盡放レ身眠、脚跟流轉三塗業、不レ管閻王乞二飯錢一、

萬年松下靠二烏藤一、冷處誰知冷似レ氷、一笑起來移二一步一、湘江水上上二眉陵一、

贈二僧之一圓覺寺一

朝遊二相國一暮西關、一策淸風正好看、九夏時々照二明月一、驪龍肯守二碧潭一寒、

温泉山

地獄顚倒一念中、一念廻向本來空、空々寂々非二他物一、樹々松靑躑躅紅、

於二天童山一作

獅子山隱獅子威、象王峰頭象王牙、夜來咬碎虛空骨、吐作二山頭古木花一、

夜坐

堅起脊梁如レ鐵堅、端然坐到二五更天一、鐘聲咬破七條角、把與二雲門一補不レ全、

次二東谷光和尙除夜韻一

巖房霧冷夕陽昏、皷吹喧々隔レ隴殘、臘漸隨二更漏一盡新、年祇向二曉天一又分、斷崖猿叫千峯雪、枯木龍吟半夜雲、好看東君施二號令一、滿山紅紫亂紛々、

○菊池寂阿戰死事

元弘年中後醍醐天皇より菊池少貳大友か方に密に綸旨を賜て探題北條修理亮平英時を誅戮すへき旨なりければ三人同心して英時退治の謀を廻しける半に少貳入道妙惠大友入道具鑑忽に心かはりして英時に告知せ共に菊池をうたんことをそはかりける寂阿是を傳聞斯る無二云甲斐一者とも を賴て大事を談しけるこそ口惜けれ乍レ去英時か方に左まて兵は集まるまし不勢なる所に押よせて討とるべしとて嫡子次郎武重（一本に肥後守と記す然れとも此ときは次郎とい ふ後に肥後守と號す元弘四年狀に肥後國司次郎武重と記）三男三郎賴隆五男阿日坊隆寂葉室右馬頭高善同左近吉宗寂阿か舅赤星有隆入道宗愚等纔百五十餘騎元弘三年三月十三日菊池を發して英時か籠たる博多の城に押寄る既に櫛田社の前を打過けるにいかなる故にか有けん寂阿か馬足をとゝめてゆかさりけれは寂阿大に

怒て介者(ヨロフ)は拜せすまして物祟する邪神に我なんそ下馬せんやと箭取て打つかひ

武士のやたけ心の一筋に思ひきるとは神ゐまらすや

と詠して神殿の扉をはたと射たりけれは馬ゆくこともとの如し英時か方には思設たる事なる故城戸を開て切て出雙方入みたれ戰ふに菊池方うち勝て城兵二百餘人を討捕英時も既に危く見へしに少貳妙恵大友具鑑八千餘騎にて英時を援寂阿今は利を得かたく思ひ武重を呼て汝は是より肥後にかへり死殘たる郎從をあつめ再義兵を揚へしといひけれは武重仰ともの覺候はす兎も角も安否を共に決し申へしとて中々落へき體に見えさりしかは寂阿大にいかつて汝は日比の思慮に拔群相違したる返答かなをよそ小信を守て大義を忘るゝは良將雄士の辱る所なり我は朝家の爲に命を爰にとゝむ汝は爰を遁れて節にあたつて命を奉るへし遲速ありといへともいつれか死をまぬかれんや時移るにとく〳〵といさめしかは武重は離別の涙に袖を濡しなから父か遺訓にしたかつて葉室吉宗以下五十騎はかりを引分て肥後國に落行は寂阿今はおもふ事なしとて葉室高善賴隆隆寂赤星宗愚等百騎はかりを左右にたて一文字に驅入散々に打破り英時か後見齋藤日向次郎西郷隼人三科丹後守小池五郎齋田又三郎武田八郎以下數十人を討捕といへとも少貳大友か大勢後より取圍て雨のふるとく射ける箭に寂阿をはしめ一族郎從悉く手負けれは寂阿多勢を驅拔てみるに八十騎はうたれて殘兵纔に二十騎にそ成にけるそれも深手淺手五ヶ所七ヶ所かうふらぬはなし寂阿いまは是まてそかた〳〵斯深手餘多所々かうふり身體自由ならぬは本意を達せんこと叶かたし一人なり共敵をうたんと思ふそやいさ敵と刺違へんとて一度に敵陣に驅入二十騎の者とも向ふ敵と引くみ〳〵落重りさしちかへてそ死にける

○少貳大友討二北條英時一附英時妻詠歌事

斯て少貳大友は一旦英時に反忠し菊池寂阿を討けるか五月七日六波羅すてに責落されし注進を聞又心を飜し英時を討て罪科を遁れんと思ひけれは七千餘騎を率し五月廿五日の午刻に探題か館におしよせ十重二十重に取圍みて急にせむ英時か家人も六波羅沒落の事を聞き過半落失不勢なれは暫く防矢射て城に火を懸け英時四十二歳にして腹搔切つてそ死にける（英時か城跡は筑前國早良郡姪濱村東鷺尾山の内巽にあり墓は姪濱山にあり）此英時は北條久時か二男なり元亨元年十一月廿七日九國の探題に補せられ三箇年か間武威を逞ふしけるか一時に斷滅しけるとそ無慚なれ少貳大友は討捕所の首三百五十を取持せ眞壁豐後守を使として肥州の葉室左近將監吉宗か方まて遣しける其狀云

今度逆徒英時一族無レ所レ殘討捕則爲二實檢一首三百五十注進候可レ然者武重並貴殿於レ有二免許一者相二率松浦等一到二肥後一可レ承二御下知一候委細之儀者眞壁豐後守申含候以二此趣一宜レ預二御披露一候恐惶謹言

五月廿八日　　小貳妙恵

大友具鑑

葉室左近將監殿

と書たりける吉宗これを披見して武重か方に遣しけれは武重大にいかつて日々に志を變する輩身方に可ゝ頼にあらすとて使の者を搦捕首を刎てそすてにける彼英時か妻は赤橋相模守守時か女なりしか世しつまりて後内縁によつて足利尊氏に預させ給ふ此女房いにしへを思ひつゝけてよめる歌に

　まらざりし心つくしのいにしへを身の思出と忍ふへしとは

○菊池武重矢矧箱根戰功之事

建武二年足利尊氏同直義反逆露顯せし故討手として新田義貞脇屋義助二十萬騎にて十一月廿日鎌倉を立同廿四日參州矢矧に着せらる菊池武重も手勢一千餘騎を引具して相したかふ足利方より高上杉畠山等十萬餘騎にて對陣す此とき菊池千餘騎を三手に分て先にすゝめは吉良左兵衛二千餘騎にて相さゝゆ武重か先手の輩足輕の射手を揃へ差詰引詰射させ拔つれて戰ふに吉良方退たてられて引退く諸手おの〳〵入みたれてたゝかひ雙方勝負區々なる中に菊池方の備は始めの塲を退す諸士粉骨を竭す足利方利を失ひ矢矧を引去て鷲坂に陣を取に官軍すゝんて攻けれは鷲坂にもたまり得す手越にてさゝへけるを續て押よせ責けるに立足もなく敗北し討るゝ者三千餘に及へり同十二月足利尊氏十八萬騎竹下に着直義八萬餘騎箱根に着京方よりは中務親王二萬餘騎搦手竹下に向せ給へば箱根には新田義貞七萬五千餘騎にて馳向はる菊池武重は手勢千餘騎にて先陣にすゝんて直義の大勢に押かゝり屈强の射手を楯の表にすゝめ散々に射させひるむ所を武重城赤星宇野鹿子木等鋒を汰へて斬て入一人萬卒にあたつて戰ふにさしもの多勢といへ共悠兼て颯と引仁木義長是を見て二千餘騎にて驅合せけるに武重屑ともせす短兵急に討て拉きける間足利方の兵かなはしとや思ひけん遙の峯にそ逃上る追手かくのことく利を得るといへとも搦手竹下の戰に中務卿の御勢討負て敗北しけれは追手の新田勢も悉く落散て義貞以下の將達皆箱根を引退き給ふ其勢百騎に足らさりける武重は此時まで軍兵三百餘ありしを引具して殿しけるに敵七百餘騎にて追懸官軍既に危く見へし時武重かへし合せ〳〵敵を追拂こと七度なり其隙に義貞以下恙なく引退る同年主上山門に臨幸のときも武重供奉に候す其外所々において戰功をはけまし武名天下に輝しけり

○尊氏直義筑紫沒落附菊池武敏討ニ少貳妙惠ニ事

建武三年二月八日足利尊氏直義於ニ攝州ニ官軍と戰ひ討負て既に自害に及んとせられしか細川定禪かいさめによつて筑紫船に打のりて西國にそ下られける尊氏も來かた往するを思ひめくらしあしきなくや思はれけむ

　漕むかうかたは明石の浦なからまたはれやらぬ我思ひ哉

細川和長とりあへす

　武士のこれやかきりの折々もわすられさりし敷島の道

かくて筑前國宗像郡江口に着船ありしかは宗像大宮司おのが館に請し入其後國々に御敎書を遣し觸おくるに一番に大友刑部太輔氏時豐前豐後の勢を催し馳附ける其外此間菊池か武

威に恐れて色に出さすといへとも内心には宮方をうとむ輩多かりしかは追々にはせあつまり程なく二千餘騎になりにける少貳妙惠も嫡子太郎賴尙に三百餘騎を添て宗像につかはしける此とき菊池武重は上洛して國には一子武士（ヒト）弟武敏はかり殘居たりしか武士は折節病に臥て死生わかたさる程の體なりけれは九郎武敏阿蘇大宮司惟國か子共惟直惟成惟澄以下三千餘騎を相催し少貳太郎か跡をしたゐて筑前國水木の渡にて追著けれとも少貳は船七八艘に取登て向の岸に漕つけけるに家人畔藏豐前守以下百五十騎はいまた河を越さりけるか取て返し暫く戰て枕をならへてうたれける武敏それより入道妙惠か籠たる内山の城に押よせ責陷し妙惠以下百六十五人か首を切勝に乘て將軍の陣所にそ寄たりける

○多々良濱合戰附阿蘇惟澄事

菊池九郎武敏は少貳妙惠を討て後いよ〳〵軍勢馳集り五千餘騎になつて尊氏の陣所多々良濱にそ押よせける足利方には仁木細川高上杉畠山大高南島津大友宗像少貳等二千餘騎にて對陣し雙方いとみ戰ける所に兼て内通もや有けん菊池か後陣にひかへたる松浦神田のもの共三百餘騎後より鬨を揚て切て懸りけれは菊池勢思ひよらされは周章さはきて楯裏に謀叛人ありかへせ戻せといふ程こそあれ左右に颯とひらきなひく足利方勝に乘て前後より責けるにうたるゝもの數を知す菊池も既に討るへく見へける所に阿蘇惟直惟成惟澄踏とゝまり多勢の中に破て入火を散して相たゝかひ惟成惟直討死すされ共弟惟澄は勇猛無雙の兵にて是までも猶うたれす舍兄二人を目前に討せてなしかは命を惜むへき向敵を十四人弓手馬手に薙倒しつゝく敵を追散し懸拔てみたりけるに日比賴思ひける親類郎從百六十人討死し其身も數箇所の疵をかうふる故是非なく兄か死骸を舁もたせ打殘されたる家人を相具し矢部の城に引返す此間に武敏は漸菊池に引退く阿蘇兄弟か働きなかりせは助かりかたき命なり夫より一色道献仁木義長を大將として菊池か城を責めさせられけるに一日もたもち得す深山の奥に逃げこもる其外の城々悉く明渡して殘らす將軍に屬しけれは九州の押えとして仁木義長を大將とし大友少貳をとゝめられ同年四月廿六日數萬の軍士を從て上洛せられけるに城郭をかまへて住居せり

○菊池武重下二向肥後一事

此事洛に聞へけれは菊池武重大に驚き叡聞に達し御暇賜つて肥後國にくたりけるにいつしか一國朝敵と成り武重を國にいれしとふせきけるされ共武重屑ともせす打やふりては通り〳〵終に所々の城郭を責陷し纔か一月の中に肥後を討謐め夫より筑後に責入うち從へて押領し自肥筑兩州の大守と稱しける

傳云玉名郡石貫村廣福寺に大智和尙の狀あり誰人におくれるといふことをあらす其文の中に載る所をみるに武重か肥後騷動のとき下向の事をいふもの多し左に出して考證に便りす但し舊にあたかつて一字を換す其狀に云く

寺の御奉行の事

當寺正法壼未來際立や立すやの一大事にて候間藏主禪古兩僧をもて申候

一けふあすかやうの事申へしとはゆめ〳〵思ひよらす候所に思ひの外にこの寺燒失いてきたりてやけ候ぬこのきさみ兩三年立て候遙拜宮のみねこしの野やかれ候て又河床へつゝきの野殊に寺の北にあたりて高候鋒寺をまほる大吉の山にて候を燒て候程にあまり心のやるせも候はて心中に佛祖三寶に知見證明あめしめせとまて誓願所念申てこのまきものを書てたまいらせ候

一山野の矢火の事向後御いましめの事書あり度候左もおほしめされ候はゝ三寶の御事にて候間御いたはしく候得共奉行人少々めし具し候てわさと山に御入候は是にて文章のていをも未來佛法の立候やうに御定候は大法の外護にふかくたのみ可申候

一神代の如法道場所前々も火難により候てやけ候ぬこの事を犬王丸か母にこの兩三年申候へとも聞入れす候それにつき候て寺にむけて三ヶ年寺領をおさへとり候事をはしめて散々のふるまひ入ニ見參一可レ申候公方より御はからひなくては如法經をいいつれの所にても候へ他國にうつすへき躰に成て候 先年いつそや高橋兵庫してわさと御文にて承又わさとはさま殿を高來にこしたてまつられ候て事を尋られ候し御こゝろさしはいまにわすれ申さす候へとも其時は犬王丸はいまたいとけなく候し程にとかは候はす母か日本一のえせものにてさん〳〵の式をふるまひ候し間犬王にとかをかけしと存候てはさま殿を事なき體にてかへしたてまつりて候今は犬王も盛人し候ぬまことに公方より正直の御はからひ候をそむき候はすは罪科まては申ましく候如法經の御おこなはれ候はゝ法界の衆生をみちひくやうに御はからひ有たく覺候

一觀喜殿豐後よりひかれ候しにゑからとの所々の難所をきりふさき候はゝ飛鳥ならては人のとをるへきやうも候はすときこしめされ候はんこの寺をふかく御賴候に大般若を轉讀候しとき御布施のために高來一郡におゐて惡盜賊百人を扶持して一郡の人のわつらひにもならす又君の御大事にも立て弓矢の道にさるものありと人にもまられて候はんする者の父うち死子うち死したる者にても候へ御方に參り候はゝ闕所有るへからす此一段を御布施候へと申て候しになのめならす御悅候て御領掌候愚身啓白して信心をこらして大般若を讀誦五ヶ日の中に觀喜殿歸國候て再び御目にかゝりて御悅候しこと不思議の靈驗にて候歟よもおほしめしわすれ候はしまかのみならす阿蘇第一のせつ所をきりふさきて凡夫のとをるましきやうに城をこしらへて候しを菊池殿をはしめて諸大名の手よりもやふらす迫間殿うちやふつて通られ候て九州にかたき御身むかしよりなき程の名をあけられ候て觀喜殿を事故なく通されて候し思出候へは併大般若の十六善神の御力をあらはされ候事いかてか御報謝なくては候へき

其時弓箭とりて人にけに〳〵しく御いはれて候し人々の名字の中にて候ちくはやかみこれか領家年貢をざんなくせめとられちくはか當知行すへき所を高橋兵庫やう〳〵まきらはして今までかへしつきさる事御ためにあまりいたはしく存候

一いかさま生々世々佛法の中にして緣をふかくむすひ申て候へはこそ今生にても外護とならせ給あまつさへ師弟子の緣をむすひ申て候事一世の緣とはおほしめさるましく候
今五ヶ條をかきて申御事聊も正直の天理にそむく事は一事も候はす仍手印押て申候
當山正法を立たてしとはたゝ御はからひたるへく候

正平十九年二月廿三日　大智

又大般若御布施の事は迫間殿に政道わたされぬはるかの以前にて候
御事一人ならてはふつとさたまりぬとは覺す以上

○菊池武重寄合內談誓紙附木野武茂納ニ聖護寺ニ神文之事

其比武重評定衆と號して軍功ある輩を定め置きその掟を書して云く

寄合衆內談之事

一天下の御大事は內談の議定ありといふとも落去の段は武重が所存にまかすへし
一國務の政道は內談の儀を證とすへし武重すくれたる儀をいたすといふとも內談衆一とうせすは武重か儀をすてらるへし
一內談衆一とうしてかたくそらことをきんし五常をまもり家門まつたいにつたはらんことをねかふへしつゝおんて　はちまん大ほさつのめうおやうをねかひたてまつる
北朝暦應二年
えんけん三ねん七月廿五日　ふちはらの武重在判

武重が弟木野對馬守武茂も鳳儀山聖護寺に神文を納めて云く

敬奉レ對ニ三世常住一切三寶殊鳳儀山聖護寺當國鎭守阿蘇大明神御寶前ニ發願起請文事
一武茂弓箭の家にうまれて朝家につかへたてまつる身たる間天道に應し正直の理をもつて家名をあけ朝恩に浴し身をたてんことは三寶の御ゆるされをかうふるべく候其外私の名聞利欲に義を忘れ耻をかへりみすへつらへる當世武士の心をなかくはなるへく候
一私欲の爲めあるひは親疎によりて五常の道にそむくへからす候
一公法出仕の外私のましはりに名聞榮花を嗜み好むへからす當世不實者のふるまひをなし文武にはつれて國家のつゐえたらんことをかたく停止す
一舍兄肥後守子々孫々までいましめを定め置候趣を武茂も堅く相守りそむかさるやうにねかひ候

此趣違背にをいては日本の諸神の御罰をかうふるへく候

延元三年八月十五日　藤原朝臣武茂

と書たりける

○鞍嶽山合戰事

爰に菊池が一族甲斐六郎武本が四代の孫甲斐民部大輔重村といふ者あり曾祖父武本は菊池時隆と家督爭論の後は甲斐國に代々蟄居せしか重村尊氏朝臣に屬して肥後還住のことを願ける故肥後國を打從へ領知すへしとて御敎書を賜り肥後守に任せられしかは重村は數代の愁鬱一時に解散しぬと悅ひ先豐後に趣き大友か家人等をかり催し延元三年九月四日肥後國

に打入り阿蘇に一夜逗留し翌日菊池によせんと議したりける武重此事を傳聞思ふに彼か分際何程の事あらん道に出むかつて打散さんとて千五百騎を引具して阿蘇によせける所に合志郡鞍嶽の麓にてはたとあひ雙方旗の手をすゝめ入亂れてたゝかふに甲斐が軍忽に敗れ討るゝ者數を知らす重村は匂々の體にて豐後に引退きそれより日向に趣き肥後還住の思ひをとゝめけり

○征西將軍宮筑紫御下向事

如斯武重毎度勝利を得るといへとも旗下の輩數反逆を企攻伐に暇なかりしかば又上洛して芳野の皇居に伺候し某數年爭戰の功を勵し近國を打從へ候得ともやゝもすれは敵となることひとへに大將軍なき故と覺へ候ねがはくはいつれにても親王筑紫に御下向ましまさは西海道は殘らす官軍に屬しなむ且は聖運をひらかるゝの端ともなり候へしと申けれは後醍醐帝けにもと叡慮をめくらされ則第九の皇子一品式部卿懷良（ヤスナカ）親王を征西將軍になしまいらせ興國元年三月芳野の皇居を出させ給ひ鎮西に御下向まします供奉の卿相二十四人新田の一族十人國侍十二人都合其勢二千餘人和泉路に出て吉見の浦より御船に召れ豐前國柳浦に着岸あり夫より陸に上らせ給ひ筑後路を經て肥後國八代に入らせ給ひ高田（コウダ）と云ふ所におはします關西親王とも稱し奉れるは是なり（同郡麓山と云所に新山丸山勝尾鞍尾鷺尾と云所あり宮に從ひ奉りし卿相の居所なりと云傳へたり）其後菊池氏武威いよ〳〵さかんになり諸國に發向して討所必靡き攻所必從ひ終に九州一統の功をなせり然りとはいへとも親王は元來玉樓鳳闕の裏に長給ひ平生詩歌管絃をのみ事とせさせ給ひけれは見るもいふせき鄙のすまひに御心をいたましめ太懶き年月をそおくらせ給ひけるあるときの御うたに

日にそへてのかれむとのみ思ふ身にいとゝ浮世の事しけき哉

あるやいかに世を秋かせの吹からに露もとまらぬわが心かな

此御歌を越後におはしましける御兄宗良（ムネナカ）親王におくらせ給ひけれは宗良御かへし

とにかくに道ある君が御代ならは事しけく共誰かまとはむ

草も木もなひくとそきけ此比の世を秋風と歎かざらなん

かくて將軍宮御甥泰成親王（後村上帝第四皇子）を下まいらせ御養子として太宰府に置きたてまつり帥宮と號し菊池肥前守武澄なと附またがひ奉る九州其威に恐れ其風を望み服從せさるものなかりけり

按るに一說に征西將軍宮諱は世良式部卿と云ふ或は帥宮と云ふ菊池これを奉して戰功あり此世良は延文五年七月筑後大原合戰に疵をかうふり同年八月菊池郡にて薨し給ふ此時若宮四歲に成り給ふを武光吉野殿に奏聞し征西將軍宮の宣旨を申下す此宮を後征西將軍或は關西親王懷良と號せらるとあり此說大に非なり帝王系圖歷代記云後醍醐天皇第二皇子帥宮世良元德二年薨すとあり增鏡云第二宮世良は冷泉實俊の女遊義門院一條局と聞へし御腹なり元德二年にはかに世をはやくし給ふと見へたり元德二年の頃はいまた世亂れす高時滅亡の四年前なり延文五年までは三十一年相違す殊に延文より後康安元年征西將

軍宮博多に出陣ありて大友少貳松浦宗像と合戰の事を大平記に載るときは延文五年薨逝の說は誤なることを知るへしある人云はく康安元年博多出陣の將軍宮は件の若宮ならん歟と然れとも延文五年四歲ならは此とき纔に五歲なるへし幼兒を將として遠國の出陣いふかしからすや今考二帝王系圖南朝記參考太平記等一式部卿懷良親王は後醍醐帝第九の皇子なりこれを世に前征西將軍と稱す異邦書には誤つて良懷と記せり此懷良御甥泰成親王を御養子と定められ帥宮と號し給ふこれを世に後征西將軍と稱す泰成は後村上帝第四宮なり是等をもつて俗間無譽のあやまりを知るへし

○阿蘇惟國被レ行二忠賞一附 阿蘇先祖事

阿蘇大宮司惟國は此年ころ官軍に屬し軍功を勵し殊更其子惟直惟成多々良濱の合戰に討死せしかは其勳功の賞として後醍醐天皇より二箇所の所領を充行る其綸旨云

肥後國隈牟田庄之內大友千代松丸跡同國守富庄地頭職爲二惟直惟成勳功之賞一可レ被二知行一者

天氣如レ此悉レ之以レ狀

左少辨判

興國三年六月廿日

阿蘇大宮司館

其後將軍宮よりの令旨に云く

元弘最初之軍忠不レ顧二老體一都鄙之忠節無二比類一旦兩息致二命於君一討死尤老心爭無二御憐一乎速於下擧二義兵一抽中軍忠上者云二本領一云二新恩一更不レ可レ有二相違一者征西將軍御氣色如レ此仍執達如レ件

興國六年八月五日

勘解由次官判

阿蘇大宮司館

と書れける此とき大宮司領內に城を構へ家人等を籠置所は山城小城木戶城坂梨城松尾城鍋城動目喜城櫻尾城比良城鐘城入江城鳶尾城小鶴城松山城西原城楯平城石櫃城下城高城高森城以上二十箇所なり彼阿蘇大宮司先祖を尋るに往昔神武天皇豐葦原中つ國をうち夷けまし大和國橿原宮に在せしとき第二の皇子八井耳の命の第五の子健磐龍命を阿蘇に封せられしかは健磐龍命大和國より阿蘇にくたり給ひ居住し給ふ其所を今宮地といふ同國草部吉見神（河蘇十二宮の第三國龍大明神）にして今の檜大宮司か祖なり）女比咩神（河蘇都媛なり）を婚て生す子を速瓶玉命と號す豐神天皇の御宇に國造に定給ふ其後景行天皇十八年六月帝阿蘇にいたりたまふとき阿蘇都彥阿蘇都媛人と化してあらはれたまふ是健磐龍比咩神の靈なり景行帝速瓶玉命の子惟人に勅を下し神社を建祭祀を司しめ給ひしより大宮司はしまれり（一說には河蘇鎭坐は孝靈帝御宇に始と有）承和十年六月に阿蘇神主に笏を把ことを預らしむ治承四年四月に惟人の末葉惟泰大宮司に任せられ建久年中まて在職す惟泰より惟次惟義惟景惟助惟國と相續し代々二位三位に任しけるも他に異なる神胤たるがゆへとそ聞へける

○菊池武士遁世事

菊池武重病死しければ其子次郎武士（ヒト）を相續して肥後守と號す武士甚た佛法を尊み世事を厭ひ隱逸の志あり常に詩を賦し歌を詠するをもつてたのしみとすあるとき大智禪師を請して四方山の雜談ともの次に大智いはく足下に短命の相あり出家せは長命ならんと有りしに武士應諾し領知を叔父武光に讓り剃髮し祖禪と號し諸國を修行し本國に歸り菊池郡寺尾野の櫻を見てよめる歌に

袖ふれし花もむかしをわすれすは我墨染を哀とはみよ

其後いつち行けんおはる所を知らさりける

按るに菊池系圖並畧傳に右の武士を武重が子とす然れ共廣福寺に正平八年十二月五日比丘尼慈春と云者の狀あり（相傳ふ慈春は武重武光等が母と）其狀にかしこまつて申入候ひこの守たけしけのめいをうけてようしたけひとめしかへされ候さた大きに候はゝほうぎのほうでうへかへしんすへく候（下略）とあり又武士か鳳儀山寄進狀に武重ことを故兄にて候者と記すこれをもつてみれは弟を養子とせるにや

○武重死去の年月あれす但し武士か誓紙に

敬奉レ對ニ三世常住十方三寶殊者鳳儀山七佛五十餘代佛祖御前一誓申發願事

一守ニ五常天道一全ニ武畧之家一奉ニ爲君一持レ節可レ仕ニ朝家一候

一幼歳繼レ家之間不レ明ニ天道正理一於レ事違ニ武重遺命一頗多矣仍爲レ謝ニ一身之咎一雖レ爲ニ頭目髓腦一於ニ爲レ法爲ニ師者不レ可レ奉レ惜候

一於ニ眞俗二諦一不ニ敢違ニ師命一一心護ニ持正法一可レ令レ報ニ謝武重厚恩一候若此條々於ニ違變一者直罷ニ蒙天罰一永失ニ弓箭之家一可レ申候仍誓文如レ件

藤原武士

興國三年壬午三月十七日

とあれは興國二年比にも武重死去せるにや

○又武士乙阿迦丸と云ふ者を養子とせる事有とみゆ乙阿迦か誓狀を左に載

敬奉レ對ニ三世常住十方三寶殊者七佛五十餘代佛祖并天龍護法善神御前一誓申發願條々

一隨分外順ニ五常天理一內行ニ大乘心法一爲ニ大法內外護一可レ奉レ護ニ持佛祖正法一候

一繼ニ武重武士家一之間於ニ文武二道一仰可レ守ニ正直天命一候

一奉レ布ニ施身命於佛祖正法一之間假令雖レ擢ニ頭目髓腦一發願之後不レ可レ奉ニ敢違ニ背師命一候

此願若破候はゝ直罷ニ蒙三寶龍天護法善神殊者當國鎭守阿蘇大明神御罰一永可レ失ニ弓箭冥加一候

興國三年八月七日

乙阿迦丸

又武士か狀に

かしこまつて申入候武士があとをようしとしておとあかにゆつりて候へともほつくはんをもやふりいかやうの事も候はん時いあにゝて候よいちとのをようしとしてあとをゆつり候へく候もしよいちとのもほつくはんをやふりたうけのきようにに候はすいそうの御はからひとしてとのきやうたいいちそくのなかにきりやう候はんものにあて給はり候へく

武士恐々謹言

十月二日　　武　士

ある人いはく乙阿迦丸は武光が幼名なるへしと分明ならす

○武士が起請文あり左に記す

てんはつきしやうもんの事

一せいたうの事はまゆ人のぎまち〳〵なりといふともまやうしきの人のきをほんとすへしたとひ武士すくれたるきを申といふともつしま殿はやしはら殿まさきとの次屋殿一とうなくは我儀をすてらるへく候この人〻一とうしてさためられて候儀をいあへてやふるへからす候

一つしま殿の申され候といふとも人々の一とうなくはもちゐたてまつるへからす候

一おほき殿かたほた殿もよりあはれ候はんときゝこの人まゆに入たてまつるへく候この人々はみなしやうちきのきをまほられ候あいたせいたうの事においては萬事まかせたてまつり候若このでういつはり申候はゝ八幡大ほさつの御はつをかうふるへく候

興國三年八月十日　　藤原武士

○武士就二大智禪師一八代高田御所に達する書に

武士天性愚昧不レ辨二天道之天理一是以奉二爲君一爲レ家若於下可レ爲二後代之難一振廻有ヒ之者任二武重遺言之旨一被二讓與一候所領不レ殘二一所一於二兄弟一族之中一撰下可レ爲二仕レ朝器用之者一可下令レ嗣二當家一給上候以二此旨一宜レ有二御披露一候武士恐惶謹言

興國五季正月十一日　　藤原武士

進上鳳儀山侍者中

○按るに唐の柳渾といふ人十四歳のとき神巫と稱する者あり柳渾を見て見の相天にして賤し浮屠とならは長命ならんといふに親族各巫か言に從んとす柳渾かいはく我異術をまなひて壽からんよりは聖人の教にあたがふてすみやかに死せんにいまかしと學にすゝむこと篤ふして後に宰相となり七十餘歳にいたるといふこと柳河東集事文類聚等に見へたり大智が武士を相するも粗相似たりその惑ふとまとはさるとは豈たゝ天淵のみならんや謄寫のつゐておもひ出るにまかせてこれを記していましめとすといふ

菊池傳記卷一終

菊池傳記卷二

○足利直冬西國下向附河尻幸俊事

肥後國飽田郡河尻鄉といふ所に河尻幸俊といふものあり彼が先祖は西宮左大臣源高明公の後胤に實明といふもの肥後國河尻郡を賜り河尻三郎と號し河尻の城に居住せしより世以家號とす實明より十代の孫左衛門佐泰明といふもの寒巖和尚を尊敬し弘安六年に大梁山大慈禪寺を建立す幸俊は泰明か子なり代々菊池と不和なる故尊氏朝臣の御敎書を申しうけ肥後守と號し菊池と度々合戰し利を失ひけれはあはれ大將もかな取たてゝ一戰を快くせんとおもふ折ふし足利右兵衞佐直冬中國の探題にて備後の鞆に住せられしが高師直が爲に追落されて去貞和五年九月十三日河尻幸俊か船に乘り肥後國に落られしかは幸俊ねがふ幸と悅ひ直冬を大將とし同國詫磨郡本山城主詫間別當太郎守直同次郎宗直（大友系圖を考に豐前守能直二男詫磨別當能秀と云ものを載たり守直は能秀か末葉なるへし後に菊池家より詫磨家を繼たる事もあり）をかたらひ國中をかりもよほすに馳集るもの甚多し程なく河尻が勢雲霞のごとくになつて將軍方宇都宮三河守と合戰し百餘級の首を得それより宮方鹿子木大炊介貞基が籠りたる合志竹迫（タカヅ）城を責陷す然處に太宰少貳賴尙いかゝ思ひけん直冬を壻として己が舘にをきしゆへ九州の輩心を通し手に屬するもの多かりしかは肥後に押寄て菊池武光と合戰し直冬賴尙討負て筑前に引退けは河尻幸俊は剃髮染衣の姿となり菊池に降參して漸く命をたすかりける

傳云右に載河尻三郎源實明建久八年鎌倉より八幡大神を河尻に勸請し一社を建伊勢春日住吉阿蘇をあいせ祀り五社大明神と號す

○右に載大梁山大慈禪寺は河尻庄にあり後宇多帝の御願紫衣の道場にして曹洞宗なり開基寒岩和尙義尹は後鳥羽帝第三の皇子母は贈左大臣藤原範季の女重子修明門院と云義尹幼して佛乘に歸し比叡山にのぼり台敎をきはめ又宗を改て越前國吉祥山永平寺の道元禪師に隨ひて禪法を學ふ志かれとも心いまたあきたらす二十七歳にして船に登宋國に入天童山にのぼり大白禪師に參し無外に謁し退耕にまみえ虛堂に學ふ（義尹宋國にて道元語錄を著し諸僧に序せしめ世に行ふ經山寺虛堂か文にも義尹事を載す）咸淳三年商船にのりて歸朝し筑前博多の聖福寺に住し後に肥後に來り小保里に住す文永六年河尻泰明が妹素妙尼が請によつて宇土郡に三日山如來寺を建立し寒巖みつから釋迦彌陀藥師を彫刻して安置す建治二年四方に告て大渡に長橋を作らしむ河尻左衞門佐源泰明師を尊敬して法場の外護となる弘安六年一寺を大渡に建立す寶殿法堂庫院丈室三門こと〳〵く備る師手つから釋迦文殊普賢の像を刻んて安置す往日師南ニ遊明州一の日大慈山の佳境を愛して心に忘れす今大渡の津たま〳〵明州に似たるかゆへに寺を大慈と號し山を大梁と云長橋あるが故なり（古の大渡は今の大慈寺山門の前にあり絲川の流なり寒岩勸化して大梁橋をかまへ往來の便とす）よつて山號を大梁と云其橋今は絕て今の渡りをも大渡と云名所歌に肥後の國赤甫山や平河や湊河あり大渡の河とよめるは是なり絲河は益城郡矢部郷菅村目丸村の邊より流れ出る河なり寒岩和尙大渡橋幹疏云遠廻二甲佐靈岳之西東一而碧潭似レ藍謂二之絲川一也とあり河尻ハ名高き所にて異邦までも聞えけるにや圖書編蒼霞草載二肥後國圖一開懷世利と記す）龜山法皇道譽を敬聞あつて謚を下し紫衣宸翰の額を賜り擧て官寺とし給ふ世に法皇長老と稱するは皇子なるが故なり寒岩晚年に大慈寺を高弟鐵山に讓り其身は如來寺に遷る寒岩自畫像に自讚あり左に記す

額皺眉霜頗本懷、百醜千拙具二形骸一、手中一脚傳來倘、脚下低高好艸鞋、他未二識知一圖二老體一、謄還添レ筆豈按排、

永仁己亥季春月半日　　如來禪寺義尹自畫讃

寒岩和尚於二如來寺一寂す正安二年八月廿一日なり示寂のとき筆を取て偈を書して云く八十四年動靜得レ禪末期一句威音以前と筆を置て化す其塔を靈根と云四神足あり斯道淨熙鐵山士安愚谷常賢仁叟齊希と云各一方の宗主となる鐵山大慈寺に住すとき豐後萬壽寺の慧文朝廷に訴へて住せんとを望む勅命あつて磬一聲の中に詩先になる者を住しめんと有しに鐵山聲に應して詩を賦す

先王綸旨定二封疆一、寺號二大慈一山大梁、從レ是兒孫相繼住、盡乾坤裏有二誰妨一、

聞くもの稱せさるはなし故に鐵山異儀なく住す延元元年鐵山於二大慈寺一寂す辭世に云鐵山崩倒九十一年、地獄天道淸風明月とあり末期に高弟天庵懷義師に向て云く和尚行履甚處落在と鐵山眼を開き答て云盡十方空唯一鼻端と云畢て瞑といふ又龜山帝宸翰の額後は燒失し今に相傳ふ勅額は後奈良帝の宸筆なり綸旨の趣に云

九州肥後國大梁山勅賜大慈禪寺者、爲二龜山禪定法皇之願一、弘安元年御建立之靈蹟也、寺造二成就一之後、自書レ之賜二額題一、今之寺號是也、爾來人皆呼レ之謂二肥後曹洞一、抑開山寒巖義尹大和尚、則依レ爲二彼仙院之皇胤一、宗徒號二法皇長老一云云、當寺之重器酷超二于他境一、是以祝二楓陸無疆之聖算一、祈二柳營有德之武運一、剩擅二守護不入之威一、而去永正庚辰之歲、干戈動二邦內一、災火罹二邊地一、爲レ之殿堂樓閣過半變二灰燼一、而勅額亦從レ之、妖孽斯何言耶、因レ茲有二門派之一僧一、來而仰伏以希レ再二興之一、天許二其志不一淺而已、故下二宸筆一裁二六字一、偏仍二舊貫一可レ觀、者綸命如レ此、仍執達如レ件

享祿二年四月十九日　　按弁官補任正五位上宣綱歟　右中辨在判

當寺住持禪室

○菊池武光陷二小國九箇處城一事

菊池肥後守武光は武時入道寂阿が十男にて初は豐田十郎と號しけるか武士か跡を嗣て肥後守と改む母は赤星有隆か女なり武光幼より聰明にして能武事を勤む勇謀父祖に倍し功名日域に溢れり延文三年尊氏朝臣より筑紫の探題として一色直氏同範光を差下されしに武光やかて押よせ打散しけれは直氏範光一戰に利を失ひにけ上りけるゆへ小貳島津松浦阿蘇草野鹿子木以下皆宮方に從ぬ其後武光は畠山國久か籠たる日向六笠の城其子民部太輔か籠りたる三俣の城を攻落し三百餘の首を得て歸陣せり武光又少貳阿蘇と牒し合せ豐後に發向して大友をせめむと議するに少貳忽心を變し太宰府に旗を揚れは阿蘇大宮司は阿蘇郡小國に九箇所の城をかまへて菊池を通すましと議したりける先滿願寺口阿蘇境の城には北里式部少輔に醍醐山滿願寺小國にあり眞言宗也龜山帝御宇に北條相模守時賴の弟六郎時定遠江守隨時修理亮定宗建立の地なり開山經果和尚といふ時に文永十一年六月十二日也の僧ともを相添三百餘騎此所を今陣床陣鼻と云矢田原口の城には北里玄蕃以下五百餘騎竹熊口動目喜の城には北里越前

守北里紀伊守五百餘騎鐘か城には北里大和守八百餘騎入江の城には實原一族二百五十騎守護陣の城には松岡丹後守七百餘騎にて是をまもる櫻尾の城をは北里加賀守一千五百餘騎にて相守る此櫻尾の城と云は加賀守か先祖に綿貫次郎左衞門妙義といふ勇士阿蘇郡中を廻りて要害無雙の所なりとて築きたる城郭なり涌蓋山の中櫻山と云所なる故に櫻尾の城と號す山高く谷深く甚た險窄の路なれは百萬の勢を以て責る共輙落しかたくそ見へたりける大友よりは玖珠侍三百餘騎をつかはし小國の城楯平山に城を築き籠塚と號して守らしむ是は豐後肥後境にて防くへしとの事なり同中山と云所に城を築き大友勢二百餘騎かくし置軍半はにおとつて切くつすへき方便なり此二箇所を合せて九箇所の城なり且菊池勢打入を見せしめんと斥候の者數箇所に出し小國の內嶽湯大比良にも豐後より檢使として人數を出し玖珠北里か防き止むる躰をみせしむ斯る所に武光菊池を出てすてに小國にかゝる所を矢田原口にて相さゝへけるを武光打破て通るを鐘か城にて防きとゝめんとしけれは責懸追落しけれは城の大將大和守は山道を傳ひ櫻尾の城に引とゝもる守護陣口の城主松岡丹後守兼て議しけるは菊池勢に矢をはなち掛け悪口して退かは武光勝に乘て追懸櫻尾の城を攻むへし身方より防箭射させ會釋とき玖珠勢籠塚の城中山の伏兵菊池かうしろより押寄へし時に櫻尾の城より切て出不知案內の菊池勢を嶽湯保津貝破湯河內耳斬赤谷なとの節所に追落し討取るへしとて守護陣口にて松岡丹後守矢を放ちかけ悪口して引けれは如ゝ案菊池勢追懸櫻尾城に押寄る然る所に玖珠勢如何したりけん合圖を違へて懸合せされは菊池いよ〳〵勝に乘て城を攻落し三百餘の首を斬すて豐後國に打入ける（豐後勢陣取し所を屋形平といふ）

按に此後豐後合戰に菊池勝利を得たりと云傳ふるといへとも其事考にもれす

○筑後合戰事

延久四年七月懷良親王を大將とし奉り菊池新田の一族太宰府に寄ると聞えけれは太宰頼尙同子忠資松浦島津の一族河尻肥後守入道堯信詫磨三郎貝正鹿子木三郎貝繼（鹿子木系圖に鹿子木三郎貝繼といふ者見へす鹿子木兵衞貞教弟に三池三郎貞繼と云者は有し之）以下八萬餘騎杜（ツツリ）の渡を前にあて味坂庄に陣を取り宮方には親王を大將とし奉り相從ふ公卿二十餘人新田一族八人侍大將には菊池武光同子次郎武政肥前次郎武信（菊池與一武隆子）同孫三郎武明（系圖には武信か子片保多三郎武明とあり）赤星掃部亮武實（有隆孫遠基子）城越前守隆顯（隆頼子）以下八千餘騎高良山柳坂水縄山三所に陣を取り同七月十九日菊池手勢五千餘騎筑後河をわたり少貳か陣に押寄る少貳三十餘町退て大原に陣す同八月十六日夜半に菊池夜討になれたる兵三百人すくりて山を越へ水を渡らしめて搦手にまはす宗徒の兵七千餘騎を三手に分け筑後川の端にそひ川音に紛れ嶮岨を廻りて押寄る大手の勢いまは近付んと覺る程に搦手の兵三百人敵陣に入て三箇所に鬨を揚け十方に走り散敵陣に火を放ち後にまはつてひかへたりもとより分內せはき所に六萬餘騎役所をならへて居けれは此音に驚き何れを敵と見わけす同士討に三百餘人討死す夜明ぬれは一番に菊池次郎武政千餘騎にて打てかゝれは少貳か嫡子太宰新少貳忠資五千餘騎にて戰けるが少貳が勢討負て忠資及朝日胤信筑後新左衞門日向刑部（考二日田系圖一日田上野守大藏詮永延文四年與菊池戰討死とあり日向刑部は詮永か事か）以下討るゝもの數をしらす身方討死には菊池孫三郎武明賀屋兵

部見參岡庄宇都宮國分八十三人なり二番に菊池肥前次郎武信 赤星掃部亮武貫 千餘騎にて
すゝめは少貳か次男太宰越後守賴泰同出雲守二萬餘騎にて打て掛り入亂れて戰ふに菊池方
には太宰越後守賴泰を生捕り饗塲兄弟山井相馬木綿西河草壁以下七百餘人を討捕は身方に
も赤星武貫結城親昭加藤宗高合田熊谷三栗屋松田以下三百餘人討死す三番に宮の御勢新田
一族菊池父子一手に成て三千餘騎討てかゝれは松浦草野島津澁谷の兵二萬餘騎矢先を汰へ
て散々に射る宮も三ヶ所御手を負せ給ひ日野坊城洞院花山院北山北畠春日土御門高辻葉室
以下討死せらる新田一族其勢千餘騎にて横合にかゝつて戰ひけるに世良田田中桃井岩松堀
口江田山名討死す武光武政憤激して戰ふに馬射られて倒れ共鎧よけれは騎手創を被らす騎
替ては驅入々々十七度までかけゝるに武光兜を打おとされ二ヶ所の疵をかうふりなから武
藤新左衞門と組て落ち首を取鋒に貫き兜を取て着し敵の馬に騎替て多勢の中に破て入其日
卯刻より酉の下りまて息をもつかす戰ひけるに新少貳をはしめ一族二十餘人郎從四百餘人
其外の軍勢三千二百二十六人討れけれは少貳方かなはしとや思ひけん太宰府に引退き寶滿
嶽に引上る菊池方も勝軍なれ共千八百人討死し手負おほけれはつゝいて寄る事もかなはす
凱歌を唱へ歸陣せり

○飯守山香椎合戰事

康安元年七月將軍宮を大將とし奉り新田一族二千餘騎武光三千餘騎博多に出て香椎に陣を
取り大友刑部七千餘騎太宰少貳五千餘騎宗像大宮司八百餘騎紀伊常陸前司三百餘騎一手に

なつて對陣す上下松浦の一黨兩勢三千餘騎飯守山に上りて敵のうしろにまはる兩陣二十餘
町を隔て陣を取り兩月を送るに城越前守隆顯松浦か陣に山伏法師なとを遣はし謀をもつて
狐疑を生せしめ置て八月六日の曉城越前守千餘騎にて飯守山によせて鬨をつくる松浦方大
勢にて城よけれとも疑ありて衆議一決せす身方に野心の者ありと呼つて落けるを隆顯勝に
乘て追懸過半討とりぬ此上は少貳大友を討へしとて菊池宮の御勢と一になつて五千餘騎明
る七日の午の刻に香椎の陣に寄せけるに松浦が敗軍に恐怖せる折節なれは一戰にも及はす
二萬餘騎逸足を出してにけゝるを追懸〳〵討とる事其數をしらさりけり

○長者原合戰事

足利方如斯討負て九州宮方に屬しぬと聞えけれは斯波左京太夫氏經を九州の探題に補して
差下さる氏經すてに大友が館に着ぬと聞て武光次男彦次郎武敎に城越前守宇都宮岩野鹿子
木民部太輔貞員大炊介貞基子下田帶刀以下五千餘騎を差添て九月十三日豐後國に差向ふ氏經是を
聞て路次に向て戰へとて子息松王丸を大將として太宰少貳舍弟筑後次郎宗像松浦七千餘騎
筑前長者原の路を遮り待所に同月廿七日菊池彦次郎五千餘騎を二手につくり長者原に寄て
戰ひけるが武敎手負從士三百餘討れて危く見へしに城越前守隆顯五百餘騎にて入替り戰ふ
に少貳筑後次郎宗像松浦が一族四百餘人討れけれは探題方少貳大友松浦宗像一度に引退き
けるを武光三千餘騎にて武敎が勢に馳加つて豐後に發向す探題少貳大友松浦宗像は是まて
も打殘されたる兵七千餘騎ありけれ共懸合の軍とてもかなはしとて探題と大友とは豐後高

崎の城に楯籠り少貳は岡城に籠り宗像大宮司は宗像の城に籠りけるを菊池豐後の府に陣を取り三人の城の中を押隔て三年まで遠攻にしたりければ氏經も高崎の城を出て洛に上りし故九州の諸士こと〳〵く旗下にそ屬しける貞治三年大内介弘世三千餘騎にて肥後に發向し武光と戰けるが弘世戰負て降を乞洛に逃上る此時に及て九州皆將軍の宮にそ從ける

按るに武光元弘より應安に至るまて四十餘年が間の戰功勝て計ふへからすまかれ共家乘絶て傳らされは詳に記する事あたはす惜むへきのみ

○土俗の說に延文五年十一月三日菊池武光合志五郎をせめんとて三千餘騎にて向けるに合志郡鞍嶽に雪つもれるをみて武光狂歌に

鞍嶽は銀覆輪か今朝の雪霰梨子地にみゆる山形

それより合志が城に押よせて責め陷すといふ

○一說に豐後の住人津江山城守長谷部信經菊池と不和なりけるが或時武光平河に漁りに出けるとき津江三百餘人にて急に襲ひうたむとせしに武光わつか二十餘人にて敵を退ちらし百餘級の首を得たり津江勢引返したるか故に其所を勢返しと云永野村の北にあり其上は津江に通ふ一騎打の細道なり勢返邊の黑き岩に旗弓鞍鐙甲冑太刀靫幕紋は丸の内に三星なりなと白く畫けるかとくに見ゆ是津江勢兵具を捨たるまゝるしと云傳ふ

○菊池武光建立熊耳山正觀寺附菊池五山の事

此武光菊池郡に熊耳山正觀禪寺を建立す時に興國五年北朝曆應三年なり開山を大方恢和尚と云響

千光國師法を秀山中和尚に傳ふ秀山法を大方に傳へり後に秀山正觀寺に來る故に兩開山と稱せり菊池爲邦のとき言上によつて十刹の位に備はる開山以後代〻住職の次第一代もかけすのせて寺記にあり又武光征西將軍宮の命によつて菊池郡に五山を建立す五山は亘理村輪足山東福寺此寺に菊池則隆延文二年二月二十五日東福寺の秀吉法印に呈す寄進狀あり然は再興して五山の員にそなふるか出田村手水山南福寺始は天台宗此寺の近邊を西福寺村といふ始は淨土宗今禪宗になる無量山西福寺此寺の近邊を西福寺村と袈裟尾村袈裟山北福寺弘安四年建立永福寺と號し天台宗なり此時禪宗に改め五山に加ふ四方に中央に九儀山大林寺を建立す

至正六年、楚石和尚題二大方和尚像一曰、菊池蘊レ秀、菅族增レ光、早歷二侍司一、稟二秀山于築之圓覺一、次掌二藏鑰一、依二嵩山于相之建長一、駕二輕車一而就二熟路一、著二錦衣一而歸二故鄉一、前藤守、後西征、並爲二檀越一、自二正觀一遷二顯孝一、兩坐二道場一、其出也、說レ妙談レ玄、儼臨二大衆一、其處也、收レ綸罷レ釣、高臥二閑房一、夫是之謂下父二秀山一祖二佛燈一松源第六世孫大方禪師上者也、

○河野通直屬二將軍宮一事

爰に伊豫國の住人河野六郎越智通直といふ者あり其先祖を尋るに天押穗耳尊の子饒速日尊の苗裔大新河命の孫物部大小市〻命といふ人應神天皇の御宇小市國造に定給ふ小市〻國は今の伊豫の國の越智郡なりそれより代々相續して通直にいたれり一說に孝靈帝の皇子彥狹島命を伊豫國に封し給ふ其子小千御子と號す其末葉河野なりと記す然れとも日本紀に景行帝五十五年春二月戊子朔壬辰以二彥狹島王一拜二東山道十五國都督一然共到二春日穴咋邑一臥レ病而薨之是時東國百姓悲二其主不レ至竊盜二王尸一葬二於上野國一とあり伊豫に封せることはかつてなし然るに通直足利方を恨る子細あつてひそかに使をさし下して宮方に屬せん事を望みける懷良親王無二子細一御許容ありけれは貞治元年七月廿九日其勢三千八百餘騎兵船五百餘艘に打乘て豐後に渡海し同三十日筑前に趣き宗像大宮司か館に宿す其折ふし將軍宮太宰府にまし

ましける間南朝正平二十年八月三日宗像より太宰府に到て將軍宮に謁し奉りけるに即ち通直を讃岐守に任せられ家例にまかせ西海の警固たるべしと仰せられけれは通直斜ならす悅て豐後國に赴き菊池武光同武政等に對面し同月十一日に肥後國にゆきいたる同廿一年將軍宮より撿使として大豆津將監蘆屋船三艘水主十人下し賜て船に乘へき人を配當す一艘は宮山太郎中川彈正吉岡帶刀江見次郎樫尾四郎一艘は菊池掃部大籠又四郎淺海八郎五郎太田田井一艘は宮前左衛門太郎森五郎重見庄五郎中次三郎南八郎筌瀨（ヤナセ）孫十郎淺海五郎左衛門高山等也今岡左衛門通任か船には小山六郎五郎宮島平八中川隼人亮同九郎次郎高尾八郎左衛門得能久三郎樋口等也村上三郎左衛門義弘か船には尾越左衛門五郎高山刑部鴨池新左衛門等也此者共に肥後の人數相加つて二十四艘にて豐後臼杵神稷守江周防津々浦々を侵し掠む同年四月大友方より豐後國宮熊の城を攻けるに菊池河野後詰して勝利を得たり此ときに及て兒島高德名和長年か一族等篠塚伊賀守以下も追々に西國に下り將軍宮に屬し奉る其御威光九州に輝き服從せさるはなかりけり

○菊池武政遣二使大明國一事

其後菊池武光家を嫡子武政に讓りしかは武政肥後守と號し隈府に城を築て住居し武威父におとらす此ときに懷良親王は八代にもし〳〵御養子泰成親王は太宰府に御住居ありしかは九州の諸將おの〳〵兩御所に出仕しけり應安四年武政親王の命を奉し故例を温ね隣好をもとめて使僧如瑤藏主を大明に遣しけるに高皇帝使僧に對面せられ日本の風俗を問はれけるに彼僧詩を賦してこたへける

國比二中原國一、人如二上國人一、衣冠唐制度、禮樂漢君臣、銀甕（サクコシ）蒻二新酒一、金刀膾二錦鱗一、年々二三月、桃李一般春、

高皇帝甚だ感感ありしとなん翌年明より趙秩といふ者を日本につかはしぬれは菊池これをとゝめ懷良親王に謁せしめてかへす明帝始めは日本の國王なりとおもひしか後には然らさるとをさりぬ故に其後大明の使僧仲猷無逸と云ふもの來朝す無逸か天台坐主によする書中に云前兩年皇帝凡三命二使于日本一、關西親王皆自納レ之、于時以二祖來入一（後光厳帝）朝稱賀、帝召二天寧寺住持祖闡瓦官敎寺住持某一命曰、朕三遣二使于日本一者、意在レ見二其持明天皇一、今關西之來、非二朕本意一、以二其關禁非レ僧不レ通、故欲レ命二汝二人一、密以二朕意一往告レ之、云云、將軍義滿これを聞て大に驚れけるとなり

○今川貞世爲二九州探題一下向附藤崎宮靈鐘の事

九州すへて宮方に屬し菊池か支配に從ふよし聞へけれは將軍義滿朝臣退治延引におよひなは以ての外の大事たるへしと應安四年二月侍所の別當今川伊豫守源貞世（駿遠二州の守今川國範第二の子なり）を九州の探題に補せられ（應永三年甥の今川泰範大内義弘の爲に讒せられ探題を停らる在職二十六年なり）小勢にてはいかゝとて大内介義弘を差添らる貞世は弓箭とる身の面目これに過きすと悅ひなから若し遠州の所領と九州の地と易りもやせんと心もとなく思ひけれは一首の歌を管領細川頼之におくりける

何となく心にかけて思ふかな濱名のはしの秋の夕くれ

賴之の返辭に遠州の舊領は別に子細あらしとの事也けれは洛陽を打立て筑前博多に下着し其後折々肥後にも來りて阿蘇大宮司河尻左衞門太郎なとを相かたらひ菊池退治の計策をめくらしけるあるとき貞世伸秋藤崎八幡宮に詣ふでゝ祠官の說を聞に當宮は朱雀帝御宇承平五年に勅願の子細有て御勸請九州五所別宮の第三にて其靈驗著しき都鄙におるてかくれなし圓融帝の御宇に淸原元輔肥後守たりしとき當宮にて子の日の遊を催し藤崎の軒のいはほに生る松今幾千代か子の日すくさんとよめりとかや又當宮の靈鐘はそのかみ宇佐彌勒寺の僧何かし當國に來り所願の子細ありて毎朝參詣しけるに神宇のかたはらにおるてあまた度跌る所ありけれは僧あやしみて火をともし見るに地中に鐘の龍頭少しみゆ彼僧人をあつめ穿しむるに穿るにまたかひて地にいれり其時僧祈念しけるは此鐘もし法器となるへくはまさに神助をくはへ給へと祈りけれは其夜神殿より一筋の鏑矢出て空中に飛行けるに社僧神官大に驚き恐れ翌旦これを見けれは白羽の矢件の鐘にたてり各奇異の思ひをなし手ことにほりて鐘を得たり是れ今の靈鐘なりと語りけれは貞世これを感歎し新たに鐘を鑄さしめ銘を勒して樓上にかけ右の靈鐘をは神殿に納め置きたりける其後あるとき雨風の夜半に客ありて祠官三郎丸藏人太夫か門をたゝく則これをひらくに客云く我は是山鹿鳥氏(フジ)それかしか使なり前に換寫す所の鐘に鍛(キス)あり故に鐘を改め鑄て是を獻す樓上の鐘にかへよ答云今すてに更深け雨また車軸の如し明日これをかゆへし客云く唯今これをかへんとおきりに乞ふ其時三郎丸以下人を集めて華鯨をあらためかゆ他日其禮として使を山鹿の鳥氏か家につかはすにあへて此ことをあらずと答ふ是祓河の末鐘か淵より河伯か獻せる靈器となり（此鐘鉄索を以てかくるにたちまち切れて地に墮つこの故に苧繩をもつて樓上にかくるにおつる事止まる）

傳云右に載藤崎宮は鮑田郡宮內鄕にあり當社御鎭坐の日勅使持る所の藤鞭枝葉生す故に名つけて藤崎と云三所に埋み神靈もし感格あらは必奇瑞あらんと云則藤鞭枝葉生す故に名つけて藤崎と云ふ（藤崎とは藤割と云ふ心）後世五所別宮の號有いつれの年と云ことをしらす（一說に承平五年五所宮を一度に建立と云ふは非なり）五所宮の次第は第一筑前大分宮（神龜二年建）第二肥前國千栗宮（天平寶字二年建）第三肥後國藤崎宮（嘉禎四年六月十六日權中納言爲家の口宣に當宮者五所別宮第三鎭護國家之禮社當別第三之宗廟とあり）第四薩摩國新田宮（神龜二年建）第五大隅國正八幡宮（天平寶字二年建）以上五社なり後一條帝萬壽年中當社炎上す承平の例を追て時の國司造營せしむ崇德帝長承保延兩度の大風に當社破壞す則保延年中に修造をくはふ後堀河帝寬喜二年八月一日の暴風に神殿傾破す四條帝御宇嘉禎四年六月十六日國守藤原盛時か願によつて綸旨を賜り同七年六月十六日權中納言藤原爲家大史小槻宿禰行元下向し修理をくはふ後深草帝建長年中又炎上せしかは再ひ修理をくはへらる後伏見帝正應年中後二條帝嘉元年中の大風に破損の時も先規のことく造り改めらる花園帝延慶二年に炎上す同御宇正和文保より後醍醐帝元亨年中までに毎度肥後國を以て藤崎宮を造立すへき旨院宣を下し給ふといへとも遠國故事ゆかさりしかは同御宇元德二年三月十七日藤崎宮造營料所肥後國正稅段米の事を春宮太夫公宗上啓あつて可レ被レ申二關東一旨の綸旨幷に相模守武藏修理亮下知狀を下し嚴密に可レ致二其沙汰一之旨ありといへとも程なく天下動亂の故に造營延引に及ひ神體久しく假殿に遷

し置所に南朝正平十二年閏七月十五日の夜又暴風吹て假殿ことゝく破損すこれに依て同年十一月十七日祠官中より菊池肥後守武光まてに達する注文に云

八幡藤崎宮可レ被レ爲二造營一次第

○大宮三所御殿九間一面○拜殿五間二面○二階樓門一宇○廻廊四十六間○若宮五間一面○舞殿三間二面○高良社三間一面○阿蘇社六間一面○寶藏六間四間○竈殿五間四面○二階鐘樓○天神社一間一面○荒人神社橘能貞一間一面○左右善神王社各一門一宇○鳥居三一宇○廳屋七間四間○四壁築地○四方門南北棟門○西四足○東平門所○彌勒寺三間四面○勝城寺三間四面○妙樂寺三間四面御輦宿三宇各四間　以上

此時修造を加ふるやしれす

文明八年五月十四日菊池肥後守重朝藤崎宮におゐて一千句の連歌を興行す且和歌を詠し詩を賦す此時隈部上總介源忠直賦レ詩序あり甚た長しこれ故に略す此詩は古人の作なる故載レ之

和光垂跡八幡宮、誓願遙期利物終、新見洪鐘涌二出地一、傳聞鳴鏑響二飛空一、藤其倚レ松千堆紫、花又傾レ陽一天紅、共獻二詩歌一靈廟下、慇懃拜手欲二相通一、

後奈良帝享祿年中飽田詫磨の領主鹿子木三河守源親員入道寂心當宮の祠官と心を合せ當宮造營の功をなして舊貫に復せしむ此事叡聞に達し綸旨を賜る其趣云

當社者承平年中草創、靈驗無雙都鄙尊崇之神社也、然頃年以來、總國亂逆度々、半斷絶之處、忽企二造營一、悉復二舊貫一、最神妙叡感不レ淺者也、彌全二修造之功一、可レ令レ致二國家安泰之懇

祈一者　天氣如レ斯、悉レ之以レ狀、

享祿二年八月二日

右中將判

藤崎八幡宮祠官中

天文十一年六月三日勅額をおくらる此後藤尙侍より祠官共への中文に

文げざんに入て候ふぢさきの宮のがく御禮に千匹まいりまいらせ候、めてたくおほしめし候よし申參候このよし心へらるへく候かしく

同年島崎宇佐公員中頃菊池氏か押領する所の神領の內數箇所を還し附す天正年中まて神領すへて八百餘町ありしとかや此とき祭禮の次第○正月九日射去祭同月十一日庫開○二月臨時祭○三月十五日藤祭○四月三日蒙古退治祭○五月五日御田植○六月二十九日菅拔祓○八月十五日放生會○九月九日流鏑○霜月九日初卯神祭○同月十五日若宮祭○十二月丑日祭以上十二度なり、毎年八月十五日勅使代を祇園社の光永氏相つとむ光永か先祖菅原光家といふ人天暦年中に肥後寺社御祈願所の勅使代として下向し代々相續して二十八代に及へり藤崎宮の祠官は四家あり所謂四家は三郎丸(荒人橘能貞か末葉)鬼丸行藤吉永なり中頃分れて三郎丸か庶流宮坂行藤か庶流杉尾吉永か庶流森崎と云以上七家なり又吉永宮坂家わかれて都合九家となれり

○菊池武敎與二今川大內一合戰事

今川伊豫守貞世大內介義弘は菊池一族を退治せんがため軍勢を催促するに九州の諸士日々に馳集りて雲霞のごとし武政これを傳聞て舍弟彦次郎武敎に五千餘騎を差添へ筑前に向はしむ今川大友戸次佐伯原田臼杵大野長野麻生高橋宇佐大宮司以下六萬餘騎三笠郡に陣を取一手は武藤筑後守賴武朝日久保那賀三原秋月上坐下坐宗像大宮司以下二萬餘騎味坂の邊に出

張し菊池を河の南にうけて相さゝゆ折ふし寒氣甚たしかりしかは翌年睦月の初まて六十餘日對陣す菊池忍ひになれたる兵三百餘人を商夫に拵へ百人宛三ヶ所の敵の中に入れ置應安六年二月十二日未明に五千餘騎を三手にして少貳か陣に押よする少貳も兼て期したれは懸合せ戰ふ所に例の忍ひの者三ヶ所の敵の陣屋に火を放ち鬨をあくるに少貳方周章さはきて色めきける所に武敎すゝんてせめ戰ふに少貳手負從士多くうたれて敗すれは大友大内と一ッになつて引てゆく今川父子は五百餘騎にて踏とゝまり鹿子木草野山鹿本條中村津江五條か勢を追靡け勝に乘て進む所に菊池武敎伯耆合志城赤星以下三千餘騎大友大内臼杵麻生高橋等か大勢に破て入攻戰ふに少貳方討負て颯と引退けは今川大内大友もかなはしとや思ひけん豐後の國府に歸りけれは武敎も手負をたすけて肥後國に歸陣しけり

○菊池武朝水島合戰事

今川貞世同仲秋は初度の軍に討負口惜きとに思ひ五千餘騎を引率し同年五月五日に筑前國博多を立て肥後の國に打入山鹿を經て隈府の城にそ向ける武政是を聞て道に出張し打散せとて嫡子中務少輔武朝を大將とし二千餘騎を相添て差向ける武朝隈府を出て水島の臺に打上り敵陣を見渡し拙き敵の陣押かな打勝んこと掌にありと思ひけれはわさと敵の攻近つくまて矢一筋をも放たす靜りかへつてひかへたり敵の先勢菊池か小勢を見て少しも猶豫せす攻上りけるに菊池思ふ圖に引うけとつと喚て切かゝるに今川か先勢千五百餘騎坂中より崩れ落引けるを菊池か兵勝に乘て射伏斬臥或は西川鄕瀨川に追入二百餘人うち取ける今川大にいかつて衆を勵ましすゝみ近付は武朝は葉室赤星城隈部東鄕西鄕蛇塚片角嘉惠本鄕以下二千餘騎を左右に相具し一文字に破て入息をもつかす攻戰ふに今川か大勢驅立られて千二百人うたれけれはさすか今川も討死するにも及はねは纔に殘る手勢を引具し筑前に引退く菊池か兵も六百餘人討死し殘る輩も過半疵をかうふりぬれは追したふ事かなはす勝閧揚て隈府にそ歸りける

○合志合戰事

其後今川貞世は大内義弘同盛見大友親世等をあつめて相議しけるは某九州の探題として下向したる甲斐もなく度々の軍に利を失ひおほくの兵を討たせ臆面々々とあらんは將軍の御憤り他家の嘲哢たるへし今一度潔よく合戰し此頃の耻辱を雪めんとて同年七月三日六萬八千餘騎を引率し豐後に打入阿蘇大宮司なとを相かたらひ菊池か城に押よする武政是を聞て武朝に五千餘騎を差添へ合志郡に出張せしめ雙方對陣しける所に菊池方の先陣河尻左衛門太夫手勢八百餘騎を引わけ今川方に加つて身方を散々に射たりける菊池か兵少し色めき立て危く見へしに大將武朝十六歳なれとも父祖におとらぬ猛將なれは少もひるます纔に四千餘騎の勢を以て雲霞のとくなる敵軍に破て入一人萬卒に當りて責戰ふ河尻左衛門太郎笠原奥山井田四人の者武朝を討むと馳合せて武朝か爲に切て落さる菊池か家人城五郎兵衛赤星掃部亮以下主に劣らぬ雄士等命を塵芥に比して透間もなく切てめくるに今川大内大友か大勢菊池か兵に敗られて四方に散て颯と引討るゝ者を數ふれは二千餘人に及ひ菊池方も八百

餘人討死す今川以下の諸將は豊後を指て引退は武朝も手負を助けて隈府にこそは打入ける

○菊池武朝筑後合戰事

同年十一月十六日菊池肥後守武光病死しけれは熊耳山正觀禪寺に葬り其牌名を建寺大檀那九州都督武光聖嚴大居士と號しけるかゝりしかは武政武朝以下各愁傷に軍議おこたりぬと聞えけれは大内大友少貳等此費に乘して攻うたは勝利を得んと疑ひなしと相議し筑後の田尻黒木草野蒲池肥前の大村諫早等をかたらひ大友は豊後豊前の勢を汰へすてに出陣せんとす筑後の者共は船に乘て肥後國長須濱にいたらんとす武朝是を傳聞合志六郎に二千餘騎を相添へ筑後勢にさし向ふ合志は隈府を打立夜の間に十餘里を馳て筑後國竹井原に押よせ鬨を揚て攻かゝれは筑後勢は思ひよらぬは一戰に敗北しそこはくの人數うたれける肥後の者とも是に恐怖して出戰に及はさりけれは親世も力なくして引退く武朝機に乘て筑後の者ともと〳〵くせめまたかへんとて軍兵八千餘騎を率し自筑後に向けれは田尻鑑安要川といふ所にて合戰しけれともかなはすして降參す其外の者共大友に加勢を請ひけれは親世一萬餘騎を率し筑後に打越市の塚といふ所に陣を取る武朝又押よせて戰ふに親世打負て引退きしかは筑後の者とも皆菊池に降參しけり

○詫磨原合戰事

探題今川大内大友は度々の軍に一度も勝利を得さりけれは憤おもふと斜ならす又人數を催して菊池追討の事をはかる先つ一手は今川大内を大將とし筑前肥前の勢を催し一手は大友を大將とし豊後日向の勢をしたかへ肥後國にそ打入げる大内義弘同盛見は少貳秋月等を引具し肥前路より船にて飽田郡河尻に打上る大友は阿蘇を越益城郡に打て出陣を張て待懸ける寄手は兼て議定して兩勢一手になりまた曉の霧まきれに菊池か本陣に押よせ鬨を作つて攻かゝる菊池武朝も兼て待まうけたる事なれは二萬餘人を三手に分け一手は五千はかり原の中の西のかたにかくれ横合をうたんとひかへたり一手は三千はかり健軍宮の森の陰に伏居たり殘る勢一萬二千餘人を前後中に備へそれ〳〵の將副をたゝしく率伍をかたくし鯨波をもあけす矢をも放たす靜りかへつてひかへたり寄手鬨の聲とひとしく射手を汰へて雨のふるとく射させけるか朝日の上るにしたかひて西の方に一軍ひかへたるを見て旗色少し色めけるとき武朝眞先に乘り出し時分は今そ掛れ〳〵と麾をふり皷をうちけれは西北の兩陣一度に鬨を作て打てかゝりけるに寄手立つ足もなく引退く豊後勢東をさして引くとき森陰の伏兵一度におき立て追討にしける程に殘り少なに打なされて津守の城に落行ける今川大内もさん〳〵にうち負て河尻より船に登り筑前にこそ引入ける

○將軍義滿筑紫征伐附菊池降參事

同七年三月廿三日將軍義滿菊池退治として十七萬餘騎を相從へ筑紫に下向あり菊池是を聞て征西將軍泰成親王を大將とし奉り新田一族菊池一族六萬餘騎にて筑前太宰府に陣を取り武朝武敎に二萬餘騎を添て長門國に遣はす將軍の先陣大内介義弘山名右衞門佐師氏赤松越前守顯則等五月五日に長門國に着て戰ふに菊池大に打勝て敵軍を追散す然れとも將軍より

降參の輩にはこと〳〵く本領を宛行れし故大友島津松浦秋月等の諸將皆將軍に屬し剩へ菊池か賴み思ひける合志五郎定實御船河内守盛安岩野鹿子木牧藤井詫磨本山本庄中村津江五條將軍方に降りければ菊池か軍勢不日に減して一萬に足らさる故武朝武敎中國の陣を引て太宰府に着く爰にても猶大軍を防きかたしとて太宰府をも引去て筑後高良山に陣を取將軍も續て豐後に押渡られ大友刑部太輔氏繼を先陣として京勢殘らす高良山の麓による武政か一族郎從八千餘騎出向て爭戰す寄手三千餘をうち取り城中八百餘戰死す細川賴之將軍に言上せられけるは菊池父子か軍慮聞及たるに十倍せり勢減すといふとも一萬の强兵あるへし是御方の二十萬に對すへし御方勝んは必定なれとも死亡も又おほかるへし彼の輩も奇代の雄士なれは助け置れてこそ世人の義を知る端ともならめ所專肥後を菊池に賜りて和睦の御はからひあらんになとか承引いたさゝるへきと申されけるに將軍も此儀尤とおほされけれは其沙汰を述られ賴之も書を遣してなためらる菊池宮の命を奉つて軍門に降り肥後に引かへせは同年義滿朝臣も歸洛ありとそ聞えける

○菊池武政所々合戰事

永和二年菊池武政又打出て筑後半國を打從へ肥前の内をも所々切取豐後にも折々出張しけれは大友親世防き戰ふこと數度に及ひしかとも勝利なすてに府内まて攻入故親世薩州の島津肥前の大村筑前の少貳に内通しけれは三方より勢を出し肥後國に攻入ける武政是れを聞て急き本國にかへりけるか薩摩勢をたに打退けなは肥前筑前の勢はおそるるに足らすと

て城三郎に三千餘騎を相添へ薩摩勢に差向しに同國佐敷にて合戰して薩摩勢を追退くこれを聞て肥前筑前の勢は本國に引かへる武政勝に乘て薩摩によせむと議しけるか陣中より病つきて肥州にかへりいく程なく病死したりしかは其後はさはらく軍もなかりけり

傳曰八代郡中宮山悟眞寺は曹洞宗なり開山は太原孚芳和尙にして賀州大乘寺明峰和尙より四代の名僧なり應安二年肥後に來る菊池武政尊敬して寺を建て悟眞寺と號す（應永十年八月廿八日太原孚芳寂）

○葉室親善本領安堵事

爰に宮方葉室左近將監清原親善（吉宗子）は數度の戰功ありといへとも讒者の言によつて吉野殿より本領二千八百五十町を沒收せらるこれによつて親善其歎に堪す弘和四年七月菊池武朝をもつて訴狀を献す其狀云

竊檢二當家系譜一、仁王四十代天武天皇第四皇子舍人親王五代孫、右大臣清原眞人正高後胤、四位宰相正通至二親善一五十九代、奉レ仕二朝家一、專拔二忠誠一、就レ中承久年中、曩祖修理太夫善賢、及菊池隆定不二敢與一東夷一、隨レ勅勵二戰功一、因レ茲爲二平義時一被二沒一倒本領一訖、文永弘安年中蒙古逆賊、兩度襲二來日本一之時、高善武房勵二勇於戰場一、傳二名於異域一、後醍醐帝御宇元弘三年正月十五日、高善與二菊池寂阿一令二同心一、奉二勅詔一、同年三月十三日發二向博多一、爲二平英時一、寂阿父子高善一族百三十騎遂二戰死一、建武二年、尊氏直義叛逆之時、武重吉宗令二上洛一拔二忠戰一、其後尊氏下二向筑紫一之時、在國之一族等菊池武敏討二少貳妙惠一、且於二多々良

濱ニ顯ニ戰功ヲ、去文中年中、今川貞世仲秋等寄ニ來肥州ニ之時、數令ニ防戰ヲ、殊於ニ水島鄉ニ、令レ追ニ落貞世仲秋等ヲ、然後武朝親善、奉レ屬ニ將軍宮ニ、令レ在ニ陣肥前ニ處ヲ、今川貞世又相ニ率松浦以下ヲ、打ニ出博多ニ之際、肥後守護代武國武元善安、遂ニ爭戰ヲ、令ニ追落ニ訖ヲ、其后貞世仲秋大內大友、率ニ豐前豐後勢ヲ、令ニ發向ニ之間、於ニ蜷打陣ニ、令ニ討死ヲ、天授四年、今川一族少貳大友大內兄弟、以ニ數千騎ニ寄ニ來肥後ニ之間、於ニ詫磨原ニ、遂ニ合戰ヲ、得ニ勝利ヲ、弘和一年、奉ニ將軍宮ニ進ニ發豐後ニ之間、武朝親善等之一族、忽企ニ反逆ヲ、楯ニ籠守山城ニ、此故武朝親善不レ廻ニ時日ニ馳向、悉令ニ追落ニ訖ヲ、然處何故被レ捨ニ代々三百餘歲之忠義ヲ、忽被レ爲レ沒ニ收懸命之領知ニ事、嘆息有レ餘、空沈ニ紅涙ヲ、越ニ述ニ盡忠之事實ヲ、所レ希ニ本領安堵ヲ、仍如レ件

弘和四年七月日　　葉室左近將監清原親善

と書たりける菊池武朝これを捧て訴訟しければけにもとや慮をめくらされけん親善に本領安堵の綸旨を下し賜りける

菊池傳記卷二終

菊池傳記卷三

○菊池兼朝奪ニ河尻領ニ事

菊池武朝四十五歲にして病死しければ其子左京太夫兼朝家を嗣て肥後守と改む然る所に河尻實照兼朝と不和になり度々爭戰に及ひしか應永二十七年八月廿四日河尻か家士佐河田玄蕃ひそかに兼朝に反り忠し菊池勢を引入れ終に實照を追出し兼朝河尻領を奪ひとる其後兼朝家を嫡子持朝に讓て後不和に成り蘆北郡左敷に住す此とき實照は持朝か母方の舅なる故ひそかに舊領をかへしあたへけり

○義昭僧正下ニ向薩摩ニ被ニ殺害ニ事

爰に其頃の將軍義敎朝臣の異母弟大覺寺の門主大僧正義昭といふ人南朝の寬成王と常に親しみ深しあるとき義昭ひそかに申されけるは將軍義敎邪に威をふるひ漫りに奢をきはめ公家武家とと〳〵く困窮す所專某黑衣を改め甲冑を着し將軍を誅戮し君を位に即參らせ輔佐の臣となつて萬民の苦をやすめ申へし幸に關東大にみたるゝ折からなれは五畿內の宮方或は將軍を恨る輩を相かたらひ九州の菊池大村等を催さんに勢の不足あるへからすと申されける故寬成王大に悅ひ思召勅を菊池等に下し賜ふ持朝畏て勅答し便宜の勢をそ催しける義昭も久しく出仕をやめて長髮せられけるかいかゝして漏たりけん此企將軍に聞へけれは討手をつかはし誅せらるへきに定まりしに義昭ひそかに大和法橋を召具し薩州に逃くたり菊池か方に人を遣しける所に將軍より兼て其形を繪圖にして諸國を尋ねらるゝ折ふしなる

ゆゑ薩摩の土人あやしく思ひ使の者を召捕懷中を探し見るに菊池か方への狀ありけれは扨は義昭にきはまれりと大勢はせあつまりて嘉吉元年三月十三日二人共に首をきる此とき義昭の辭世に

あたなりと思ひし花のよはひさへうらやましくも思ほゆる哉

○菊池持朝生松原合戰事

菊池兼朝か嫡子十郎持朝後に肥後守と號す菊池郡筈嶽の麓に住す筈嶽を八方嶽とも云以故に夢因和尚聖珠城備中守子正觀寺入院香語にも伏願鞍山筈嶽之氣鍾乎此一人文東武西之名冠乎彼九牧といへり此一人とは持朝とをいふ嘉吉元年赤松滿祐討手の催促にあたがはさるによつて誅戮すべき旨大内敎世に命せられしかは同年十月敎世多勢を率して少貳をせめしに少貳もあはらく防きたゝかひしか共かなひかたくや思ひけん肥前國に引退く敎世やかて少貳が所領をうはひ取る同年十一月嘉賴五千餘騎を催し筑前におしよせける所にかねて大内か内通ありし故菊池持朝千餘騎を率して生の松原に出張し少貳とたゝかふに城赤星隈部原木野白石八代以下粉骨をつくし小貳か軍を打破り數百の首を獲たり少貳父子纔に五十餘騎に成つて名護屋をさして落行は持朝は凱歌を唱へて肥後國に引かへす

傳曰飽田郡梅谷萬歲山成道禪寺は寰中和尚のひらく所なり寰中諱は元志氏は小足合志郡の人なり父常に天滿宮を信し隈府赤星村勸請して子を祈るにある夜の夢に扇のほねを賜ると見て子うまる是出家のかたちなりとて正觀寺に投す後に洛に入建仁寺の西來院にうつり南禪寺により又中華にいたり楚石梵琦慧辨禪師に參し歸りて正觀寺に住し庵をむすんで西鶴軒と號す寰中其門弟志道を遣はし閑居の勝狀をえらはしむ志道國中をめくり此梅谷にいたりて佳境を得歸て師につく寰中悅て梵宇を建山を萬歲と祝す時に應永三十三年十二月八日の草創たる故にかの世尊の明星を見て悟道ありし極果に表して成道寺と號す永享六年三月廿二日大檀越菊池持朝寺領を寄附す寰中正觀寺より出し故に末寺となる水石幽勝の地なり獅子巖象王石坐禪石などあり俗間相傳成道七不思議○時々有二異香一○夜々有二無レ人而鳴レ鈴聲一○日々有二無レ人而誦レ經聲一○夏夜無レ蚊○春時無レ蛙○唯有二雀一而無二群鴉一○唯有二雙鴉一而無二群雀一其後寰中中華にあそひて寂す八十三歲偈云日本非二生土一大唐亦客鄕虛空兼二法界一平等我家常

○傳云持朝菊池郡片角村に菊榮山光善寺を建立す年月開山未詳

○山鹿郡醫福山日輪興國禪寺古朱雀帝の御宇天慶三年國司尾藤少卿隆房爲二皇昭上人一七大伽藍を建立するの一寺なり一說に日輪寺は敏達帝の御宇日羅來朝して當國に七ケ所の梵宇を造建するの一時なり中ころ廢跡に及へるを天慶三年皇昭上人尾藤隆房に告て再興すと云ふ是のみにあらず古來より本朝の史に贊き輩あやまつて日羅を以て僧と覺へ廐戸皇子の師なりとし我寺の古きをを誇らんとて日羅開基の地なりと緣起なとを妄作し俗をあさむくもの多しかれとも日羅は勇士にて僧にあらず佛法を信せし事もなし詳に日本紀に見へたり其後破壞に及ひしを正和五年菊池肥後守武時入道寂阿寒巖三世の法孫天庵懷義寒巖孫弟子鉄山高弟を請し是まては天台の敎刹にて小峯山日輪寺といひしを醫福山と改めて禪刹となす延元年中後醍醐帝勅願の刹となつて日輪興國禪寺と號せられ宸筆を以て懷義に天庵大和尚大禪師の號を賜る今に存す康安三年三月十六日懷義七十四歲にて寂

すそれより五世の主席紹彝かとき大變によつて寺すてに斷絶せんとす依レ之紹彝先例及前肥後守が印證を記して菊池持朝に示す其趣に云

肥後國、山鹿庄、醫福山、日輪禪寺、建立次第

朱雀天皇御宇、天慶三年、當國良史少卿肥隆房、爲二皇昭上人一、令レ建二立七大伽藍一之一寺也、其支證數通而降、宮御所令旨、國司代々、當家武重武光武朝三代公驗、小鳥墻本村、武朝御寄進狀、先探題今川了俊狀、杉領主比丘尼素覺一書作二寂阿女一未レ知二是非一證文、及杉村一圓寄進狀、開山置文等、應永二十九年九月五日寺家炎上之時、悉令二燒失一際、應永三十一年三月二十二日、元朝按元朝兼朝法名系圖作二常微元朝一具被レ加二御證判一、殊以領知、御公驗可レ備二末代龜鑑一者也、日輪寺領、同四至界者、東限二日籠寺麓山鹿大道一、南限二八本木大道石村井手溝一、西限二石村溝一、北限二津留山迫下寄木井手溝一、寺領一所六町二段二丈者杉村內、一所九町四段三丈者墻本村、一所一町者山鹿南島村大蓑町、一所一町者吉田大園內野豆、總田數十八町七段末寺十三箇所、今略之

永享六年甲寅十一月廿二日　　住持比丘紹彝

持朝此書を閲し竟に其志をつかしむ天正十五年當郡の隈部親安叛逆して佐々成政と戰ひし時寺火災に罹りて斷絶に及へり加藤清正これをあはれみ少地を附し寺を建しむ此寺の鐘銘は天庵懷義自述なり此鐘銘及大慈寺鐘銘は諸國鐘銘集に出この故に贅せず

○菊池爲邦爲二一揆一被レ圍二隈府城一附爲邦剃髮事

菊池持朝三十八歲にして病死しけれは嫡子爲邦家を嗣て肥後守と號す然る處に康正元年三月八日一揆蜂起して急に隈府の城をかこむ爲邦防き戰ふといへともかなはす城まさに陷んとせしとき薩州國守島津修理太夫勝久多勢を相具して肥後に入り寄手を追はらひ急難をすくひけり然る處に爲邦か次男民部允武邦父を恨る子細あつて五百餘の兵を率し益城郡豐福城に楯こもる爲邦嫡子重朝をつかはし攻めさせけるに武邦强戰數十度に及ひ從士皆うたれけれは武邦むかふ敵二十餘人切伏其身も十九歲にて討死す文正元年爲邦三十七歲にて所領を嫡子重朝に讓り剃髮し尖活仍勢居士と號し私第を寺とし袈裟をかけて碧巖集を講すこれ今の合志郡板井神龍山碧巖禪寺なり開山は如拙伯巧和尙にて曹洞派なり同三年十月廿三日爲邦六十歲にて卒去す

此後碧岩寺荒廢して民舍に異ならす慶長年中加藤清正これをあはれみ寺領を附し東福寺前住淸翰長老を請し住せしむ後に淸翰寺職を辭して洛にかへれり爲邦僧形畫像に淸翰長老讚あり左に附す

藤原朝臣爲邦公者、奕葉肥之後州之使君、而菊池氏第二十代之英主、富有二一國一、德甲二九州一、智名勇功、誰敢角レ雄、末年傾二心於佛乘一、染二指於禪法一、染衣祝髮號二尖活仍勢大居士一、以二蒐裘之地一爲二禪刹一、山曰二神龍一、寺曰二碧巖一、今僕レ指百二有餘年于玆一也、當住月谷座元、命レ工繪二肖像一請レ贊、拙偈一首題二其上一、

衣冠巍々舊朝天、着二被袈裟一後入レ禪、德色道香今尙在、柴藤花發碧巖前、

慶長壬子歳舍六月日　　前住東福後住南禪清韓書

○爲邦菊池郡狹間村に禪刹を建江月山玉祥寺と號す佳景の地なり建立の年月開山はまれす長祿三年二月十八日野原鄕の内倉滿牛水等寄進の狀今にあり

○此爲邦が事は異域までも知つて海東諸國記にも菊池殿、丙子年、遣レ使來朝書、稱ニ肥筑二州太守藤原朝臣爲邦一、約ニ年遣ニ一二船一、庚寅年又遣レ使來受ニ圖書一、所レ管兵三千餘、世號ニ菊池殿一、領ニ肥後州一と記したり

○菊池重朝建ニ聖廟於隈府一事

爲邦が嫡子重朝幼名を藤菊丸と云後に肥後守と號す世に月松屋形と云文學に志し隈府に聖廟をたて春秋の祭祀をとりおこなふ此時南禪寺の桂庵和尙當國に下向し菊池郡に五六年在留す重朝桂庵和尙に請ふて釋奠の詩を賦せしむその詩云

太平奇策至誠中、春奠賁レ筵陪ニ泮宮一、泗水吹添菊潭碧、塞雲染出杏檀紅、一家有レ政九州化、萬古斯文四海同、絃誦未レ終花欲レ暮、香烟撲レ袂畫簾風、

此重朝和歌の道にも志し連歌をも嗜めり隈府萬句の連歌藤崎千句の連歌をも興行す其臣隈部上總介源忠直も詩を賦し歌を詠す其著述相傳ふる所藤崎宮記福本八幡宮棟梁の銘等なり

○菊池能運與ニ宇土彈正一合戰事

重朝が子武運家を嗣て後肥後守能運と號す然るに爲邦が弟宇土彈正爲光能運を滅し所領を奪んとて所々において合戰す能運討負明應九年肥前高來に奔る爲光其跡をうはふ能運高來に寓居すること三年にして久壽二年肥後に來り舊臣城重岑隈部運治以下の勢を催し高來に歸り翌年十月肥後高瀨に來て爲光父子と戰ふに隈部城赤星山鹿以下强く働きければ敵方うたるゝ者百餘人に及ひ爲光父子落行きしかのかるゝ所なりしかは宇土郡大見村において腹かき切て死にける能運も又にはかに病つきて二十三歳にて死去し子なきゆゑ菊池嫡流此ときに斷絶す

○菊池政隆與ニ菊池武經一合戰附菊池家士誓書事

菊池能運早世して家を嗣へき子なかりしかは城隈部等相議して爲邦か甥肥前守重安か子政隆をもつて能運か跡を嗣しめ二十三代の屋形と號すまかれとも菊池家士同心せす永正二年十二月三日八十四人連判の誓書をもつて阿蘇大宮司惟憲か嫡子惟長を菊池の養君とせんと を請によつて惟長神職を弟惟豐に讓り其身は菊池家を嗣て武經と改む所謂菊池家士は城上總介賴岑隈部式部少輔武治赤星彈正少弼重規内空河(ウチコガ)備前守重載田島右京重實小森田安藝守能世内田遠江守重國長野備前守運貞立田伊賀守重雄窪田大和守爲宗隈部和泉守宗直鹿子木民部左衞門貞治御宇田上總介重直長田右衞門武秀出田刑部少輔重綱岩河藏人允運秀立田小次郎重德城大藏少輔敏岑隈部豐前守貞明吉田左衞門公世北山城守公村隈部源兵衞守治關部新右衞門朝家内田右京亮重貞小森田和泉守朝右内空閑二郎左衞門朝貞瀨田新左衞門惟夏山北掃部介景直臼間田又十郎武益隈部右京亮常治赤星右近武規宗與八郎盛賴瀨田兵部允惟清

竹崎忠左衞門惟豐高倉圖書亮俊直隈部彌七郎清平相良式部少輔朝長吉田新十郎公棟竹崎兵部惟直赤星飛驒守房繼關將監公賴古閑山城守貞載高橋薩摩守朝景若園源三兵衞忠道長野清左衞門運俊阿佐古清左衞門能清內空閑周防介朝誠小森田加賀守高世本山十郎太郎能世關部滿龍丸合志藏人少輔隆岑隈部右馬允重門小山十郎三郎運貞小森田四郎兵衞運清窪田式部允重宗山井丹後守賴直赤星大藏少輔重生隈部新兵衞賴夏城彌兵衞昌岑御宇田山城守直貞佐藤日向守重秀馬見塚藤左衞門盛秀白石民部允朝通出田六郎貞峰佐藤式部允朝右竹崎又丞九佐藤伊豆守朝經多比良出雲守朝道牧右馬允安滿內田右衞門朝藤立田刑部少輔武貫赤星安藝守有繼馬見塚新左衞門長行平山中務少輔秀直若園源左衞門忠村竹崎次郎衞門惟次馬見塚左衞門盛岑中山對馬守經世大河內和泉守氏直田中彈正忠朝宗竹崎圖書助惟秀鹿兒木式部允房員內空閑神十郎運直合志掃部隆直以上八十四人なり政隆これをいかつて城六郎政元隈部下野守鎮治以下五百餘人を相かたらひ武經と戰しに豐後の大友阿蘇大宮司なと武經に一味し大軍をもつて政隆を責政隆一戰に利を失ひ永正六年閏八月十七日合志郡久米庄安國寺に走入り腹かき切て死にける

○菊池武經滅亡事

かくて武經菊池家を相續して後逆暴の振回あるゆゑ國人とも憤り多勢をもつて隈府の城を追落す程なく武經病死す其子惟前といふ者阿蘇大宮司を滅し神領を奪むと思ひ永正十年三月十一日益城郡堅志田城に押よせ惟豐と合戰す惟豐討負て日向國鞍岡山に立退く惟前大宮

司か所領をうはひて威を震ひ鞍岡山によせて攻戰ふに惟豐小勢なるか故に度々の軍に利をうしなひいかにもして惟前を滅し阿蘇に還住せしめんと旦夕憤り思ふ處に日向國高知保に甲斐大和守親宣同民部太輔親直といふ者あり是は菊池の庶流甲斐肥後守重村か末葉なり重村菊池武重と爭戰に及ひしより後は代々日向國に蟄居せり父子ともに武勇他に超たる聞えある故に惟豐甲斐父子をたのみ勢を催し阿曾益城の城主等と牒し合せ大軍を催し堅志田の城をせめ落す惟前及其子惟堅城を出て薩摩國に落行ける

○菊池武包奔二肥前高來一附阿蘇一家繁榮事

武經惟前かくなりしかは隈部親氏長野運貞內空閑重載同長載等相計つて菊池の庶流詫磨別當太郎武安か子武包を取立二十五代の屋形と稱すまかれ共阿蘇惟豐と不和にして武包玉名郡小代筒嶽の城に楯籠る惟豐これを聞て甲斐親直を大將としてうたしむるに大永三年三月二日落城し家士二百餘人討れて武包肥前高來に赴き天文元年二月十三日病死す（一說に武包高麗に赴と書は高來の文字をあやまるのみ）惟豐此たひ甲斐父子か軍功を感し八百町をあたへて一家老とす親直後に薙髮して宗運蕉夢と號す宗運かつて菊池武光か秘する所の軍法を傳得て數ヶ度の戰功をあらはせり其ころ阿蘇家臣益城郡御船の城主房行といふもの反逆の聞え有けれは大宮司宗運を遣はして攻させけるに宗運御船にいたり苦身坂峠に陣を取り木倉に於て大に戰ひ房行を始め四百八級の首を得たり大宮司其戰功を感し宗運を御船の城主とす其外の阿蘇家臣益城郡矢部岩尾城には甲斐武藏守親房同郡隈庄城には甲斐上總介敦昌其子隈庄甲斐守守昌同郡甲佐早